

高松市埋蔵文化財調査報告 第81集

市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊

高松城跡（無量壽院跡）



2005年3月

高松市教育委員会

卷頭図版 1



卷頭図版 2



例　　言

1. 本報告書は、市街地再開発関連街路（都市計画道路高松駅南線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊であり、高松市西の丸町・寿町一丁目に所在する高松城跡（無量壽院跡）の調査報告を収録した。本遺跡は中世から近世に至る3面の遺構面を検出したが、本報告書では最下層の第3遺構面のみを報告する。
2. 発掘調査期間は、平成14年11月28日～平成15年3月14日である。
3. 発掘調査および本報告書作成は、高松市教育委員会が実施した。
4. 調査から報告書作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々のご指導とご協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

香川県教育委員会　香川県埋蔵文化財センター　紫山隨願寺無量壽院

片桐節子　片桐孝治　歳木晋司　乗松真也　松本和彦　森下友子

5. 調査は、文化振興課文化財専門員 大嶋和則と讃岐文化遺産研究会 中西克也が担当し、大朝利和が補佐した。
6. 本報告書の執筆は、第1章第1節を大嶋、第2章を文化振興課文化財専門員 川畠聰、その他は中西が行った。編集は中西が行った。
7. 本報告書の第4章第1節樹種同定は、（株）吉川生物研究所に委託した。
8. 本報告書の遺物写真撮影は、杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。
9. 発掘調査で得られた全ての資料は、高松市教育委員会で保管している。
10. 本報告書における表記および記述に関する凡例は、以下のとおりである。

- (1) 使用した遺構略号は次のとおりである。

S D 溝　S E 井戸　S K 土坑　S P 柱穴　S X 性格不明遺構

- (2) 遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

a. 法量の中で（ ）を付けていいるのは残存値である。

b. 色調が内外面とも同じ場合には外面のみ表記する。

c. 上器胎土の粒土表記の基準

微砂：非常に細かい　細砂：0.5mm以下　粗砂：0.5～1mm　細礫：1mm以上

- (3) 方位の北は、国土座標第IV座標系（世界測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面からのプラス値である。

- (4) 土壤及び土器観察の色調表現は、『新版　標準上色帖』（農林水産省技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

- (5) 挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」と高松市都市計画図2千5百分の1「高松市街北部」を一部改変して使用した。

- (6) 写真図版の出土遺物には、第3面以外の遺物は番号をつけていない。

本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査の概要	9
第2節 基本土層	9
第3節 遺構・遺物	14
1. 溝	14
2. 井戸	42
3. 土坑	45
4. 柱穴	51
5. 性格不明遺構	57
6. 包含層出土遺物	76
第4章 自然科学的分析	
第1節 高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果	80
第5章まとめ	
第1節 遺構の変遷について	86
第2節 「無量壽院」について	86
1. 無量壽院の歴史・変遷	86
2. 調査成果と歴史史料の整合	89
第3節 第3面出土の瓦について	90
第4節 高松城築城以前の高松	90
無量壽院関係文書（抜粋）	94
観察表	105

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図（1）	5	第38図 S K1307・1308平・断面図および出土遺物実測図	…45
第2図 遺跡位置図（2）	5	第39図 S K1314・1315平・断面図および出土遺物実測図	…47
第3図 調査地位図（1）	6	第40図 S K1319平・断面図および出土遺物実測図	…47
第4図 調査地位図（2）	7	第41図 S K1321平・断面図および出土遺物実測図	…48
第5図 高松城跡周辺主要調査地位図	8	第42図 S K1322平・断面図および出土遺物実測図	…48
第6図 調査区上岩図	10	第43図 S K1323平・断面図および出土遺物実測図	…50
第7図 第3面造構配置図	11	第44図 S K1328平・断面図および出土遺物実測図	…50
第8図 第3面上層造構配置図	13	第45図 S P1301～1338平面図および出土遺物実測図	…52
第9図 S D1301平・断面図	15	第46図 S P1333平・断面図および出土遺物実測図	…53
第10図 S D1301出土遺物実測図（1）	16	第47図 S P1341～1348平面図および出土遺物実測図	…53
第11図 S D1301出土遺物実測図（2）	17	第48図 S P1384～1479平面図	…56
第12図 S D1302平・断面図	19	第49図 S P1384～1492出土遺物実測図	…57
第13図 S D1302出土遺物実測図（1）	21	第50図 S X1301・1302平・断面図	…58
第14図 S D1302出土遺物実測図（2）	23	第51図 S X1301出土遺物実測図（1）	…58
第15図 S D1302出土遺物実測図（3）	24	第52図 S X1301出土遺物実測図（2）	…59
第16図 S D1302出土遺物実測図（4）	25	第53図 S X1301出土遺物実測図（3）	…60
第17図 S D1302出土遺物実測図（5）	26	第54図 S X1301出土遺物実測図（4）	…61
第18図 S D1302出土遺物実測図（6）	27	第55図 S X1301出土遺物実測図（5）	…62
第19図 S D1302出土遺物実測図（7）	28	第56図 S X1301出土遺物実測図（6）	…63
第20図 S D1302出土遺物実測図（8）	29	第57図 S X1301出土遺物実測図（7）	…64
第21図 S D1303平・断面図	31	第58図 S X1301出土遺物実測図（8）	…65
第22図 S D1303出土遺物実測図	31	第59図 S X1301出土遺物実測図（9）	…66
第23図 S D1304平面図	32	第60図 S X1301出土遺物実測図（10）	…67
第24図 S D1304遺物出土状況実測図	32	第61図 S X1301出土遺物実測図（11）	…68
第25図 S D1304出土遺物実測図（1）	34	第62図 S X1301出土遺物実測図（12）	…69
第26図 S D1304出土遺物実測図（2）	35	第63図 S X1301出土遺物実測図（13）	…70
第27図 S D1304出土遺物実測図（3）	36	第64図 S X1301出土遺物実測図（14）	…71
第28図 S D1304出土遺物実測図（4）	37	第65図 S X1302出土遺物実測図（1）	…73
第29図 S D1304出土遺物実測図（5）	38	第66図 S X1302出土遺物実測図（2）	…74
第30図 S D1305平・断面図	39	第67図 S X1302出土遺物実測図（3）	…75
第31図 S D1305出土遺物実測図（1）	39	第68図 S X1304平・断面図および出土遺物実測図	…76
第32図 S D1305出土遺物実測図（2）	40	第69図 S X1305平・断面図および出土遺物実測図	…76
第33図 S D1306・1307平・断面図	41	第70図 第3面出土遺物実測図（1）	…77
第34図 S E1301平・断面図	43	第71図 第3面出土遺物実測図（2）	…78
第35図 S E1301出土遺物実測図（1）	43	第72図 第3面出土遺物実測図（3）	…79
第36図 S E1301出土遺物実測図（2）	44	第73図 無量壽院の変遷図	…88
第37図 S K1304平・断面図および出土遺物実測図	45	第74図 S D1302出土文字瓦拓影	…89

図版目次

図版 1 - 1	遠景（西から）	図版 7 - 1	S E 1301完掘
- 2	遠景（東から）	- 2	S E 1301土層
- 3	完掘状況（東側）	- 3	S E 1301井戸檻
図版 2 - 1	完掘状況（東側）	図版 8 - 1	S K 1304完掘
- 2	完掘状況（東側）	- 2	東側ピット群完掘
- 3	完掘状況（西側）	- 3	西側上層ピット群完掘
図版 3 - 1	完掘状況（西側）	図版 9 - 1	西側ピット群完掘
- 2	完掘状況（西側）	- 2	西側ピット群完掘
- 3	S D 1301・1304	- 3	S X 1301・1302完掘
図版 4 - 1	S D 1301・1304完掘	図版10	出土遺物（1）
- 2	S D 1301土層	図版11	出土遺物（2）
- 3	S D 1304遺物出土状況	図版12	出土遺物（3）
図版 5 - 1	S D 1302完掘（東側）	図版13	出土遺物（4）
- 2	S D 1302完掘（東側）	図版14	出土遺物（5）
- 3	S D 1302完掘（東側）	図版15	出土遺物（6）
図版 6 - 1	S D 1302土層	図版16	出土遺物（7）
- 2	S D 1302土層	図版17	出土遺物（8）
- 3	S D 1302完掘（東側）	図版18	出土遺物（9）
- 4	S D 1302完掘（西側）	図版19	出土遺物（10）
- 5	香炉出土状況	図版20	出土遺物（11）
- 6	五輪塔出土状況	図版21	出土遺物（12）
- 7	S D 1303完掘	図版22	出土遺物（13）
- 8	S D 1305土層	図版23	出土遺物（14）
- 9	S D 1305完掘		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

高松市では、サンポート高松整備事業においてJR高松駅周辺の再開発事業を進めており、これに伴い都市計画道路高松駅南線の整備が計画された。道路新設部分は幅員20m、延長約90m、事業面積約1,800m²である。

平成13年度に事業主体である高松市都市開発部都市再開発課から、高松市教育委員会に対して道路建設予定地における埋蔵文化財について照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかったが、東側には国史跡高松城跡が所在し、西側隣接地では（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡（西の丸町地区）が所在した。また、事業予定地は周辺の発掘調査成果や地割と絵図との比較によって、江戸時代には高松城内であり、東半が西ノ丸、西半が中堀に位置することが推定された。しかし、事業予定地内には鉄筋コンクリート造の建物が建てられており、搅乱を受け遺跡が消滅している可能性もあったため、事前に道路建設予定地内について試掘調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認することで合意した。

これを受けて、高松市教育委員会では平成13年10月9・10日に道路建設予定地内の用地取得地について試掘調査を実施した。事業予定地東半の西ノ丸推定地のみが試掘可能であり、道路幅員の両端に沿って東西方向のトレーナーを設定した。南側のトレーナーでは、中世と江戸時代の3面の遺構面を確認し、それぞれから土坑を検出した。北側のトレーナーでは、西半は溝や柱穴を検出ましたが、東半はコンクリート基礎による搅乱が遺構面以下まで及んでいた。このため事業予定地の北東部分については搅乱が著しく、遺跡は消滅してしまっているが、その他の部分についてはほぼ全面に遺跡が所在することが判明した。なお、事業予定地西半は試掘調査できなかつたが、堀が推定されていることから遺構の深さが深く、また既存建築物が2階建であることから地下遺構に対する搅乱の影響が少ないと考えられた。さらに、西側隣接地において（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡（西の丸町地区）が所在することからも、埋蔵文化財が包蔵することは確実視された。試掘調査結果については都市再開発課と香川県教育委員会に報告した。

平成14年9月11日に都市再開発課より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、これに対し、9月26日に香川県教育委員会から事前に発掘調査を行うよう指導があった。これを受けて、都市再開発課と協議を行った結果、道路建設前の平成14・15年度の2カ年で発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意した。平成14年度においては事業予定地の東半と西端部分が用地取得済みであったことから、この範囲を調査対象とした。東半のうち北東部については試掘調査によって搅乱が著しいことが判明しており発掘対象範囲から除外した。このため、東半部分の発掘面積は360m²となった。西端は堀の検出が予想され、掘削深度が深くなることから、十分な法面を設け、南北13m、東西10mの130m²程度を調査することとした。また、平成15年度については、事業予定地の中央部分を発掘対象地とした。西端同様堀が予想されることから、安全措置を講じながら、200m²程度の調査を行うこととした。なお、平成15年度調査地は現在も用地取得が完了しておらず、調査は延期されている。

第2節 調査の経過

1. 発掘調査の経過

発掘調査は、平成14年11月28日に着手し、15年3月14日に終了した。この年度に調査を実施した東側の調査区はI区、西側の調査区はII区と称する。

本調査については、事前協議の中で廃土搬出費用の削減という観点から、遺構の調査に伴う廃土は調査区内に仮置きすることとなり、I区は二分して調査を実施した。I区の東側をI-1区、西側をI-2区と仮称した。最初にI-1区・2区の第1遺構面を調査し、航空写真測量の終了後に、I-1区の第2遺構面・第3遺構面を調査し、航空写真測量を実施した。最後にI-2区の第2遺構面・第3遺構面を調査し、航空写真測量を実施した。この部分の廃土はI-1区に置いた。II区の調査は調査期間の最終に実施した。

以下、調査日誌を掲げて調査の詳細について報告する。なお、本報告書の内容は第3遺構面のみの報告であるが、調査の経過に関しては着手から終了までの全過程を記載する。

調査日誌（抄）

平成14年

11月

28日にI-1区の重機による第1遺構面までの機械掘削作業を開始し、29日に終了する。

12月

2～5日にI-1区の第1遺構面の遺構検出作業を行う。6日に遺構配置図を作成し、東端より遺構の調査を開始する。9・10日に柱穴などの小規模の遺構を完掘し、同時にI-2区の重機による第1遺構面までの機械掘削作業を行う。

11～16日にSD1001・SK1010・SE1001の掘り下げを行い、土層図を作成する。SE1001は土器製井戸枠を4段重ねており、最下位に木枠をもつ明治時代以降の井戸である。

17・18日にSE1002の掘り下げ、I-2区の遺構検出作業を行う。24日にI-2区の遺構配置図を作成し、遺構の調査を開始する。27日までSD1001・SE1001・1002・SX1003等の大きな遺構を完掘する。SD1001では集石を検出する。

平成15年

1月

6・7日にI-2区の溝・柱穴・土坑を完掘し、調査区の北壁・西壁の土層図を作成する。

8・9日に調査区南壁の土層図を作成する。

10日にI区における第1遺構面の航空写真測量を行う。高所作業車を使用して全体の完掘写真を撮り、次に個々の遺構の写真を撮る。

14～16日にI-1区の重機による第2遺構面までの機械掘削作業を行い、遺構配置図を作成した後にSX1201や柱穴などの遺構の調査を行う。SD1001を掘り下げ、底面直上に石垣の礎石と考えられる列石が検出する。列石は南に面をもち、集石は石垣の奥込めと思われる。

17日に柱穴や土坑等の全ての遺構を完掘し、20・21日に遺構の平面図を作成し、全体の完掘写真を撮り、次に個々の遺構の写真を撮る。

22～24日にSP1203～1208に切られるSK1209を掘り下げて完掘する。調査区東端より第3遺構面までの機械掘削作業を行い、隨時、遺構検出作業を行う。

28~31日にはSD1301~1303・SE1301・SX1301・土坑・柱穴の調査を行う。SD1301からは瓦器碗が出土し、東西方向に延びる溝であるSD1302からは、「野原濱村无量寿院」と刻まれた丸瓦や梵字瓦、五輪塔、香炉などが出土した。SE1301では底面で石組を検出した。

2月

3・4日にSD1301~1304・SE1301・SX1301を完掘する。SD1301は集石が検出され、平面図を作成する。SD1304は多量の土師質土器小皿や瓦器碗が出土し、出土状況の写真撮影を行う。SE1301の石組と曲物の平面図・立面図を作成する。

5日にI-1区の第3遺構面の航空写真測量を行う。高所作業車を使用して全体の完掘写真を振り、次に個々の遺構の写真を撮る。

6日にSD1301・1304の遺物出土状況の平面図を作成し、遺物を取り上げる。SD1302の集石の平面図を作成し、五輪塔2点を取り上げる。

7日にSD1302の集石を取り除き、完掘写真を撮る。SX1302を掘り下げる。

10~14日にI-1区SD1302の平面図とSD1001の列石立面図を作成し、SX1301の完掘後に確認されたSD1303・1304を完掘し、平面図を作成する。SX1302を完掘し、平面図を作成する。I-2区において第2遺構面までの機械掘削作業を行い、遺構検出作業を行う。

17日にI-2区の第2遺構面の遺構配置図を作成した後に柱穴・土坑の調査を行う。

18~24日にI-2区第2遺構面の柱穴・溝・土坑を完掘し、SB1201・SE1201は半裁し土層図を作成した後に完掘する。全ての遺構を完掘した後に平面図を作成する。SB1201は単独に平面図を作成する。I-2区第2遺構面の完掘写真を振り、個々の遺構の写真を撮影する。

25・26日にI-1区のSD1001の列石を取り除き、地山まで掘り下げる。調査区南壁の上層図の下層を付け加える。I-2区の第3遺構面までの機械掘削作業と遺構検出作業を行う。

27・28日にI-2区の第3遺構面の柱穴・土坑・溝の調査を行う。SD1305は埋土に多量の焼土・炭や瓦を含む。SD1301を完掘し、上層図と集石平面図を作成する。調査区北西側に検出された第3遺構面上層のピット群・土坑群を完掘し、平面図・写真撮影を終える。

3月

4日にI-2区のSD1302の掘り下げを行う。土層観察用の畦を2本設定し、西側の畦の土層図を作成する。調査区北西側を掘り下げ、第3遺構面下層の遺構を検出し、遺構配置図を作成する。5日にSD1302の東側畦の上層図を作成し、青磁香炉の出土平面図と写真を終える。

10日にII区の調査を行う。地表から約2.50mの深さまで重機により掘り下げる。埋土は海砂であり、湧水が激しく、調査は不可能となる。

11・12日にI-2区第3遺構面の全ての遺構を完掘する。

13日にII区の一部に鉄板を打ち込み、地表から約3.00mの深さまで掘り下げる。下層に中堀の埋土の黒褐色シルト質粘土が検出される。I-2区第3遺構面とII区の航空写真測量を行う。高所作業車を使用して全体の完掘写真を振り、次に個々の遺構の写真を撮る。

14日に重複した遺構を完掘し、平面図を作成する。

2. 整理作業の経過

整理作業は2年次に分けて実施した。平成14年度末~15年度前半は出土遺物の水洗いと図面修正と遺物の復元・選定作業を行う。平成15年度後半~16年度前半に遺物の実測を行う。平成16年度後半に挿図を作成し、12月中旬までに原稿の執筆を完了した。

第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて、高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口の中洲や砂堆上に立地している。このため、城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は、現在、石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀初頭、高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお、17世紀の磨川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第2節 歴史的環境

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは、弥生時代後期である。高松城内南の武家屋敷跡で行われた発掘調査（新ヨンデンビル別館）では、ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し、付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では、平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し、人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時、この地域は笠原郷と呼ばれ、安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は、白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券莊号されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから、土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

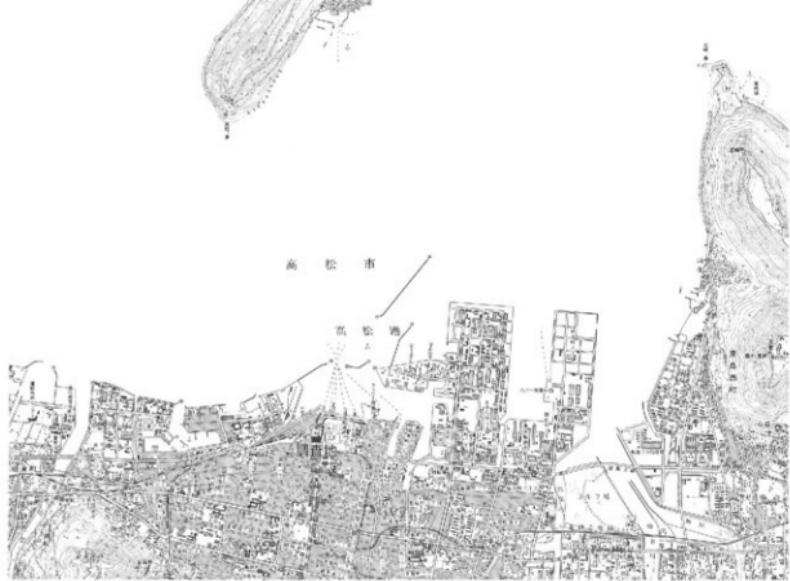
さらに時代が下ると、莊岡としての機能以外にも、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから、中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが、高松城跡西の丸地区の発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに、西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺を埋納していた13世紀末から15世紀末の集落跡が確認されている。

一方、高松城跡東の丸地区に目を転じると、16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては、15～16世紀に属するL字形の大溝を検出してお、これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

このように、高松市街地下において、古代末から中世の集落等が確認され、文献からもうかがえるように、かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸千軒町遺跡にも見られるように全国的な傾向であり、これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに、高松城がこの地に築かれ、城下町が整備されたと考えられる。



第1図 遺跡位置図（1）（S : 1 / 600,000）



第2図 遺跡位置図（2）（S : 1 / 50,000）



第3図 調査位置図(1) (S:1/5,000)



第4図 調査地位置図（2）（高松城下図を基に作成）（S：1/2,500）

さて、この高松城および城下町を造ったのが、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国征伐により、天正13年（1585）長宗我部元親が降伏し、讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年（1587）生駒親正が入封し、讃岐17万6千石を領した。高松城は、生駒親正の居城として、翌天正16年から築城され、数カ年を要して完成された水城である。水城と呼ばれる由縁は、北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく、堀には海水が導かれているからである。また、南方には大手（旧太鼓門）を構え、城の南側に城下町が展開する「後堅岡」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし、内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は、さらに堀によって他の曲輪と独立しており、本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。本丸には、天守閣と地久櫓が設けられている。

寛永17年（1640）御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、寛永19年に代わって松平頼重が高松城主となり、東讃岐12万石を領した。松平頼重は、城の改修を度々行っているが、寛文11年（1671）頃の大規模な改修では、東ノ丸を造成するとともに、月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り、北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようにしている。その後、松平氏は高松城主として明治維新を迎える。高松城は昭和29年（1954）に松平氏より高松市に譲渡され、翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに、史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかしながら、明治17年（1884）に天守閣が取り壊されるとともに、都市化の波によりしだいに堀は埋め立てられ、本丸近くまで市街化が進んでいる。



第5図 高松城跡周辺主要調査位置図 (S : 1 / 10,000)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

本遺跡の調査は、道路建設に伴う発掘調査であるため東西方向に長い調査区に設定された。第1章第2節で前述したように、平成14年度の調査は国道30号線（通称中央通）に接する東端の部分と高松駅に面する西端の部分において実施し、東側の調査区をⅠ区、西側をⅡ区と呼称する。

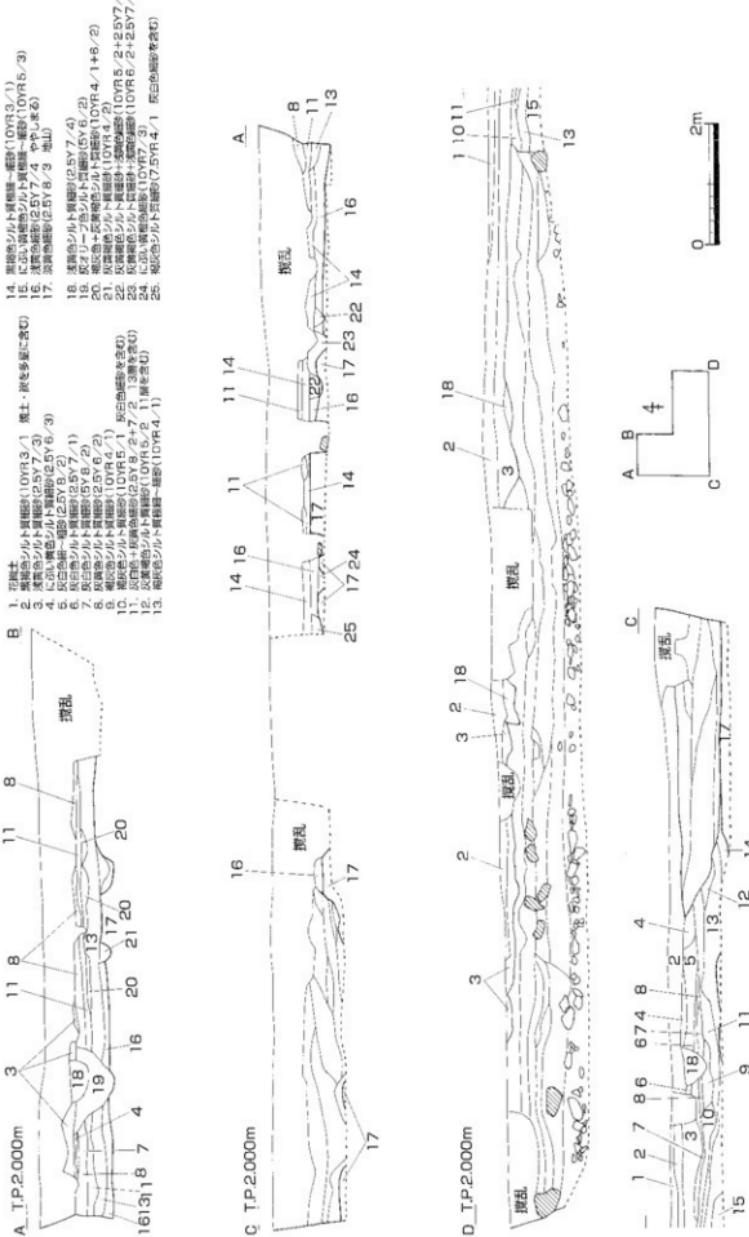
Ⅰ区は、高松城の中堀の内側、内堀の外側に位置しており、調査前は駐輪場であった。この地点は寛永15～16年に描かれた『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』には「生駒隼人下屋敷」と記載されている。1650年代前半の『高松城下図屏風』では1頭の馬と二人の人物が描かれている。享保年間の『高松城下図』と文化年間の『高松市街古図』、弘化年間の『東讃高松絵図（弘化年間高松城下絵図）』では何も書かれておらず空白である。

試掘調査の結果により北東部分にコンクリート基礎が確認され調査対象外となったため、Ⅰ区の平面形は横向きの逆「L」字形を呈する。東西方向の長さは29.50m、南北は18.00mである。調査では中世から明治時代に至る3面の遺構面が検出された。第1面では江戸～明治時代の遺構が検出され、標高は1.20m前後である。主な遺構としては、井戸・溝・土坑・柱穴がある。遺構は調査区全域において検出しているが、北壁の中央から東側にかけては搅乱を受けている。第2面では江戸時代の掘立柱建物・井戸・溝・土坑・柱穴等の遺構を検出し、その標高は1.10m前後である。調査区の西側ではほぼ全域に遺構を検出したが、東側の北壁付近は第1面と同一の搅乱を受け、南壁付近に石列を有する第1面のSD1001があり、遺構の検出は中央部の狭い範囲のみである。今回報告する第3面は、中世から江戸時代初頭の遺構が調査区全域に分布しており、その標高は0.80～1.00mである。主な遺構は井戸・溝・土坑・柱穴であり、調査区西北部では第3面が北方向に緩やかに低くなっている。第3面の上位に遺構面が確認され第3面上層と呼称する。特筆すべき遺構としては、調査区中央を東西方向に延びるSD1302が挙げられる。この溝から「野原濱村无量壽院」と刻まれた丸瓦や梵字瓦・五輪塔などが出土し、調査地が寺院跡であると判明した。SD1304では12世紀頃の土師質土器小皿・瓦器碗等が多量に出土した。中世段階において集落が営まれていたことがうかがえる。

Ⅱ区は、中堀の西端と推定される位置であり、中堀西側の石垣の確認を目的に調査を実施した。調査区の平面形は長方形を呈し、上端の東西方向の長さは10.00m、南北13.00mである。地表面から約0.60mまでコンクリート基礎があり、その下に明治時代に埋め立てられた海砂が約1.50mある。その下は中堀の埋土であり、地表面から約2.70mまで掘り下げた。調査において西側の石垣は検出されなかった。

第2節 基本土層（第6図）

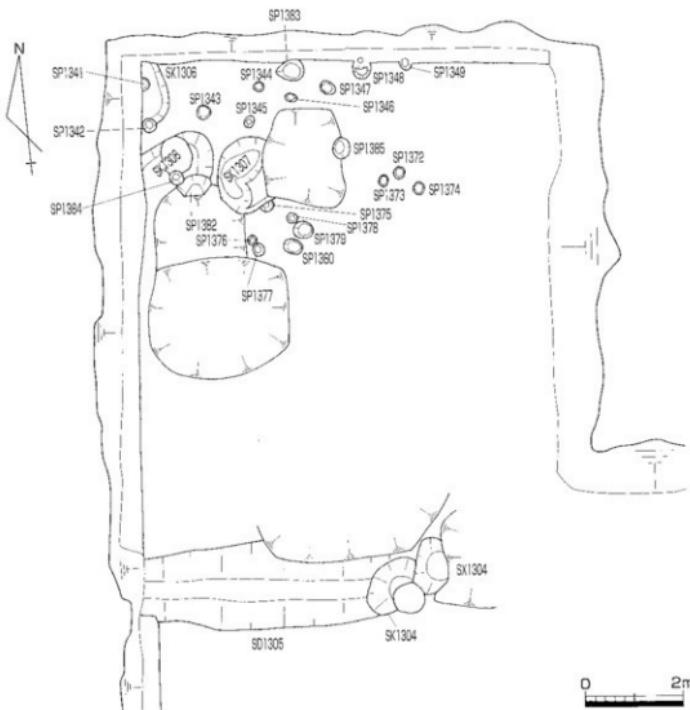
調査区の北壁の一部と西壁・南壁の土層図を作成したが、西壁の南端と南壁の西端は第1面のSX1003、南壁の中央から東端は第1面のSD1001が深く掘り込まれており、良好な堆積状態を示すのは北壁と西壁・南壁の一部である。



第6図 調査区土層図 (S : 1 / 80)



第7図 第3面遺構配置図 (S : 1 / 100)



第8図 第3面上層造構配置図 (S : 1/100)

地表面から約0.60mの深さまで花崗土（第1層）で埋め立てられ、その直下に昭和20年7月4日の高松空襲による焼土・炭を多量に含む黒褐色シルト質細砂（第2層）が最大0.40m堆積している。

第3～6層は明治時代から第2次世界大戦までの埋め立てである。

第7・8層の灰白色シルト質細砂の上面は第1面の確認面である。第8層は最大0.20mの厚さでほぼ水平な堆積をなしている。第7層は薄く、部分的に確認した。

第13層の褐灰色シルト質細砂～細砂の上面は第2面の確認面である。厚さは0.20mであり、北西方向に若干低くなっている。西壁の土層図では擾乱により第14層以上が削平されているが、調査区内では擾乱が浅く、第1・2面の造構が検出されている。

第16層の浅黄色細砂の上面は第3面上層の確認面であり、調査区の北西隅のみに堆積し、北西方向に若干低くなっている。第17層の淡黄色細砂の上面は第3層の確認面である。上層と同様に北西方向に低くなっている。

第18～25層は、造構の埋土である。SD1001とSX1003の土層は第2層において報告する。

第3節 遺構・遺物

1. 溝

S D 1301 (第9~11図)

調査区南側において検出したほぼ直線的に延びる溝であり、東側はS E 1002に、西側はS E 1201に切られている。検出面のレベルは標高0.80~1.00mである。検出した溝の全長は15.80m、幅は0.65~1.40m、深さは0.34~0.50mを測る。溝の方位はN-90°-Eである。溝西端付近の断面は傾斜の強いU字形をなすが、中央から東側は緩やかな傾斜の船底形を呈し、底面のレベルは西から東方向に若干低くなっている。埋土は、炭を僅かに含む黒褐色シルト質極細砂が厚く堆積し、底面近くに灰黄色細砂と灰白色細砂が薄く堆積していた。埋土は自然堆積である。溝の中央から西端部にかけては拳大~人頭大の礫が多量に充填されていた。

遺物は、土師質土器小皿(1~25)、同杯(26~32)、同椀(33~36・55・56)、須恵器小皿(37)、瓦器小皿(38・39)、同椀(40~54・57~59)、白磁碗(60・61)、備前焼播鉢(62~67)、土師質土器壺(68)、須恵器壺(69)、瓦質土器捏ね鉢(70)、土師質土器壺(71)、陶器壺(72・73)、土師質土器足釜(74)、平瓦(75)、鉄斧(76)である。

1~10は器高の低い小皿で、1・2・4・5・8~10は底から急激に立ち上がり、3・6・7はやや緩やかな立ち上がりである。体部の調整は回転ナデである。底部は、1・4・6・8・9が回転ヘラ切り後にナデであり、3は回転ヘラ切り後に板目・回転ヘラナデが施される。5・10は回転ヘラケズリ、7は板目後に回転ヘラケズリ、2はナデである。

11~20は口径8~10cm、底径4~10cm、器高1.4~2cmの小皿であり、やや緩やかに立ち上がる。15の口縁端部は面取りされる。11・12・15・16の底部はナデ、13は回転ヘラ切り、14・18は回転ヘラ切り後に中央を板目、周縁を回転ヘラナデが施される。17・19は回転ヘラ切り後にヘラナデ、20は回転ヘラ切り後にナデが施される。

21~25は底部であり、21の底部は回転ヘラ切り後に中央を板目、周縁を回転ヘラナデが施され、22は回転糸切り、23・25は回転ヘラ切り後にナデが施される。24はハケである。

26~32は直線的な体部の杯であり、30の底部は回転ヘラ切り後に中央を板目、周縁を回転ヘラナデが施される。33~36の口縁部は若干外反する。

37は内面にヘラミガキ、底部外面に指頭圧痕が施される。38はヘラミガキ、底部外面に指頭圧痕後にナデが施され、内面にヘラによる線刻がある。39は内面にヘラミガキ、底部外面に指頭圧痕が施される。

40・47は内面にヘラミガキが施され、42~46・48~54は外面に指頭圧痕とヘラミガキ、内面にていねいなヘラミガキが施される。57~59は低い高台を有し、体部外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。

60は下縁状口縁部の白磁碗である。

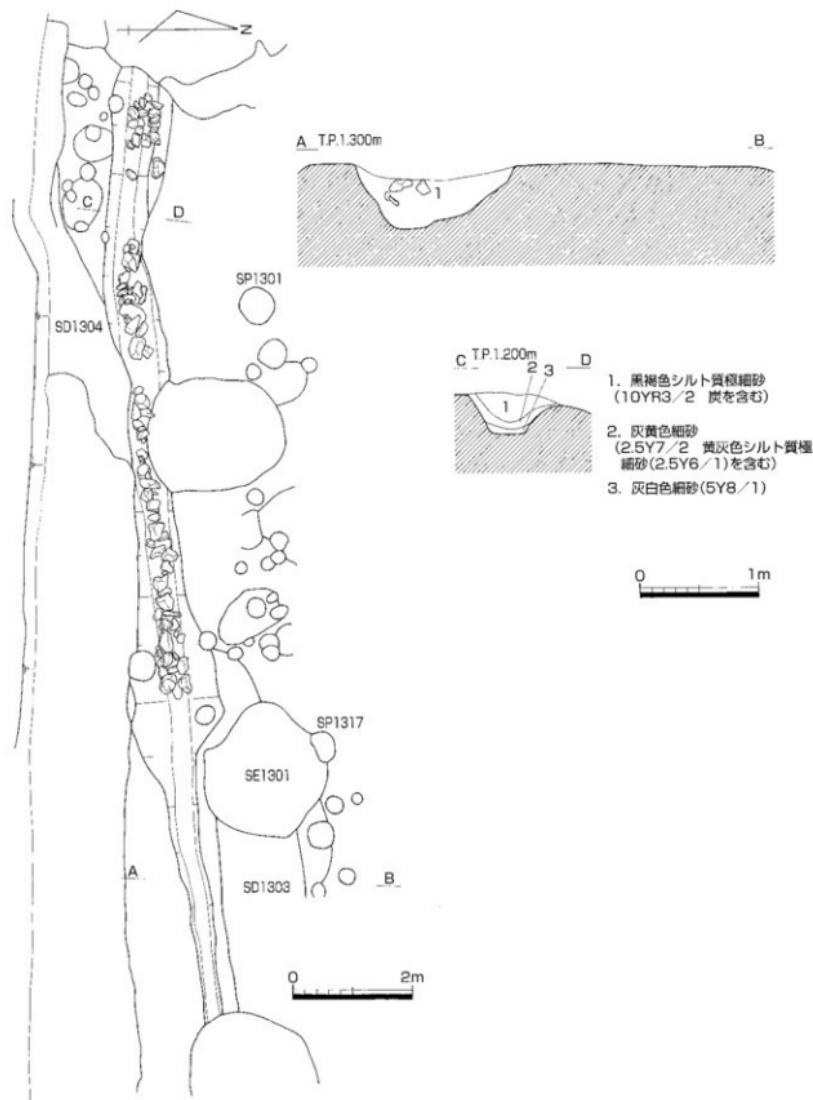
62~67は備前焼の播鉢である。62~65の口縁部は上下に若干拡張し、64・65は片口を有する。内外面は回転ナデが施される。66の外面はナデ・ヘラケズリ、67はヘラナデが施される。

69は直立する口縁部の壺で、口縁端部はわずかに玉縁状を呈する。

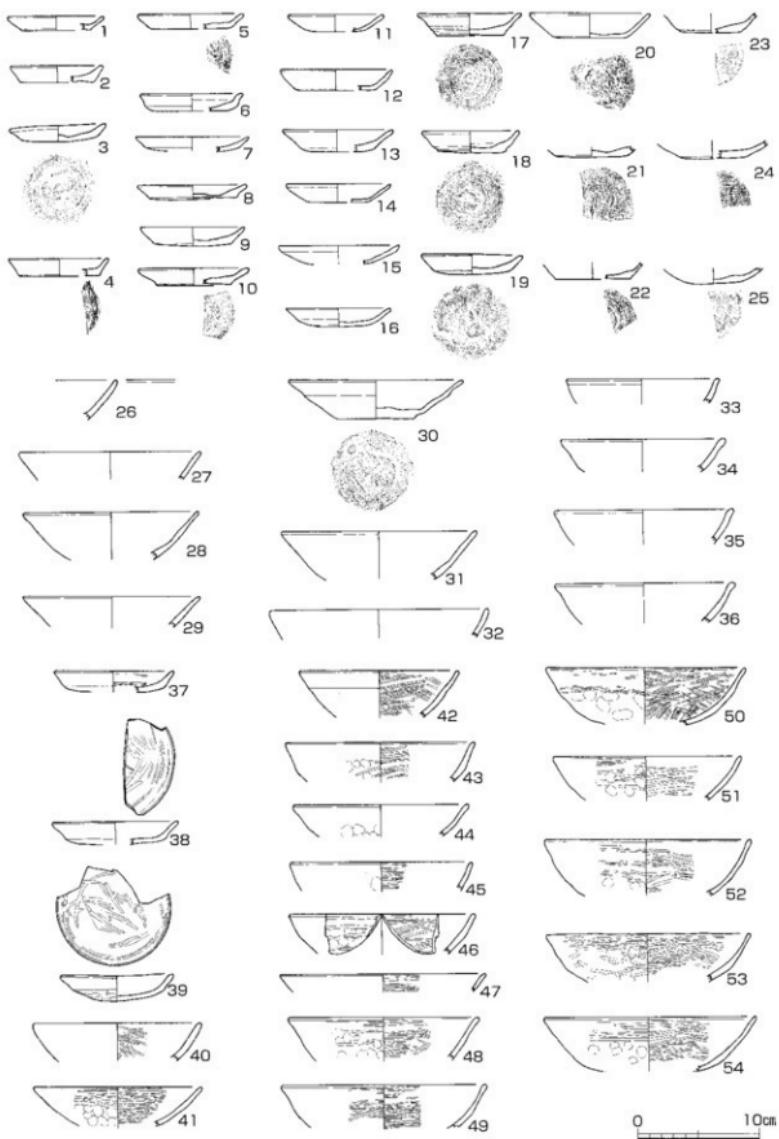
70は直線的に口縁部に至り、外面は指頭圧痕・ナデが施される。

72・73は平底で、外面にハケとヘラケズリ、内面にヘラナデ・ナデが施される。

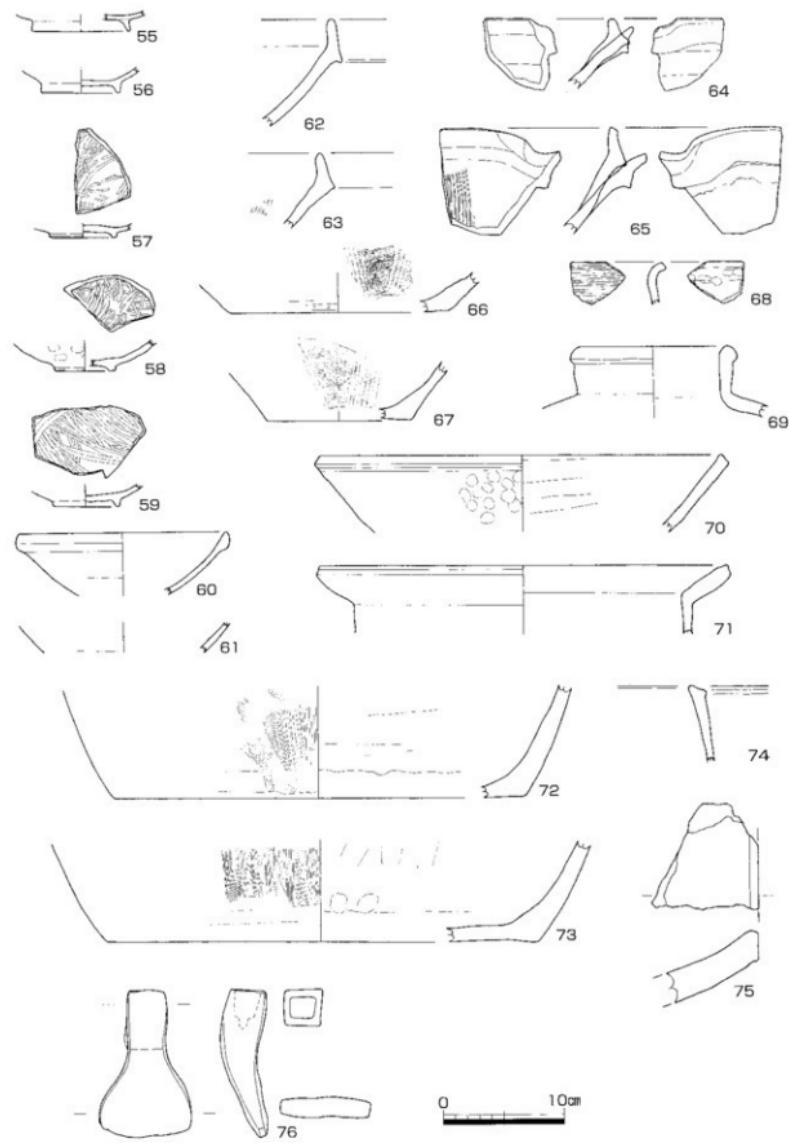
75は円面端部を面取りし、ヘラナデが施される。



第9図 SD 1301平・断面図 (S : 1/40・1/80)



第10図 SD 1301出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)



第11図 SD1301出土遺物実測図(2) (S:1/4)

S D 1302 (第12~20図)

調査区中央において検出した溝であり、中央より東側では近代の擾乱により上部が削平されている。検出面のレベルは標高0.90m前後である。溝は直線的で東西方向に延びており、その方向はN-90°-Eである。検出した溝の全長は約28.80m、幅は1.60~2.25mを測る。検出面から最深部までの深さは約0.60mであり、底面のレベルは比高差約0.20mで東方向に低くなっている。掘り込みは緩やかな傾斜であり、断面は船底形を呈する。溝の中央付近に隅丸方形を呈する落ち込みを3ヶ所検出した。その長軸は1.40~2.00m、短軸は1.40mを測り、溝底面からの深さは約0.40mである。落ち込みの埋土は灰白色粗砂である。溝の東側には拳大~人頭大の石を集中して検出した。その中に火を受けた状態の石が数個含まれ、集石の東端に五輪塔（第20図207・208）が出土した。さらに、集石直下の溝底面に全長10.20mを測る小規模な落ち込みを検出した。幅は0.30~0.40m、深さは0.10~0.25mを測る。埋土は6層に分層でき、自然堆積をなす。埋土の第2層褐灰色シルト質細砂には焼土と炭が若干含まれていた。

遺物の出土は多量であり、特に注目すべき遺物として「野原濱村无量壽院」と刻まれた丸瓦と梵字瓦、ほぼ完形の青磁香炉が挙げられる。その結果、調査地が寺院跡であることが判明した。無量壽院の寺記によれば、天文年間に今のが松城の地に寺を移転したが、天正年間に高松城を築城の際に西へ移転したとされていた。

遺物は、土師質土器小皿（77~88）、同杯（89~109）、同鉢（110~116）、同椀（117~121）、瓦器椀（122~125）、青磁碗（126・127）、同香炉（128）、白磁碗（129~133・135）、同皿（134）、磁器碗（136・137）、同皿（138）、土師質土器擂鉢（139）、備前焼擂鉢（140・141）、土師質土器鍋（142~147）、同足釜（148~155）、備前焼壺（156）、瓦質土器壺（157）、土師質土器甕（158~162・168）、備前焼甕（163・164）、須恵器甕（165~167・169）、土師質土器鉢（170）、須恵器高杯（171）、土師質土器イイダコ壺（172）、土製円盤（173~179）、砥石（180）、土錐（181~187）、丸瓦（188~195）、平瓦（196~203）、鬼瓦（204~206）、五輪塔（207・208）である。

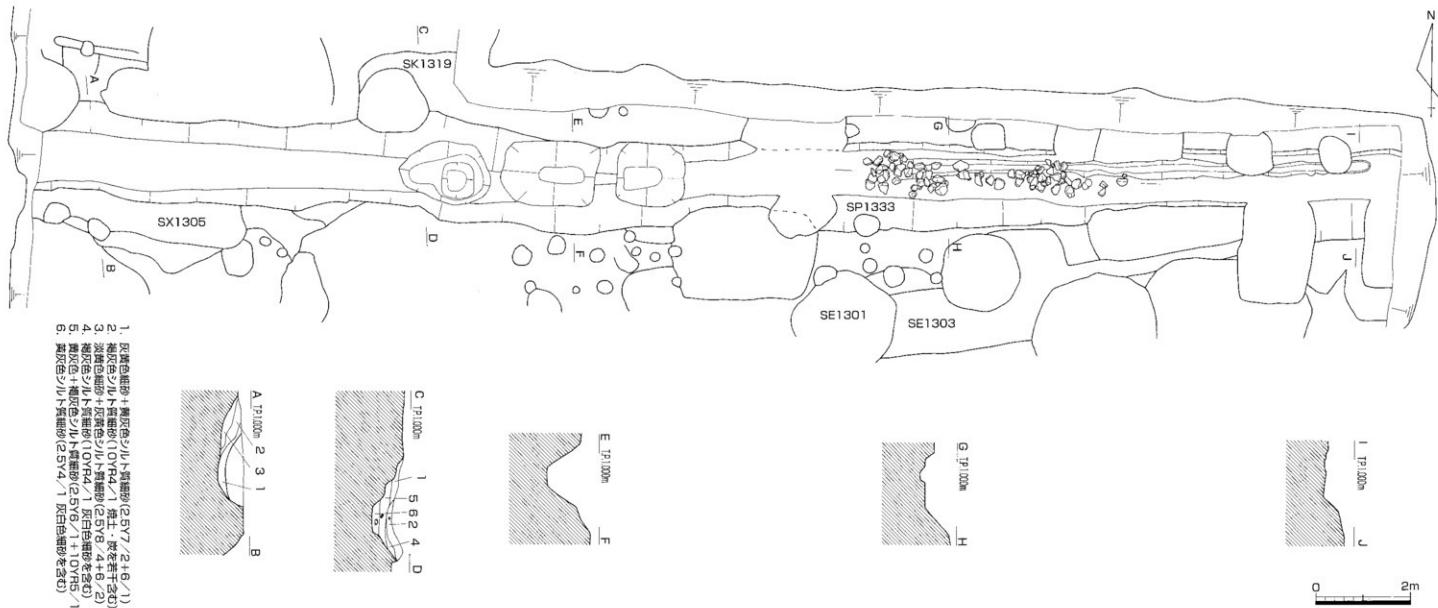
77~81は非常に体部の短い形態の小皿であり、77の底部はナデ、78・80の底部は回転ヘラケズリ、79・81は回転ヘラ切りが施される。82~88は前者より体部が長い小皿であり、底部からやや緩やかに立ち上がる。85の底部は回転ヘラ切り、86は回転ヘラ切りの後に中央部を板目、周縁部にナデが施される。

89~98は口径10~11cmを測り、回転ナデが施される。92・96の底部は回転ヘラ切り、93・95はナデ、94は静止板ナデが施される。99~101は口径12~14cmを測り、99・101は回転ナデ、100は回転指ナデが施される。102~109は底部であり、103は板目、104は回転ヘラケズリ、105・108・109は回転ヘラ切り、106は中央部に板目、周縁部にヘラナデが施される。107は回転ヘラ切り後に板目が施される。

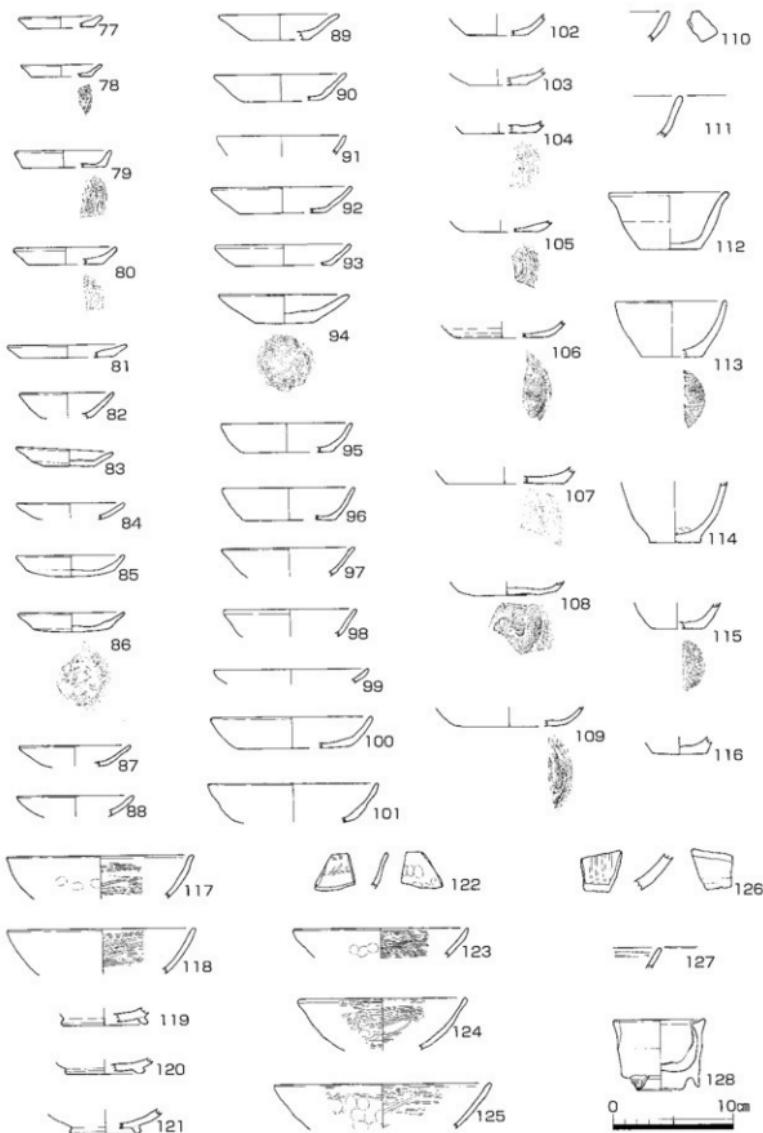
110~116は口縁部の外反する器形と内湾する器形がある。110の外面には墨書が見られる。112は内外面に回転ナデが施され、内面に煤が付着している。113の底部は静止糸切り、114は内外面にナデが施される。115の底部は浅いハケが施される。

117は体部と口縁部の境に若干の棱を有し、外面は指頭圧痕・ナデ、内面はヘラミガキが施される。118は内湾気味の器形で、外面は回転ナデ、内面はヘラミガキが施される。119~121は短く断面方形の高台を有する。

122・123は外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。124・125は外面に指頭圧痕の後



第12図 SD1302平・断面図 (S : 1/80)



第13図 SD 1302出土遺物実測図(1) (S : 1/4)

にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。123・124の口径は14cm前後、125は18cmである。

126は青磁碗の体部下半部、127は青磁碗の口縁部である。128は3個ある脚の1個を欠損するがほぼ完形の中国産の筒形香炉であり、漆による補修が施されている。脚は形骸化しており、高台より短くなっている。底部置付は露胎である。

129～132は玉緑の白磁碗であり、132は体部下半分を露胎にしている。口径14cmを測る小形の碗と口径18～20cmの大形の碗がある。133の口縁部はわずかに外反する。134の底部は静止ヘラケズリが施される。135は短く太い高台を有し、底面は回転糸切り後に周縁に回転ヘラケズリが施される。

136はわずかに外反する口縁端部で、灰白色の釉がかかる。137は褐灰色の釉のかかる碗である。138は体部下半が露胎である。

139は口縁端部が大きく内湾し、外面にわずかな指頭圧痕が見られ、内面には横方向に幅広いハケが施される。6条1単位の擂目がある。140は擂鉢の口縁部であり、上下に若干拡張する。141は擂鉢の底部付近であり、8本1単位の擂目が放射状に引かれている。

142～145はほぼ同形態の鍋であり、146を除いて口縁端部は断面方形を呈する。142・144・146の外面は指頭圧痕が施され、144の口縁部内面は横方向のハケが施される。

148～153は足釜の口縁部であり、内傾する口縁部の外面に鍔が付く。148は口縁端部の近くに低い鍔が付くが、149～153はしっかりした鍔が付き、鍔からの立ち上がりがやや長い。149・150・153の外面はハケ、150・151・153の内面はハケが施される。154は長い脚、155は短い脚であり、板ナデが施される。胴部内面は横方向のハケである。

156は口縁部がやや外反気味に直立し、口縁端部が少し外側に拡張する。内外面ともに回転ナデが施され、外面に自然釉がかかる。

157は瓦質土器であり、外面に成形痕が明瞭に残り、内面に指頭圧痕・ナデが施される。

158・159は「く」の字状に外反する甕で、158は胴部外面にヘラナデ・指頭圧痕、内面に横方向のヘラナデが施される。159の口縁端部はわずかに上に拡張する。160・161は緩やかに外反する口縁部を有し、160の内面は深いハケが施される。161の外面は強い板ナデ、内面は横方向のハケが施される。162は大形の甕である。

163・164は備前焼の甕で、163は折り返し口縁部である。

165の外面は格子状タタキ、166は平行タタキが施される。167は外面に浅い沈線を2本廻らし、内面には成形痕が明瞭に残る。168・169は平底である。

170はやや大形の鉢であり、口縁部と体部の境にわずかな稜を持ち、口縁部は直立する。内外面ともに成形痕が残る。

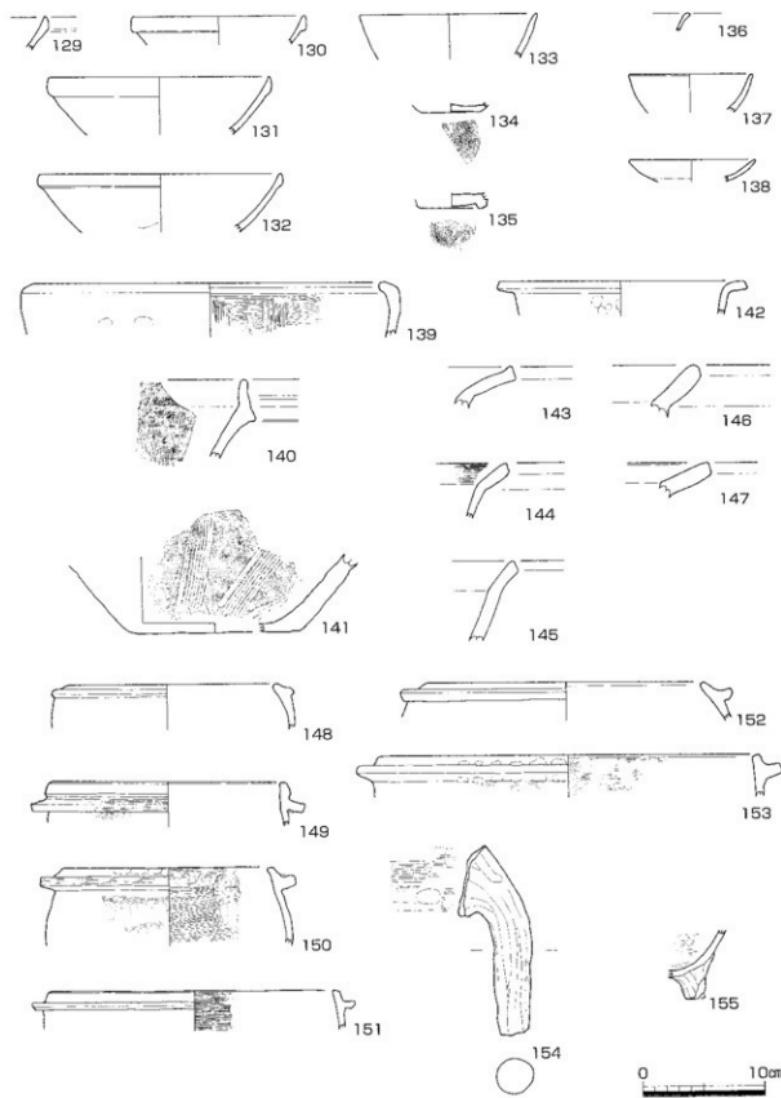
171は高杯の脚部であり、方形の透かしの一部が残存する。内外面は回転ナデが施され、内面上部に絞り目が残る。

172はイイダコ殻の口縁部であり、外面に指頭圧痕が施される。

173は瓦を不整な円形に加工した円盤であり、直径12cmを測る。176も瓦製であり、布目が施される。174・175・177～179は土器転用の円盤であり、ヘラナデが施される。174～178の直径は7～5cm、179は3.3cmである。

180は粘板岩の砥石の破片で、2面を使用している。

181～186は側面に溝を有する土錘である。186は全長6.7cmでやや小形であるが、その他は全長8.6～9.9cm、重さ210～429gを測る。187は中央に孔を有する土錘で、全長8.4cm、直径5.8cm、

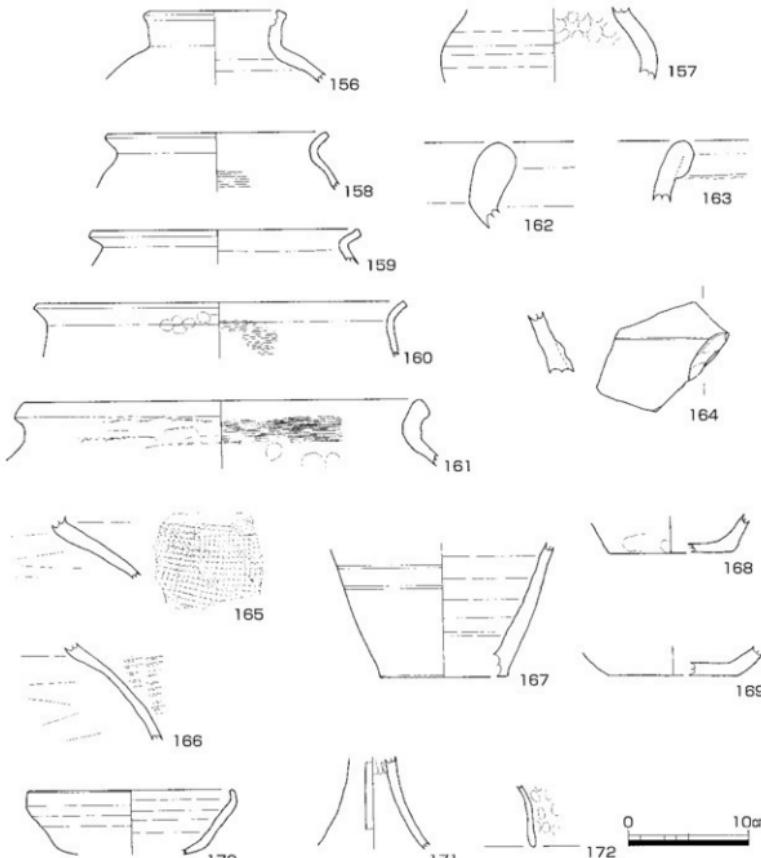


第14図 SD 1302出土遺物実測図 (2) (S : 1 / 4)

重さ290.9を測る。

188は広端面を欠損する丸瓦であり、凸面に「野原濱村无量壽院 天（文？）（以下欠損）九月（以下欠損）」の文字が刻まれている。凸面の調整は長軸方向に丁寧なナデが施され、凹面は細かな布目と幅2cmの粘土紐の痕跡が残存する。凹面内面には強くループ状に垂らす吊り紐痕が明瞭に見られる。凹面玉縁部は連続した面取りとなっている。凸面玉縁部と連結面の調整は板ナデが施される。凹面に斜め方向の緩弧線が残存し、粘土板の切断方法はコピキAである。

189は瓦当に巴文がみられる軒丸瓦であり、瓦当の下半を欠損する。外縁幅は広く、高さは低い。巴頭部は丸みを持ち、僅かにくびれを有し、尾はやや短い。凸面の調整は丁寧なナデが施

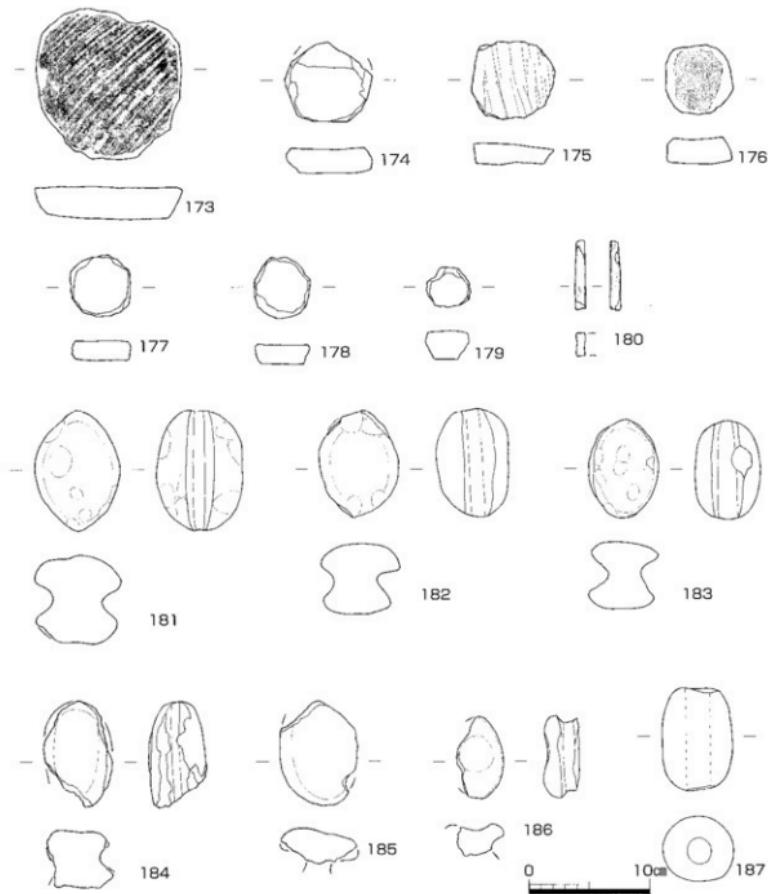


第15図 SD1302出土遺物実測図(3)(S:1/4)

され、凹面は細かな布目と幅2cmの粘土紐の痕跡が残存する。

190は玉縁の一部を欠損するがほぼ完形の軒丸瓦である。巴頭部は丸みを持ち、くびれを有し、尾はやや短い。珠文の間隔は広く、外縁幅は広く低い。凹面の玉縁連結部分に仕切りが設けられている。凸面の調整は長軸方向に丁寧なナデが施され、凹面は細かな布目と幅2cmの粘土紐の痕跡が残存する。192・193は巴文の軒丸瓦であり、尾は短く、珠文の間隔は広い。

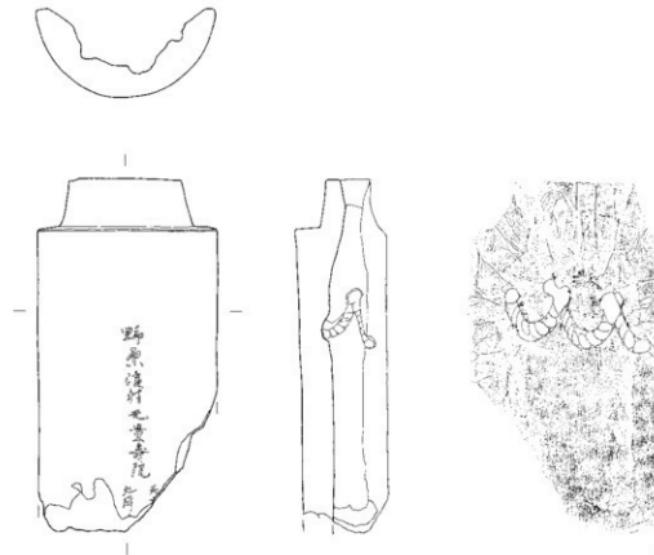
191は梵字文の軒丸瓦である。外縁幅は広く、その高さは低い。珠文の間隔は広く、内側に非常に細い界線が廻る。内区に阿弥陀如来（無量寿如来）を意味する梵字がある。



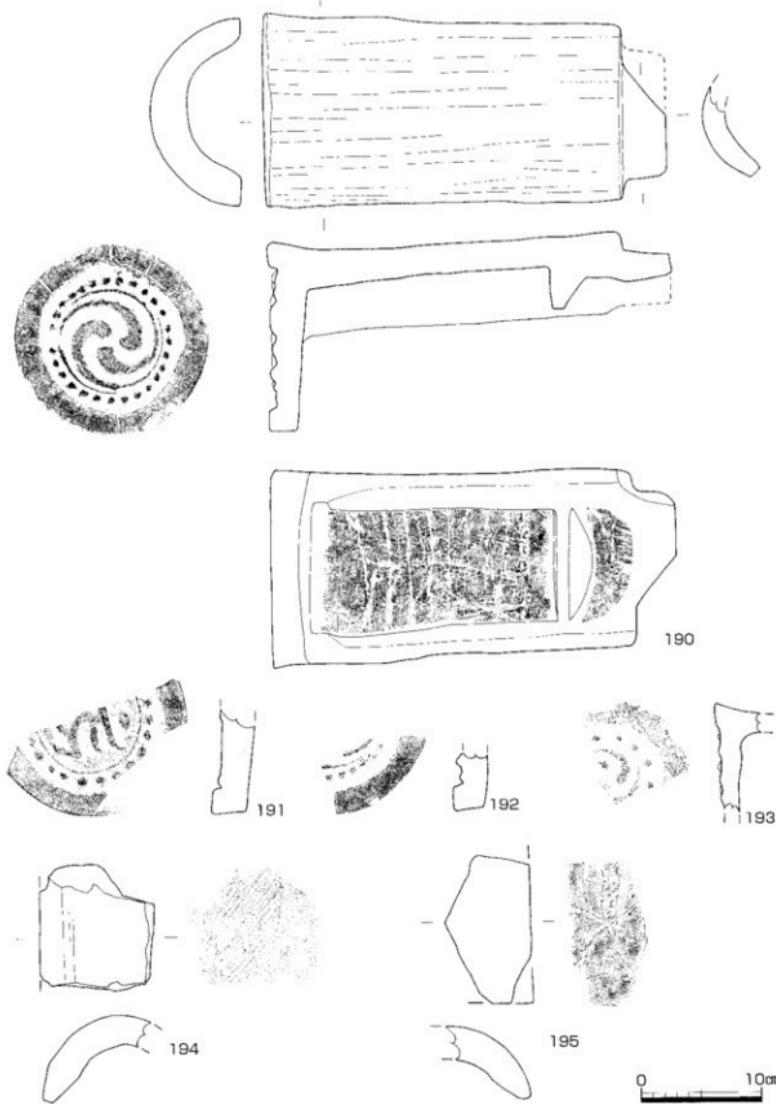
第16図 SD 1302出土遺物実測図 (4) (S : 1/4)

194・195は丸瓦の破片であり、淡赤橙色を呈する。凸面はナデ、凹面には布目・内叩き痕が残存する。粘土板の切断方法はコビキAである。

196～202は波状文軒平瓦である。外縁の幅はやや広くなり、左右外縁幅は特に広くなる。界線は無く、波状は「重波文的波状文」であり、波の峠は3～5本である。頸裏面の調整は横方向のナデが施される。196・197は瓦当上縁を幅広く面取りし、頸後縁に狭い面取りが行われる。



第17図 SD1302出土遺物実測図(5)(S:1/4)



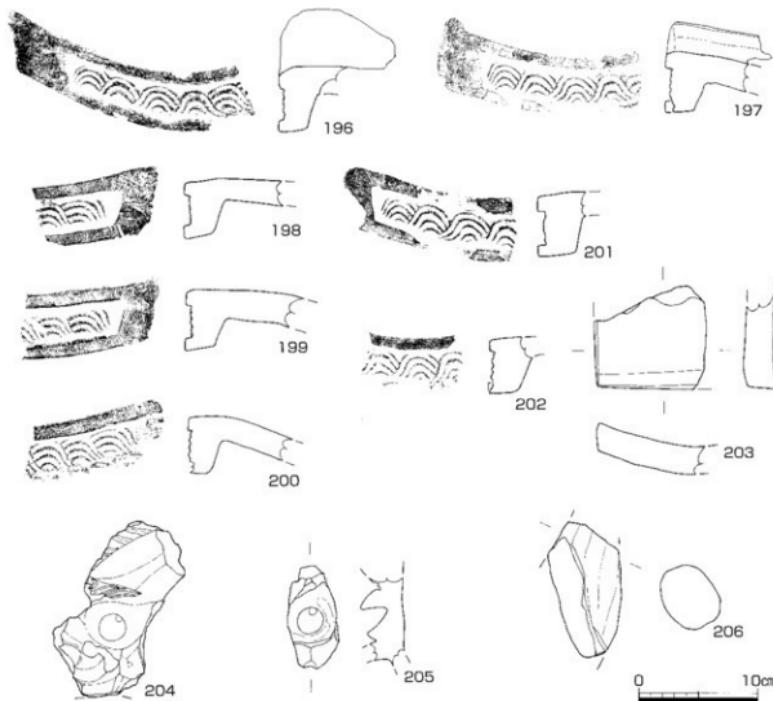
第18図 S D1302出土遺物実測図（6）(S : 1 / 4)

197は頸部に圧痕が残存する。198は頸後縁に幅5mmの面取りが行われ、凸面に横方向の板ナデが施される。凹面には幅2cmのヘラナデが横方向に施される。199は瓦当上縁を幅広く面取りし、頸後縁に狭い面取りが行われる。200は瓦当上縁を幅2mmの面取りをし、頸後縁の依存状態が悪いがやや幅の広い面取りの痕跡が残る。201は瓦当周縁の面取りは行われていないが、瓦当上縁には凹面に対して幅1.7cmの非常に緩やかな傾斜がある。202は瓦当上縁に幅2mmの面取り、頸後縁に幅5mmの面取りがある。

203は半瓦であり、色調はにぶい橙色を呈する。凸面に斜め方向の緩弧線が残存する。凹面狭端側端・側面・狭端面はナデが施される。

204～206は鬼瓦の破片である。204は天空を睨みつける目と角の部分であり、205は口、206は角の一部である。

207は五輪塔の空輪・風輪で、石材は角礫凝灰岩である。空輪の直径は15.4cm、高さ11.5cmを測り、風輪の直径は16.1cm、高さ10.9cmを測る。遺存状態は良く、原形を保っている。208は五輪塔の水輪であり、石材は角礫凝灰岩である。直径は22cm、高さは15.3cmを測る。表面の風化が著しい。



第19図 S D 1302出土遺物実測図(7)(S:1/4)

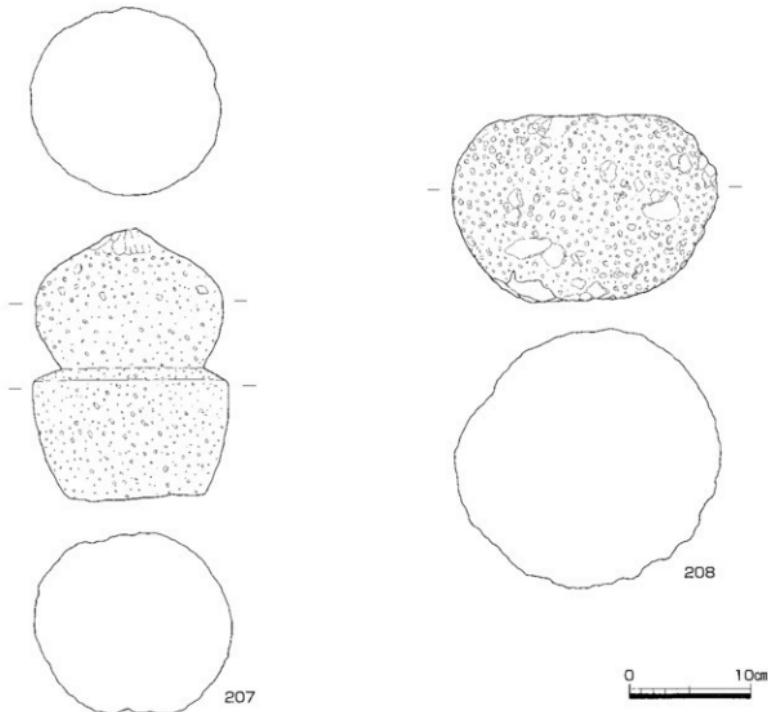
S D1303 (第21・22図)

調査区南壁中央から南東隅にかけて検出した溝であり、S D1001・S E1001・S X1001・S K1209に切られ、S D1301・S X1301を切っている。確認面のレベルは標高0.80m前後である。溝の方向はN-77°-Eであるが、S D1301より南側はやや方向を変える。検出した全長は11.90mを測り、上場の最大幅は溝の中央付近にあり1.40mである。溝の東側は近代の搅乱により上部を削平されている。確認面からの深さは溝の中央で0.46m、西端で0.24m、東端で0.20mを測る。底面のレベルはほぼ平坦であり、標高0.45m前後である。溝は段を有する掘り込みであり、上部は非常に緩やかであるが中央で急傾斜に落ち込む。埋土は灰白色シルト質細砂+灰白色細砂の單一層である。

遺物は、土師質土器小皿(209・210)、同杯(211～217)、瓦器小皿(218)、同椀(219～221)、土師質土器羽釜(222)、同足釜(223・226)、同鍋(224)、須恵器甕(225)である。

209・210は器高の低い小皿であり、内外面ともに摩滅しており調整は不明である。

211は口径10.4cm、底径7.0cm、器高2.9cmを測る。内外面の調整は回転ナデであり、底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。212は口径10.0cm、底径6.0cm、器高2.9cmを測る。底部はやや上



第20図 S D1302出土遺物実測図(8)(S:1/4)

げ底気味である。体部外面に成形痕が残存する。内外面の調整は回転ナデが施され、底部は中央に板目、周縁にナデが施される。213・215は直線的な体部で、回転ナデが施される。214は内消気味の体部である。216は体部の立ち上がりの緩やかな器形で、器高は低い。内外面の調整は回転ナデが施される。217の底部は回転ヘラ切り後にヘラナデ・指ナデが施される。

218は口径9.8cm、器高2.3cmを測り、体部外面の調整は指頭圧痕・ナデ、内面はヘラミガキ・ナデが施される。

219は椀の口縁部であり、体部外面の調整は指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面はナデ後にヘラミガキが施される。220・221は底部である。220は外面に回転ナデ、内面にナデが施される。221は低い高台を有し、内面にナデの後にヘラミガキが施される。

222は短く直立する口縁部と水平に太く伸びる鈎部であり、口縁端部と鈎端部に平坦面を有する。口縁部と鈎部の外面はヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のナデが施される。

223は内傾する口縁部に短い鈎を有する。口縁部外面はヨコナデ、胴部外面は指頭圧痕・ナデ、内面はヘラナデが施される。226は脚であり、ナデ・指頭圧痕が施される。

224の口縁部は胴部から緩やかに外反する。口縁端部はヨコナデ、口縁部内面は横方向の深いハケが施され、胴部外面は指頭圧痕・ヘラナデ、内面は板ナデが施される。

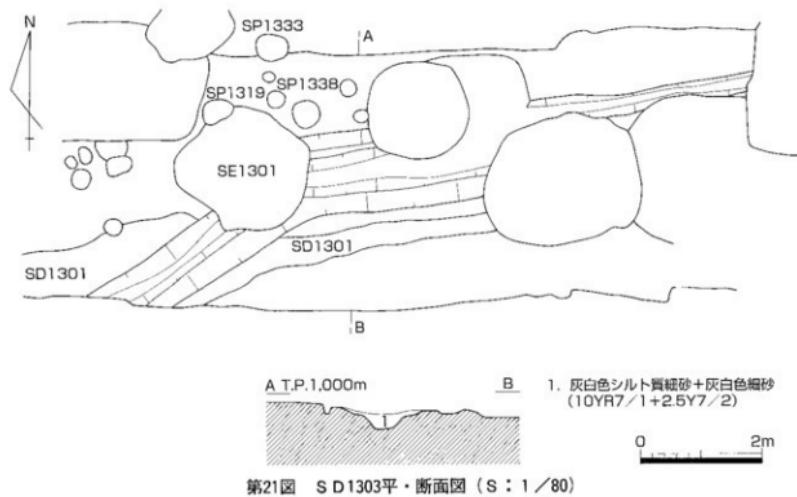
225は平底で、外面は指ナデ、内面ヘラナデ、底部は回転糸切り後にヘラケズリが施される。

S D 1304 (第23~29図)

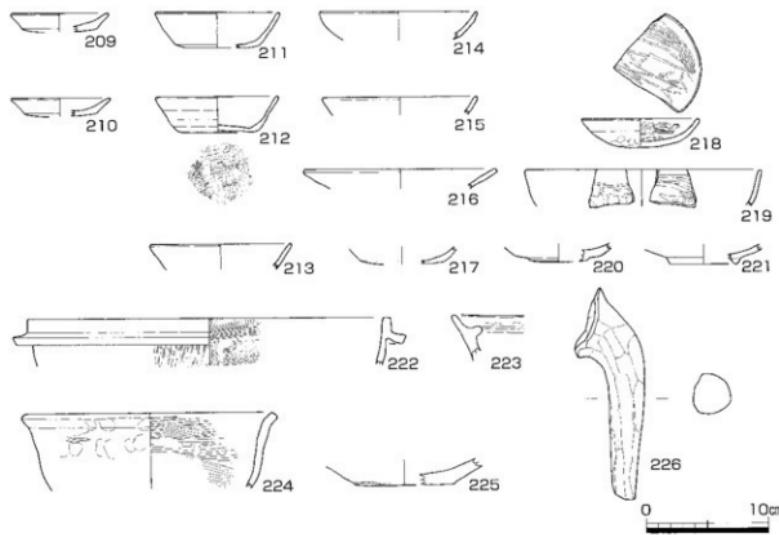
調査区の南側中央において検出した溝であり、南側の調査区外に延びている。この溝は S D 1001、S D 1301・1302、S E 1301に切られている。確認面のレベルは標高1.00mである。溝の方向はN -45° - Eを示す。検出した溝の全長は約11.80mであり、北端の幅は0.60mを測るが、南端では幅広くなっている。確認面からの深さは、南端部で0.25mを測り、底面のレベルはほぼ平坦である。溝の断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色シルト質極細砂の單一層であり、わずかに木炭粒子を含んでいる。遺物の出土は溝の南端部に集中していた。

遺物は、土師質土器小皿(227~277)、瓦器小皿(278~284)、土師質土器杯(285~292)、同椀(293~301)、瓦器椀(302~342)、白磁碗(343・344・346~348)、青磁碗(345)、須恵器高杯(349)、土師質土器鍋(350)、同甕(351)、土鍤(352・353)、軒平瓦(354)、カマド(355・356)である。

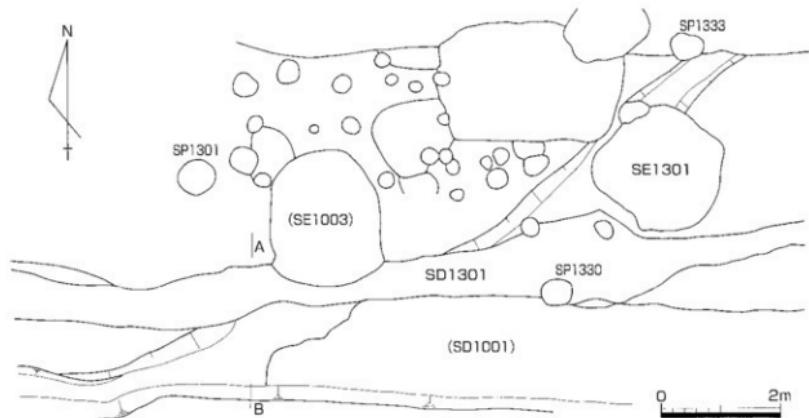
227~269は平底と体部の境が明瞭で器高の低い器形を呈し、270~277は底部から緩やかな傾斜で体部に至る器形である。227の底部は静止ヘラケズリの後に回転ヘラケズリが施される。228は外面に回転ナデ後に指ナデ、底部はナデが施される。229は厚い底部で、口縁部にわずかな煤が付着する。230・234は直線的な体部で、底部はナデが施される。231は非常に低い器高の小皿で、上げ底気味の底部はナデが施される。232・233は底部に回転ヘラケズリが施され、233は薄い器厚である。235は厚い底部にナデが施される。236はやや不整形な器形であり、底部は回転ヘラ切り後に中央に板目、周縁に回転ヘラナデが施される。237~239は底部内面に指ナデが施される。237・238の底部は中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施され、239は回転ヘラ切り後に中央に板目が施される。240の底部は板目の後に周縁に回転ヘラケズリを施す。241は厚い器厚で、底部はナデが施される。242・243は底部と体部の境が若干不明瞭で、底部はナデが施される。244は厚い器壁で、底部は回転ヘラ切りが施される。245~251は外反気味の体



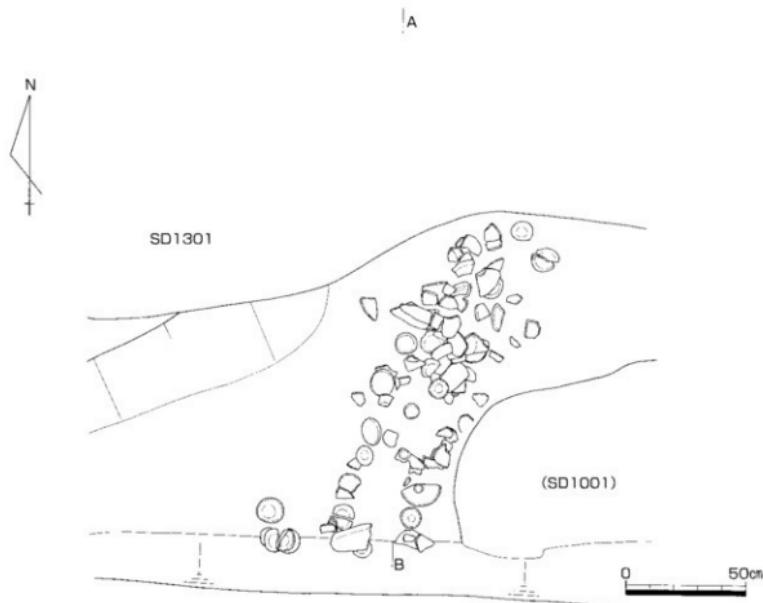
第21図 SD 1303平・断面図 (S : 1 / 80)



第22図 SD 1303出土遺物実測図 (S : 1 / 4)



第23図 SD 1304平面図 (S : 1 / 80)



第24図 SD 1304遺物出土状況実測図 (S : 1 / 20)

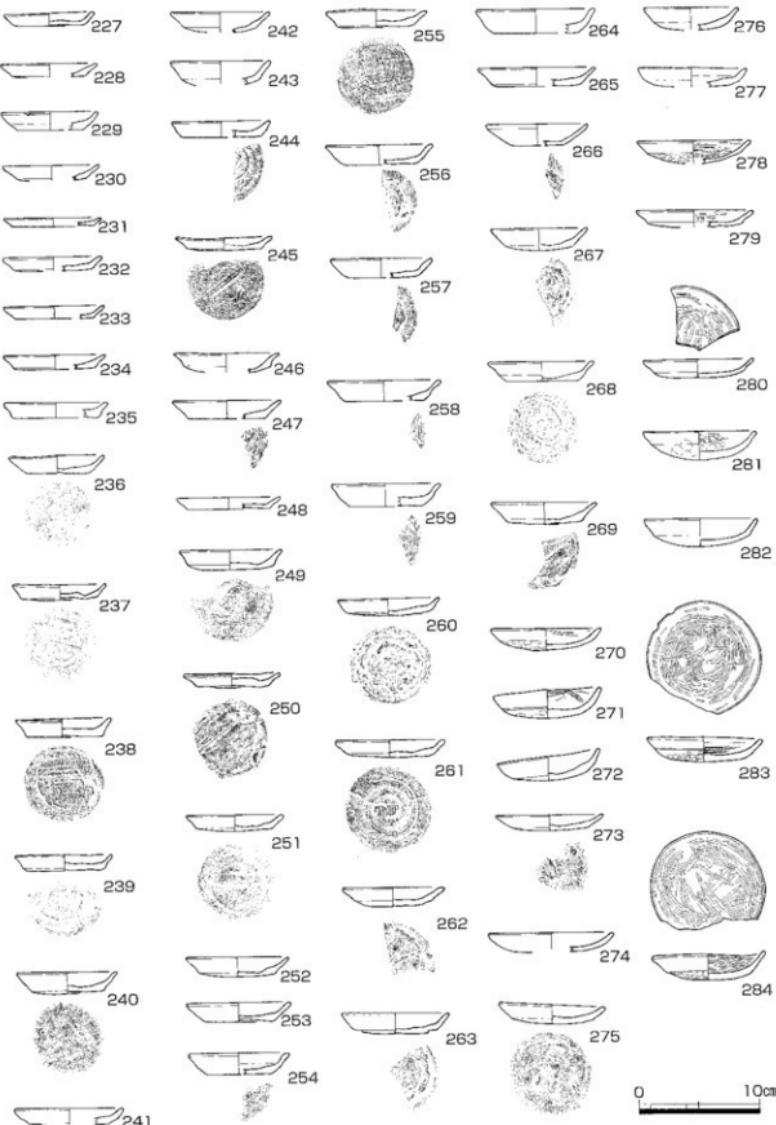
部である。245の底部は回転ヘラ切り後に中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施され、247は回転ヘラケズリ、249は中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。250は厚い底部で、不整形な器形である。内面は回転ナデ後に指ナデ、底部は回転ヘラ切り後に板目が施される。251の底部は回転糸切り後に中央に板目、周縁にナデが施される。252～254・256は回転ヘラ切りが施され、253の口縁部には煤が付着している。255の底部は中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。257は回転ヘラ切り後に回転ヘラケズリ、258は回転糸切り、259は回転ヘラケズリが施される。260・262は回転ヘラ切り後に板目、261・263は回転ヘラ切り後に中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。264の底部は厚く、回転ヘラケズリが施され、265は回転ヘラケズリ・ナデが施される。266の体部は長く、底部は回転ヘラケズリが施される。267は回転ヘラ切り後にナデ、268は回転ヘラケズリ、269は回転ヘラ切り後に中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。270・271は不整形な器形で、体部外表面は指頭圧痕とヘラナデ、内面は回転ナデ後にヘラミガキが施される。272・273の底面は回転ヘラ切り後にナデが施される。274の体部外表面は指頭圧痕とヘラナデが施される。275は中央に板目、周縁に回転ヘラケズリが施される。277は回転ヘラ切りが施される。

278～284は体部と口縁部の境に棱を有する器形である。278の口縁部・体部内面はヘラミガキ、体部外表面は指頭圧痕が施される。279・281～284の口縁部外表面は回転ナデ、体部外表面は指頭圧痕とナデ、内面はヘラミガキが施される。280の口縁部は回転ナデ、体部外表面は静止ヘラケズリ・ナデ、内面はヘラミガキが施される。

285～287は内湾気味の体部で、286は外表面に成形痕が残存し、底部は板目・ヘラナデが施される。287の底部は中央に板目、周縁に回転ヘラナデが施される。288～290は体部の立ち上がりが緩やかで、289の底部は回転ヘラ切り後に中央に板目、周縁に回転ヘラナデが施される。291の底部は回転ヘラ切り後にナデが施される。292は外表面回転ナデ、内面ナデである。

293～295は若干外反する口縁部を有し、293の体部はナデが施される。296～301は底部であり、296・300・301の内面はナデ・ヘラミガキが施される。297の底部中央は回転ヘラ切り後に回転ヘラナデが施される。301は黒色土器A類で、底部は回転ヘラケズリが施される。

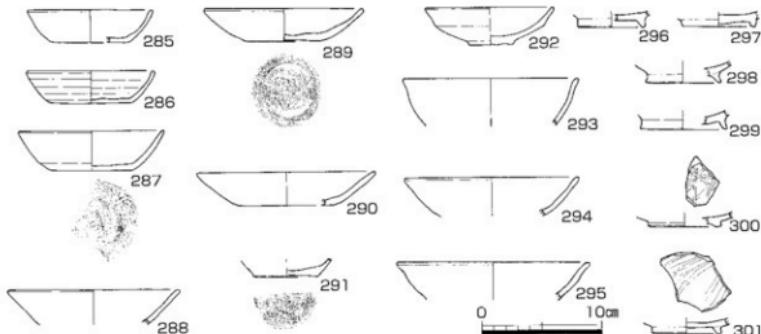
302～342は外表面に指頭圧痕・ヘラミガキ、内面にヘラミガキを施す和泉型の瓦器模であり、外表面にわずかな段を持つ器形と持たない器形がある。高台は低く断面三角形である。302は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外表面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。303は口縁部・底部に回転ナデ、体部外表面に指頭圧痕の後にヘラナデ、内面にヘラミガキが施される。304の口縁部外表面は回転ナデ後にヘラミガキ、内面は回転ナデ、体部外表面は指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。305は口縁部外表面に回転ナデ後にわずかなヘラミガキ、体部外表面に指頭圧痕後にヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。306・308・309・311・312は口縁部外表面に回転ナデ後にわずかなヘラミガキ、体部外表面に指頭圧痕後にヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。307は不整形な器形で、体部外表面は指頭圧痕後にヘラミガキ、内面はまばらなヘラミガキが施される。見込みに格子状の暗文が見られる。310は口縁部に回転ナデ、体部外表面に指頭圧痕後に若干ヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。見込みに斜格子状の暗文が見られる。313の口縁部外表面は回転ナデ後にヘラミガキ、体部外表面はわずかな指頭圧痕後にヘラミガキ、内面は細かなヘラミガキが施される。314



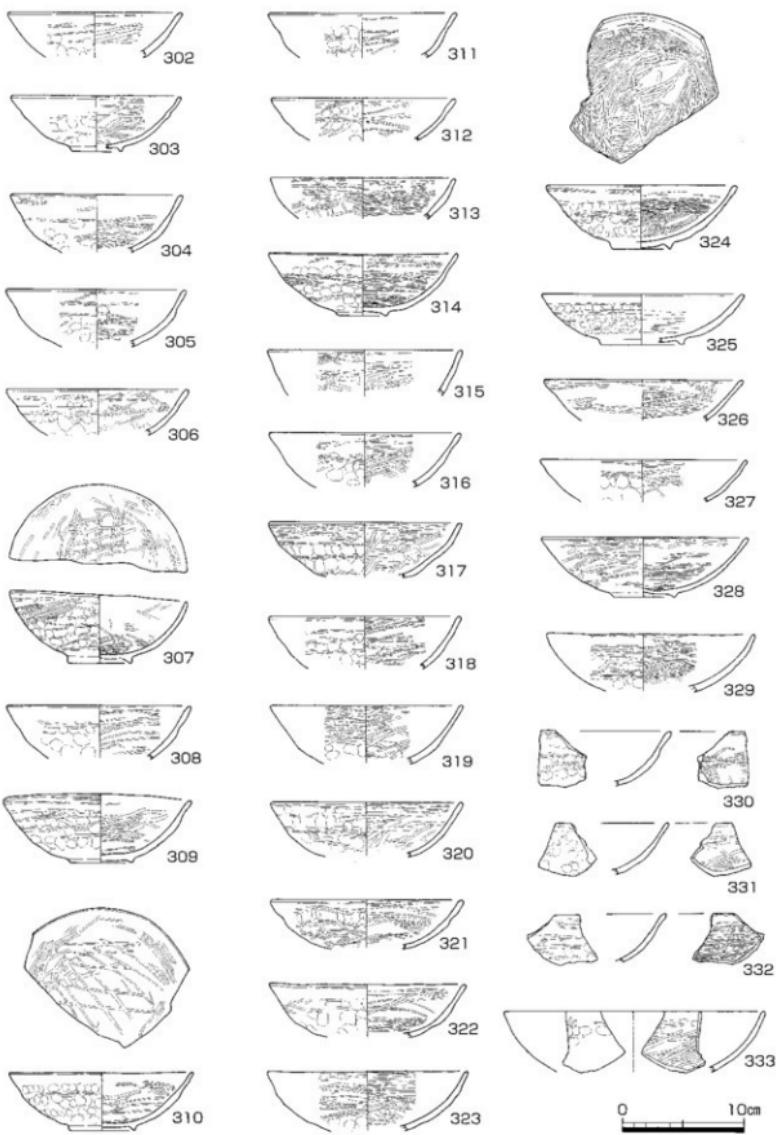
第25図 SD 1304出土遺物実測図（1）(S : 1/4)

は断面四角形の高台を有し、体部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが施される。315・316は口縁部外面に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。317は口縁部に回転ナデ後に丁寧なヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕とヘラミガキを交互に施し、内面にヘラミガキが施される。318は口縁部に回転ナデ後にわずかにヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕とヘラミガキを交互に施し、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。319は口縁部に回転ナデ後に丁寧なヘラミガキ、体部外面は下半に指頭圧痕と上半にヘラミガキを施し、内面にヘラミガキが施される。320～322は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。323は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面は下半に指頭圧痕と上半にヘラミガキを施し、内面に丁寧なヘラミガキが施される。324は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕後にわずかにヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。325の口縁部は回転ナデ、体部外面は指頭圧痕とヘラミガキを交互に施し、内面にヘラミガキがわずかに施される。326の口縁部と体部外面はわずかにヘラミガキ、体部外面はヘラミガキが施される。327は口縁部に回転ナデ後に若干のヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕の後に若干のヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。328・329は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面にわずかに指頭圧痕後にヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。330・331・333は体部外面にわずかに指頭圧痕とヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。332は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕とヘラミガキを交互に施し、内面に丁寧なヘラミガキが施される。334～337は低く断面三角形の高台、338～341は低く端部に面のある高台を有する。334の見込みには斜格子状の暗文が施される。335・337・339・340は体部外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。336・338・342の内面は隙間の広いヘラミガキが施される。341は体部外面に指頭圧痕の後に若干のヘラミガキ、内面に隙間の広いヘラミガキが施される。

343の口縁部は外反し、344は内湾する。346・347は直線的な体部に玉縁状の口縁部を有する。体部の下半は露胎となっている。348はしっかりした高台を有し、体部外面は回転ヘラケズリが施される。

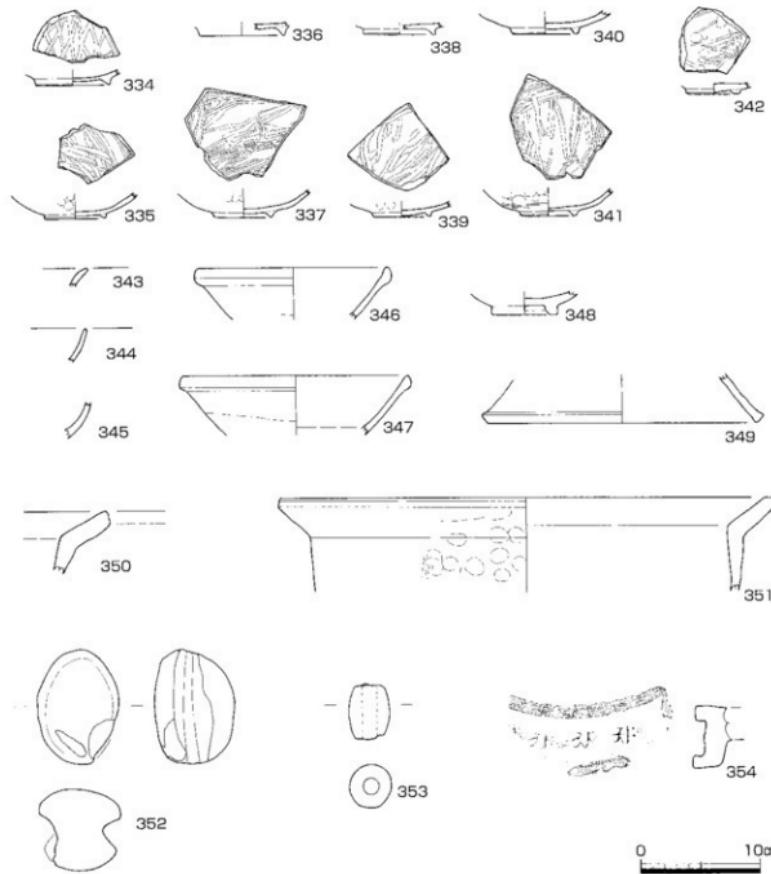


第26図 S D 1304出土遺物実測図（2）(S : 1 / 4)

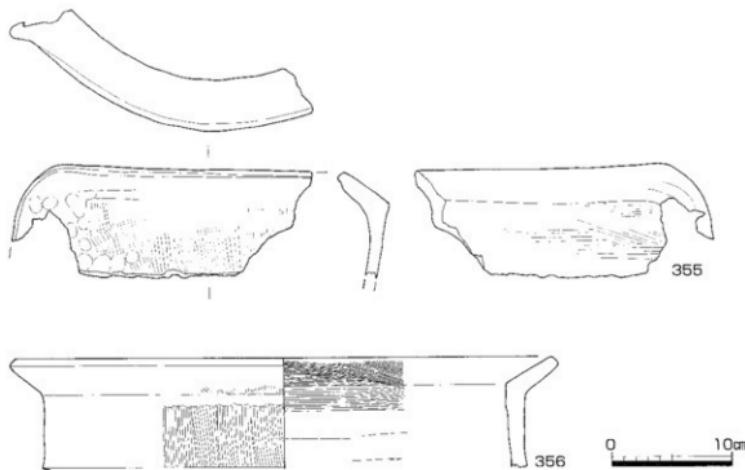


第27図 SD 1304出土遺物実測図(3)(S:1/4)

- 345は碗の下半部である。
 349は須恵器の高杯の脚部であり、内外面ともに回転ナデが施される。
 350は口縁端部に面を有し、胴部は内傾する。口縁部はヨコナデ、胴部はナデが施される。
 351の胴部は直立する。口縁端部はヨコナデ、口縁部・胴部外面は指頭圧痕とナデが施され、内面はヘラナデが施される。
 352は側面に溝を有する形態の土鉢であり、重さは356.7 gを測る。353は中央に孔を有する形態の土鉢であり、重さは42.7 gを測る。
 354は瓦当に梵字のある軒平瓦で、顎裏面の調整はヨコナデである。梵字は胎藏界五仏を表し、大日如来・開敷華王・天鼓雷音を意味する3文字が残存する。



第28図 SD 1304出土遺物実測図(4) (S : 1 / 4)



第29図 S D 1304出土遺物実測図（5）(S : 1/4)

355・356はカマドの破片である。355は縦方向と横方向のハケが施され、356はカマドの上部であり、外面に粗いハケ、内面上部に横方向の粗いハケが施される。外面と内面下半には煤が付着している。

S D 1305 (第30~32図)

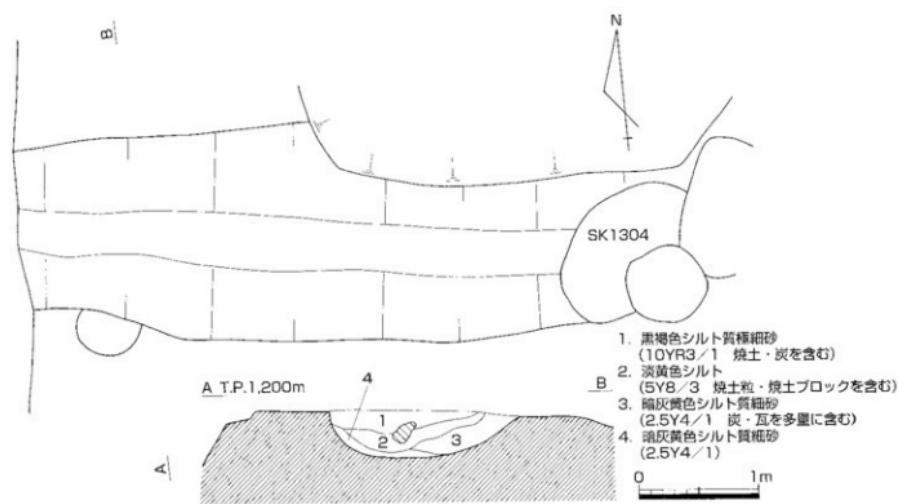
調査区西側中央において検出した溝であり、S D 1302の上位に位置する。溝の東端はS K 1304と近代の搅乱に切られ、西側は調査区外に延びている。検出面のレベルは標高1.00m前後である。溝の方位は東西方向をなし N - 95° - E を示す。検出した溝の全長は約4.90m、幅は1.80mを測り、検出面からの深さは0.33mを測る。底面のレベルはほぼ平坦である。断面は船底形を呈し、北側の掘り込みは非常に緩やかな傾斜であるが、南側はやや急傾斜の掘り込みである。埋土は4層に分層でき、北側から流れ込んだような堆積状態をなしている。埋土の大部分を占める第1~3層は焼土粒子・炭・焼土ブロックを含み、特に第3層は炭と瓦を多量に含んでいる。

遺物は、土師質土器小皿（357~362）、同杯（363~367）、瓦器椀（368・369）、青磁碗（370~372）、磁器碗（373）、陶器壺（374）、土師質土器足釜（375）、同鍋（376）、軒丸瓦（377・378）、丸瓦（379~381）、文字瓦（382）、梵字瓦（383）、軒平瓦（384）、道具瓦（385~387）、土錘（388）、スラグ（389）である。

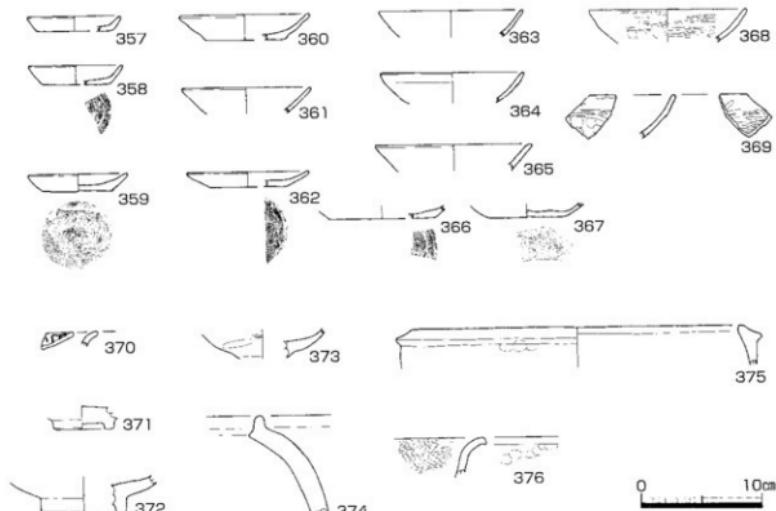
357~359は口径8cm未満の小皿である。357の底部は回転ヘラケズリ・ナデが施され、358は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリ、359は回転ヘラケズリが施される。

360~362は口径10.5cm前後を測る小皿であり、体部は直線的でやや長い。362の底部は回転糸切りである。

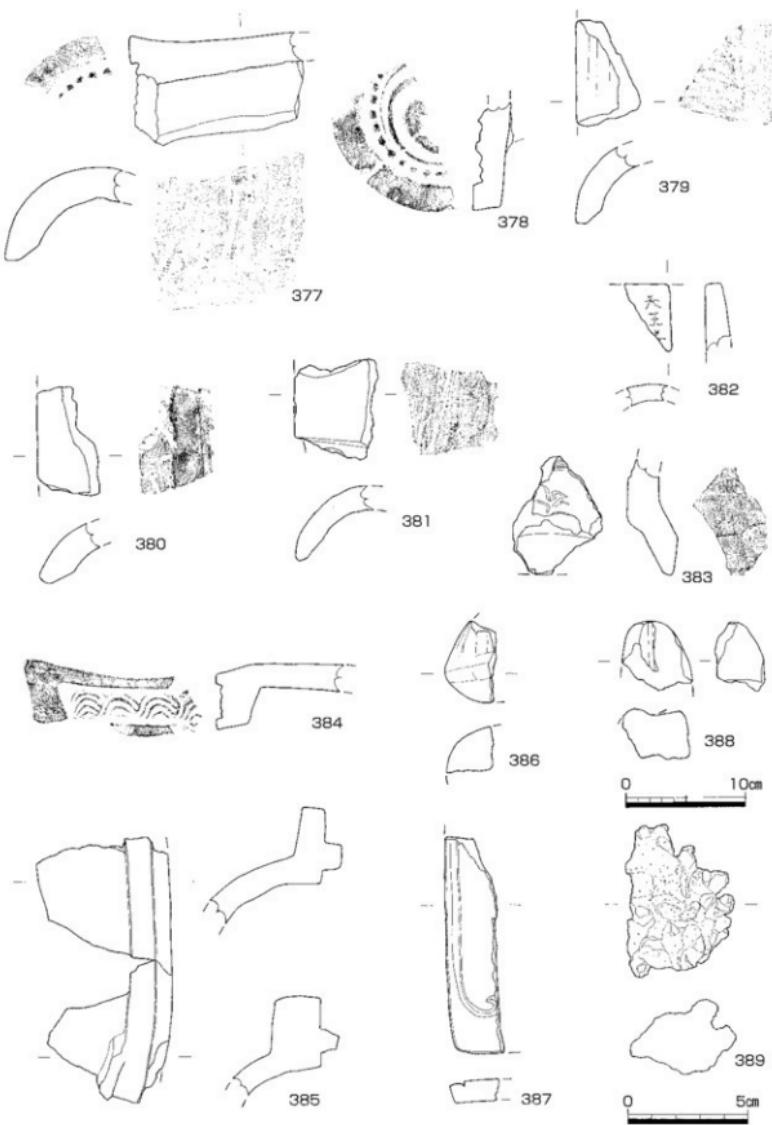
363~365は口径12~13cmを測る杯である。363・365は回転ナデ、364は口縁部と体部内面に回転ナデ、体部外面にナデが施される。



第30図 SD 1305平・断面図 (S : 1/4)



第31図 SD 1305出土遺物実測図 (1) (S : 1/4)



第32図 S D 1305出土遺物実測図 (2) (S : 1/2・1/4)

366の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。367の底部は回転糸切りの後に回転ヘラナデ、底部内面中央にヘラナデが施される。

368・369は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面に隙間の大きなヘラミガキが施される。

370の口縁部は外反し、内面に雷文をめぐらす。371は厚い底部に高台が付き、疊付と底面は露胎である。372は高い高台が付き、見込みに蛇の目釉ハギがある。

374は球形の胴部に非常に短い口縁部が付く。内外面は回転ナデが施され、内面は無釉である。

377は珠文の一部が残存する軒丸瓦であり、珠文の間隔は広い。凸面は長軸方向のヘラナデが施され、凹面は細かな布目と幅2cmの粘土紐の痕跡が残存する。378は瓦当面の破片であり、外縁幅は広く、巴文の尾はやや長い。379・380は丸瓦部の破片、381は玉縁付近の丸瓦部であり、凸面はヘラナデ、凹面は布目が残存する。380の凹面にはループ状に垂らした吊り紐痕がみられる。382は丸瓦の玉縁であり、凸面に「天王□」の文字が刻まれている。383は丸瓦の下縁付近であり、丸瓦部凸面に不動明王を意味する梵字が刻まれている。

384は「重波文的波状文」の軒平瓦であり、外縁の幅はやや広くなり、左外縁幅は特に広くなる。頸後縁に狭い面取りが行われる。凹面は長軸方向のヘラナデ、凸面の頸表面接合部は板ナデが明瞭に残る。

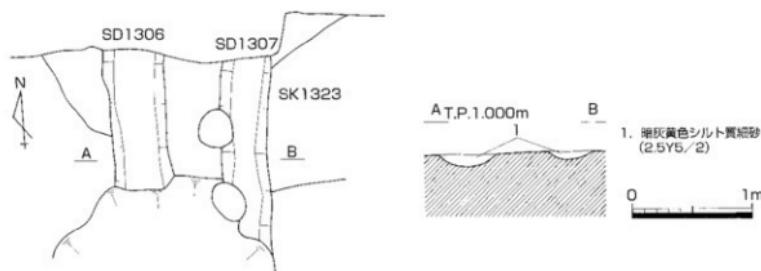
385は両面共にナデが施され、386は球形である。387は方形を呈し、「し」の字状に浅い溝があり、壇の可能性がある。

388は側面に溝を有する土錐である。

S D 1306 (第33図)

調査区北西隅において検出した溝であり、SD 1307の西側で並行に延びている。溝の南側は近代の擾乱に切られ、SK 1323を切っている。検出面のレベルは標高0.72mである。溝の方向は南北方向をなしN - 0° - Eを示す。検出した溝の全長は1.20m、幅は0.50m、検出面からの深さは0.10mを測る。底面のレベルは平坦である。断面は浅い船底状を呈する。埋土は暗灰黄色シルト質細砂の單一層である。

遺物は土師質土器の小皿・鍋の小片数点のみであり、図化できる遺物はない。



第33図 S D 1306・1307平・断面図 (S : 1 / 40)

S D1307 (第33図)

調査区北西隅において検出した溝であり、S D1306の東側で並行に延びている。溝の南側は近代の搅乱を受け、S K1323を切っている。検出面のレベルは標高0.72mである。溝の方向は南北方向をなしN-0°-Eを示す。検出した溝の全長は1.50m、幅は0.40m、検出面からの深さは0.06mを測る。底面のレベルは平坦である。断面は浅い船底状を呈する。埋土は暗灰黄色シルト質細砂の單一層である。

遺物は土師質土器の小皿・杯・鍋の小片数点のみであり、図化できる遺物はない。

2. 井戸

S E1301 (第34~36図)

調査区中央やや南寄りにおいて検出した井戸であり、S D1302とS D1101の中間の位置である。本遺構はS D1301・1303・1304と重複している。

検出面のレベルは標高0.85m前後である。上端の平面形は西側に細く突き出る不整な円形を呈し、南北方向の直径は2.05m、東西は2.20mを測る。検出面から最深部までの深さは1.25mである。掘り込みは急傾斜であるが、西側はやや緩やかになっており段を持っています。井戸の底面には1段ないし2段の石組が残存し、その下に曲物1段の井筒を検出した。井筒の直径は東西0.44m、南北0.38mを測り、南方からの土圧によって内側に変形している。曲物は幅0.28mを測る3枚の板を曲げて作られており、内側に数枚の板を立てている。埋土は9層に分層でき、上位の第1層は焼土と炭を多量に含み、第3・4層は焼土と炭を含んでいる。最下層の第8・9層は黒褐色シルト質粗砂であり、上層の土と異なっている。石組の残存状態から考えると、第1~7層は埋め戻された土である。

遺物の大部分は上層より出土しており、井筒内の出土はほとんど無い。

遺物は、土師質土器小皿(390~395)、同杯(396~398)、同椀(399~401)、白磁碗(402)、青磁碗(403~407)、磁器碗(408)、陶器擂鉢(409)、土師質土器足釜(410)、同鍋(411~412)、備前焼壺(413~414)、硯(415)、土錘(416)、羽口(417~422)、木製品(423)である。

390~393は口径8.8~9.6cmを測る小皿であり、394~395は口径12.0cm未満の小皿である。390は底部と体部の境に稜を有し、内外面とも摩滅している。391~392は口縁部と体部の境に僅かな稜があり、回転ナデが施され、392の口縁部に煤が付着している。393の底部は平底であり、回転ヘラケズリが施される。394~395は回転ナデが施され、395の口縁部に重ね焼きによる黒斑がある。

396は緩やかな傾斜の体部で、口縁部と内面に回転ナデ、体部外面上半に回転ナデ後にヘラナデ、下半にナデが施される。底部は回転糸切り後にナデが施される。397は口縁部と内面に回転ナデ、体部外面上にヘラナデが施される。398は成形痕が残り、底部は回転ヘラ切りである。

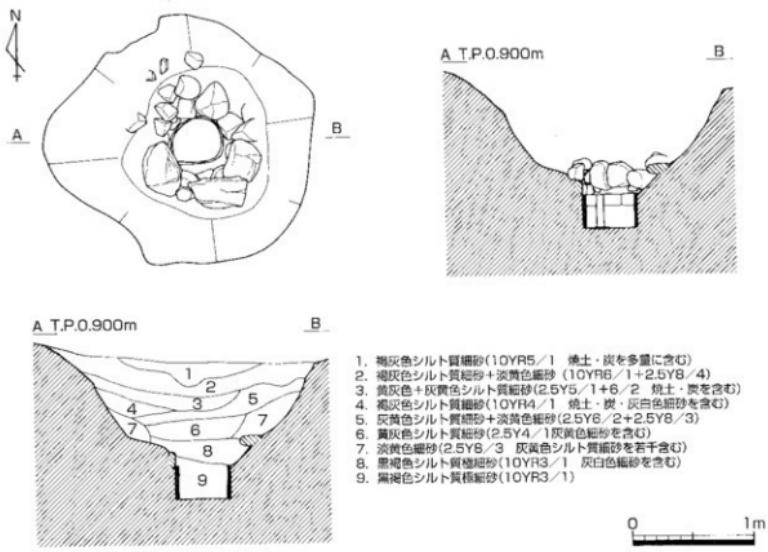
399は口縁部に回転ナデ後に僅かなヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。400は高い高台を有する。401の高台は断面四角形で内面にヘラミガキが施される。

402は玉線状の口縁部である。403は口縁部の屈曲する碗で、内面に浅い櫛描文がある。404は鍋蓮弁文を配する。405は無文である。406の外面は花文が施される。

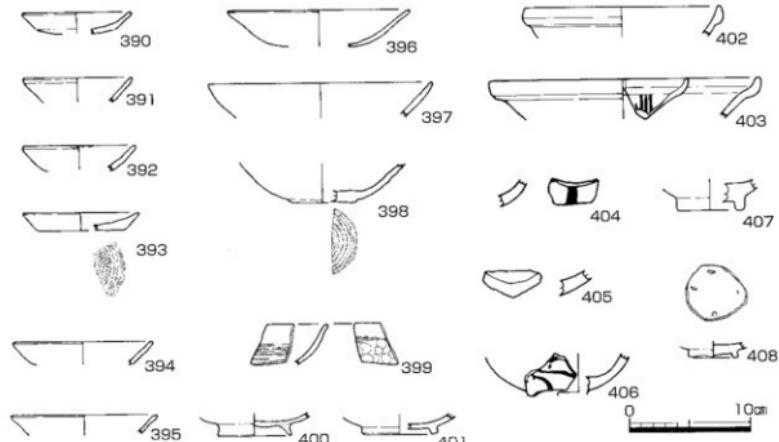
408は見込みに4ヶ所の砂目があり、疊付に4ヶ所の抉りがある。

409は8本1単位の擂り目がある。

413は直立する口縁部で、口縁端部がやや丸くなる。



第34図 S E 1301平・断面図 (S : 1 / 40)

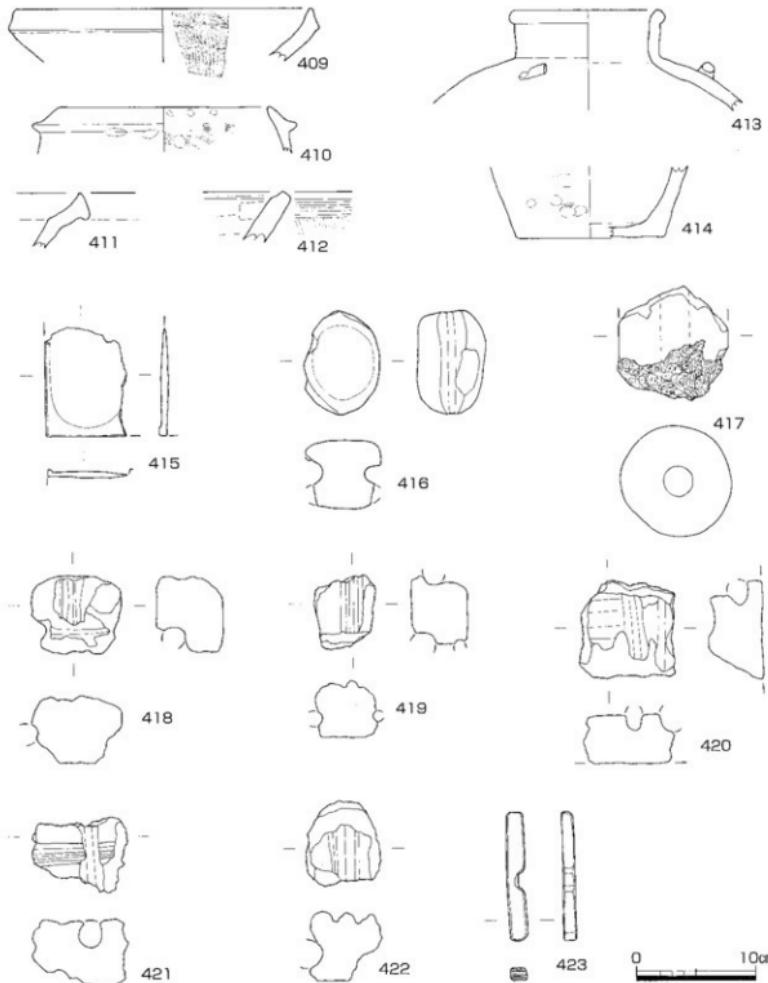


第35図 S E 1301出土遺物実測図 (1) (S : 1 / 4)

415は粘板岩製の硯の破片である。

416は側面に溝を有する土錘で、重さは273.2gである。

417は直径9.2cmを測る羽口で、中心に2.4cmの孔を有する。端面には多量のスラグが付着している。418~422は円形と三角形の孔を有する。

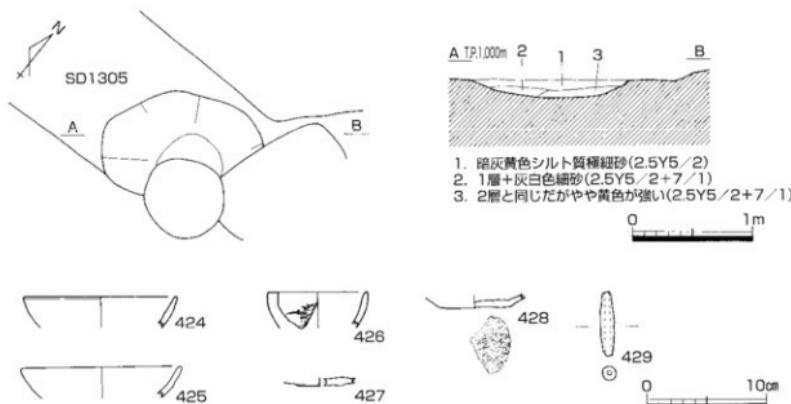


第36図 SE 1301出土遺物実測図(2)(S:1/4)

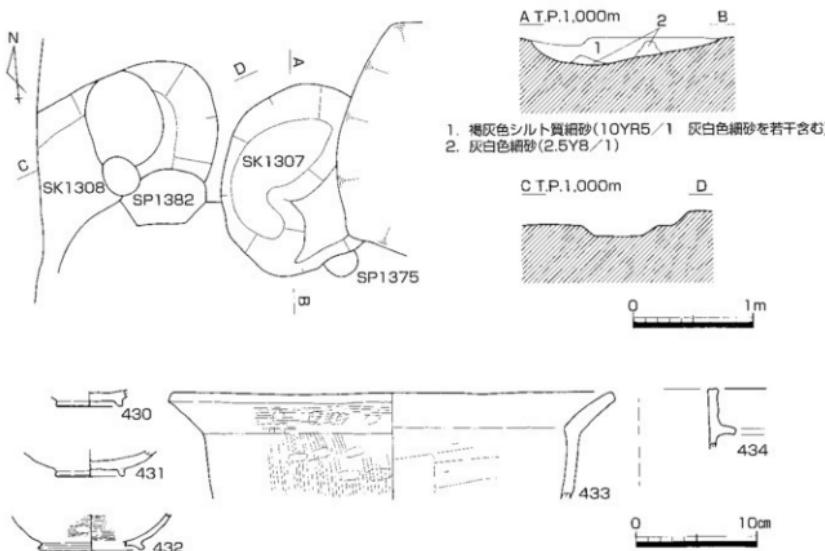
3. 上坑

S K 1304 (第37図)

調査区の南西部において検出した上坑であり、S D1305を切り、S X1304と第2面のS B1201のP-1に切られている。検出面のレベルは標高0.88mである。平面形は稍円形を呈し、



第37図 S K 1304平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)



第38図 S K 1307・1308平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)

長軸は1.34m、短軸0.56m以上を測る。深さは0.20mである。埋土は3層である。

遺物は、土師質土器杯（424・426～428）、須恵器杯（425）、土鉢（429）である。

425は口縁部に回転ナデ、体部に指ナデが施され、口縁部には重ね焼きの黒斑がある。

426は口径8.2cmを測り、体部の立ち上がりは急傾斜である。体部外面に墨による文字が書かれているが、解読不明である。427の底部は回転糸切りが施される。428の底部はヘラ切り後にヘラナデが施され、内面に指ナデが施される。

429は細管状の土錐で、全長5.35cm、直径1.10cm、重さ5.3gである。

S K 1307 (第38図)

調査区北西隅に位置する土坑であり、第3面の上層で検出した。本遺構の東側は近代の擾乱を受け、S P 1375と重複する。検出面のレベルは標高0.88m前後である。平面形は円形を呈し、直径は1.60mを測る。最深部までの深さは0.22mで、東側に0.10m高い部分がある。埋土は2層に分かれるが、第1層褐色シルト質細砂が大部分を占める。

遺物は、土師質土器椀（430～432）、同甕（433）である。

430は低い高台を有し、内外面共に摩滅している。431は断面四角形の高台を有し、体部外面にナデ、内面にヘラミガキが施される。底部中央は回転ヘラ切りが施される。432は断面四角形の高台を有し、体部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

433は口縁端部に面を持ち、口縁部外面に横方向のハケ、内面にナデ、胴部外面に縱方向のハケ、内面に横方向の板ナデが施される。

S K 1308 (第38図)

調査区北西隅でS K 1307の西側に位置する土坑であり、第3面の上層で検出した。本遺構の南側は近代の擾乱を受け、第2面のS P 1287に切られ、S P 1382と重複する。検出面のレベルは標高0.88m前後である。平面形は検出された範囲で梢円形を呈すると考えられる。長軸は1.60m以上、短軸は0.95m以上を測る。深さは0.10mである。埋土は褐色シルト質細砂の単一層である。

遺物は、瓦質土器羽釜（434）である。

S K 1314 (第39図)

調査区北西側において検出した土坑であり、S K 1313・1315・1326、S P 1414・1416・1503・1504と重複する。検出面のレベルは標高0.88m前後である。平面形は北側に突き出る不整な梢円形を呈する。東西方向の長軸は1.40m、南北方向の短軸は1.25mを測る。検出面からの深さは0.38mである。断面は逆台形を呈する。埋土は質の全く異なる2層の土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は、土師質土器杯（435）、同足釜（436～438）、弥生土器高杯（439）である。

435は体部に回転ナデ、底部内面にナデが施される。底部は回転ヘラ切りである。体部内外面に成形痕がわずかに残る。

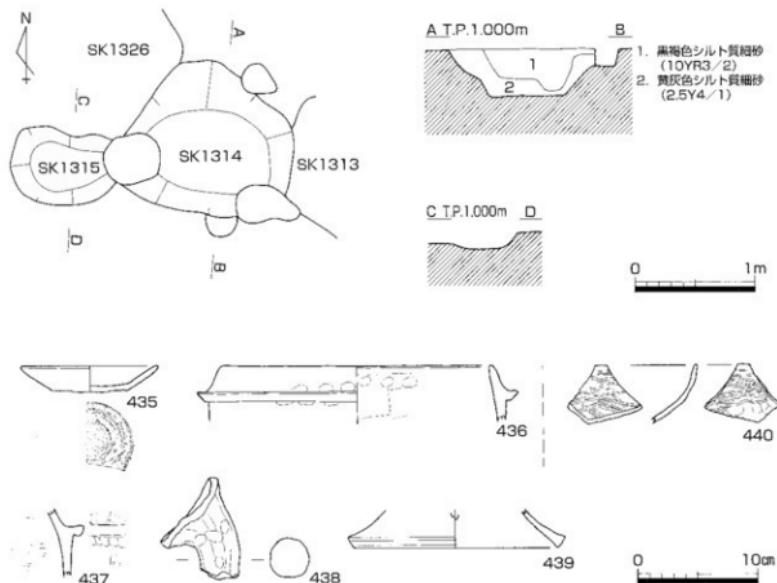
436は外側に鈎が水平に付き、鈎から口縁部までが長い。口縁部はヨコナデ、胴部内面は指頭圧痕の後に板ナデが施される。437の外側は指頭圧痕・ハケ、内面にハケが施される。

439は円孔を有する高杯の脚部である。

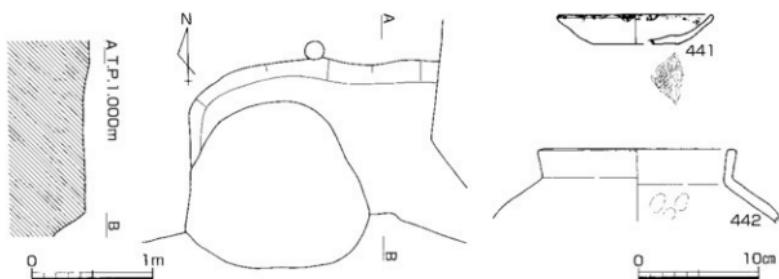
SK 1315 (第39図)

調査区北西側において検出した土坑であり、SK 1314の西側に位置する。SK 1326、SP 1503と重複する。検出面のレベルは標高0.88m前後である。平面形は不整な楕円形を呈する。東西方向の長軸は0.78m以上、南北方向の短軸は0.65mを測る。検出面からの深さは0.15mである。断面は逆台形を呈する。埋土は黄灰色シルト質細砂の単一層である。

遺物は、瓦器楕(440)である。440は和泉型の楕であり、口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。



第39図 SK 1314・1315平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)

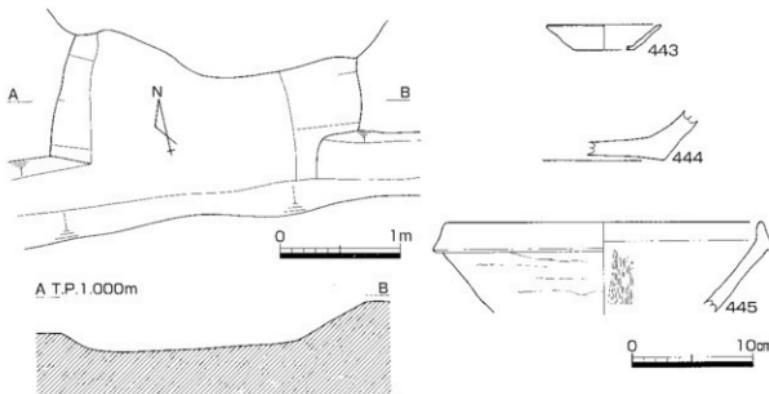


第40図 SK 1319平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)

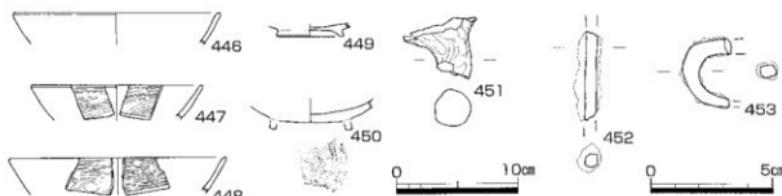
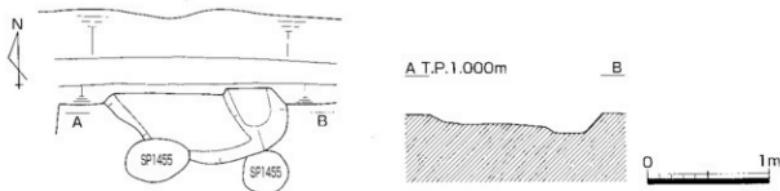
S K 1319 (第40図)

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑で、南側はS D1302に切られ、東側は近代の搅乱を受ける。本遺構はS K1328を切っている。検出面のレベルは標高0.87mである。平面形は不明であるが、隅丸方形あるいは楕円形と考えられる。検出できた東西方向の長さは2.00m、南北方向は1.40m、深さは0.06mを測る。埋土は黄灰色シルト質細～粗砂の単一層である。

遺物は、土師質土器杯(441)、甌壺(442)である。441は口縁部内外面に煤が付着しており、底部は板口が施される。442の口縁部は短く直立する。



第41図 SK 1321平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)



第42図 SK 1322平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4, 1/40)

S K 1321 (第41図)

調査区南西隅において検出した土坑であり、南側の調査区外に広がる。西側は第1面 S X 1003に削平され、北側は第2面 S E 1201に切られている。検出面のレベルは標高0.95mである。平面形は全体を検出してないので不明であるが、円形と考えられる。東西方向の直径は2.55mを測る。検出面からの深さは0.40mであり、底面は平坦である。断面は逆台形を呈し、ゆるやかな傾斜の掘り込みである。埋土は黒褐色シルト質極細砂～細砂の單一層である。

遺物は、土師質土器小皿（443）、陶器壺（444）、同擂鉢（445）である。

443は口径9.6cmを測る。445は備前焼である。

S K 1322 (第42図)

調査区北西隅において検出した土坑であり、北側の調査区外に広がる。S P 1455・1456と重複する。検出面のレベルは標高0.68mである。平面形は全体を検出してないので不明であるが、不整な円形と考えられる。検出できた東西方向の径は1.50mを測る。東側の底面にピット状の落ち込みがある。検出面からの最深部までの深さは0.15mであり、浅い部分で0.10mを測る。埋土は黄灰色シルト質細～粗砂の單一層である。

遺物は、土師質土器杯（446）、須恵質土器杯（447・448）、同碗（450）、瓦器壺（449）、土師質土器足釜（451）、鉄釘（452・453）である。

447は口縁部に回転ナデ後にヘラミガキ、体部にナデ後にヘラミガキが施される。448は口縁部と体部内面に丁寧なヘラミガキ、体部外に指頭圧痕の後にヘラミガキが施される。

449は低い高台を有し、ナデが施される。

450は高台を欠損し、体部外に回転ナデ、内面にナデが施され、底部は回転糸切りの後にナデが施される。

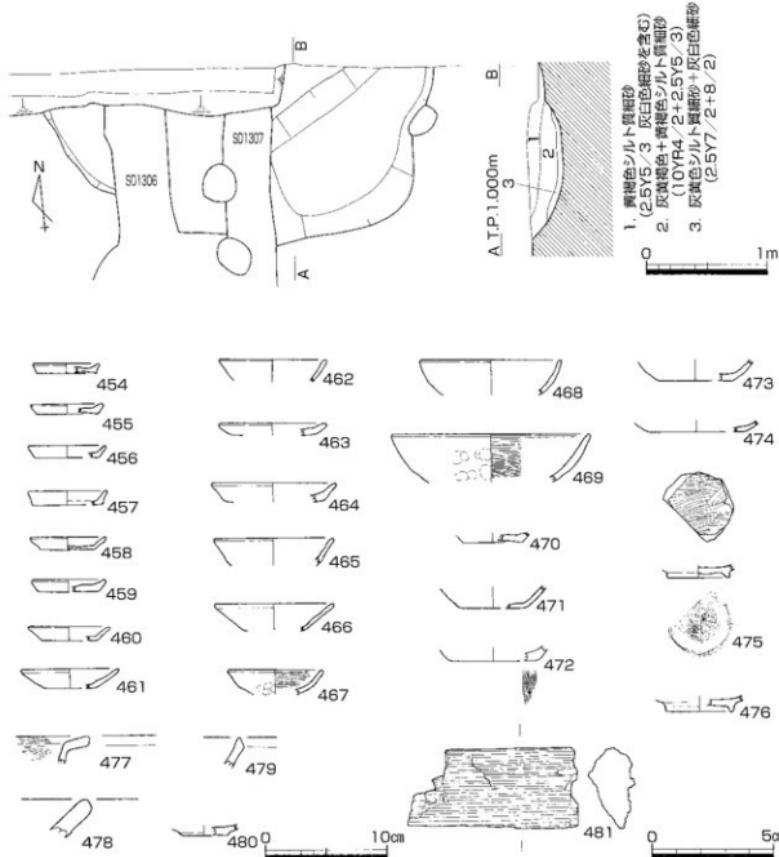
452・453は断面方形の釘である。

S K 1323 (第43図)

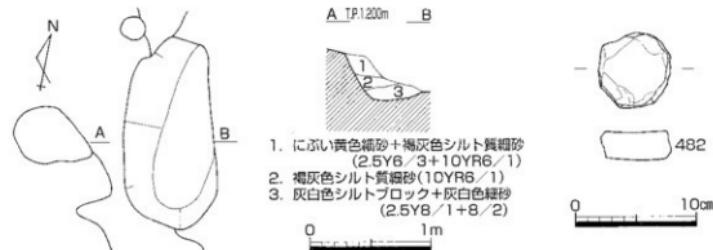
調査区北西隅において検出した土坑であり、S K 1322の東側に位置する。本遺構は北側の調査区外に広がり、S D 1306・1307に切られる。検出面のレベルは標高0.68～0.75mである。平面形は全体を検出してないので不明であるが、不整な円形と考えられる。検出できた東西方向の径は3.25m、南北方向は0.95mを測る。東側の底面は深くなっている。検出面から最深部までの深さは0.24mであり、浅い部分で0.10mを測る。埋土はほぼ同様な土であるが、詳細に観察すると3層に分層できた。

遺物は、土師質土器小皿（454～466）、瓦器小皿（467）、土師質土器杯（468～474）、須恵質土器壺（475）、土師質土器碗（476）、同鍋（477）、同甕（478）、須恵質土器捏ね鉢（479）、磁器皿（480）、珪化木（481）である。

454～457・459は口径5.4～6.4cmを測り、外傾する短い口縁部を有する。454の底部は回転ヘラ切り、455・457は回転ヘラケズリ、456は回転糸切り、459は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリが施される。458・460～462・464～466は体部の外傾度が強く長い器形である。458の底部外面は回転ヘラ切りの後に中央に板目、周縁に回転ヘラナデが施され、内面は指ナデが施される。460の底部は回転ヘラケズリ、461は回転糸切りが施される。463は口径8.7cmを測り、短い体部である。底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。



第43図 SK 1323平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4, 1/40)



第44図 SK 1328平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)

467は口径7.8cmで、口縁部外面に回転ナデ、体部外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。

469は口縁部内面に浅い沈線が見られ、体部外面に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。470の底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ、内面に指ナデが施される。471は底部に回転ヘラ切りの後に指ナデ、内面に指ナデが施される。472の底部は回転糸切り、473・474はナデが施される。

475は底部に板目、内面にヘラミガキが施される。

S K1328 (第44図)

調査区南西側において検出した土坑であり、S K1305の東側に位置する。本遺構は第2面のS E1201・S X1202に切られる。検出面のレベルは標高0.97mである。平面形は不整な楕円形を呈する。検出できた南北方向の径は1.55m、東西方向は0.75mを測る。検出面からの深さは0.40mである。断面は逆台形を呈する。埋土は3層に分層でき、自然堆積である。

遺物は瓦製円盤(482)である。

4. 柱穴

S P1301 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴であり、単独で存在する。検出面のレベルは標高0.70mである。平面形は円形を呈し、直径は0.62m、深さは0.13mを測る。埋土は灰黄色シルト質細砂、淡黄色細砂の單一層である。

遺物は、上師質土器小皿(483・484)である。483は厚い底部にやや長い体部であり、底部に静止糸切りの後に回転ヘラナデ、内面にナデが施される。484の底部は回転ヘラ切りの後に板目、内面にナデが施され、口縁部に煤が付着している。

S P1312 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴であり、S P1311・1319と重複する。検出面のレベルは標高0.92mである。平面形は不整な円形を呈し、直径は0.22m、深さは0.26mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂+灰白色細砂の單一層である。

遺物は、土師質土器小皿(485)であり、底部は未調整である。

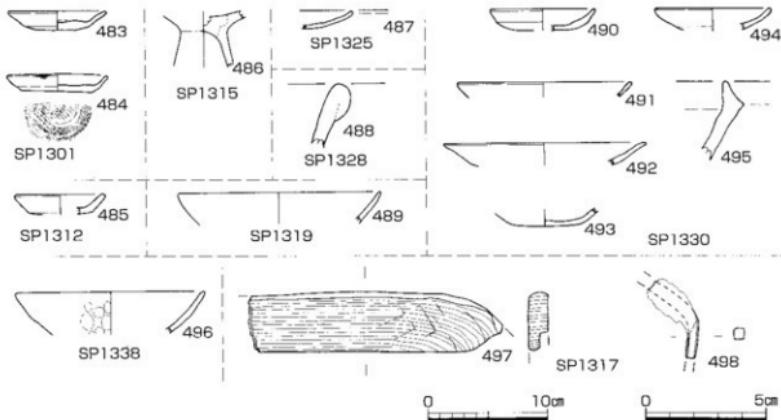
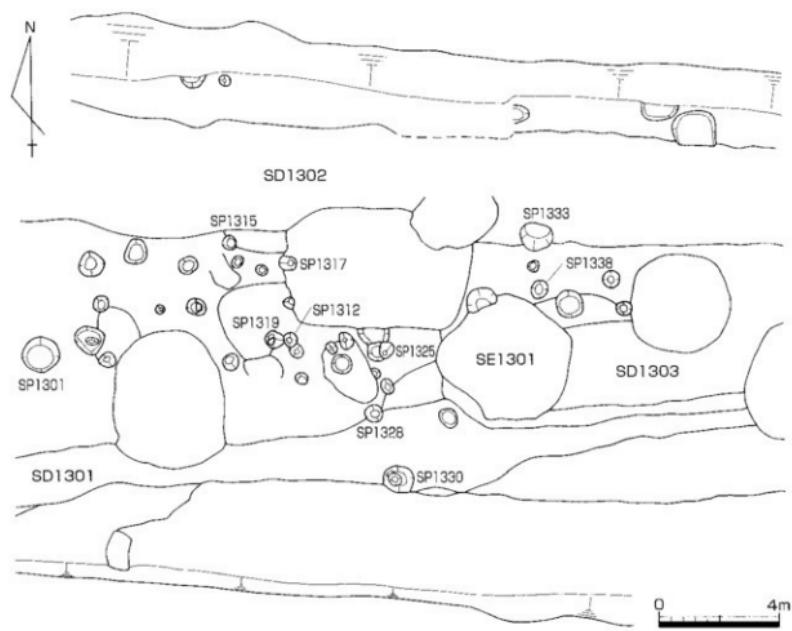
S P1315 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴である。検出面のレベルは標高0.89mである。平面形は円形を呈し、直径は0.23m、深さは0.08mを測る。埋土は暗灰黄色シルト質細砂+灰白色細砂の單一層である。遺物は、弥生土器高杯(486)であり、内外面共に摩滅している。

S P1317 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴である。検出面のレベルは標高0.92mである。平面形は円形を呈し、直径は0.25m、深さは0.47mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の單一層であり、炭を若干含む。

遺物は、木製品(497)、鉄釘(498)である。497は柾目で、加工痕を明瞭に残す。



第45図 S P 1301~1338平面図および出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4, 1/80)

S P 1319 (第45図)

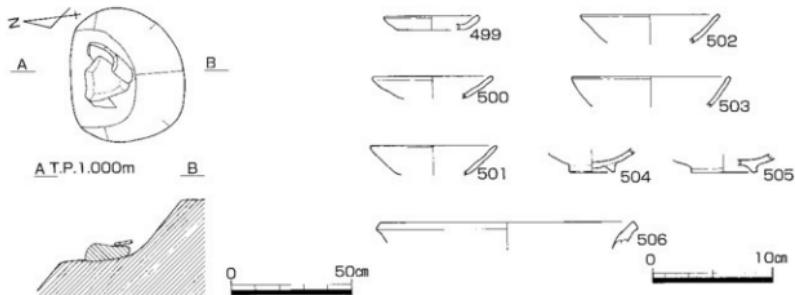
調査区中央やや南寄りに検出した柱穴であり、S P 1312と重複する。検出面のレベルは標高0.92mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は0.31m、短径0.28m、深さは0.15mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂で焼土と炭を含む。

遺物は、磁器碗（489）である。

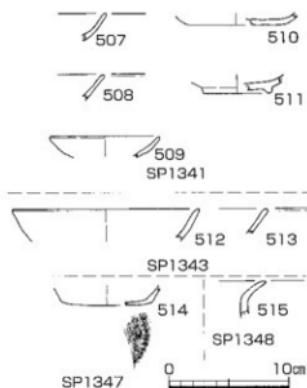
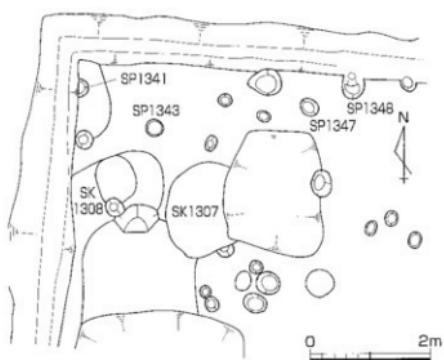
S P 1325 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴であり、S P 1324と重複する。検出面のレベルは標高0.87mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は0.45m、短径0.30m、深さは0.20mを測る。底面に段を有する。埋土は黄灰色シルト質細砂の單一層である。

遺物は、土師質土器小皿（487）で、器高が低い。底部はナデ、内面は指ナデが施される。



第46図 S P 1333平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/20)



第47図 S P 1341~1348平面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/80)

S P 1328 (第45図)

調査区中央やや南寄りに検出した柱穴であり、S D1301と重複する。検出面のレベルは標高0.85mである。平面形は円形を呈し、直径は0.30m、深さは0.12mを測る。埋土は黄灰色シルト質細砂の單一層で、焼土粒子を含む。遺物は、備前焼甕(488)である。

S P 1330 (第45図)

調査区中央の南側に検出した柱穴であり、S D1001に切られ、S D1301と重複する。検出面のレベルは標高0.85mである。平面形は円形を呈し、直径は0.50mを測る。掘り込みは東側に段を有し、深さは0.45mである。埋土は黄灰色シルト質細砂で、焼土と炭を含む。

遺物は、上師質土器小皿(490)、同杯(491~493)、磁器皿(494)、陶器捕鉢(495)である。490の底部はナデ、493は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

S P 1333 (第46図)

調査区中央のやや東寄りに検出した柱穴であり、S D1302に切られる。検出面のレベルは標高0.90mである。平面形は円形を呈し、直径は0.53m、深さは0.26mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂の單一層である。底面直上に丸瓦と石が出上する。

遺物は、土師質土器小皿(499~501)、同杯(502・503)、同椀(504)、瓦器椀(505)、須恵器甕(506)である。

499は短い体部、500・501は長い。505の内面はヘラミガキが施される。

S P 1338 (第45図)

調査区中央のやや東寄りに検出した柱穴であり、単独に存在する。検出面のレベルは標高0.86mである。平面形は円形を呈し、直径は0.27m、深さは0.10mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂で、焼土と炭を含む。遺物は、瓦器椀(496)である。

S P 1341 (第47図)

調査区北西隅の上層で検出した柱穴であり、S K1306を切る。検出面のレベルは標高0.87mである。平面形は円形を呈し、直径は0.30m、深さは0.08mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂で、灰白色細砂を若干含む。

遺物は、土師質土器小皿(507~509)、同杯(510)、同椀(511)である。

S P 1343 (第47図)

調査区北西隅の上層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.85mである。平面形は円形を呈し、直径は0.25m、深さは0.18mを測る。埋土は灰白色+淡黄色シルト質細砂。

遺物は、土師質土器杯(512・513)である。

S P 1347 (第47図)

調査区北西隅の上層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.87mである。平面形は円形を呈し、直径は0.28m、深さは0.24mを測る。埋土は暗灰黄色シルト質細砂である。

遺物は、土師質土器杯(514)で、底部に板目の後にナデが施される。

S P 1348 (第47図)

調査区北西隅の上層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.85mである。平面形は楕円形を呈し、直径は0.38m、深さは0.30mを測る。南側に段がある。埋土は黄灰色シルト質細砂である。遺物は、土師質土器壺（515）である。

S P 1384 (第48・49図)

調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.69mである。平面形は円形を呈し、直径は0.32m、深さは0.17mを測る。埋土は灰白色細砂+灰黄色シルト質細砂である。遺物は、土師質土器杯（516・517）で、516の底部は回転ヘラ切りの後に板目、517は回転ヘラナデが施される。

S P 1400 (第48・49図)

調査区北西側の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.80mである。平面形は不整な楕円形を呈し、5個のピットが重なり合う。長径は0.90m、短径0.45m、深さは0.26mを測る。埋土は灰白色細砂+褐灰色シルト質細砂である。

遺物は、土師質土器小皿（518）で、底部は回転ヘラ切りの後にナデが施され、口縁部にわずかな煤が付着する。

S P 1403 (第48・49図)

調査区北西側の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.78mである。平面形は不整な円形を呈し、直径は0.70m、深さは0.35mを測る。埋土は灰白色細砂+褐灰色シルト質細砂である。遺物は、須恵質土器捏ね鉢（523）である。

S P 1416 (第48・49図)

調査区北西側の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.89mである。平面形は不整な楕円形を呈し、径は0.53×0.30m、深さは0.24mを測る。埋土は灰白色細砂+褐灰色シルト質細砂である。遺物は、瓦製円盤（538）である。

S P 1455 (第48・49図)

調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、S K 1322・S P 1458と重複する。検出面のレベルは標高0.69mである。平面形は楕円形を呈し、径は0.50×0.36m、深さは0.14mを測る。埋土は灰白色細砂+灰黄色シルト質細砂である。

遺物は、土師質土器小皿（520）、同椀（519・521）である。520は器高が低く、底部に回転ヘラ切りが施される。521は内外面とも回転ナデの後にヘラミガキが施される。

S P 1458 (第48・49図)

調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、S P 1455・1459と重複する。検出面のレベルは標高0.69mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は0.80m以上、短径0.50m、深さは0.14mを測る。埋土は灰白色細砂+灰黄色シルト質細砂である。

遺物は、土師質土器杯（522）である。

S P 1459 (第48・49図)

調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、SK1307に切られ、S P 1458と重複する。検出面のレベルは標高0.68mである。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は1.20m、短径1.00m、深さは0.28mを測る。埋土は灰白色細砂+灰黄褐色シルト質極細砂である。

遺物は、須恵器椀(524)、土師質土器杯(525~528)、同椀(529)、瓦器小皿(530)、同椀(531・532)、土師質上器壺(533)、弥生土器壺(534)である。

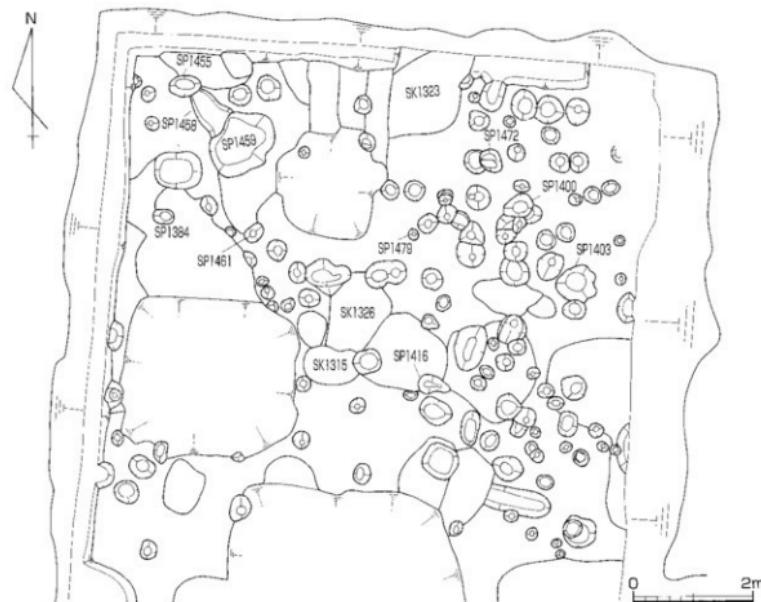
528の底部は中央に板口、周縁に回転ナデが施される。529の内面はヘラミガキが施される。530は外面に回転ナデ、内面にヘラミガキが施され、531・532は外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

S P 1461 (第48・49図)

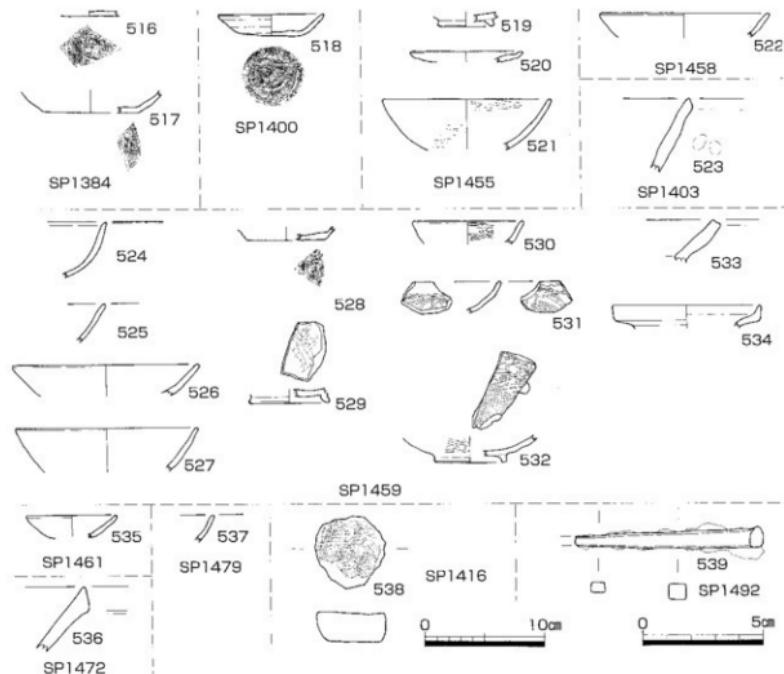
調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、SK1307に切られる。検出面のレベルは標高0.77mである。平面形は楕円形を呈し、径は0.34×0.24m、深さは0.22mを測る。埋土は灰白色細砂+灰黄色シルト質極細砂である。遺物は、土師質土器小皿(535)である。

S P 1472 (第48・49図)

調査区北西隅の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.80mである。平面形は



第48図 S P 1384~1479平面図 (S : 1/80)



第49図 SP 1384~1492出土遺物実測図 (S : 1/2, 1/4)

不整な円形を呈し、直径は0.34m、深さは0.23mを測る。底面直上に根石が残存する。埋土は灰白色細砂+黄灰色シルト質細砂である。遺物は、備前焼鉢（536）である。

S P 1479 (第48・49図)

調査区北西側の下層で検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.79mである。平面形は円形を呈し、直径は0.17m、深さは0.10mを測る。埋土は淡黄色細砂+黄灰色シルト質細砂である。遺物は、土師質土器杯（537）である。

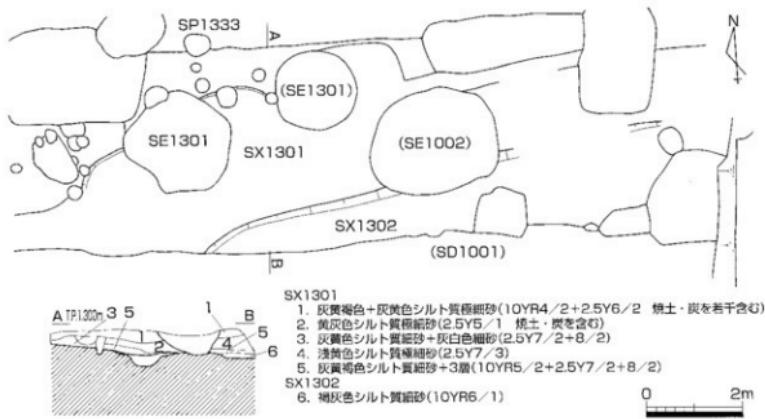
S P 1492 (第7・49図)

調査区南西側において検出した柱穴であり、検出面のレベルは標高0.98mである。平面形は梢円形を呈し、径は0.50×0.38m、深さは0.35mを測る。埋土は灰色シルト質細砂である。遺物は、鉄釘（539）であり、断面は方形である。

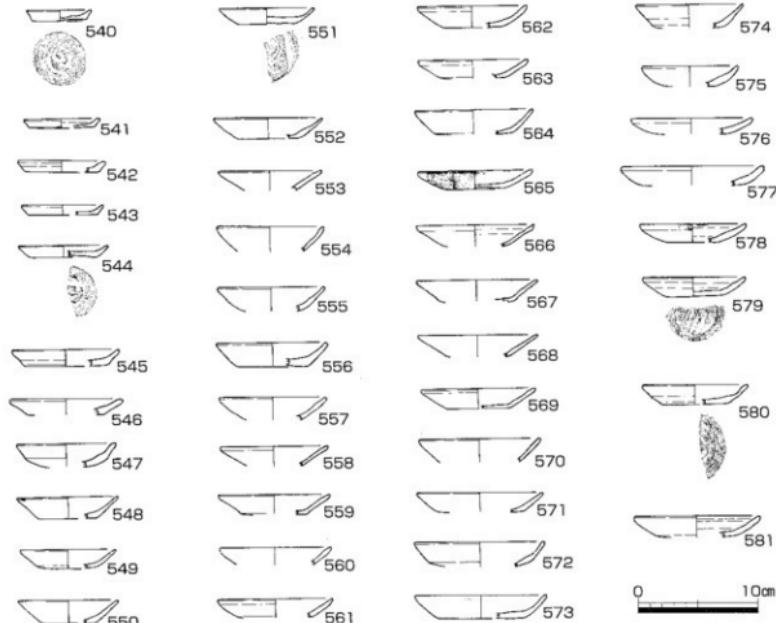
5. 性格不明遺構

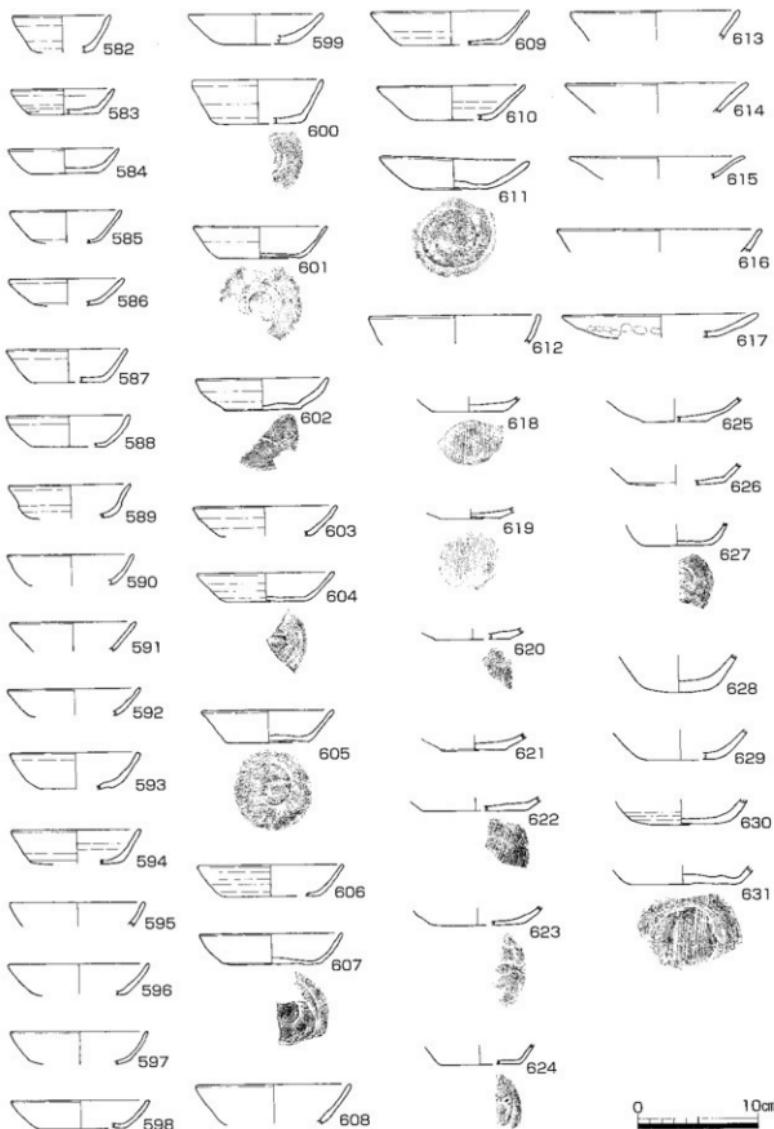
S X1301 (第50~64図)

調査区中央部の南側のS E 1301周辺において検出した落ち込みであり、S E 1301・S D 1301・



第50図 S X1301・1302平・断面図 (S : 1 / 100)





第52図 S X 1301出土遺物実測図(2) (S : 1 / 4)

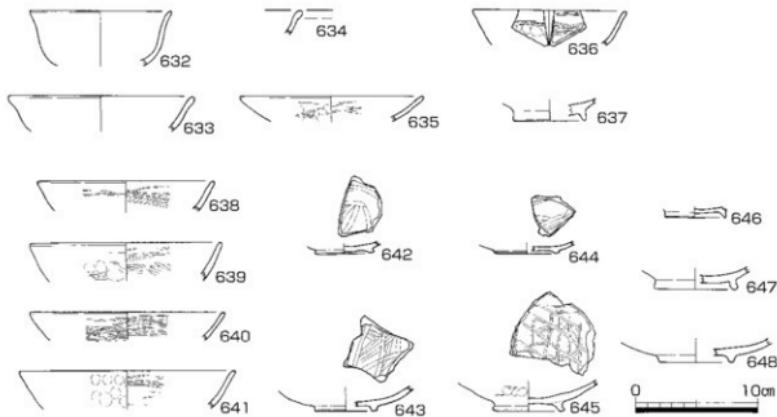


第1面 S E1001・1002に切られている。検出面のレベルは標高0.86mである。平面形や規模は北辺の一部のみの検出であるため不明であるが、東はS E1002付近まで、南はS D1001まで広がる規模の大きな落ち込みである。検出面からの深さは0.20mを測り、掘り方は非常にゆるやかである。遺物は全域より多量に出土した。

遺物は、土師質土器小皿（540～581）、同杯（582～631）、同椀（632～634）、須恵器杯（635・636）、黒色土器椀（637）、瓦器椀（638～648）、青磁碗（649～662）、同皿（663）、同香炉（664）、同水注（665）、白磁杯（666～669）、同碗（670・671）、土師質土器鉢（672～674）、須恵質土器鉢（675・676）、土師質土器壺（677～685）、須恵器壺（686・687）、同壺（691）、陶器壺（688・689・699～705）、同壺（690・692～698）、同擂鉢（706～715）、土師質土器擂鉢（716）、同鍋（717～720）、同足釜（721～731）、同羽釜（732）、同風炉（733・734）、同火鉢（735・736）、同火舟（737）、磁器蓋（738）、同碗（739～743）、弥生土器壺（744）、土製品（745）、石鍋（746・747）、銭（748）、青銅品（749）、鉄釘（750・751）、軒丸瓦（752）、軒半瓦（753）、鬼瓦（754）、土錐（755～788）、羽口（789～803）である。

540～545は外傾する短い口縁部をもつ小皿で、口径5.2～8.8cmを測る。540・543の底部は回転ヘラ切りの後にナデ、541はヘラナデ、542は回転ヘラ切り、544は回転ヘラ切りの後に中央を板目、周縁をナデが施される。

546～581は外傾するやや長い口縁部をもつ小皿で、口径8.0～11.6cmを測る。546はやや厚い器厚で、647は丸底気味の底部に回転ヘラ切りの後にナデが施される。548・567・578は口縁部に煤が付着している。551・562の底部は回転ヘラ切り、552はヘラナデ、555は回転ヘラケズリが施される。556は内外面に煤が付着する。565は外面のほぼ全面と口縁部内面の一部に煤が付着する。566は口縁部外面に稜を有する。569の底部は板目が施される。571・572の底部はナデが施される。573は内外面に煤が付着し、底部に回転糸切りが施される。577の底部は静止糸切りが施される。579は口縁部に煤が付着し、底部に板目・ナデが施される。580の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。581の外面はナデが施される。



第53図 S X1301出土遺物実測図（3）（S : 1/4）

582～589は口径7.8～10.0cm、590～605は10.0～11.0cm、606～613は11.0～14.0cm、614～617は14.0～17.0cmの杯である。583・589・590・592・603・610の底部はナデ、584・587は中央に板目、周縁にナデ、585・594・596・598・599はヘラナデ、586・597は回転ヘラナデ、588・607・609・611は回転ヘラ切りの後にナデ、593は静止ヘラケズリ、600・601・604・605は回転ヘラ切りの後に中央に板目、周縁にナデ、602は回転糸切りの後にナデ、606は板目の後にナデが施される。

618～620の底部は静止糸切り、621は回転糸切り、622・631は中央に板目、周縁にナデ、623・630は回転ヘラ切りの後にヘラナデ、624は回転ヘラ切り、626は回転ヘラ切りの後にナデ、627は回転ヘラ切りの後に板目、628・629はヘラナデが施される。

632～634の口縁部はやや外反する。637は黒色土器A類である。

642～646は低い高台であり、内面にヘラミガキが施される。445・446は斜格子状の暗文が見られる。647・648はやや高い高台を有する。

649・651・658は明確な鍋蓮弁文を刻む碗であり、650は体部外面に明確な鍋蓮弁文、内面に割花文を刻んでいる。652・653は内面に片切彫りで割花文を描く。659は底部露胎であり、見込みに細い割花文が描かれる。660～661は口縁部の外反する碗である。

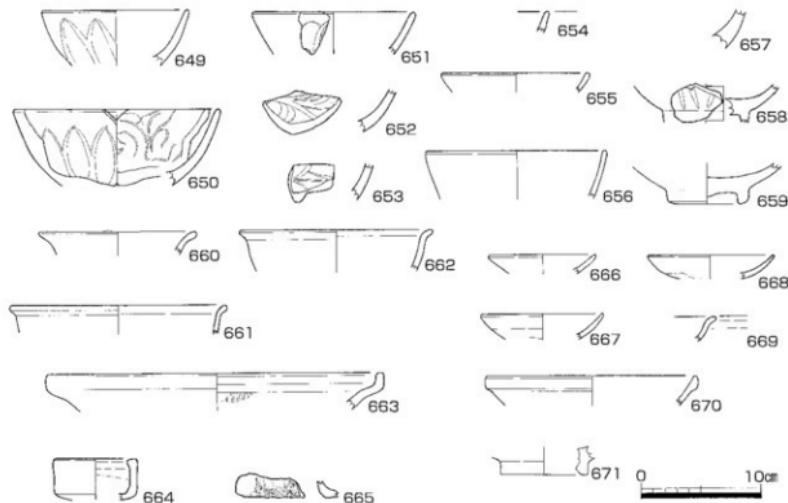
663は内面に印花文を持ち、664の内面下半は露胎である。

666～668の体部は内湾、669は外反する口縁部、670の口縁部は玉縁状である。

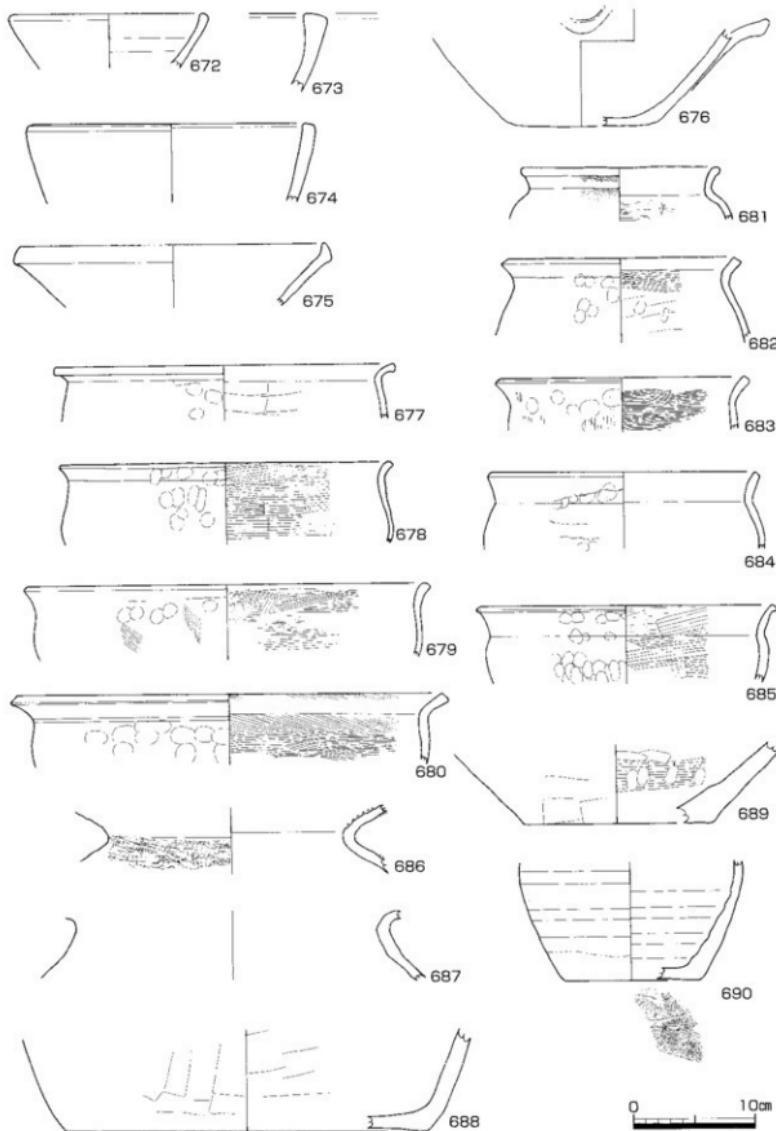
672～674は直線的な胴部であり、675・676は東播系の捏ね鉢で、676は片口を残存する。

677～680はやや長胴の甕、681～685は球形気味の胴部であり、外面は指頭圧痕、内面は横方向の明確なハケが施される。

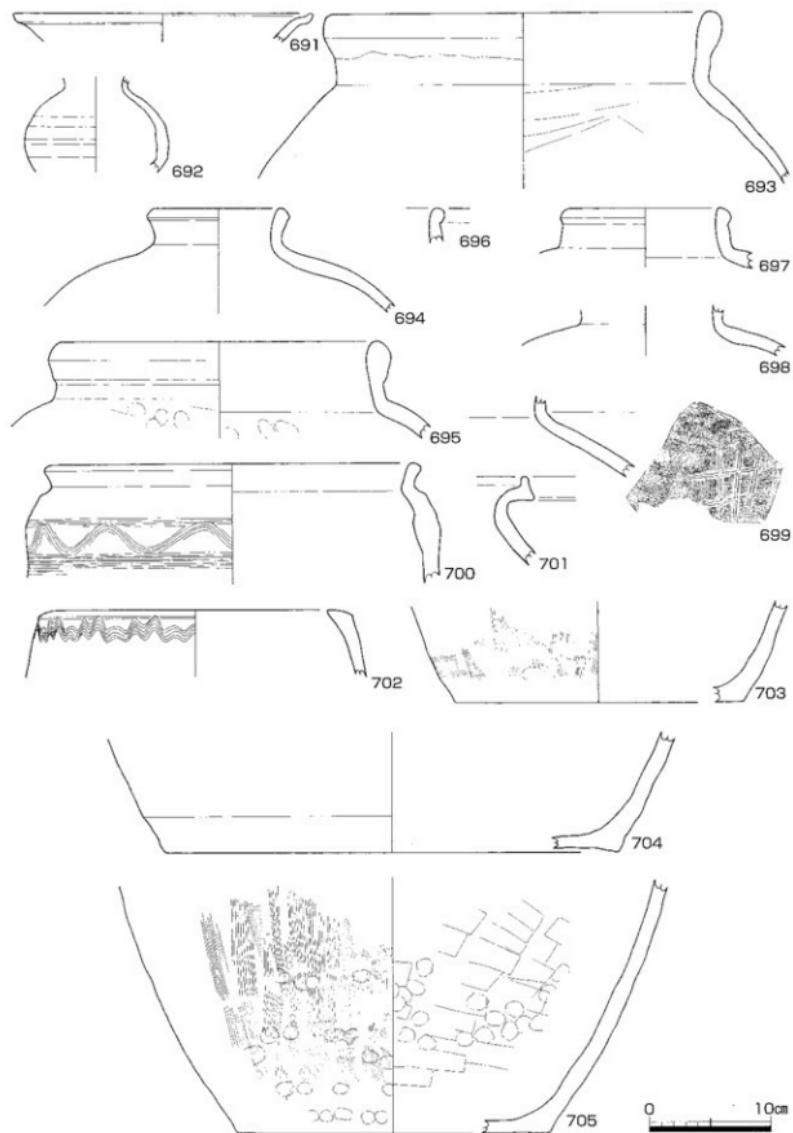
686の胴部外面に格子目タタキが施される。690の底部は回転糸切りの後にナデが施される。



第54図 S X1301出土遺物実測図(4) (S:1/4)



第55図 S X1301出土遺物実測図(5) (S:1/4)



第56図 S X1301出土遺物実測図 (6) (S : 1 / 4)

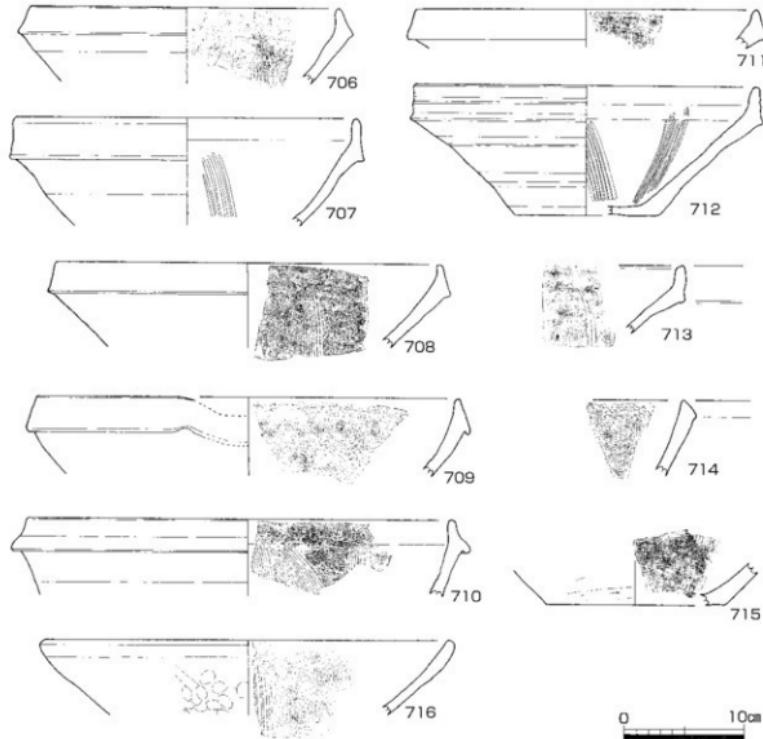
692～705は備前焼である。692は小型の壺で、693・695は口径31.6cmと26.0cmを測り、口縁部は直立し、端部は玉縁である。694・696～698は狭い口径で、短く直立する口縁部を有する。699は外面にヘラによる刻印が見られる。700は短い口縁部を有し、胴部外面に描画直線文2条と波状文1条を巡らす。702の口縁部は内傾し、外面に柳描波状文1条を巡らす。

706～715は備前焼擂鉢で、口径25～35cmを測る。706～713の口縁部は上下に若干拡張し、709は片口の一端を残存する。716は直線的に口縁部に至り、外面に指頭圧痕が施される。

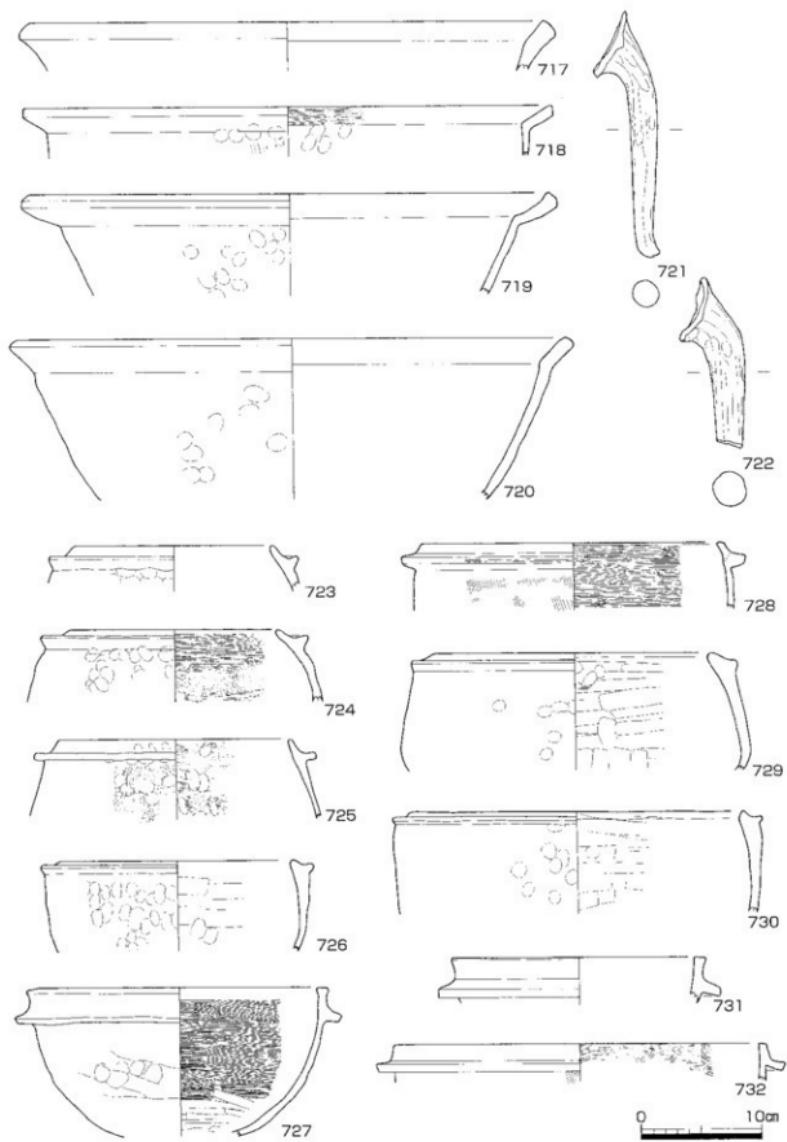
717～720は口径42～45cmを測り、直線的な口縁部と内湾気味の口縁部がある。

723～725・728の口縁部は内傾し、鍔から口縁部までがやや長い。胴部外面は指頭圧痕・ハケ、内面は横方向のハケが施される。726・729・730は口径部のすぐ下に鍔があり、胴部外面は指頭圧痕、内面はヘラナデが施される。727・731は直立する口縁部である。

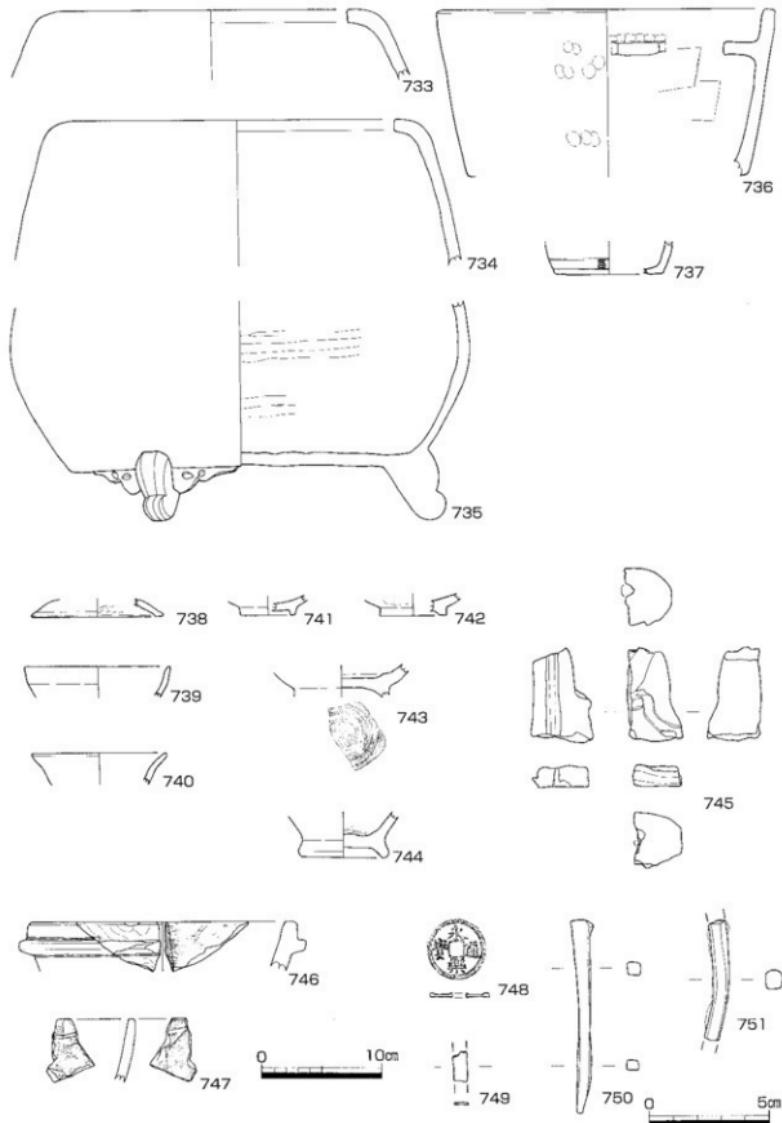
732は直立する口径部に水平な鍔が付く。



第57図 S X1301出土遺物実測図(7)(S:1/4)



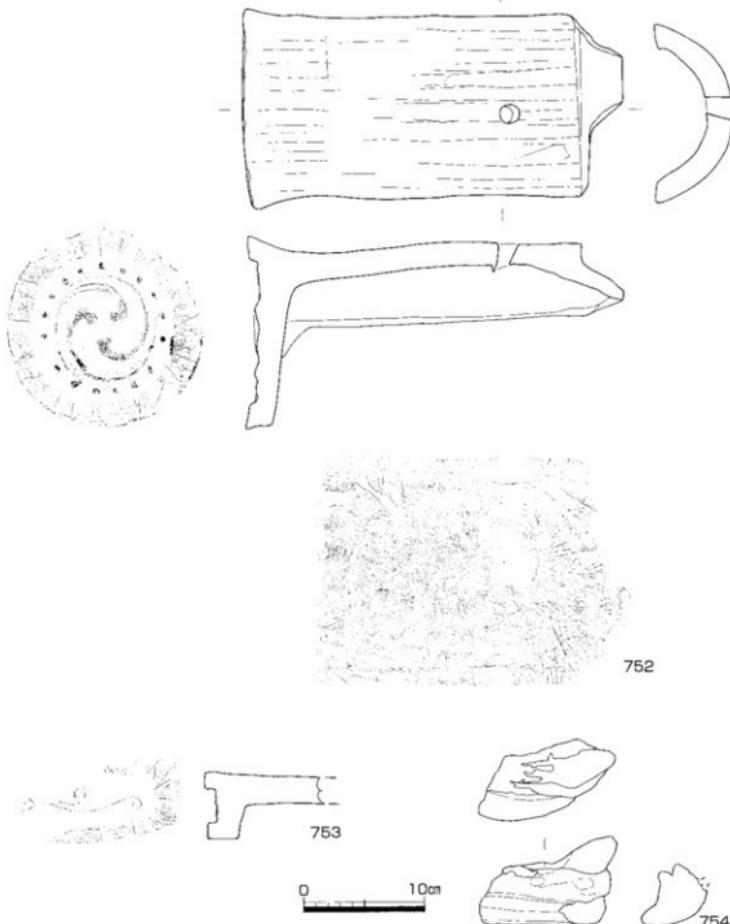
第58図 S X1301出土遺物実測図（8）(S:1/4)



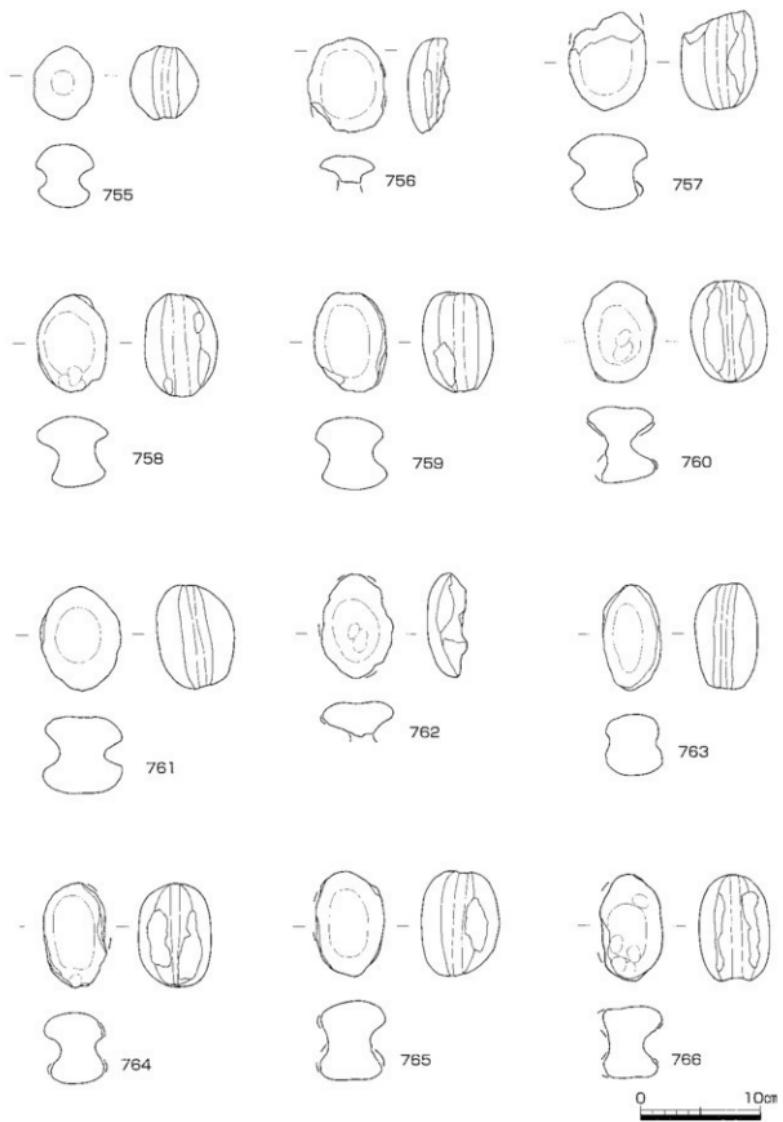
第59図 S X1301出土遺物実測図 (9) (S : 1/2, 1/4)

733・734の口縁部は大きく内傾する。735は浅鉢形を呈する火鉢であり、底部外面の縁辺に3個の足を貼り付けている。外面はナデ、内面はヘラナデが施される。畿内出土の火鉢に酷似する。736は直線的な胴部の浅鉢形を呈し、内面に突起を有する。737は外面に四角の渦巻文のスタンプを押捺する。

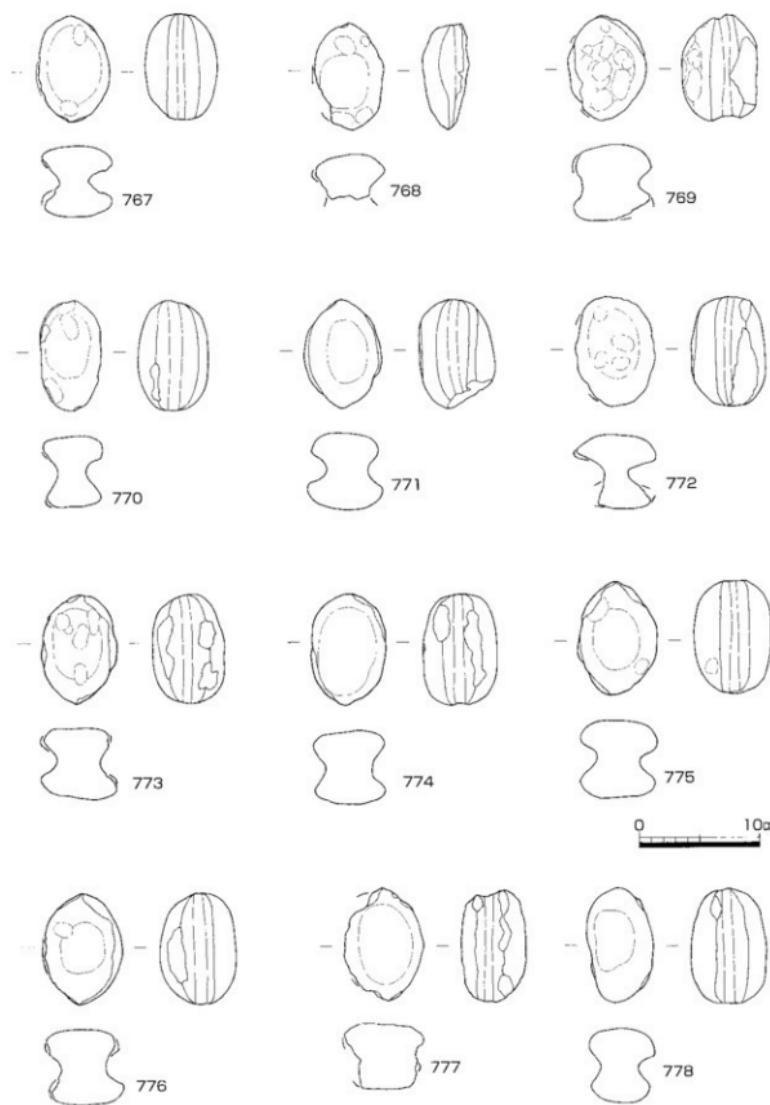
738は口縁部のみ施釉される。739は天目碗である。743の底部は回転糸切りが施される。



第60図 S X 1301出土遺物実測図(10) (S : 1/4)



第61図 S X1301出土遺物実測図 (11) (S : 1 / 4)



第62図 S X1301出土遺物実測図 (12) (S : 1 / 4)

745は土製仏像であり、頭部と左半身部を欠損する。仏像と接合しないが台座がある。仏像の現存高は7.7cmを測り、袈裟がわずかに残存する。

746・747は石鍋の破片であり、746は断面に擦痕があり転用されていた。746は口縁部直下に削り出された鋤がめぐり、747は鋤がなく、口縁部を丸くおさめる。

748は永樂6年(1408年)が初鉄の「永樂通宝」である。

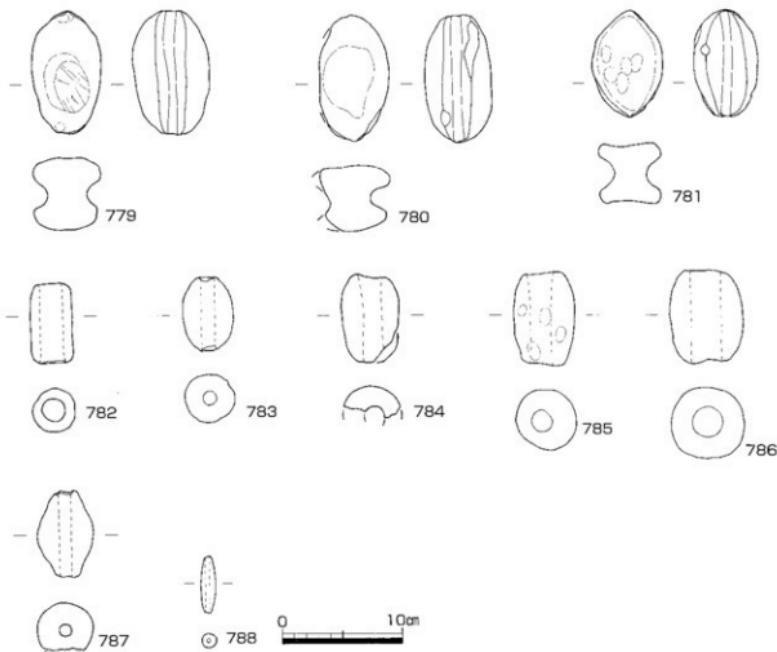
749は細い板状の青銅製品、750・751は断面方形の鉄釘である。

752は瓦縁の一部を欠損する軒丸瓦であり、瓦当部に尾のやや長い巴文がある。凸面は長軸方向のヘラナデが施され、凹面は布目が残存しコビキBにより切り取られる。瓦当裏面は横方向のナデと周縁に沿うナデが施される。

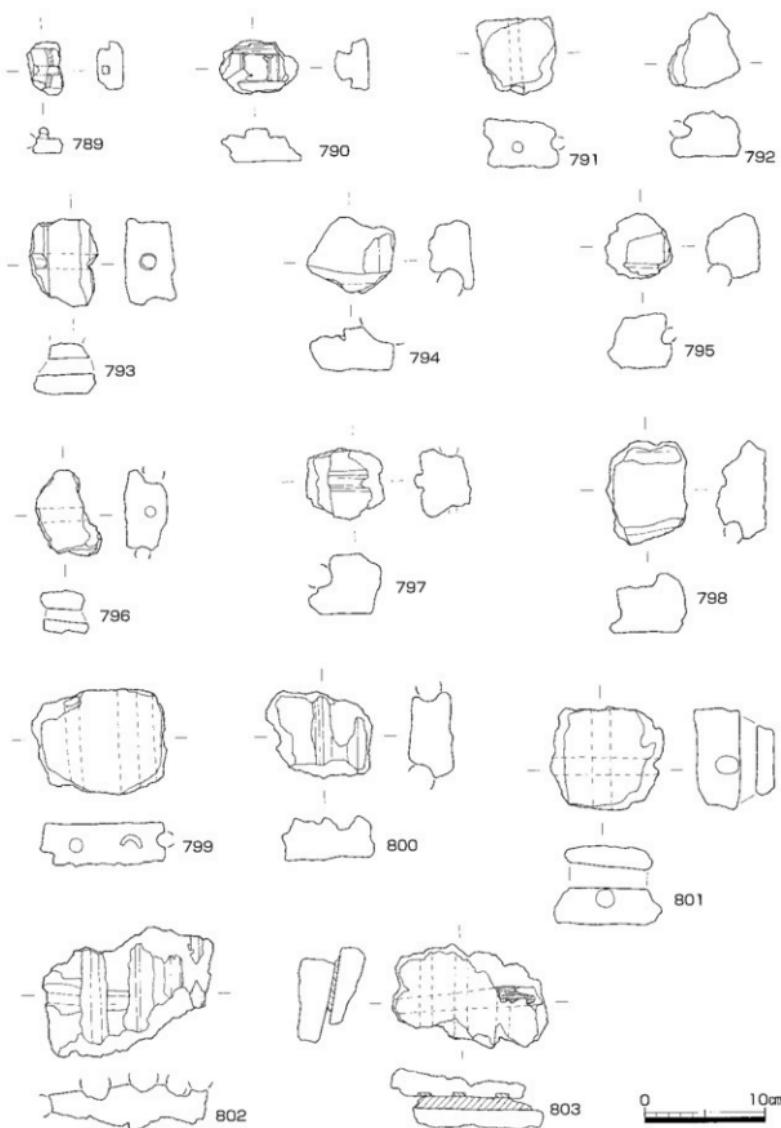
753は唐草文軒平瓦であり、瓦當上縁に幅広い面取り、顎後縁に幅狭い面取りが行われる。

755～781は側面に溝を有する土錐であり、重さは130～340gを測る。755～761の平面形はやや丸めの楕円形、762～780は先端が尖り気味の楕円形を呈し、781は中央部分にわずかに凹む平坦面を持つ。782～787は管状の土錐で、782は側面に直線を持つ長方形、783～786はやや長い楕円形、787は中央の広がる算盤玉状を呈する。788は細管状の土錐である。

789～803は断面円形・方形・三角形・三日月形の孔を有する羽口であり、803は孔の中に炭化材が残存する。



第63図 S X1301出土遺物実測図(13)(S:1/4)



第64図 S X1301出土遺物実測図(14)(S:1/4)

S X1302 (第50・65~67図)

調査区南東側のS E1002の南東において検出した落ち込みであり、第1面 S E1002・S D1001と第2面 S K1209・S X1203に切られている。

検出面のレベルは標高0.67m前後である。平面形や規模は北辺の一部のみの検出であるため不明であるが、S K1209の東側にも落ち込みが確認されており、規模の大きな遺構であると考えられる。検出面からの深さは0.09~0.17mを測り、掘り方はゆるやかである。底面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。本遺構はS X1301の底面より深く掘り込まれているので別の遺構としたが、同一遺構である可能性も考えられる。遺物は全域より出土したが、特にS E1002付近が多い。

遺物は、土師質土器小皿(804~811)、同杯(812~825・827~829・833~838)、須恵器杯(826・830)、瓦器杯(831)、土師質土器碗(832・839・840)、瓦器小皿(841)、同碗(842)、青磁碗(843~848)、同皿(849・850)、綠釉陶器(851)、白磁杯(852)、同碗(853)、磁器碗(854~856)、備前焼壺(857・858)、土師質土器壺(859)、須恵器壺(860・861)、備前焼擂鉢(862・863)、須恵質土器捏ね鉢(864)、土師質土器鍋(865)、同足鍋(866~868)、瓦質土器(869)、石鍋(870)、硯(871・872)、土錘(873~876)、鉄釘(877)である。

804・805は外傾する短い口縁部をもち、口径6.6cmと6.9cmを測る。806~811は口縁部のやや長い形態である。806の底部は回転ヘラ切りの後にナデ、807・809は回転ヘラ切りが施される。807の口縁端部は尖り、809は口縁部外面に面を有する。

812の底部は回転ヘラ切り、813は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ・静止ヘラナデ、815・838は回転ヘラ切りの後にナデ、816・835~837は中央に板目、周縁にナデ、817・821・823・825はナデが施される。827~829は成形痕を明瞭に残す。

826は内外面に成形痕を残し、底部にヘラナデが施される。830の底部は回転ヘラ切りの後に中央に板目、周縁にナデが施される。

839は黒色土器A類であり、840の内面はヘラミガキが施される。

841は左右不对称な器形で、底部に指頭圧痕、内面にヘラミガキが施される。842は小さな底部で、体部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。

843~846は明確な鏽蓮弁文を刻む碗であり、848は内面に割花文を刻んでいる。

849・850は内面に印花文をめぐらす。

851は緑釉の碗破片である。852は白磁の杯で口径8.6cmを測り、853は口縁部が外反し、外面下半は露胎である。

855は天目碗で、856はわずかに口縁部が外反する。

857・858は備前焼であり、口縁部は直立する。857の口縁部外面に自然釉が付着する。

859は短く外反する口縁部で、胴部外面にタタキ、内面に板ナデが施される。860は頸部径33cmを測り、外面に格子状タタキが施される。

862・863は備前焼の擂鉢であり、862は口縁端部に面を有する。

864は須恵質土器捏ね鉢の底部付近であり、外面に明瞭な成形痕を残存する。底部中央はやや上げ底になる。

865の口縁部は直線的に外反し、外面にヨコナデ、内面に横方向のハケが施される。

866・867は内傾する口縁部で、口縁部外面のやや下に水平方向の鈎が付く。口縁部はヨコナデ、胴部外面上半は縦方向のハケ、下半は格子状タタキ、内面は指頭圧痕・ナデが施される。外

面には煤が付着している。

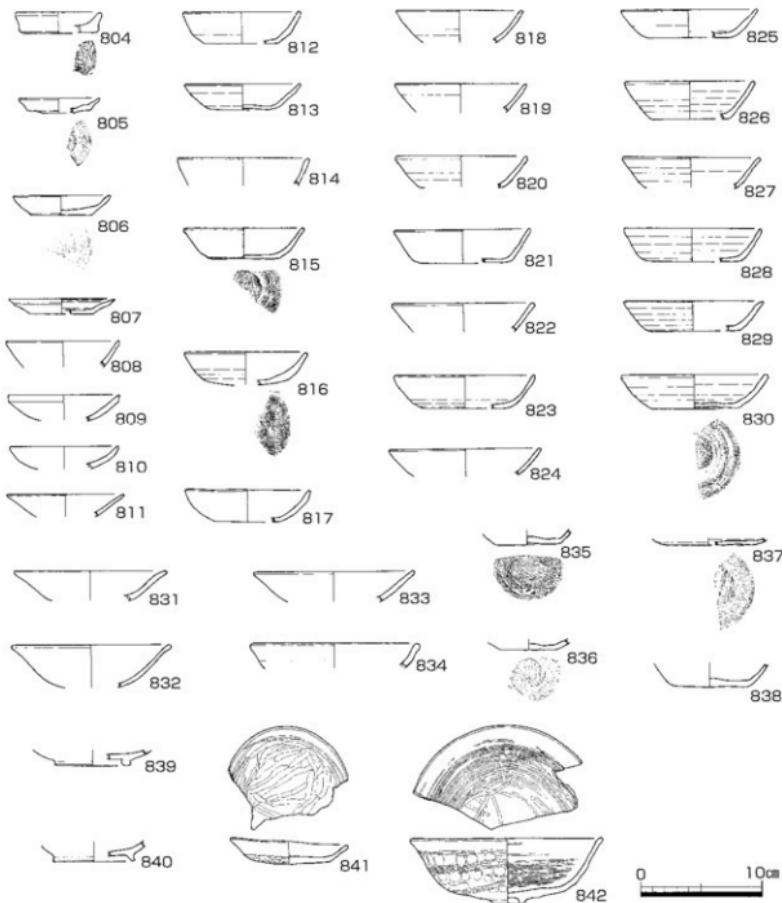
868は球形の胴部から外反する口縁部であり、足の一部を残存する。口縁部はヨコナデ、胴部外面は指頭圧痕と縦方向のハケ、内面は横方向のハケが明瞭に施される。

870は石鍋の破片で、内外面に仕上げの加工痕がみられる。

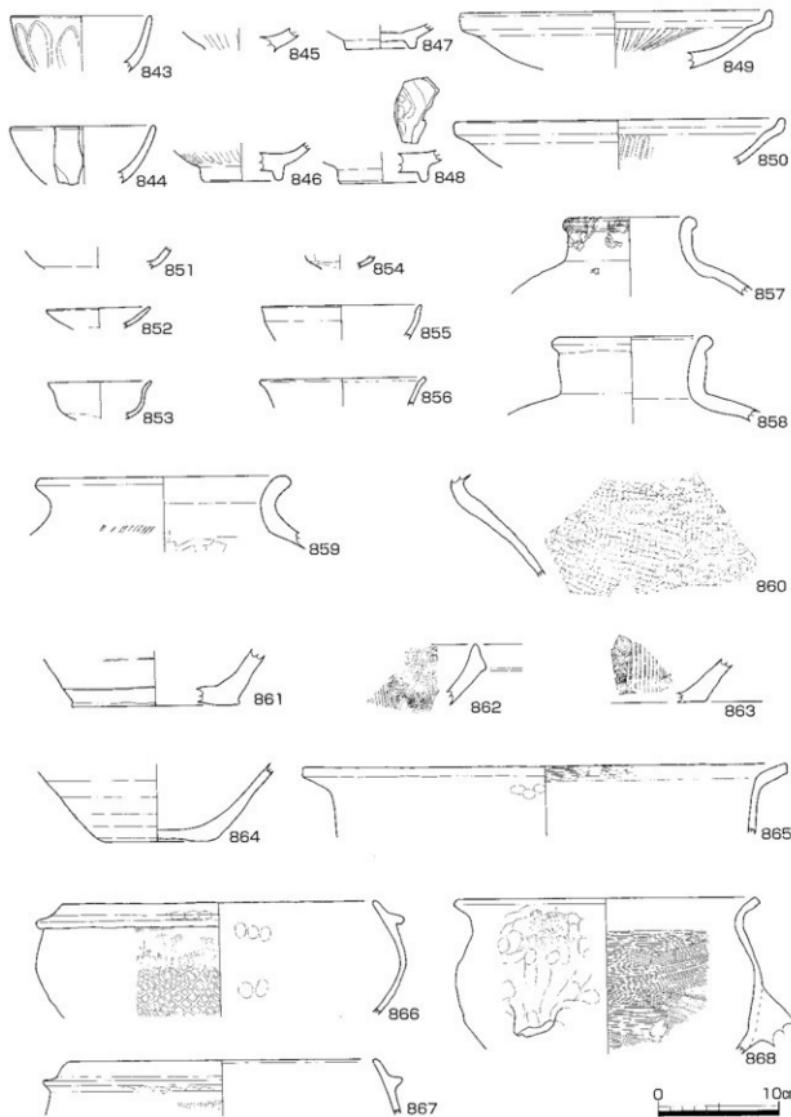
871・872は硯の破片であり、872の表面には研磨痕が明瞭に残る。

873～876は側面に溝を有する土鍤である。

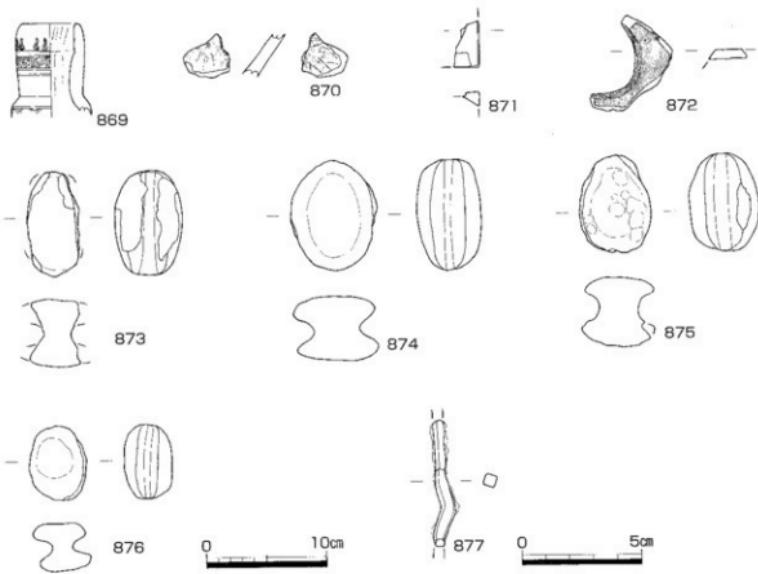
877は断面方形の鉄釘である。



第65図 S X1302出土遺物実測図(1) (S:1/4)



第66図 S X1302出土遺物実測図（2）(S : 1 / 4)



第67図 S X 1302出土遺物実測図（3）(S : 1/2, 1/4)

S X 1304 (第68図)

調査区南西部において検出した造構であり、S D1305・S K1304を切り、第2面のS B1201のP-1に切られる。検出面のレベルは標高0.90mである。東側は近代の搅乱を受け、平面形は不明である。南北長は1.17m、東西長0.73m以上を測る。深さは0.18mである。掘り込みは緩やかである。本造構は検出された範囲で土坑の可能性もあるが、本報告書では性格不明造構とする。

遺物は、土師質土器杯（878～882）、同釜（883）である。

878～882は口径8cm前後で、器高の高い杯である。色調・胎土は同一である。外面に墨書きが見られるが、「法」と書かれている881以外は小片であり解読不可能である。

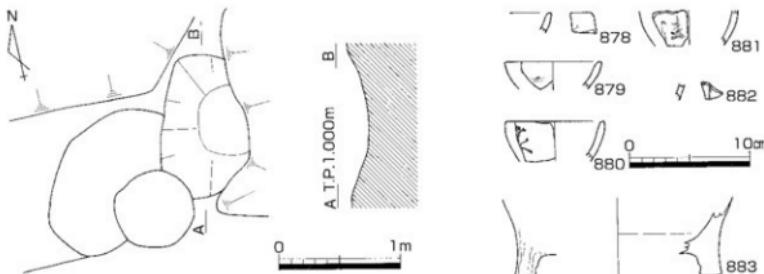
883は短い足の釜であり、ナデが施される。

S X 1305 (第69図)

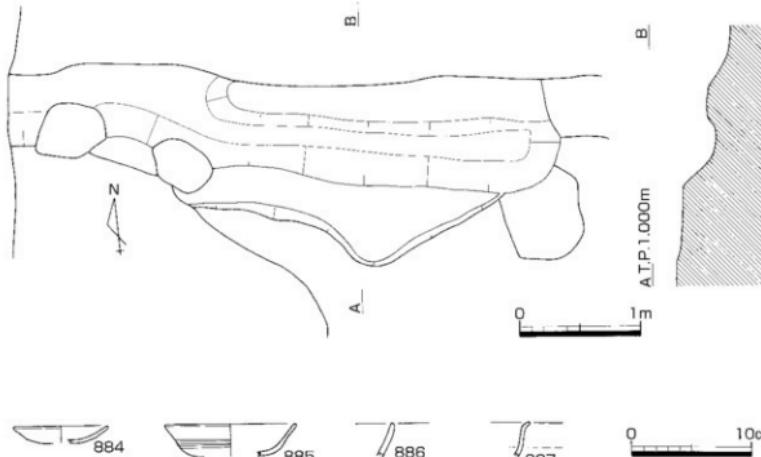
調査区南西部において検出した造構であり、S D1302・S P1492に切られる。検出面のレベルは標高0.98m前後である。平面形は不明であり、検出できた東西長は4.55m、南北長1.50m以上を測る。断面は段を有し、南側に深さ4cmの深い部分があり、その北側は急激に落ち込んで溝状になる。検出面から最深部までの深さは0.42mを測る。

遺物は、土師質土器小皿（884）、同杯（885）、瓦器椀（886）、磁器碗（887）である。

884は口縁部に煤が付着し、底部にナデが施される。885は体部外面に沈線状の深い凹みを有する。887は口縁部が外反する。



第68図 S X1304平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)



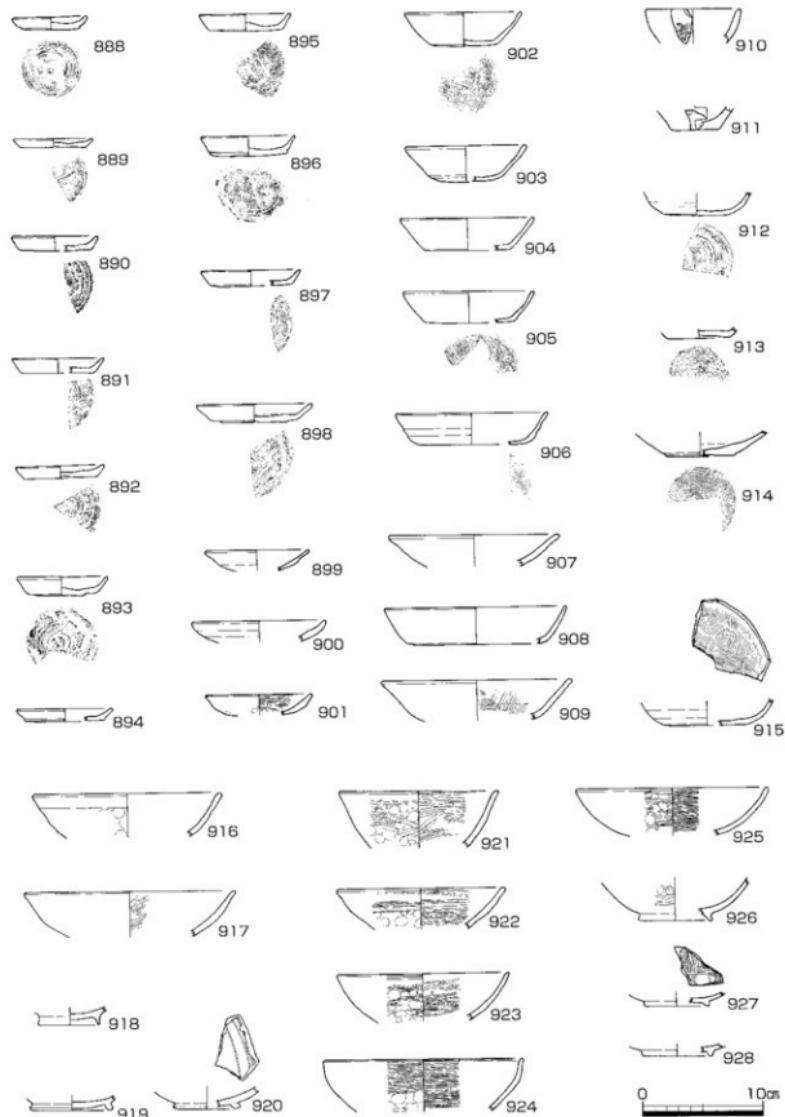
第69図 S X1305平・断面図および出土遺物実測図 (S : 1/4, 1/40)

6. 包含層出土遺物 (第70~72図)

888~900は土師質土器小皿であり, 888~897は短い口縁部, 898~900はやや長い口縁部の器形である。888・892・898の底部は回転ヘラ切りの後に板目, 889・895は回転ヘラ切りの後にナデ, 890・894は回転ヘラ切り, 891・896・897は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリ, 893は回転ヘラ切りの後にヘラナデが施される。

901は瓦器小皿であり, 外面に指頭圧痕の後にナデ, 内面にヘラミガキが施される。

902~912は土師質土器杯である。902・906の底部は中央に板目, 周縁に回転ヘラナデが施され, 903・905は回転ヘラ切りの後に板目, 904・912は回転ヘラ切りが施される。909の内面は縦方向のハケが施される。910・911は器高の高い杯で, 外面に墨書きが認められる。小片であり, 解読は不可能である。911の底部は回転糸切りである。



第70図 第3面出土遺物実測図(1) (S:1/4)

913～915は須恵器鉢であり、913・914の底部は回転糸切り、915の内面はハケが施される。916～920は土師質土器椀であり、916の体部外面は指頭圧痕、917の内面はヘラミガキが施される。918は細い高台で内面にナデが施され、919・920は断面方形で低い高台を有し、920の内面には細い暗文がみられる。917・919・920は黒色土器A類である。

921～928は瓦器椀であり、921～923・926は外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面にヘラミガキが施される。924は口縁部と体部の境にわずかな稜を持ち、口縁部外面と内面に丁寧なヘラミガキ、胴部外面に指頭圧痕の後にヘラミガキが施される。925は外面に指頭圧痕の後にヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。927・928は低い高台を有し、内面にヘラミガキが施される。

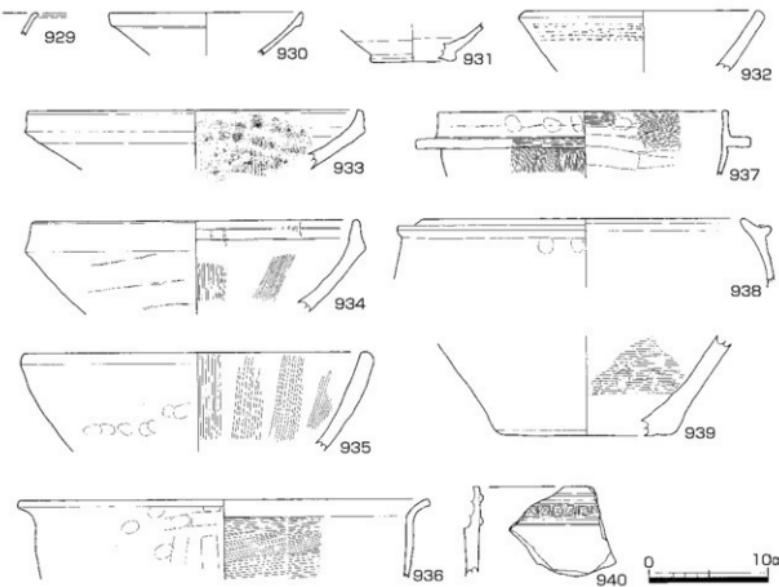
929～931は白磁碗であり、929の口縁部は外反し、930の口縁部は玉縁であり、931は見込みに圓線が廻る。

932は須恵器鉢で、外面に刺突痕がある。

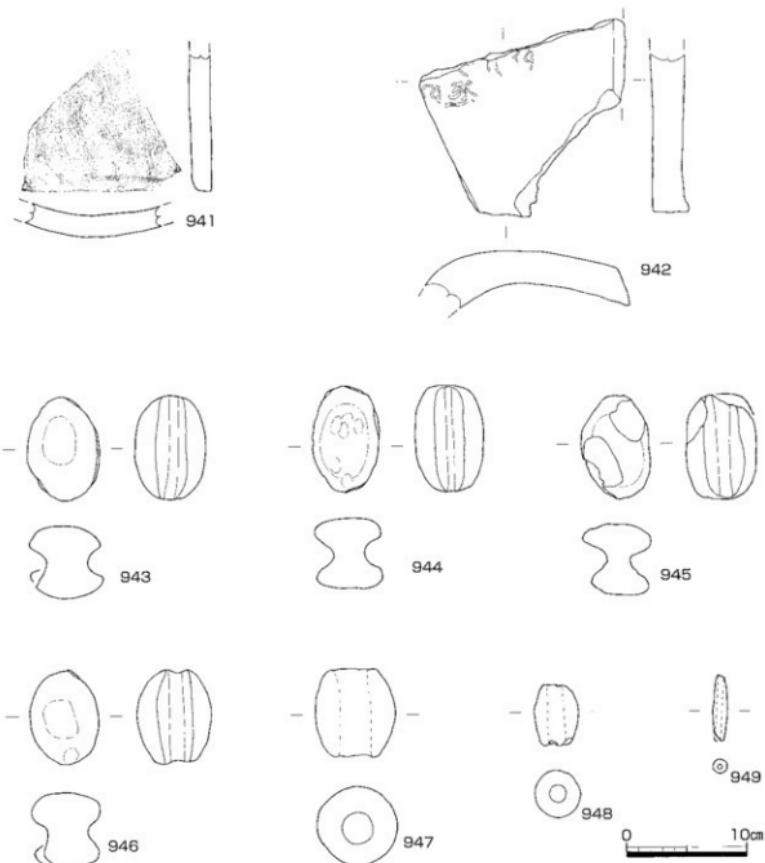
933・934は備前焼擂鉢であり、口縁部外面に面を持つ。

935は土師質土器擂鉢で、口縁端部は丸くおさめる。外面はナデと指頭圧痕が施され、内面に5本単位の擂目が刻まれる。

936は土師質土器鍋で、口縁部はゆるやかに外反する。胴部外面に指頭圧痕・ヘラナデ、内面に明確なハケが施される。



第71図 第3面出土遺物実測図(2) (S:1/4)



第72図 第3面出土遺物実測図（3）(S:1/4)

937は上師質土器羽釜で、口縁部は直立し、大きな鉗が水平方向に付く。口縁部と鉗部はヨコナデ、胴部外面は縱方向のハケが施され、内面は横方向のハケの後にヘラナデが施される。胴部外面と鉗下面は煤が付着する。

938は土師質土器足釜で、口縁部が内傾する。

939は備前焼甕で、内面に粗い横方向のハケが施される。

940は土師質土器の火鉢である。

941・942は平瓦で、941の凸面はナデ、凹面は板ナデが施される。942の凸面はヘラナデ、凹面はコビキBがみられ、凸面に「眞言」を表す5文字の梵字が残存する。

943～946は側面に溝を有する土錘、947・948は管状の土錘、949は細管状の土錘である。

第4章 自然科学的分析

第1節 高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市高松城跡から出土した容器 2 点、部材 9 点の合計 11 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種調査結果（針葉樹 3 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

（遺物No. 2～7, 9）

（写真No. 2～7, 9）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1～15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

（遺物No. 11）

（写真No. 11）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は穏やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からスギ型で 1 分野に 2～4 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

（遺物No. 1, 8, 10）

（写真No. 1, 8, 10）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。樹脂細胞は晩材部で接線

方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスキ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて單列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平であるスギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

高松市高松城出土木製品同定表

番号	遺構	遺物番号	品名	樹種
1	S E 1 2 0 1		曲物底板	スギ科スギ属スギ
2	S E 1 2 0 1		加工材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
3	S E 1 2 0 1		板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
4	S E 1 2 0 1		板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
5	S E 1 2 0 1		板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
6	S E 1 2 0 1		板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
7	S E 1 2 0 1		板材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
8	S E 1 2 0 1		板材	スギ科スギ属スギ
9	S P 1 3 1 7	4 9 7	加工材	マツ科マツ属〔二葉松類〕
10	S E 1 3 0 1	4 2 3	加工材	スギ科スギ属スギ
11	S E 1 3 0 1		曲物（井筒）	ヒノキ科アヌロ属

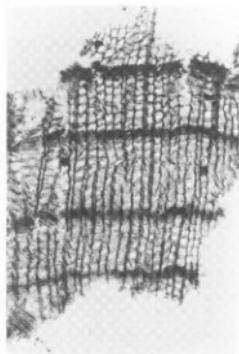
参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版 (1988)
- 島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社 (1982)
- 伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所 (1999)
- 木村四郎・村川 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社 (1979)
- 深澤和三 「樹体の解剖」 海青社 (1997)

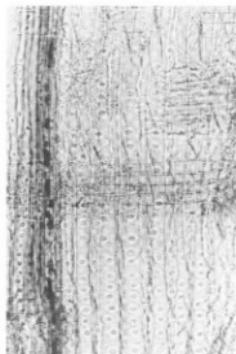
使用顕微鏡

Nikon

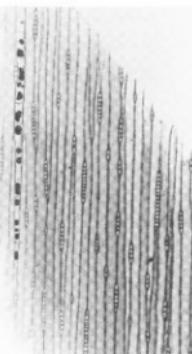
MICROFLEX UFX-DX Type 115



No-1 スギ科スギ属スギ
木口×40



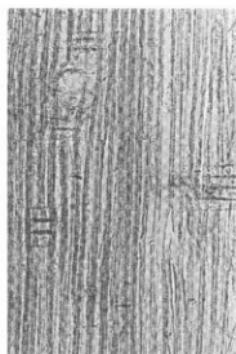
柾目×100



板目×40



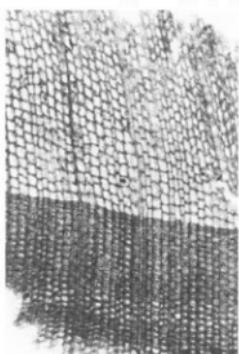
No-2 マツ科マツ属〔二葉松類〕
木口×40



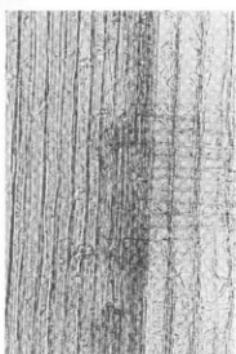
柾目×100



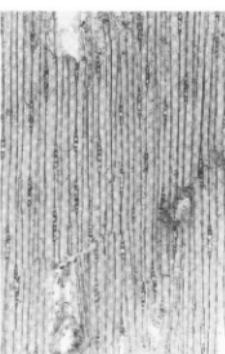
板目×40



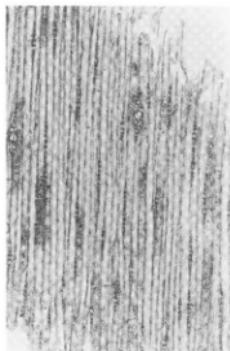
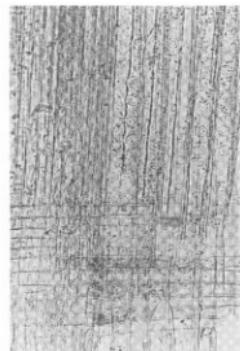
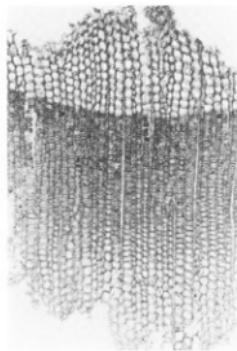
No-3 マツ科マツ属〔二葉松類〕
木口×40



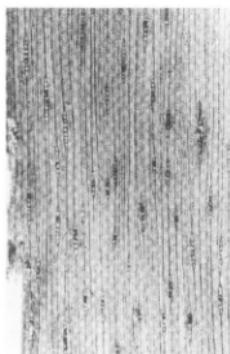
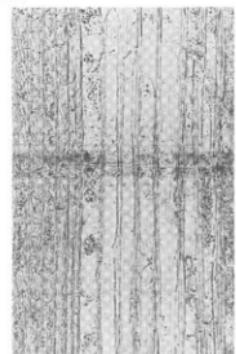
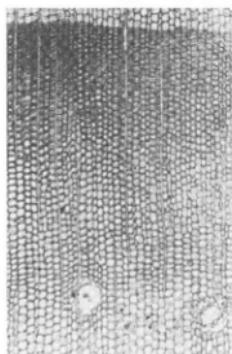
柾目×100



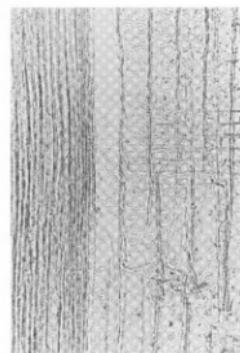
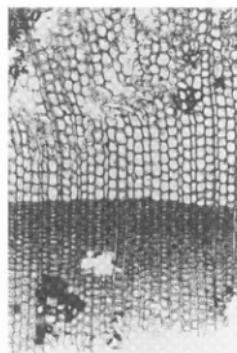
板目×40



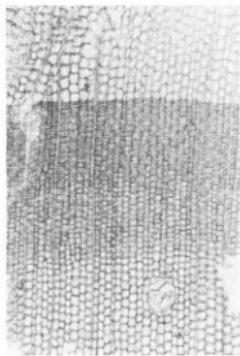
No-4 マツ科マツ属〔二葉松類〕



No-5 マツ科マツ属〔二葉松類〕

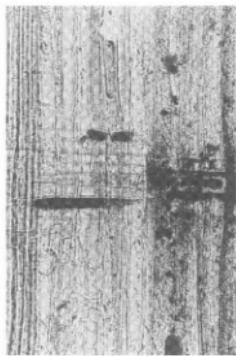


No-6 マツ科マツ属〔二葉松類〕

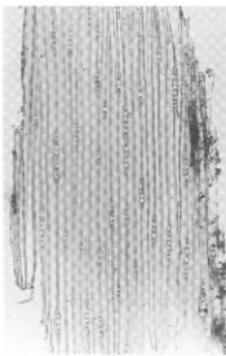


木口×40

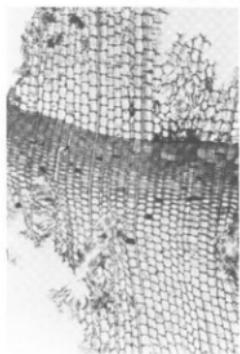
No-7 マツ科マツ属〔二葉松類〕



桿目×100

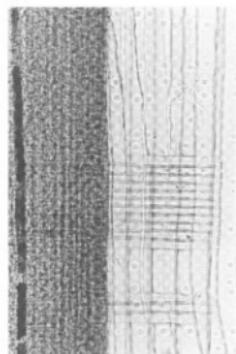


板目×40

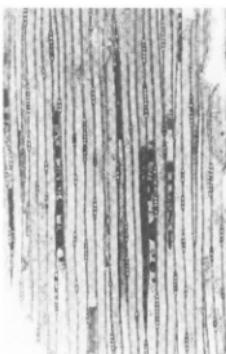


木口×40

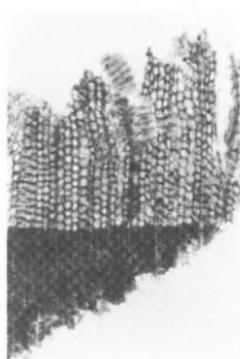
No-8 スギ科スギ属スギ



桿目×100

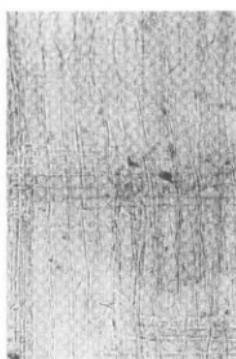


板目×40



木口×40

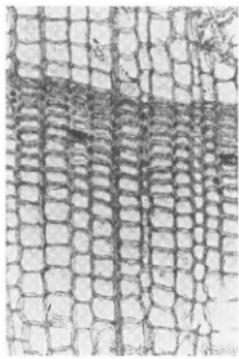
No-9 マツ科マツ属〔二葉松類〕



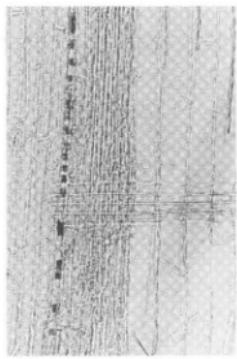
桿目×100



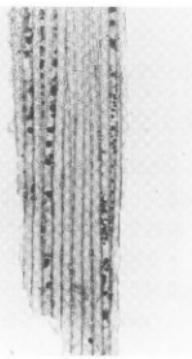
板目×40



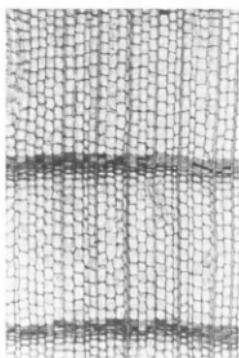
No-10 スギ科スギ属スギ
木口×40



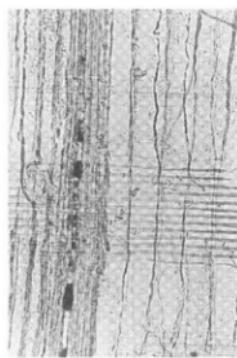
柾目×100



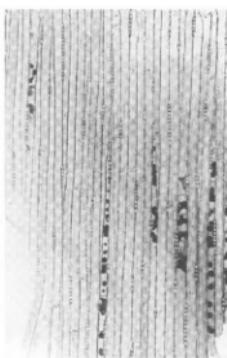
板目×40



No-11 ヒノキ科アスナロ属
木口×40



柾目×100



板目×40

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

高松城跡（無量壽院跡）では3面の遺構面を検出したが、本書では最下層の第3遺構面のみの報告である。ここでは12～16世紀に比定される遺構の変遷に関して述べることとする。

12世紀～13世紀初頭

本遺跡において集落が初めて営まれるようになる時期である。遺構の埴土から須恵器や弥生土器が若干出土するが、12世紀以前の遺構は検出されていない。

この時期の遺構はS D1304のみである。この溝は調査区南壁中央から北東方向に延びており、和泉型の瓦器椀をはじめ土師質土器小皿・瓦器小皿等の多量の土器が出土した。

15世紀～16世紀

S E1301・S D1301・1303・S K1314・1321・1322・1323は15世紀に比定される。S E1301は石組と曲物を組み合わせた構造の井戸であり、浜ノ町遺跡において検出されたS E514・521とはほぼ同様な構造であり、時期も同じである。S D1301・1303はほぼ同位置で、同方向に延びる溝である。

S D1302・1305・S K1304・S X1304は16世紀に比定される。当該期に属する遺構で最も注目すべきは、S D1302である。この溝はその規模が大きく、東西方向を向き直線的に延びる。第2節で論考するとおり、「野原濱村无量壽院」と刻まれた丸瓦が出土し、無量壽院の寺域を区画する境界線の溝である。

S X1301・1302の時期は13世紀～16世紀と推定される。

第2節 「無量壽院」について

今回の調査では、調査区中央を東西に延びるS D1302から「野原濱村无量壽院」と刻まれた丸瓦が出土した。S D1302は幅1.60～2.25m、深さ0.60mを測り、ほぼ完形の青磁香炉や青磁碗・土師質土器をはじめとする多量の土器や丸瓦・平瓦・梵字瓦等の瓦類、五輪塔も出土しており、この地城が、天平11年（739年）行基が開創したと伝えられる讃岐国屈指の古刹の無量壽院跡であることが判明した。無量壽院の寺記によれば、天文年間（1532～1555年）に今の高松城にあたる八輪島に寺を移転したが、天正年間（1573～1592年）に高松城の城地となつたため西方に移転したとある。調査では、無量壽院に直接関連する建物跡等は検出できなかつたが、寺域を区画する境界線としての溝を確認することができたことは、高松城築城以前の状況を研究する上で重要な資料となる。

1. 無量壽院の歴史・変遷

無量壽院の創建と変遷を記した史料としては、「増補三代物語」・「無量壽院隨願寺記」・「御領分中寺々山米」・「全叢史」・「讃岐國名勝図会」・「北野天満宮一切経」・「親長御記」が一般的に知られているが、明治45年に発行された「紫山隨願寺無量壽院の記」を現在の無量壽院のご好意で実見する機会があり、ほとんど普及していない書物であるので、「増補三代物語」・「讃岐國

名勝図会』・『北野天満宮一切経』・『親長卿記』と共に本報告書に収録する。

無量壽院は、高松市御坊町に現存する真言宗御室派の寺であり、紫山隨願寺と号する。その創建は、天平11年（739年）に光明皇后の発願により行基が坂田郷室山のふもと（現、西春日町）に寺を建立したと伝えられる。行基は自ら無量寿仏を刻んで安置された（増補三代物語・無量壽院隨願寺記・御領分中寺々由来・全譜史・讃岐國名勝図会）。ただし、『紫山隨願寺無量壽院の記』には稻荷山の嶺より栗林村官脇村の総称である八輪島に建立したとしている。

弘仁年間（810～824年）に空海が寺を修造し、仏像を安置供養し経三巻を製作した。嵯峨天皇が曼荼羅・仏器を寄付し、談議所としての宣旨を天皇より賜る（御領分中寺々由来・讃岐國名勝図会・紫山隨願寺無量壽院の記）。

仁和年間（885～889年）に菅原道真が坂田郷橋詰の無量壽院を館にしていた（増補三代物語）。菅原道真が香川元茂に当院の由来を聞き、この院に七日参籠し付近の池水に映る姿を模写して奉納した。この影像はその後に紛失するが、貞享3年（1686年）に小豆郡草加部村江田与一左衛門祐長が当寺に返した（増補三代物語・讃岐國名勝図会・紫山隨願寺無量壽院の記）。

昌泰年間（898～901）に当寺初代住職の觀賢は寛平法皇より御祈願所の勅宣を賜る（紫山隨願寺無量壽院の記）。觀賢は坂田郷の泰氏出身で、聖宝の弟子となり般若寺を開き、弘法大師信仰の基礎を固めた人である。觀賢に関する記載は『紫山隨願寺無量壽院の記』に詳しい。

白河法皇は特に信仰が厚く、伽藍興隆の詔を下した。大治4年（1129年）に法皇崩御すると、住持覚道が中野町付近に法皇の陵（白河陵）を築いた。その後、龜山天皇も厚く信仰し伽藍再興し、嘉元3年（1305年）に天皇が崩御した後、宮脇町石清尾神社付近に陵（龜山陵）を築いた（讃岐國名勝図会・紫山隨願寺無量壽院の記）。

応永年間（1394～1428年）に虚空蔵院（与田寺）の増畔が寺を中心とする（讃岐國名勝図会・紫山隨願寺無量壽院の記）。『讃岐國名勝図会』に名前が載っている有範僧正と増畔僧正については『紫山隨願寺無量壽院の記』に詳しい。

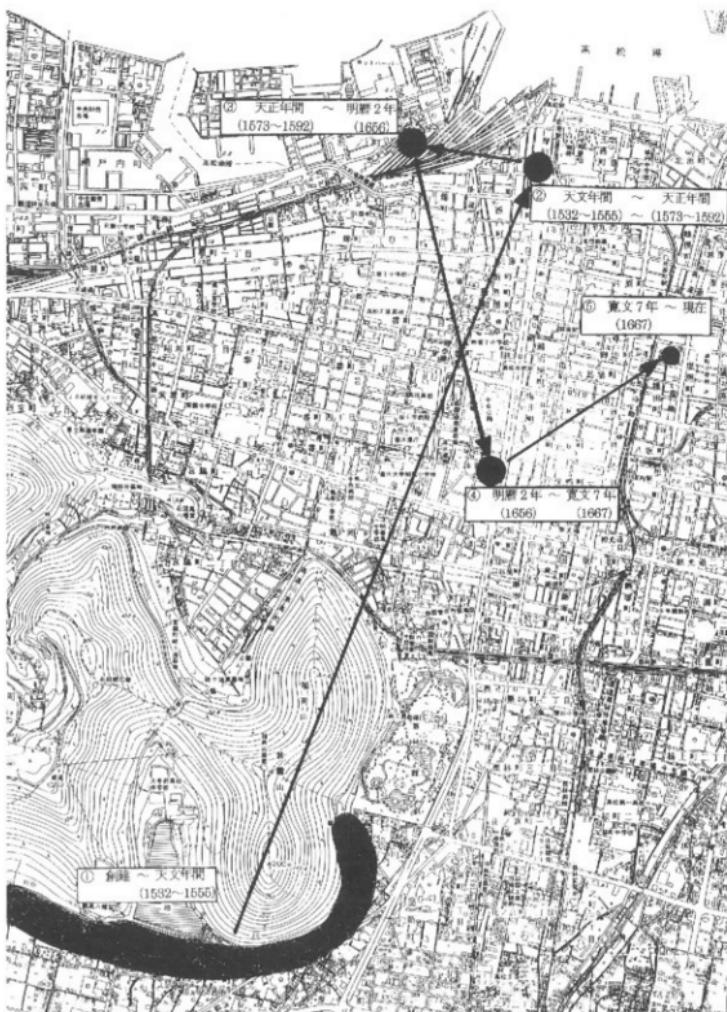
応永19年（1412年）に虚空蔵院の僧増範が願主となって勧進書写した『北野天満宮一切経』には「讃州野原無量壽院住菩薩」の名がみえ、奥書に「野原無量壽院」「野原西浜極楽寺」「野原福成寺」などの高松市内に現存する真言宗寺院名が散見できる。甘露寺惣人納言藤原親長の日記である『親長卿記』文明5年（1473年）3月24日条によれば、大覺寺門跡の閑白鷹司房平息性深僧正が讃州坂田無量壽院の極官のことについて奏聞したことが知られ、『讃岐國名勝図会』には住持増専を権僧正に任せた同年7月7日付の宣旨写を載せている。

天文年間（1532～1555年）に兵火にかかり伽藍が焼失し、寺は野原郷八輪島に移転した。八輪島は高松城の城域にあたる（増補三代物語・讃岐國名勝図会）。ただし、『紫山隨願寺無量壽院の記』には「因縁厚き八輪島より宿り島に移転するに至れり。宿り島とは即ち現今の大瀬地是なり。」と記しており、場所は同一だが地名については他の史料と異なる。

天正15年（1587年）讃岐に入国した生駒親正が天正16年（1588年）に高松城を築城するにあたって、当寺は西の方（浜ノ町）に移転する。その地点は後に御船蔵となる所であり、近世まで談義所という地名が残っていた。

寛永19年（1642年）京都御室御所仁和寺の末寺となり、寛永21年～明暦元年（1644～1655年）は無住となり、寺は荒廃する（紫山隨願寺無量壽院の記）。

明暦2年（1656年）御船蔵を作るために寺は中村（天神前）の淨願寺東南に移転する。塔頭吉祥寺と蓮花寺は残る。享保年間（1716～1736）の「高松城下図」には跡地の海岸に御船蔵が



第73図 無量壽院の変遷図

描かれている。

寛文4年（1664年）藩主松平頼重から米30俵が合力米として給される（御領分中寺々由来・寺社記）。

寛文7年（1677年）松平修理様長屋の建築により法華宗大乗寺の跡地であった御坊町に移転した。弘化年間（1844～1848年）に作成された「弘化年間高松城下絵図」には松平修理様長屋と無量壽院の所在地が記されている。無量壽院は現在に至るまで同所に所在する。

元禄14年（1701年）山田郡六条村青木免で53石3斗が寄進される（寺社記・紫山隨願寺無量壽院の記）。

昭和20年に高松空襲により堂宇・寺宝を焼失する。昭和22年に再建される。

2. 調査成果と歴史的史料の整合

無量壽院の天平11年の創建から現在に至るまでの移転をまとめると次のとおりである。

天平11年	坂田郷の室山の麓に創建
天文年間	野原郷八輪島に移転
天正16年以後	高松城築城に伴い西の方（浜ノ町）に移転
明暦2年	中村（天神前）の淨願寺東南に移転
寛文7年	法華宗大乗寺の跡地（御坊町）に移転

史料により若干の相違部分もあるが、無量壽院は今までに所在地を少なくとも4回移転していたことが史料上に記録されている。その変遷を図化したのが第73図である。

今回の調査で検出したS D1302より出土した文字瓦（188）は、

野原濱村无量壽院 天（文）（以下欠損）

九月（以下欠損）

の文字が刻まれている。「野原」は平安期の『和名抄』香川郡十二郷の一つであり、笑原と表記される。中世になると、康治2年（1143年）8月19日の太政官牒案に「野原（条）野原郷」と見るのが初見であり、嘉元4年（1306年）6月12日の『昭慶門院御領目録案』が郷名として記載される最後である。その後、『北野天満宮一切経』に「讃州野原」と見える。つまり、平安時代から室町時代にかけて高松城下町及び宮脇・西浜・福岡・東浜・中ノ村・上ノ村・今里の範囲は「野原」と呼ばれていた。前述したように、無量壽院は天文年間に高松城の城域にあたる八輪島に移転し、天文16年に生駒親正が高松城を築城するにあたって、当寺は西の方（浜ノ町）に移転した。今回の調査区は、高松城の内堀と中堀の間に位置しており、まさに城域である。「野原濱村無量壽院」の下の「天」は、次の字の一部「一」が残存するのみであるが史料の記事との関連から「天文」の年号を表すと考えられる。さらに、青磁香炉・墨書き土器・青磁椀や五輪塔や梵字瓦・波状文軒平瓦等が文字瓦と同一の溝から出土した。この遺物の時期は16世紀後半に比定される。溝の南側には土製仏像や墨書き土器・青磁椀や梵字瓦・波状文軒平瓦等を出土する遺構が検出されている。S D1302は寺域を区



第74図 S D1302出土文字瓦拓影（75%縮少）

画する北側の境界線としての性格を有する溝であり、S D1302より南側の地域が寺域であったと考えられる。これらのことと総合的に検討すると、今回の調査区は天文～天正年間に所在していた無量壽院の寺域であったことが判明した。

第3節 第3面出土の瓦について

瓦が出土した遺構はS D1302・1304・1305・S X1301であり、その種類は丸瓦・平瓦・梵字瓦・鬼瓦・道具瓦である。

軒丸瓦はすべて三巴文であり、外縁幅は広く低く、丸い巴頭部はくびれを有し、尾が細長く、外区の珠文が小さく数多いという16世紀の特徴を有するが、瓦当の文様はわずかに違いがある。189・190・192・377・378は尾が細長く、珠文が28個前後であり、752は尾が細長いが、珠文の間隔がやや広くなり19個を数える。193は珠文の間隔が752と同じだが、尾が短い。

軒丸瓦を含める丸瓦は、形態や調整の違いによりいくつかに分かれる。188・380は、四面の細かな布目と粘土紐の痕跡・吊り組痕、コビキAを特徴とする。190は、凹面の玉縁連結部分の仕切り・細かな布目と粘土紐の痕跡を特徴とする。194・195は、淡赤橙色の色調、凹面の布目・内叩き痕、コビキAを特徴とする。752は、間隔の広い珠文、凹面の布目、コビキB、瓦当裏面の横方向ナデ・周縁に沿うナデ、釘孔を特徴とする。

軒平瓦は「波状文」と「唐草文」であるが、後者は753の1点のみである。波状文軒平瓦は外縁の幅はやや広く、左右外縁幅は特に広くなり、界線は無く、波の皴は3～5本である。瓦当周縁の面取りの違いにより5分類できる。196・199は瓦当上縁に幅広い面取り、顎後縁に狭い面取り、197は瓦当上縁を面取り、198・384は顎後縁を面取り、200・202は瓦当上縁に幅狭い面取り、顎後縁に広い面取り、201は面取りをしていない。唐草文軒平瓦（753）は瓦当上縁に幅広い面取り、顎後縁に狭い面取りがされている。

本遺跡出土の波状文軒平瓦は、浜津四天王寺出土の「甲子」銘の波状文軒平瓦と長岡京市の勝龍寺城出土の波状文軒平瓦に文様が類似している。四天王寺例は1564年製作で、勝龍寺例は1568～1572年頃製作された瓦である。この製作年代は無量壽院が八輪島に所在していた時期であり、本遺跡出土の波状文軒平瓦は文字瓦（188）と同時期のものであると考えられる。

梵字瓦は、S D1302の191、S D1304の354、S D1305の383、第3面の942の4点である。191は軒丸瓦で、阿弥陀如来を意味する「キリーグ」があり、354は軒平瓦で、胎藏界五仏を意味する梵字がある。383は丸瓦で、不動明王を意味する「カーン」を刻む。942は平瓦で、凸面に「真言」の一文を刻んでいる。

第4節 高松城築城以前の高松

中世の高松は港町であったことが、文安2・3年（1445・1446年）の『兵庫北関入船帳』によって知られている。その史料には、兵庫北関に入船した多くの讃岐船が記載されており、その中に「野原」を船籍地としたものがみられる。応永19年（1412年）の『北野天満宮一切経』奥書には、「野原西浜極楽寺」「野原無量壽院」「野原福成寺」などの真言宗寺院名が散見でき、これらの寺院を建てられるだけの経済的基盤を有する港町であったと考えられる。高松城築城以前の高松については、『南海通記』卷之廿の「讃州新高松府記」に、西側と東側に海が湾入

画する北側の境界線としての性格を有する溝であり、SD1302より南側の地域が寺域であったと考えられる。これらのことと総合的に検討すると、今回の調査区は天文～天正年間に所在していた無量壽院の寺域であったことが判明した。

第3節 第3面出土の瓦について

瓦が出土した遺構はSD1302・1304・1305・SX1301であり、その種類は丸瓦・平瓦・梵字瓦・鬼瓦・道具瓦である。

軒丸瓦はすべて三巴文であり、外縁幅は広く低く、丸い巴頭部はくびれを有し、尾が細長く、外区の珠文が小さく数多いという16世紀の特徴を有するが、瓦当の文様はわずかに違いがある。189・190・192・377・378は尾が細長く、珠文が28個前後であり、752は尾が細長いが、珠文の間隔がやや広くなり19個を数える。193は珠文の間隔が752と同じだが、尾が短い。

軒丸瓦を含める丸瓦は、形態や調整の違いによりいくつかに分かれる。188・380は、凹面の細かな布目と粘土紐の痕跡・吊り紐痕、コビキAを特徴とする。190は、凹面の下縁連結部分の仕切り・細かな布目と粘土紐の痕跡を特徴とする。194・195は、淡赤橙色の色調、凹面の布目・内叩き痕、コビキAを特徴とする。752は、間隔の広い珠文、凹面の布目、コビキB、瓦当裏面の横方向ナデ・周縁に沿うナデ、釘孔を特徴とする。

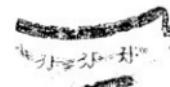
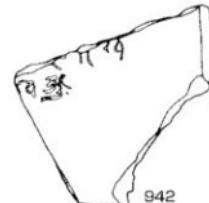
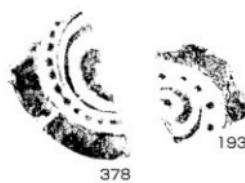
軒平瓦は「波状文」と「唐草文」であるが、後者は753の1点のみである。波状文軒平瓦は外縁の幅はやや広く、左右外縁幅は特に広くなり、界線は無く、波の皺は3～5本である。瓦当周縁の面取りの違いにより5分類できる。196・199は瓦当上縁に幅広い面取り、顎後縁に狭い面取り、197は瓦当上縁を面取り、198・384は顎後縁を面取り、200・202は瓦当上縁に幅狭い面取り、顎後縁に広い面取り、201は面取りをしていない。唐草文軒平瓦（753）は瓦当上縁に幅広い面取り、顎後縁に狭い面取りがされている。

本遺跡出土の波状文軒平瓦は、根津四天王寺出土の「甲子」銘の波状文軒平瓦と長岡京市の勝龍寺城出土の波状文軒平瓦に文様が類似している。四天王寺例は1564年製作で、勝龍寺例は1568～1572年頃製作された瓦である。この製作年代は無量壽院が八幡島に所在していた時期であり、本遺跡出土の波状文軒平瓦は文字瓦（188）と同時期のものであると考えられる。

梵字瓦は、SD1302の191、SD1304の354、SD1305の383、第3面の942の4点である。191は軒丸瓦で、阿弥陀如来を意味する「キリーグ」があり、354は軒平瓦で、胎藏界五仏を意味する梵字がある。383は丸瓦で、不動明王を意味する「カーン」を刻む。942は平瓦で、凸面に「真言」の一文を刻んでいる。

第4節 高松城築城以前の高松

中世の高松は港町であったことが、文安2・3年（1445・1446年）の『兵庫北関入船帳』によつて知られている。その史料には、兵庫北関に入船した多くの讃岐船が記載されており、その中に「野原」を船籍地としたものがみられる。応永19年（1412年）の『北野大満宮一切経』奥書には、「野原西浜極楽寺」「野原無量壽院」「野原福成寺」などの真言宗寺院名が散見でき、これらの寺院を建てられるだけの経済的基盤を有する港町であったと考えられる。高松城築城以前の高松については、『南海通記』卷之廿下の「讃州新高松府記」に、西側と東側に海が湾入



しその間に砂洲が突き出す地形と西濱・東濱という漁村の存在が記載されている。近年の発掘調査により、高松城周辺には古代末から中世の遺跡が存在することが判明し、当時の港町の実態が解明されつつある。本遺跡の北西に位置する高松城跡（西の丸町地区）では、11世紀前半～13世紀前半のと考えられる礎敷遺構や船着場と考えられる木組、木製の碇が検出され、遺跡の立地と搬入品の多さなどから港湾施設関連の遺跡である。本遺跡の西側の浜ノ町遺跡では13世紀末から15世紀末にかけての掘立柱建物や井戸・溝等の遺構が検出され、海浜部に立地する集落を確認した。出土遺物には多様な搬入品や上鍤が多量に含まれており、この集落は物資流通と漁業を経営基盤としていたと考えられる。扇町一丁目遺跡では14世紀前葉～15世紀末の遺構・遺物が確認されている。また、現高松城の東側に位置する高松城跡（東の丸町地区）には16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。現高松城の南側の高松城跡（丸の内地区）では13世紀末～14世紀前葉の井戸が検出され、高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）では中世末葉の井戸・溝が検出されている。このように、高松城築城以前には砂堆や中洲の上に集落や数多くの寺院が存在していたことが明確になってきた。従来は遠浅の海を埋め立てて高松城が築かれたと思われていたが、大きな経済的基盤を有する中世都市を立ち退かせて築かれたのである。

引用文献・参考文献

- 「親長卿記一」「増補史料大成」 増補史料大成刊行会 臨川書店 1965
「北野天満宮…切経」「大日本史料 第七編之十六」 東京大学史料編纂所 1957
増田休意「増補三代物語」 阪口友太郎編集 三代物語刊行会 1992
「無量壽院願願寺記」「香川叢書 第一」 香川県 1939
「御領分中宮山米・同寺々由來」「新編 香川叢書 史料編」 香川県教育委員会 1979
「全譜史」「復刻讃岐叢書（第一）国譜全譜史」 中山城山 1972
「口説全譜史付三教一帰論訓釈」 中山城山 1991
「讃岐國名勝団会」「日本名所風俗団会 14 四国の巻」 松原秀明編 角川書店 1981
「紫山願願寺 無量壽院の記」 手塚畫巖編 無量壽院保存會 1970
香西成資「南海通記」 歴史図書社 1976
角川書店「角川 日本地名大辞典 37香川県」 1985
四国新聞社「香川県大百科事典」 1984
日本史広辞典編集委員会編 1997 「日本史広辞典」 山川出版社
大鷲和則「(財)松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（作事九）」 高松市教育委員会ほか 1999
大鷲和則「香川県弁護士会会館建設に伴う発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家中屋敷）」 高松市教育委員会ほか 2002
大鷲和則「高松城跡（西内町）」「平成15年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」 高松市教育委員会 2004
小川賢・片桐節子「新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家中屋敷）」 高松市教育委員会ほか 2004
香川県教育委員会「高松城東の丸跡発掘調査報告書」 1987
川畠聰「扇町一丁目遺跡」「平成13年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」 高松市教育委員会 2002

- 川畠聰ほか「高松城跡（都市計画道路高松海岸線）」『平成13年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報』高松市教育委員会 2002
- 川畠聰「史跡高松城跡地久橹台発掘調査概報－平成11～13年度調査－」高松市教育委員会 2003
- 川畠聰「史跡高松城跡（三の丸）」「平成14年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」高松市教育委員会 2004
- 川畠聰「史跡高松城跡地久橹台発掘調査概報－平成14～15年度調査－」高松市教育委員会 2004
- 川畠聰「高松城跡（丸の内）」「平成15年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」高松市教育委員会 2004
- 川畠聰「史跡高松城跡（二の丸）」「平成15年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」高松市教育委員会 2004
- 北山健一郎「香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 1999
- 佐藤竜馬「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡IV」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2000
- 佐藤竜馬「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2003
- 木光甲正「組屋町遺跡」高松市教育委員会 2003
- 乗松真也ほか「平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 浜ノ町遺跡 高松城跡（西の丸町地区） 西打遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2001
- 乗松真也「平成13年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 浜ノ町遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2002
- 乗松真也「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 高松城跡（浜ノ町地区）」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2004
- 藤好史郎「高松港頭土地区画整理事業平成7年度埋蔵文化財発掘調査概報 高松城跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 1996
- 古野徳久ほか「平成11年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告 高松城跡（西の丸町）・浜の町遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2000
- 古野徳久ほか「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 高松城跡（西の丸町地区） 浜ノ町遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2001
- 松本和彦「高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2003
- 松本和彦ほか「サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）III」（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 2003
- 森下友子「高松城下の絵図と城下の変遷」財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要 IV （財）香川県埋蔵文化財調査センターほか 1996
- 中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1995
- 山崎信二「中世瓦の研究」雄山閣出版株式会社 2000
- 山本美之・大鶴和則「史跡高松城跡整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 史跡高松城跡（地久橹台・三ノ丸跡）」高松市教育委員会 1999
- 山元敏裕・中西克也「高松城跡（丸の内）」「平成15年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松市内遺跡発掘調査概報」高松市教育委員会 2004

無量寿院関係文書（抜粋）

『親長卿記』 『壇場史料大成 親長卿記一』

文明五年三月

廿四日 陰 參内、^{丁酉} 八幡宮護國寺禮別當事、大法師應消極、質申、^{庚午} 奏聞、勅許、謹

州坂田無量壽院板官事、人覺寺僧正妹中、同參聞、可任人體職、猶可尋決云々、

廿七日 晴、瀧州坂田無量壽院事、以蘆野獵子之由中之、迷上以疊狀了、此土者勅許、

『北野天満宮一切経』 『東京大學史料叢書所編纂「大日本史料 第七編之十六」』

成 大般若波羅蜜多經卷第二百六十一

右華讚岐國野原之福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十三

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十四

古事記州野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十五

古事記州野原之福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十六

七華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十七

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十八

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百六十九

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第二百七十

大願王金剛智寶藏

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

生年六十四才

應永十九年正月十四日書寫了、

珠 大般若波羅蜜多經卷第五百二十一

右華讚岐國野原福成寺金寶賀宋玄

大般若波羅蜜多經卷第五百二十二

本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十三
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十四
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十五
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十六
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十七
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十八
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百二十九
本願聖藏
大般若波羅蜜多經卷第五百三十
應水十九年四月八日於常宮寺寫畢、
本願聖人受攝
右華嚴州野原住金剛弟子等
一校畢、

法集經卷第一
右華嚴州野原住金剛弟子等
一校畢、

法集經卷第二
右華嚴州野原住金剛弟子等
一校畢、
為有悞讀定已、

法集經卷第三
應水十九年丈人八日、任本受事、
右華嚴州野原住金剛弟子等
一校畢、

法集經卷第四
應水十九年丈人八日、任本受事、
華嚴州野原住金剛弟子等
一校畢、

法集經卷第五
應水十九年丈人一口、任本受事、
金剛弟子脚跡弟子等
一校畢、

法集經卷第六

應永十九年五月十三日書寫、

右事降迦密藏金像香港

本願覺藏

一校讎、

觀經諸法行經卷第一

右華嚴經新原義金像香港

一校讎、

觀經諸法行經卷第二

應永十九年印月廿六日書寫、

右華嚴經新原義金像香港

一校讎、

觀經諸法行經卷第三

一校讎、

應永十九年卯月廿八日書寫、

右華嚴經新原義金像香港

觀經諸法行經卷第四

一校讎、

應永十九年卯月卯日書寫、

右華嚴經新原義金像香港

「增補二代物語」

版口友太郎編纂

○無量寿院 素山隨願寺 真言宗 京都御室仁和寺末寺 在野方町 法華宗大乘寺跡と云 天平中行基来 間比之所疾苦 対曰昔在景行寺時 海中有大魚 忽起洪濤覆舟食人 帝深憂之 迺勅皇子倭式辨救之 (事詳記後) 萬來風雨不和 水旱疾疫茅蠻 占之大魚為祟 於是行基欲卜地建寺以追福安其衆矣適々過坂田家山下 忽無量為仏端現 紫雲覆其上 迺建寺於其地 自造無量寺佛像安之為大依之追薦焉 又生々海浜立魚畫堂祀之 自斯之後 邦内乂安較大松安一說曰 光明皇后 大継冠之女也 語干行基而創此寺云 蟹藏寺時 生海波比乎 大聖釋世音 極大持明仙 但說法 四海瞻聽之興興矣 遂造開泰宮真言學院 而折震解之泰陞 香川郡苗裔山業據此寺 真鍋中藤原朝臣重秀 泰朝末会見群兒感戲 有一童子相之不凡 紫雲一片覆其上 間之此邑人秦氏之子也 遷出家為聖主尊稱弟子 所謂觀寶也 正是也(小字岡古壁) 山号原号宝照院 以數有紫雲瑞現 因改号紫山 觀寶寺 墓碑有記 墓碑 墓碑之説前正相繼而生傳續官尚存 謂較に壇議所之一 由社靈香祖觀定於南國矣 素武 延喜 朱雀 付上 空壁 後鑿壁 後花園 龜山 諸帝王最禪依化寺 藏名器寶等 有院宣及信施之法具 事詳有緣起 天正之乱 賊徒將焚伽藍 不動明王忽日護護堂牆口而救火 賊從大門而逃去 因稱口牆口不動 空海所造也 口要遷守於口ノ村 又從八幡島即今城地也 又及生駒縣上氣城於之地 遷諸船塲地 至今呼其地曰壇議所 久又遷城南 (淨願寺前御長尾山地) 五六帳遷不安其居 正保中徙於今地 遷法華宗大乘寺遂也 于時有台命禁不受不施 大乘寺僧固執不屈 故逐其僧堅守 遂以那命遷此寺於其塗云

○彌陀什物如左

木導無量壽佛（良三・元行作） 菩薩如來 菩薩菩薩 遊出不動（並弘法大師作） 四天王（頃光院寄附） 駕馱音（李謐作） 十一面觀音（弘願寺日作） 喬達菩薩（惠心作） 弥勒 愛染 弘法大師 極寶僧正像（並作者不知） 不動 虛空藏 川山松迎客勒 足沙門 梵天 日天 月天 真言十六祖 十六輪（以上並增叶作） 同八祖（八幅七幅弘法圖 弘法二幅增叶画） 正面弥陀 文殊（弟土佐將船圖） 泰樂像 十二天觀音（並南宮公子行） 金胎大日種子（二幅富變音） 不動（同上） 不動（金圓圖） 右劍左觸不動（二幅） 不動（並妙次圖） 十二天金胎堂某羅 金剛薩埵 檀若菩薩（並南宮昌基） 弥陀（惠心圖） 不動（弘法圖） 六字名号（弘法書） 弘法大師（晉班圖） 公舍利（晉班清美） 五大明王 金部五種經 四面大黑玉王二枚（並光仁帝懸） 法華絆一部（聖武帝与光明皇后書寫） 後宮家臣加國字 連系院三尊曼荼羅（中等煥鑑） 地藏（青舟圖） 天神像（仁和中官家守此界屢々遊此寺乞生持相普于門首家實同鄉燒館 今其壇曰天神領 俗曰燒 諸御殿 及其去也 日向其懷留之 因國之時 同鄉有森田羽舟 桦比像 其女嫁小豆島豪家因號此像 其家存有絆 古之音神為崇於是號此像于某寺 は像以夢故遂遷此寺） 両部曼荼羅（頃薄値正圖） 二十字弘像（三福各一十字） 十二月七日仏名念 十二弘 愛染愛行本地像 雨足童子 岁神（以上並名画 不知何人之所画） 王義之筆頭（以竹織之或日 胎時未有今体之端末審 然其書不凡 江都開帳時 佐々木玄道写時年十二） 紗印跡一部八十卷（左住有範碑立書） 僧正中後於通守後遷遷化此寺 事詳見八官錄起応永中那叶僧正住持 念仁中增普僧正住持 並有其券 文明中增寺印住持有繪言 寺領六十石 在山田郡六条

△一宗觸頭

○無量寿院跡 在室

『讀岐國名勝圖会』

（松原秀明編集・角川書店發行「日本名所風俗圖会」十四）

無量壽院（同所）にあり。紫山隨願寺。往古七叢院の一なり。真言宗、京都仁和寺末寺（寺領五十三石二斗）。

本堂、本尊正觀音（弘法大師作）護摩堂、不動明王（興教大師作）。走り出の不動また鼠突の不動（とも云ふ）

藥師堂（藥師如來、弘法大師作。鑑原藥師といへり。同称院如米、行基大士作。十一面觀音、弘願寺日作。大日如來・地藏尊、並びに聖德太子御作）聖天堂 客殿（阿弥陀如米、覺證上人作。不動尊、同作）經藏（木尊人日如來、覺證和尚作）地藏堂（石像）領守社（二宜大明神・藤原俱羅明神・秋葉大権現・荒神）

音神（御日聲。仁和年中、菅丞丞相當國御任間のとき、香川元茂といふ者当主の内緒申し上げしきは、この中に七日參禮し、その畔傍の池水を鑑として自ら写したまゝ所の實影なり。當寺無住の時所在を失す。そのち小豆島草加郡の村長江印耳・左衛門祐良の手に入りしかば、其事をかうべりしことありて寺宇に移す。貞享二年五月の事なり。江印耳・左衛門うら書きあり）

寺記曰く、行基菩薩はじめのを坂田姫室山の麓に創建し紫雲山隨願寺といふ。弘法

大師のとき修造して七談議所の「となし」は、大師の大伽藍なり。白河法皇の移動にて歴經ありしゆゑ、大治四年崩御のち住持道隆請して慶を榮きて壇時に禮福の動め怠らざりける。今中村背神の社西園野中にあり。龜山天皇この寺を崇復あり。寛延三年崩御のうち、この跡をも榮きて追福怠らざりける。今石原尾社頭を陵跡といふ。同社龜山廟の頃今なほ存す。有縁僧に正當時住職のとき、安祥寺の法源を伝ふ。妙伴の末弟是吽は『妙印抄』にのみを持ち去り、八十卷の抄の寺に伝へたり。元徳二年にその功なりたりといふ。三牛寺通寺に移転して東北院を遺す。元徳二年放す。応安四年、贈僧正の旨旨をたまへり。増野僧正は大内郡虚空院と当守の職務なり。当寺は三室院慈覚方の法流をつたべ、虚空院は義龍方の法源を伝ふ。文明十三年九月八島寺開基のとき、細川守護代と源氏・源氏と権威をあらそひ合戦に及び、八栗寺および山田郡の敷寺寺門に属する事、美川郡宝應院の記にみえたり。今接するに、文明五年三月山名宗全卒、六月勝元卒。そのうち阿家和ぼくなり京師は静謐なれども、政元幼ゆる家家権威をあらそひ、僧法師まで武事にあづかりしとみえたり。当寺坂田郡にありしは文明の記に分明なり。今その地に寺跡の名を呼べり。天文のころ天下一統弘國になり、僧法師まで兵員をたゞさく領主兵を出させし事あり。そのうち兵火にかかり八幡宮へうつる、今の城地これなり。天正年中西の方へ移す、今御舟藏これなり、談議所といふ。塔頭に祥寺・聖花寺は今にこれり。増野二重中村にうつる、淨願寺東隣、今御長屋地これなり。寛文七年また今地にうつる、この地は法華宗大乗寺の地となり。

末寺六ヶ寺、その所に出だす。

宝物〇法華經（八巻、光明皇后御筆。半は聖武天皇宸翰、天皇御密附。背左柏叶御印の時の和点を加へたまゝ、希代珍物なり）阿弥陀・轉進受經（中將姫・御髮と蓮糸とを以ておりたまふゆゑにはすのまんだらといふ）五大尊（弘法大師等ならびに帳帳天皇御著附）瀧頂道良の外仏器一類（金鏡金利持・仏利持・懸拂ひに同御者附）ム令利・寶證大師等（阿彌陀二重（奥教大師等）・真言八祖次第（弘法大師筆）・弘法大師像・真言伝法十六祖（並びに增野僧正筆）・不動明王（弘法大師等）・弘法大師（寶證大師等）・寶證御朝のち仏利一類をそへこの寺の御影堂にをさむ）・流見觀音（金剛輪）・大木闍不動尊（弘法大師作）・愛宕本地（寶證に人筆）・愛染明王（軍牢御上筆）・般若心絆（弘法大師等）・阿陀如来（惠心僧都等）・不動明王（弘法大師筆）・増野僧正所持）・同（妙況筆）・虚空藏（増野僧正筆）・弘法大師十王圖（千幅）十二天（並びに同筆）・文殊菩薩・土佐守御系（不動明王（弘法大師筆）・十三佛（金剛輪）・地藏尊（寶舟筆）・御經相（云教大師筆）・当寺緣起（良範法親上御筆）・瀧頂道良御筆（増野僧正筆）・大日經妙印抄八十卷（青龍僧正自筆）・阿弥陀（惠心僧都等）・不動尊（二幅、觀音僧正筆・増野僧正筆）・青神講式（世尊寺行能卿等）・大般若經（全部、奥書あり、左に記す）

大般若經裏書曰く、

一校了 三秦富小焰中光院

五秦富極経歸上座

文安二丁卯七五

住持増野僧正宣旨序

文明五年七月七日 宣旨

法印妙抄

宣任權僧正

藏人右近衛權中將藤原公兼奉

大永年中の縞旨これを略す。

当寺に鷹々女房奉書写

御縞れいのくわんしゆまよりめてたく竟しめし候

わたくしへもてたくいたきまあらせそろ かしく

その余、仏像・菩薩あまたありといへども一々挙ぐるにいとまあらず。

『紫山隨願寺無量壽院の記』

〔宇摩聖藏編輯・無量壽院保存會事務所〕

抑ち當院は人皇四十五代聖武天皇の御宇天平十一年、行基菩薩の開基し給ひし所なり。是より先き人皇十二代坂上天皇の御宇、大慈魚ありて船を覆へし人を食ひ、四國の近海を荒すこと頗々として、海上の往来危険極りなし。天皇之を聞召して深く慈悲を惄まし給ひ慈魚退治の大命を小難皇子の息、靈龕に下し給ふ。靈龕命を拜して瀧岐に下向し苦心參懺終に之を殊歎す。天皇靈龕の武勇絶倫にして勝く大命を全くしたるを賞して瀧岐を賜ひしかば、靈龕瀧岐に止住す、世之を瀧留靈王と稱す。是より越民初めて安堵の恩をなす。然るに慈魚の怨念當國に崇りをなし、比牛風雨駆を失ひ五穀實らず國中の人民告むこと乍久しかりき。行基菩薩當國行化の時此事を聞き、我れ一寺を建立して此災殃を拂ひ、人民の苦患を除かんと決心し、各所を踏査して地理を檢す。個々一人の老翁もあり菩薩にて曰く、

是より東方に當りて山あり資照山と名く、山北の海邊に不出讓の地あり八輪船と稱す、常に地中より光明を放ち山上には紫雲騰く、雲中に阿彌陀如來示現し無量の菩薩、明モ、龍神等に圍繞せられて微妙の法を説く、輪王輪轉に乘じて來御し、佛足を頂禮して說法を聽聞す、時に天照大神輪王の開法を知りしめし諸神を從へて亦た開法の座に列なり給ふ。彼の輪實に八輪輪あり故に其止まる所を八輪場と云ふ、我れ観たり此有端を見たり今皆僧の呼むる靈地此所に遇きたるはなし、速に伽藍を建立して願望を遂げ給へ、且、菩薩即ち其地にせざ山上に登りて見給ふに、其發祥奇瑞實に老翁の言の如し。是に於て瀧院三尊の靈像を勧請し、慈魚怨念の退散を祈られしに、果して其驗ありて風雨時に順ひ百穀豐熟し、人民喜ぶこと限なし。菩薩供具して此の願木を天皇に奏聞しけるに歡感矣ならず、但願度道の勅許を下し給ひ、且つ金光明經、仁王經、法華經并に資照山、無量壽院、隨願寺の三種を御普賜あらせられしを以て、直に土木の工を起し佛閣僧坊日ならずして竣工す、これ當院の靈體なり。

此の八輪場とは即ち福井山の嶺より栗林村官輪村の總名なれば、現今高松市の所在地が塩原の庄と稱し、瀬戸口荒野なる一渓村たりし時よりも尚ほ以前の地名なれば、之に依りて當院が如何に古き關係を當地に有するかを知るべく、又た当地開發の動機が遠く當院造営の昔時に萌せるを知ることを得べし。

其後嵯峨天皇の弘仁年間、宗祖弘法大師當院に錫を留め、大般若首著螺弁に金剛力士及び現在于佛の尊像を造りて安置供養し給ひ、且つ圓記、秘記、縁記の三卷を製作して此靈地の殊勝なる旨を記述し、以て天皇に奏聞し給ひしかば深く歡喜あらせられ、瀧院三尊の靈像羅、軸井に五種飾、四面器等の佛器を御持附し給ひ、則へ勅願所として又た信言傳法の教諭所として、

實祚延喜の所願をなしとを承認とすべき旨言を下し賜ふに幸れり。當院を教議所と稱するはこれが爲なり。

天皇御帝附の曼荼羅及び佛器は幸にして現存すれども弘法大師御製作の國記秘記稿記の二卷は、何れの世に紛失したりけむ今は存せず、實に惜むべきの空空なり。然れども現今當院所藏の縁起は此の二卷に依りて記述したるものなれば、之を讀まば又以て其大要を知ることを得し。

天地顯氣記に依れば、光孝天皇の在和牛中肯原道實公當院在任の時香川元茂公に告ぐるに當院創建の由來を以てす。公之を聞き然らば我れ試むことありて、七日間當院に參籠し、本尊の實前に於いて至心に祈請せしかば、靈應空しからずして心願成就せり。公深く之に感し附近の池水に姿を映つし、之を模様して當院に奉神し、且つ聖武天皇御帝附の法事經に訓説を加へらる。此經今現に當院に秘藏す、實に天下無比の靈實なりと謂ふべし。管公泰納の形像は何れの時に紛失したりけむ所在明からざること併久しかりしが、輻輳して小豆郡守加福村江田桑左衛門佑長の家に藏せり、然るに貞享三年祐長靈夢の告を蒙り、終に之を當院に奉納し今日に至る當院に秘藏す、池に苔異のことならずや。

宇多天皇は譲く弘法大師の靈體と實言宗の法門とを御信仰あらせられ、實章二十一體にして位を皇太子に譲り、本尊大師を成體として實言宗の出家となり、父君光孝天皇の御本願に依りて建立せらるに和乎に入らせ給ふ、是れ即ち寔平法皇なり。當院初代の住職たる觀實僧正、嘗院由緒の神業なる所以を後身に養し上げるに、直に御軒所の勅宣を下し賜へり。

朱雀天皇の承平元年法皇實章六十一歳にして崩御し給ふや、天皇は法皇と觀實僧正との道交深からざりしことを追憶し給ひ、御陵を當院に築き奉るべきの旨言を下し賜ひを以て、葬て之を室山の傍なる觀實僧正の廟所と相並べて樂き奉り、毎年七月十九日齋禮に御追福を祈り奉れり。特に承平七年は法皇の七周年御誕生日と觀實僧正の十三回忌とに當りしかば、同年七月十九日日転体下向して御苦惱を祈り立つ。

延喜の帝は高野大師に法衣を贈り朕何ぞ觀實に送らざらんやとの御書に一體の紫衣を添へて觀實僧正の廟所に下し賜へり。僧正の面目、寺門の光榮、何物か之に過ぎんや。初め栗林公園附近一帯の山は之を實照山と稱せしが、行基菩薩登臨の時紫衣贈さしをして教新山と改稱せり、然るに今回紫衣御下賜の恩典を尋ねしたるに依り、此の光榮を後世に紀念せんが爲めに、改て紫山と號す。

觀實僧正是當院初代の住職にして、弘法大師四世の法孫なり。

俗姓は養氏、香川郡坂田村の人なり。或る年聖實尊師（勧善理源大師）讚岐下向の時、路傍の水を掬して手を洗ふ、俄々其邊りに見覚數聲遊戲しつゝありしが、一人の童子尊師に謂て曰く其水は不淨なりと、尊師答て口く詮法に淨不淨なしと、童子言てに反問して口く若し淨不淨なくんはぞ手を洗ふの要あらんやと。學德廉儼の尊師も其道理ある反間に屈服して一語なく、熟々其顕貌を見るに聰明文智の相あり、因て父兄に講て京都に携へ歸り弟子となす、是れ即ち觀實僧正なり。唯喚母權は「葉より香しく絃は一寸にして人を弄むの極あり。」後宇多、醍醐兩帝の御諱を守り、學德一世に送絶せし僧正是、幼少の時既に其器の非凡なりしこと此の如し。稍長して書を讀むに其強記常人の企及ふ所にあらず。深く密教を研究し其に三論の教義を馳び、共に其極量を極む。寔平七年聖實尊師に就て傳法灌頂を受け、新に般若寺を建立して大に教法を開演す。又た屢々南都興福寺の維摩會の講師を務め、盛名遠近に高し。昌泰三年に和寺の別當となり、延喜九年真寺の住持

となりて一家を擁護す。同十年東寺の御能供を修業す、天皇勅して永世の恒規となし給ふ。同十四年夏旱す、天皇御正に勅を下し、神樂苑に於て孔雀經の神法を修せしめ給ふ、第三日に至りて甘雨大に降る天皇歎感鶴ならず厚く之を賞し給ふ。此年石山寺に住す。同十九年醍醐寺の座主となる、此職僧正を以て權失とす。同口十一年某後、宗祖遍照金剛天皇の御夢に入りて參して曰く、君が法衣弊朽す頃は之を慈み給へど。天皇覺めて後深く之を感銘し給ひ、直に新衣一襲を調製し、僧正を僧使として之を高野山に送らしめ給ふ。僧正勅を奉じて蚤山し、定窓を開きしに驚駭驚懼として尊容を押すことが能はず。大に慚愧して頭顔を懺悔し、心に祈願すること少時、感空しからず驚駭漸く附れて尊容に現はる。恭しく之を押すれば撫摩長く垂れて地に至る、因て之を刺り法衣を更く奉る、これ御衣更の遷禪なり。此時天皇宗祖に弘法大師の誦號を贈ぶ、益し僧正の恭清に基くものなり御衣更の際弟子淳祐傍に在りしに而から宗祖の尊容を拝することができず僧正乃ち淳祐の手を執りて定體を摸索せしめらる。後に至る遂其手の香氣芬芳として失せず、故に淳祐を香の僧正と稱し、其手寫せし經典を香の聖教と稱す。同年高野山の座主を兼任す。延喜三年僧正に選び、此年六月一日昇終として寂す年七十三¹³。僧正著はす所の書不動略次第一巻、五大力秘釋一巻、五大明王義一巻、如意輪次第一帖、文殊次第一巻、胎藏次第一巻、阿尼駁密記一帖、神供次第一巻、結縁灌頂私記一巻、大疏鈔四卷、水讚音天次第一巻、三摩耶杖式一巻、後七年由縁作法一巻等あり。

其他醍醐、村上、山河、後嵯峨、龜山、後花園等の聖帝相繼て當院を御信仰あらせられ、勅旨、院宣、官符等を下し賜ひしこと云ふにあらず。就中白河天皇は御藥院隆の詔勅を下し給ひ、散信殊に頗るましませんを以て、大治四年七月七日崩御あらせらるゝや、當時の寺務法印臺道上人奏請して御靈を榮き御菩提を折り奉る。有輪上人の歎心求法記に北天神の社より木中二丁計りに當つて御陵ありと云ふるもの即ち是なり。思ふに先れ現今市原市中野天神の社より木中の方位に當れる上幡町の白河家なるものなるべし。即ち大覺寺より西方約一丁を隔てたる地に一本の松樹の在る所なり。此地近頃まで白河屋敷と稱せり。茲に記して歴史家の参考に供す。

龜山天皇から亦た御薬院道の勅疏を下し給ひ、當院を御行所として御跡依舊た深くましませしが為也。承元九月十五日崩御あらせられしを以て、例例に准じて御靈を榮き御菩提を折り奉る。此御靈は現今の石清水尾八幡宮の後に在りと云ふ。當院の舊記に依れば比龜山廟を八幡宮に勅請したるるものなり。後の三代物語に石清水尾八幡宮の社務所に隸する實物に、龜山廟と云ふる額ありと記せるに微するも、此説の騒ぎなきを體するに足らんか。石清水の山を龜山と稱するは蓋しきに基因せしものなるべし。是に依りて之を見れば、龜山帝の御陵及び石清水八幡宮と當院とが、如何に深き關係を有するかを知ることを得べし。明治二年一月十九日神佛判然の際、石清水尾八幡宮の御本地佛大師前に御佛堂の本尊を始め、其他之に附屬せる佛像等は總て之を當院に遷坐して奉安せり。これ豈に當院と深き關係あるが爲めにあらずや。

上に既に述べし如く當院は行基菩薩開基の勝地、弘法大師出生の靈場たるのみならず、上は張代皇帝の御謹依を受け、下は萬人の尊信を集めたる所なれば、其住僧も初代の觀智僧正を始めとし、學德兼備の名僧少なからず。晉道上人の如きから數度上洛して天願に咫尺し奉りしより察せば、一代の高僧たりしは幾を容れず。唯だ惜むらくは上人の傳記現存せず、其行化的跡今日之を尋ねるに由なし、嘆乎べきの至りなり。上人の後を嗣ぎて當院の法席を擔せしは、彼の有名なる有輪僧正なり。

有輪僧正は當國那珂郡福梨村の人にして、龜山天皇の御宇文永七年に生る。幼にして同郡

の新善光寺に入りて剃髮し淨土教を學ぶ。一夜夢に佛僧現れ、數巻の聖經を出し諸人をして任意に之を取らしむ。僧正一咄を取りて披見するに梵字にして讀むこと能はず。因て問て曰く是れ何の經ぞや、梵僧曰く密教なり汝所教に譲ありと。覺めて後此夢告を信じ、眞に當院に來りて覺道上人の弟子となり大富院と號す。時に年十七歳なりき。夫より八年間上人に就て兩部の大經典に小野の法流を受身し、造詣する所頗る深し。二十五歳にして高青山に登りしかど、事故の爲に留まること能はず、下りて下野國に行き勁足寺の學頭賴尊同圓林に從て三寶院の法流を受く。同國衣寺の妙淨上人は大日經奥之義に精通せる點に於て、日本一の研學なり。僧正就て傳授を受けんことを請ふ、上人曰く我れ住年泉涌寺の願行上人の請を容れて、特に東寺に於て奥之義を講傳せんとするに附し上人の許旨に接して此事を果さず、舊來講經の意を終つこと年半し。故を以て階第すること能はず。奥州宮崎郡如法寺の道性法印は斯道の大家なりと聞く。汝行きて傳授を受くべし。僧正已ひことを得ず、衣守を辭して東州に出發す。此年早春にて五度實らず處死する者多し、斯の状態なれば食を得ることも甚だ難し。僧正上人より惠まれし申和ニ連を携へ、松葉を取りて之に交へ食し、十三日間にして如法寺に着し、道性法印に面會して奥之義講傳のことを請ひしに、法印は之を講じたることなしして謝辭せられたり。僧正人に失望して空しく歸途に歎く。九十九里の長路、宿るに家なく食ふに物なし、或は野の果し或は山に野の落葉の蟲を取りて食ひ、小川の水を掬し飲みて確かに飢を解き、具さに千辛萬苦を経て漸く大寺に歸着し、妙淨上人に告ぐるに事の由を以てす。上人承を流して之を聽棄し、且其熱心に感じて終に奥之義を傳講す。爾後十餘年間上人に隨從して改革し其美義を極む。正安元年上人伊豆國を湯山遍照院に於て講經の時、僧正に言て曰く、古來奥之義には末跡なく學者の不便少からず、汝既に其幽旨を得たり宜く之を作りて後學に賜せよと。僧正師命を受け平生受傳する所を記して三十巻となす。上人遺して妙印抄と名けらる。其後最暦の末年、更に傳補して八十卷となす。泰治元年讚岐に歸り、覺道上人の命に依りて當院を薦す。僧正下野在學の時、妙淨に人より安祥寺に行きて慈運流を受けよと勧められしことありしを以て、延慶二年同寺に行き光輝上人に謁して傳授し、寶永十八年間往來して終に其融奥を究め盡す。研學の稱識實に後世の好模範なりと謂ふべし僧正性懶を好み深く世塵の喧嘩を厭ひ、覺道上人に請りて當院を引退し、小松の小室に閑居す。然るに元徳二年普通寺の衆徒來りて同寺の頃屢を嘆き、僧正に請ふに興障の事を以てす。初は之を辭せしかども再二の懇請已み難く、終に之を話して同寺に移住し、普應牛中堂塔伽藍の興障全く竣工せしを以て復た小松の小室に歸虫せらる。僧正重時象頭山に登り、此山は金毘羅大権現相應の靈地なりとして之を勧請して一寺を建つ、是れ即ち象頭山松尾寺金光院の開基なり。されば新通寺並に象頭山の今日あるは全く僧正の賜ものなりと謂ふべし。僧正の著書は妙印抄の外に大日經疏科文十卷、阿彌陀經三十五卷、大乗口决十卷、供養法燈聞書三卷等なり。觀應二年七月一日寂す、年八十二。弟子有源の奏請に依りて聖空三年七月朔日勅して僧正に贈補し給ふ。

宥鏡僧正の後、寺門惣次娘通に向ひ、坐塔伽藍頼廢して又た昔日の盛觀を止めざるに至りしが、僧吽僧正來りて大に興障に力を盡し、再び舊觀に復することを得たり。僧正は實に當院の中興開山と稱すべき大德なり。

僧吽僧正是大内郡泉州の郷西村、安藤右衛門盛正の子にして、後光嚴天皇の貞治五年二月朔日に生る。脚裏に空海の一子ありしを以てお札大師の再来なりと稱せらる。生れながら

にして能く歩み、又た空を仰ぎて叶の字を唱へしと云ふ。幼少の時十砂を集めて佛塔の形を造り、或は之に佛像を積みて遊戯となす。一日岡村の仲官手に手る、傳燈法印之を見て稱嘆して曰く他日大法を駿隆せん者此子なりと。終に父母に請うて弟子となし龍德房と名く。長するに及び果して非凡の人徳となり、事相教相の奥義に達するのみならず、又た佛書に妙を得、其作品の今日に傳れるものを見るに、筆力雄健、氣品高尚實に過るる感あり。應永年間當院に在住して中興の大業を元成す。僧正は世に稱れなる解説家にして、音音に當院を駿興したるのみならず、仁風の覺城院、奥田の虚空藏院、傳前の大仰山聖壽寺等を駿隆して何れも中興の祖と仰がれ、遺功尚ほ今日に歿れり。應永十九年一月勅ありて權僧正の位に補せられしを見れば、其學識の如何に高かりしかを知るに足るべし。然れども僧正の傳記の完全なるもの現存せず、一代の事跡甚詳細を知ること能はざるは深く遺憾とする所なり。僧正晚年奥田の虚空藏院に住せしが其終る所を知らず、傳へ云う同院西手の山上より現身に都安鉢天に往詣したるなりと。僧正の脱き捨てたる草履の在りし所に石塔を建てゝ墓となす。

長尾村寶藏院の記録に依れば、後土御門天皇の文明年間に、八葉寺を始め山田郡の諸寺院は悉く當院の末寺たりしが如し、又た以て其盛大なりしを證するに足る。然るに天文の攻囲中亂れて林の如く群衆々に捕獲して戰争絶ゆることなく、僧侶に至る迄兵器を携ふるに至り、國民一日も安穩の思なし。斯る状態なりしかば祐祐社大なりし當院も不幸にして兵火に罹りて灰燼となり、終に灰燼早き八幡鳴より宿り嶋に移轉するに至れり。宿り嶋とは即ち現今之玉藻城地是なり。城地は元と海濱の一小島なりしが、往昔吉備津姫命宮闈へ渡御の際、船を吹鳴に着けて暫く鎮座あらせられ。大より一の宮へ移り給ひし因縁に由りて宿り嶋と稱す。當院を此嶋に移せし後神跡を記念せんが爲めに社を建てゝ勧請し奉り。今に至りて依然一の宮明神を鎮守とし凡月二十九日を祭日とせり、これ城地を宿り島と稱する所以をり。蟲岐安要には城地を八幡島と稱する由を記せども、これをくは誤りならん歟、何となれば八幡島と云へる名稱は上に既に沿ふるが如く、八幡の輪寶飛來して止まりしに起因するものにて、城地に關係なきこと明白なればなり。

天正十六年生駒雅樂公新城を築かんと欲して地理を檢し、前立島の要地なるに着眼し、當時の住僧秀法印に向て、一の宮明神并びに當院を西瀬に移轉すべき旨命令せられしを以て已むる得ずして此所に移る。即ち現今停車場の西に當れる地にして雄渾前御舟檻と稱せし所なり。故に此地近頃立其子を慈義所と稱せり。今之蓮花寺、古井寺は當院の塔頭寺院たりしなり。

當院は往昔より多數の末寺を有し、一懸獨立の本山なりしが、寛永十九年十一月二十七日京都御室御所に本寺の末寺となれり。

寛永二十二年より明暦元年に至る十二年間は無にて、諸般の寺務は蓮花寺住職之を擔任するの有様となり、而て堂塔伽藍も自然蕭条に傾けるが、此年御室御所より當寺の敷地を所掌せられしに依りて中の村に移轉す。即ち現今之淨願寺の前より南は中の村に及びしと云ふ。然るに其後幾ぼもなく、修理様昌教新築の爲め又た移轉せざる可らざるに至り、寛文七年野方町なる口蓮宗不受不施派大乘寺の跡に移れり。是れ即ち現今七十間町に在る紫山、無量壽院、隨順寺なり。

寛文九年蓮寶院源英公より山田郡六條村青木免にて、五十三石三斗の寺領を賄附せられ且つ諸役を免除せらる。

當院古來本寺頗る多く、元と右清尾八幡宮の別當たりし五智院に其末寺たる圓滿院、淨光院、

西脇寺、龍音寺、極樂寺、豊平寺等の諸寺院は寛文八年舊藩主より石清水八幡宮の別當を命ぜられしに依り、仁和寺の末寺となりしと雖も、夫より以前は何れも當院の末寺たりしなり。又中野天神の別當たりし鶴林寺、行徳寺も天和三年舊藩主の命に依りて天台宗に改宗せしと雖も、元と當院の末寺たりしなり。加くのみならず文明年間に山田郡の諸寺院も悉く當院の末寺なりしと云ふを以て見れば、其數の多かりしこと略乎推知するを得べし。然れども種々の因縁に依りて或は遷来し或は邊境して、現今僅かに左の五ヶ寺を有するのみ。

蓮華寺 海室山慈眼院と號す文安元年に建立せし所なり境内に大松樹あり西行法師の像あしものなりとして上人之を西行松と稱す

吉祥寺 平昭山文樂院と號す應永年中の丘連となりし云々境内に松樹あり鶴禪松と稱す
東福寺 長壽山如意輪院と號す萬治三年沙門信見の再建する所なり初め御伊藏の西に在りしが延暦年に今今地に移りしと云ふ

多聞寺 寶塔山嚴勝院と號す元様年間再建せし所なり當寺に古來より大葉天あり是を庭原の大葉と稱す

清光寺 法開山圓覺院と號す明治初年迄は円佛寺と號せり往昔同野郡南部府中に在りしが天正五年前兵火に罹り元和年中今之地に移る

已に終して無量壽院即ち其今日に至る迄の沿革の大要を述べ了れり。之を要するに當院は懶化千歳に芳しき行基菩薩が、國土人民を救はんとの大慈悲心により、八幡島の勝地をトして建立したる靈地なり。若し大れ菩薩の來りて此勝業を起さりせば、當國の比武と豪傑の怨念に苦しめられて、其堵に安心する事能はざりしならん。されば古が讚岐の今日ある所以のものゝ、洵に當院創建の昔に其源を發せりと云ふらむ強て過言にはあらざるべし。聖武天皇を始め奉り慈眼、宇多、醍醐、朱雀、村上、白河、後嵯峨、龜山、後花園等歴代天皇の御宿と代々國土の隠れとを傳うするることを得たる、豈に之が爲めにわらずとせんや、加くのみならず、宗祖弘法大師賀智圓正、覺道土人、宥範僧正、津叶僧正等の高僧高德止住して、体を布き化を垂れて恩澤を今日に遺し給ふあり、誰か之を仰がざるを得んや。殊に當院は今の高松市が慶原の庄と稱せし時よりか、尚古き八幡島の昔に於て建立せられたる古跡たるのみならず、當市の氏神たる石清水八幡宮と緊密の關係を有し、併て宿り島の歴史を察るべき好史料たるを以て、當院の歴史は實に當院ノ院のことたるのみならず、又た實に昔が香川縣及び高松市に取りて看過すべからざる一大中寶なり。此の如き由緒ある當院も創立し來年を闌するこ千有餘歳、地を易かること五ヶ、其間世の變遷に伴つて幾多の盛衰隆替を経たり。且ドの現状は之を往古の盛觀にして其百分一にだらめ及ばず、小供信頼ありて當院體の一員に加はり、一念此に至る母に憲た今昔の歴に堪ぐざるなり。因て今回別紙規則書の如く保存會を組織し、寺門維持の方法を確立し、益々佛法を興隆して上は皇化の萬歳を禱け奉り、下は國利民福を期し以て列聖教信の湯恩と先祖諸徳の本體とに酬答せんと欲す。希くは有縁の檀信徒諸氏、此の誠意を諒して懇切の贊助をなし給はんことを。

無量壽院出土遺物觀察表

※法線の()は、原寸値を表す。

物語	器種	法線 (cm)		調査	色	断面	備考
		L	W				
1	土師質土器	7.9	5.7	1.7	外側：白系ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/1 内側：灰白10YR8/1	1mm以下の石英・黄石 を含む
2	土師質土器	7.4	6.0	1.4	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白・黄土10YR8/2 内側：灰白・黄土10YR8/2	1mm以下の石英・黄石 を含む
3	土師質土器	7.8	6.1	1.5	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/2 内側：灰白10YR8/2	1mm以下の石英・黄石 を含む
4	土師質土器	8.0	6.8	1.3	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：浅黄7.5YR8/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
5	土師質土器	8.6	6.4	1.2	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/3 内側：灰白10YR8/3	1mm以下の石英・黄石 を含む
6	土師質土器	8.6	6.0	1.4	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰青10YR8/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
7	土師質土器	9.4	7.8	(1.2)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/1 内側：灰白10YR8/1	1mm以下の石英・黄石 を含む
8	土師質土器	8.8	7.3	1.1	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/1 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
9	土師質土器	8.4	6.4	1.6	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：浅黄7.5YR8/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
10	土師質土器	9.0	6.2	1.4	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
11	土師質土器	8.0	3.2	1.4	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
12	土師質土器	9.2	6.8	1.7	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
13	土師質土器	9.0	6.2	1.8	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
14	土師質土器	8.6	5.0	1.5	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
15	土師質土器	10.0		(1.5)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
16	土師質土器	8.6	3.2	1.5	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
17	土師質土器	8.6	5.6	1.8	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
18	土師質土器	7.9	5.8	1.8	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
19	土師質土器	8.4	6.4	1.6	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
20	土師質土器	10.1	6.4	2.1	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
21	土師質土器	6.2	(0.9)		外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/6 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
22	土師質土器	6.4	(1.6)		外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
23	土師質土器	5.0	(1.6)		外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
24	土師質土器	5.6	(1.5)		外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
25	土師質土器	5.0	1.3		外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
26	土師質土器	(3.0)			外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
27	土師質土器	15.0			外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
28	土師質土器	14.4			外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
29	土師質土器	14.6		(2.5)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
30	土師質土器	14.2	6.2	3.2	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
31	土師質土器	16.2		(3.0)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
32	土師質土器	15.0		(2.5)	外側：ナメ 内側：ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
33	土師質土器	12.6		(2.1)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白25Y8/6 内側：同側ナメ	0.5mm以下の微細な 砂を含む
34	土師質土器	13.6		(2.6)	外側：ナメ 内側：ナメ	外側：灰白10YR7/4 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
35	土師質土器	15.0		(2.8)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/2 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
36	土師質土器	14.7		(3.3)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR8/3 内側：同側ナメ	1mm以下の石英・黄石 を含む
37	須磨器	10.0	8.4	1.7	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
38	瓦器	10.4	8.2	1.9	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	0.5mm以下の石英・黄 石を含む
39	瓦器	9.2		2.2	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留 和型
40	瓦器	13.8		(3.2)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
41	瓦器	11.0		(3.2)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
42	瓦器	13.0		(3.6)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
43	瓦器	13.6		(3.0)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
44	瓦器	11.7		(2.6)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留
45	瓦器	13.0		(2.4)	外側：同側ナメ 内側：同側ナメ	外側：灰白10YR7/1 内側：同側ナメ	留

報告 番号	種 名	法算(㎝)			調 査	色 調	基 土	備 考
		口徑	底径	厚さ				
46	瓦 器 類	15.2	(3.5)		外面部：圓筒子ア後にハラミガキ 体形：ハラミガキ、後退土唐 内面：凹凸ナゲ後ハラミガキ	外面：灰N5/ 内面：灰N5	0.5mm以下の石英、長 石を含む	
47	瓦 器 類	17.0	(1.5)		外面部：岡ナガ/ 内面：ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	2mmの石英、0.5mm以 下の微粉を含む	
48	瓦 器 類	15.8	(3.6)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：ハラミナゲ後ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N7	素	
49	瓦 器 類	16.8	(3.6)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 体形：ナデ後ハラミガキ 内面：凹凸ナゲ後ハラミガキ	外面：灰N6/ 内面：灰N6	0.5mm以下の微粉を含 む	
50	瓦 器 類	16.4	(4.7)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 体形：ナデ後ハラミガキ 内面：分岐ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	素	
51	瓦 器 類	15.6	(3.6)		外面部：ハラミガキ、折断压痕 内面：ハラミガキ	外面：灰N5/ 内面：灰N5	0.5mm以下の微粉を含 む	
52	瓦 器 類	17.0	(4.6)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：岡ナガ後ハラミガキ	外面：灰N5/ 内面：灰N5	素	
53	瓦 器 類	16.8	(4.0)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：岡ナガ後ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	0.5mm以下の微粉を含 む	
54	瓦 器 類	17.6	(4.5)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：岡ナガ後ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	やや密	
55	土壁瓦土器 等	8.2	(1.7)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：ハラミガキ	外面：淡青色10YR8/4 内面：灰白色5Y8/2	1mm以下の石英、長石 を含む	表面：なで
56	土壁瓦土器 等	6.3	(2.2)		外面部：岡ナガ/ 内面：ナデ	外面：灰10YR8/1 内面：灰20Y8/1	1mm以下の石英、長石 を含む	
57	瓦 器 類	4.8	(1.2)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：ナデ後ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	0.5mm以下の微粉を含 む	表面：ナデ
58	瓦 器 類	5.0	(2.6)		外面部：岡ナガ後ハラミガキ 内面：ハラミガキ	外面：灰N4/ 内面：灰N4	0.5mm以下の微粉を含 む	表面：ナデ
59	瓦 器 類	5.4	(1.9)		筋沟瓦：岡ナガ 外面部：ナデ、折断压痕 内面：ハラミガキ	外面：灰N5/ 内面：灰N5	0.5mm以下の微粉を含 む	表面：ナデ
60	白 瓦	17.3	(5.2)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰白色5Y7/2 内面：灰白色5Y7/2	粘土	内面：買入
61	白 瓦		(2.5)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：第10T8/1 内面：灰白色5Y7/2	素	
62	薄片燒 瓦等		(8.1)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰白色B5/2 内面：灰白色B5/2	やや粗	
63	剪削燒 瓦等		(5.4)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰白色5Y4/1 内面：灰白色5Y4/1	素	
64	荷葉燒 瓦等		(5.8)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰白色5Y4/1 内面：灰白色5Y4/1	2mm以下の繊維微粉 を含む	
65	剪削燒 瓦等		(6.8)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰褐色10Y4/3 内面：灰褐色10Y4/2	素	
66	剪削燒 瓦等		(6.0)		外面部：ナデ、ハラケズリ 内面：折断压痕ナデ	外面：灰褐色10YR8/4 内面：灰褐色10YR8/4	粗	
67	剪削燒 瓦等		(4.0)		外面部：ハラナデ 内面：岡ナガ	外面：灰褐色25YR5/1 内面：灰褐色25YR5/1	1mm以下の石英、長石 を含む	
68	土壁瓦土器 等		(3.5)		外面部：ヨコナガ、ナデ 内面：ハラ	外面：灰褐色25YR6/4 内面：灰褐色25YR6/4	2mm以下の石英、長石 を含む	
69	黑 器 類	12.4	(6.6)		外面部：岡ナガ 内面：岡ナガ	外面：灰オリーブグリーン4/2 内面：灰褐色25YR6/1 地面：灰N6	やや粗	
70	土壁瓦土器 等	33.2	(6.4)		外面部：1部：ヨコナガ 体形：ナデ、折断压痕 内面：ナデ、ナデ	外面：灰褐色25YR6/1 内面：灰褐色25YR6/1	1mm以下の石英、長 石を含む	地面：露地を含む
71	土壁瓦土器 等	34.0	(5.7)		外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面：灰褐色25YR6/4 内面：灰褐色25YR6/2	1mm以下の石英、長 石、金雲母を含む	堆積物
72	陶 器 類		(3.8)		外面部：1部：ハラ、未発 達 内面：ハラナデ、ナデ	外面：灰褐色10YR5/1 内面：灰褐色25YR5/1	素	
73	陶 器 類	25.6	(8.4)		外面部：底打下：ハラ、ハラケズリ 底面：ハラナデ 内面：ナデ、ナデ	外面部：灰褐色73YR5/2 内面：灰褐色10YR5/1	素	
74	土壁瓦土器 等	42.6	(6.4)		外面部：岡ナガ： 體形：ナデ 内面：ハラナデ、ナデ	外面部：灰褐色25YR6/1 内面：灰褐色25YR6/1	1mm以下の石英、長 石、金雲母を含む	外観：模化
75	瓦 器 類	25	1.5		外面部：ハラナデ 内面：ハラナデ	外面部：灰褐色25YR6/1 内面：灰褐色25YR6/1	1~2mmの繊維を多量 に含む	
76	铁 斧	全長 12.2	標 7.6		外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：淡青色75YR8/4 内面：淡青色75YR8/4	2mm以下の石英、長石 を含む	
77	土 器 類	6.8	5.4	0.9	外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：淡青色75YR8/4 内面：淡青色75YR8/4	2mm以下の石英、長石 を含む	底面：ナデ
78	土 器 類	8.6	5.0	1.0	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：灰褐色25YR6/4 内面：灰褐色25YR6/4	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
79	土 器 類	8.0	6.8	(1.4)	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ後ハラミガキ	外面部：灰褐色25YR6/4 内面：灰褐色25YR6/4	2mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
80	土 器 類	8.2	6.2	1.4	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：灰褐色25YR6/3 内面：灰褐色25YR6/3	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
81	土 器 類	9.6	7.6	1.0	外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：灰褐色25YR6/2 内面：灰褐色25YR6/2	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
82	土 器 類	7.8	4.2	2.1	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：灰褐色25YR6/1 内面：灰褐色25YR6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
83	土 器 類	8.1	4.1	1.6	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：灰褐色25YR6/1 内面：灰褐色25YR6/1	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
84	土 器 類	9.0	5.6	(1.3)	外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：灰褐色25YR6/3 内面：灰褐色25YR6/3	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
85	土 器 類	9.0	7.4	1.7	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：灰褐色25YR8/4 内面：灰褐色25YR8/4	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
86	土 器 類	8.7	6.3	1.6	外面部：岡ナガ、折断压痕 内面：岡ナガナ	外面部：灰褐色10YR8/1 内面：灰褐色10YR8/1	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
87	土 器 類	9.1	5.4	(1.7)	外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：灰褐色25YR6/2 内面：灰褐色25YR6/2	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
88	土 器 類	9.8	6.4	(1.7)	外面部：岡ナガ/ 内面：深成	外面部：灰褐色10YR8/2 内面：灰褐色10YR8/2	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ
89	土 器 類	10.0	4.7	2.1	外面部：岡ナガ/ 内面：岡ナガ	外面部：淡青色10YR8/3 内面：淡青色10YR8/3	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：岡ナガヘリケズリ

品目 番号	品種	法規 (cm)		開発	色調	植土	備考	
		11葉	底葉					
90	土師質土器 杯	10.8	7.0	外葉：灰白ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：にぶい緑7.5Y R 7/4 内葉：にぶい緑7.5Y R 7/4	1mm以下の石英・長石 を含む		
91	土師質土器 杯	10.6		(1.7)	外葉：回転ナゲ 内葉：灰白ナゲ	外葉：透青緑7.5Y R 4/3 内葉：透青緑7.5Y R 4/3	2mm以下の石英・長石 を含む	
92	土師質土器 杯	11.6	7.0	2.1	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：7.5Y R 7/6 内葉：7.5Y R 7/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
93	土師質土器 杯	11.2	7.8	2.7	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：7.5Y R 7/6 内葉：7.5Y R 7/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
94	土師質土器 杯	10.9	5.1	2.5	外葉：回転ナゲ、灰ナゲ 内葉：灰白ナゲ	外葉：にぶい緑7.5Y R 7/4 内葉：にぶい緑7.5Y R 7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	
95	土師質土器 杯	10.8	7.6	2.4	内葉：ナゲ	外葉：透青緑7.5Y R 7/2 内葉：透青緑7.5Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
96	土師質土器 杯	10.8	7.6	2.7	内葉：ナゲ	外葉：透青緑7.5Y R 7/2 内葉：透青緑7.5Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
97	土師質土器 杯	10.9		(2.4)	内葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透青緑7.5Y R 7/2 内葉：透青緑7.5Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
98	土師質土器 杯	11.0		(2.3)	外葉：摩滅 内葉：摩滅	外葉：透青緑7.5Y R 7/3 内葉：透青緑7.5Y R 7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	
99	土師質土器 杯	12.8		(1.2)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/6 内葉：透7.5Y R 7/6	0.5mm以下の石英・角 片を含む	
100	土師質土器 杯	11.2	9.2	2.5	内葉：ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/2 内葉：透7.5Y R 7/2	0.5mm以下の石英・角 片を含む	
101	角形	14.0	10.2	(3.2)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 7/1	1mm以下の石英・鐵れ を含む	
102	土師質土器 杯	5.2		(1.8)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：にぶい緑7.5Y R 7/4 内葉：にぶい緑7.5Y R 7/4	1mm以下の石英・長 石・芒硝を含む	
103	土師質土器 杯	4.7		(2.4)	外葉：摩滅 内葉：摩滅	外葉：透7.5Y R 7/4 内葉：透7.5Y R 7/4	底面：無目	
104	土師質土器 杯	6.2		(0.9)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/2 内葉：透7.5Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
105	土師質土器 杯	6.0		(1.0)	外葉：摩滅 内葉：摩滅	外葉：透青緑10Y R 8/2 内葉：透青緑10Y R 8/2	2mm以下の石英・長石 を含む	
106	土師質土器 杯	8.0		(1.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透青緑7.5Y R 8/3 内葉：透青緑7.5Y R 8/3	2mm以下の石英・無石 を含む	
107	土師質土器 杯	9.6		(1.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/2 内葉：透青緑10Y R 8/4	底面：芒硝・長石 を含む	
108	土師質土器 杯	5.2		(1.2)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/4 内葉：透7.5Y R 8/2	2mm以下の石英・無石 を含む	
109	土師質土器 杯	7.8		(1.6)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透12S Y 8/2 内葉：透12S Y 8/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
110	土師質土器 杯			(2.5)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/2 内葉：透7.5Y R 8/2	外面に墨書き	
111	土師質土器 杯			(2.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/2 内葉：透7.5Y R 8/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
112	土師質土器 杯	5.2	4.7		外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/4 内葉：透7.5Y R 8/4	1mm以下の石英・長石 を含む	
113	土師質土器 杯	9.2	5.9	4.6	外葉：回転ナゲ、摩滅 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/6 内葉：透7.5Y R 7/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
114	土師質土器 杯		4.2	(5.0)	外葉：ナゲ、指輪印	外葉：透青緑10Y R 8/3 内葉：透12S Y 8/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
115	土師質土器 杯		4.4	(2.2)	外葉：回転ナゲ 内葉：ナゲ	外葉：にぶい緑10Y R 7/4 内葉：にぶい緑10Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
116	土師質土器 杯		4.6	(1.4)	外葉：摩滅 内葉：ナゲ、指輪印	外葉：にぶい緑10Y R 7/2 内葉：透7.5Y R 6/2	1mm以下の石英・長石 を含む	
117	土師質土器 杯	15.4		(3.6)	外葉：回転ナゲ、ナゲ 内葉：体部・回転ナゲ、ナゲ ナゲ：ヘラミガキ	外葉：透25S Y 8/1 内葉：透25S Y 8/1	1mm以下の石英・長石 を含む	
118	土師質土器 杯	15.3		(3.7)	外葉：回転ナゲ 内葉：ヘラミガキ	外葉：透10W Y R 8/2 内葉：透10W Y R 8/2	1mm以下の石英・長 石・芒硝を含む	
119	土師質土器 杯		6.8	(1.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/3 内葉：透7.5Y R 8/3	1mm以下の石英・長 石・芒硝を含む	
120	土師質土器 杯		6.4	(1.2)	外葉：摩滅 内葉：摩滅	外葉：透7.5Y R 7/6 内葉：透7.5Y R 7/6	1mm以下の石英・長 石・芒硝を含む	
121	土師質土器 杯		5.8	(2.1)	外葉：ナゲ 内葉：ナゲ	外葉：透7.5Y R 8/1 内葉：透7.5Y R 8/1	1mm以下の石英・長石 を含む	
122	瓦器			(2.9)	外葉：回転ナゲ、回転ナゲ 内葉：体部・回転ナゲ・ヘラミガキ	外葉：透7.5Y R 6/2 内葉：透7.5Y R 6/2	黒	
123	瓦器	14.4		(2.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：ヘラミガキ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 7/1	黒	
124	瓦器	13.6		(4.3)	外葉：回転ナゲ、摩滅 内葉：摩滅、指輪印 ナゲ：ヘラミガキ	外葉：透7.5Y R 7/2 内葉：透7.5Y R 6/2	黒	
125	瓦器	18.0		(3.7)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透N 6/ 内葉：透N 6/	黒	
126	瓦器			(3.0)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透N 6/ 内葉：透N 6/	黒	
127	青磁 青磁 青磁 青磁 青磁			(1.8)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透S Y 6/1 内葉：透S Y 6/2	黒	
128	青磁 青磁 青磁 青磁		7.3	4.0	6.0	外葉：透S Y 6/1 内葉：透S Y 6/2	透S Y 6/1 透S Y 6/2	接合痕、No.3 (内次)
129	青磁 青磁			(2.7)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透N 6/ 内葉：透N 6/	黒	
130	白磁	14.2		(2.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 7/1	白	
131	白磁	18.2		(4.8)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透S Y 7/1 内葉：透D S Y 6/1	白	
132	白磁	20.2		(4.8)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透S Y 7/1 内葉：透S Y 7/2	白	
133	白磁	14.7		(3.7)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 7/1	白	
134	白磁 白磁		4.8	0.9	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 7/1	白	
135	白磁		8.0	(1.0)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 6/1	白	
136	白磁 白磁			(1.4)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 7/1 内葉：透7.5Y R 6/1	白	
137	白磁		10.2	(3.2)	外葉：回転ナゲ 内葉：回転ナゲ	外葉：透7.5Y R 6/1 内葉：透7.5Y R 6/1	白	

規格名	種類	法面 (cm)		調査	色調	地土	備考
		凸面	凹面				
138 砂利層		10.6	(2.7)	外面：同軸ナダ 内面：同軸ナダ 外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/1 内面：灰Y5V8/1	地：灰Y5V8/1 内面：灰Y5V8/1	細良
139 土壤質土苔 群生		29.0	(4.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 外面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：浅灰Y5V8/4 内面：浅灰Y5V8/4	2mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
140 腐葉地 泥炭			(6.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：浅灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	1mm以下の酸性を含 む	
141 腐葉地 樹木		14.2	(6.4)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	1mm~3mmの鐵・根 筋を含む	
142 土師質土苔 群生		20.4	(2.8)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	
143 土師質土苔 群生			(3.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y4/4 内面：灰Y4/4	粗	
144 土師質土苔 群生		50.0	(4.6)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
145 土師質土苔 群生			(6.6)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	やや暗	
146 土師質土苔 群生		41.6	(4.4)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/3 内面：灰Y5V8/2	1mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
147 土師質土苔 群生		38.0	(9.8)	外面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石・角閃石・斜長石 を含む	
148 土師質土器 風化		18.2	(3.8)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石を含む	
149 土師質土器 風化		19.1	(3.7)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/3 内面：灰Y5V8/2	1mm以下の石英・長 石・雲母を含む	
150 土師質土器 風化		17.6	(6.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/3	1mm以下の石英・長 石を含む	
151 土師質土器 風化		24.0	(3.3)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	1mm以下の石英・長 石を含む	外見：黒斑
152 土師質土器 風化		22.6	(3.2)	外面：ヨコナダ 内面：ヨコナダ 内面：ヨコナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	1mm以下の石英・長 石・雲母を含む	
153 土師質土器 風化		31.4	(5.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	2.5mm以下の石英・長 石を多く含む	
154 土師質土器 風化			(13.0)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	2mm以下の石英・長 石・金剛石を少々含む	
155 土師質土器 風化			(5.6)	外面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石を含む	
156 土師質土器 風化		10.6	(6.0)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	やや暗	外見：自然釉付
157 瓦質土器 風化			(6.1)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/1 内面：灰Y5V8/1	やや暗	
158 土師質土器 風化		18.0	(4.8)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・角閃 石・全鉄分を含む	
159 土師質土器 風化		23.0	(1.9)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/3 内面：灰Y5V8/3	1mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
160 土師質土器 風化		30.4	(4.6)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/7 内面：灰Y5V8/7	1mm以下の石英・長 石・角閃石・雲母を含 む	
161 土師質土器 風化		33.0	(5.6)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ 内面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/4 内面：灰Y5V8/4	1mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
162 土師質土器 風化			(7.0)	外面：摩擦 内面：モクナダ	外面：灰Y4/4	1mm以下の石英・長 石・全鉄分を含む	
163 磚塊			(6.0)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/1	やや暗	外見：自然釉付
164 磚塊			(9.0)	外面：同軸ナダ 内面：同軸ナダ	外面：灰Y5V8/3 内面：灰Y5V8/3	粗	粒度：H3級1条
165 磚塊			(5.2)	外面：同軸ナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5/2 内面：灰NS/	1mm以下の酸性を含 む	
166 磚塊			(8.1)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5/2 内面：灰Y5/2	1mmの砂鉄、0.5mm以 上の鉄鉱を含む	
167 瓦質		10.8	(11.0)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	やや暗	沈姆之条
168 土師質土器 風化		10.2	(3.1)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：淡灰Y5V8/4 内面：灰Y5/2	2mm以下の石英・長 石・雲母を含む	
169 燒結		10.8	(2.5)	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	外面：同軸ナダ 内面：摩擦ナダ	2~3mmの 鉄 磷 0.5mm以下の酸性を含 む	底面：細粒赤鉄にナデ
170 土質質土器 風化		17.0	(5.0)	外面：摩擦 内面：摩擦	外面：灰Y5/2 内面：灰Y5/2	2~3mmの石英・長 石を含む	
171 燒結			(6.7)	外面：同軸ナダ 内面：同軸ナダ 内面：モクナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	2~3mmの石英・長 石・全鉄分を含む	造出し3回削
172 燒結			(5.1)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5/2 内面：灰Y5/2	1mm~2mmの石英・長 石・角閃石を含む	
173 土質質土器 風化		12.0	(2.5)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	重さ：473.0g	
174 土質質土器 風化		12.0	(2.0)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/2 内面：灰Y5V8/2	重さ：98.7g	
175 土質質土器 風化		6.6	(1.8)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	重さ：102.9g	
176 土質質土器 風化		5.8	(2.1)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰NS/ 内面：灰NS/	重さ：80.2g	
177 土質質土器 風化		3.9	(3.0)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/1 内面：灰Y5V8/1	重さ：51.7g	
178 土質質土器 風化		5.1	(1.6)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/6 内面：灰Y5V8/6	重さ：46.9g	
179 土質質土器 風化		3.4	(2.5)	外面：モクナダ 内面：モクナダ	外面：灰Y5V8/6 内面：灰Y5V8/6	重さ：36.7g	

番号	種類	流量 (cm)			開 窓	色 調	耐 土	備考
		口洋	水洋	深高				
180	気石	大きさ (5.6)	幅4 (0.8)	厚さ 19				板状者
181	上井	底3 9.9	幅6 7.0	厚3 12	外側：ナデ	外側：灰黒10YR5/2 内側：灰5 内面：ナデ	6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
182	上井	底3 8.7	幅6 6.5	厚5 6.0	外側：ナデ	外側：灰7.5YR6/6 内側：ナデ	6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
183	土雞	底3 8.1	幅5 5.8	厚5 5.5	外側：ナデ	外側：灰に赤7.5YR7/4 内側：ナデ	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
184	土雞	底3 8.75	幅6 5.35	厚5 4.6	外側：ナデ	外側：棕10YR7/6 内側：ナデ	3mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
185	上井	底3 8.6	幅6 6.25	厚5 5.0	外側：ナデ	外側：灰白10YR5/2 内側：ナデ	2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
186	上井	底3 8.7	幅6 5.8	厚5 5.0	外側：ナデ	外側：灰に赤7.5YR7/4 内側：ナデ	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
187	土雞	底3 8.4	幅6 5.8	厚5 5.0	外側：ナデ	外側：灰7.5YR6/2 内側：ナデ	6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
188	丸瓦	底3 (29.2)	幅6 14.8	厚5 14.8	内側：布目 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
189	丸瓦	底3 (17.0)	幅6 (11.7)	厚5 (10.4)	内側：布目 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
190	丸瓦	底3 (38.6)	幅6 (16.5)	厚5 (15.8)	内側：布目 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
191	丸瓦	底3 (18.8)	幅6 15.0	厚5 14.0	外側：ナデ 内側：ナデ	外側：灰NS 内側：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
192	丸瓦	底3 (16.0)	幅6 26	厚5 26	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
193	丸瓦	底3 (15.0)	幅6 26	厚5 26	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
194	丸瓦	底3 (10.4)	幅6 15.0	厚5 14.0	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
195	丸瓦	底3 (12.1)	幅6 (20.4)	厚5 19.0	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	「野花渓村無量寿院」の文字有り
196	平瓦	底3 (9.6)	幅6 16.8	厚5 4.9	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	波状文
197	平瓦	底3 (9.3)	幅6 16.8	厚5 4.9	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	波状文
198	平瓦	底3 (7.3)	幅6 (10.5)	厚5 4.9	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：灰NS	直立者	波状文
199	平瓦	底3 (9.7)	幅6 (11.5)	厚5 2.5	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
200	平瓦	底3 (8.8)	幅6 (11.0)	厚5 2.5	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
201	平瓦	底3 (8.0)	幅6 (11.0)	厚5 2.5	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
202	平瓦	底3 (3.3)	幅6 (8.7)	厚5 2.5	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
203	平瓦	底3 (8.5)	幅6 (9.4)	厚5 2.5	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
204	鬼瓦	底3 (14.3)	幅6 15.0	厚5 15.0	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
205	鬼瓦	底3 (14.0)	幅6 15.0	厚5 15.0	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
206	鬼瓦	底3 (11.0)	幅6 15.0	厚5 15.0	内側：ナデ 内面：ナデ	内側：灰NS 内面：ナデ	直立者	波状文
207	五輪塔(空・風 鈴)	空輪塔 15.4 風鈴輪塔 15.4	幅6 15.5	高さ 109				無縫隙灰岩
208	瓦特筋(水輪)	底3 15.0	幅6 15.3	厚5 15.3				無縫隙灰岩
209	土炒玉器 瓶	底3 8.8	幅6 6.2	厚5 (1.5)	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰に赤7.5YR7/4 内側：灰に赤7.5YR7/4	6mm以下の微砂を含む	直立者
210	土炒玉器 瓶	底3 8.2	幅6 6.9	厚5 (1.5)	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰7.5YR7/4 内側：灰7.5YR7/4	6mm以下の微砂を含む	直立者
211	三和骨質 土炒玉器 瓶	底3 10.4	幅6 7.0	厚5 2.9	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰にナデ 内側：灰にナデ	6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
212	土炒玉器 瓶	底3 30.0	幅6 6.0	厚5 2.9	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰にナデ 内側：灰にナデ	6mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
213	土炒玉器 瓶	底3 11.8	幅6 (2.1)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：逐黄10YR5/6 内側：逐黄10YR5/6	1~3mmの粒、灰、0.5 mmの微砂を含む	直立者
214	土炒玉器 瓶	底3 13.0	幅6 (2.3)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰10YR8/2 内側：灰白10YR8/2	0.5mm以下の微砂を多 量に含む	直立者
215	土炒玉器 瓶	底3 12.8	幅6 (1.5)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰SY6/4 内側：灰SY6/4	0.5mm以下の微砂を含む	直立者
216	土炒玉器 瓶	底3 35.8	幅6 (1.6)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰10YR8/2 内側：灰10YR8/2	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
217	土炒玉器 瓶	底3 7.6	幅6 (1.5)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰10YR8/1 内側：灰10YR8/2	0.5mm以下の微砂を含 む	直立者
218	瓦湯屋	底3 9.8	幅6 2.3	厚5 (1.5)	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰NS 内側：灰NS	1mmの石英・0.5mm的 微砂を含む	直立者
219	瓦湯屋	底3 19.4	幅6 (3.1)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰25YR6/1 内側：灰白25YR7/1	0.5mm以下の微砂を含 む	直立者
220	瓦湯屋	底3 4.8	幅6 (1.5)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰N4/ 内側：灰N4/	1mmの石英・0.5mm以 下の微砂を含む	直立者
221	瓦湯屋	底3 5.8	幅6 (1.6)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：灰NS/ 内側：灰NS/	0.5mm以下の微砂を含 む	直立者
222	土炒玉器 瓶	底3 29.0	幅6 (4.0)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：ヨリナデ 内側：ナデ	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
223	土炒玉器 瓶	底3 20.3	幅6 (6.4)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：摩滅	外側：ヨリナデ 内側：ナデ	1mmの石英・0.5mm以 下の微砂を含む	直立者
224	土炒玉器 瓶	底3 8.3	幅6 (2.2)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：ナデ	外側：灰NS/ 内側：ナデ	1mm以下の微砂を含 む	直立者
225	土炒玉器 瓶	底3 17.8	幅6 2.5	厚5 2.5	外側：ナデ	外側：灰10YR8/6 内側：灰10YR8/5	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
226	土炒玉器 瓶	底3 7.4	幅6 6.0	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：ナデ	外側：灰10YR8/6 内側：灰10YR8/5	1mm以下の石英・長 石・角閃石を含む	直立者
227	土炒玉器 瓶	底3 8.0	幅6 (1.1)	厚5 2.5	外側：摩滅 内側：ナデ	外側：灰NS/ 内側：ナデ	0.5mm以下の微砂を含 む	直立者

番号	特徴	法面 (cm)		形状	規格	色調	地土	備考
		上界	下限					
278	瓦器 瓶	9.4		(1.9)	外面部端部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部端部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	
279	瓦器 瓶	9.5	8.0	1.2	内面: ナデナ 外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	1mm以下の微砂を含む	底面: 須崎江底、ナデ
280	瓦器 瓶	9.9	7.6	1.5	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N5/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	底面: 須崎江底
281	瓦器 瓶	9.3		2.3	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	相模型
282	瓦器 瓶	9.1		2.3	外面部: ナデ 内面部: 脊部直後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	相模型
283	瓦器 瓶	9.4		1.9	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ、ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	底面: 須崎江底
284	瓦器 瓶	9.2	3.3	2.4	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	底面: 指鋼仕側
285	土師質土器 杯	10.4	6.3	2.7	外面部: 学成 内面部: 右舷ナデ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	底面: 指鋼仕側
286	土師質土器 杯	10.2		2.8	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ	外観: にいわ根7Y R7/4 内面: にいわ根7Y R7/4	1mm以下の石英、長石 を含む	底面: 板見、ヘラナダ
287	土師質土器 杯	11.0	6.6	3.2	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ	外観: 黒N3/ 内面: 黒N3/	0.5mm以下の微砂を含む	底面: 板見後に開削ヘラトヤ
288	土師質土器 杯	14.0		(2.9)	外面部: ナデ 内面部: ナデ	外観: 深根7Y R8/4 内面: にいわ根7Y R7/4	1mm以下の石英、長石 を含む	
289	土師質土器 杯	12.5	7.0	2.8	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ	外観: にいわ根7Y R7/4 内面: にいわ根7Y R7/4	1mm以下の石英、長石 を含む	底面: 板見、ヘラナダ
290	土師質土器 杯	14.9	8.2	2.8	外面部: 右舷ナデ 内面部: 平洋	外観: 深根10Y R8/3 内面: 10Y R7/2	1mm以下の石英、長石 を含む	底面: 板見
291	土師質土器 杯	5.2		(1.5)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデ	外観: 深根7Y R8/3 内面: 7Y R8/3	1mm以下の石英、長石 を含む	底面: 板見ヘラ切接にナダ
292	上耕土器 杯	10.5	3.7	3.1	外面部: 右舷ナデ 体部: 右舷ナデケツリ、ナデ 内面部: ナデ	外観: 黒10Y R8/2 内面: 深根10Y R8/3	1mm以下の石英、長石 を含む	
293	土師質土器 杯	14.4		(4.0)	外面部: 右舷ナデ 体部: ナデ 内面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ、ナデ	外観: 黒10Y R8/2 内面: 黑N3/	1mm以下の石英、長石 を含む	内面部: 黒
294	土師質土器 杯	14.1		(3.2)	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ	外観: 黑10Y R8/2 内面: 黑N3/	2mm以下の石英、長石 を含む	
295	土師質土器 杯	16.0		(3.1)	外面部: 右舷ナデ 内面部: 右舷ナデ	外観: 黑10Y R8/2 内面: 深根10Y R8/2	1mm以下の石英、長石 を含む	底面: 指削ヘラ切接に右舷ヘラナダ
296	土師質土器 杯	3.8		(1.5)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデヘラミガキ	外観: 黑10Y R8/1 内面: 黑N3/	0.5mm以下の微砂を含む	
297	土師質土器 杯	6.0		(1.2)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ハラナ	外観: にいわ根7Y R7/4 内面: にいわ根7Y R7/4	0.5mm以下の石英、長石 を含む	
298	土師質土器 杯	8.0		(1.9)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデ	外観: 黑白5Y S/2 内面: 黑10Y R8/2	1mm以下の石英、長石 を含む	
299	土師質土器 杯	7.5		(1.0)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデ	外観: 黑10Y R8/1 内面: 黑10Y R8/1	1mm以下の石英、長石 を含む	
300	土師質土器 杯	6.2		(1.2)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデヘラミガキ	外観: にいわ根7Y R7/2 内面: にいわ根7Y R7/2	0.5mm以下の微砂を含む	
301	土師質土器 杯	5.2		(1.3)	外面部: 右舷ナデ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑15Y R1/ 内面: 墓K3/	1~2mmの石英、長石 0.5mm以下の微砂を含む	底面: 回転ヘラケツリ 内面: 黒
302	瓦器 瓶	14.2		(3.8)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N4/ 内面: 黑N4/	0.5mm以下の微砂を含む	
303	瓦器 瓶	13.8	4.0	4.6	外面部: 右舷ナデ後にナダ 体部: 指鋼頭直後にナダ 内面部: ナデ後にナダ	外観: 黑N4/ 内面: 黑N4/	1mmの石英、0.5mm以 下的微砂を含む	
304	瓦器 瓶	14.0		(4.8)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 内面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N6/ 内面: 黑N6/	1mm以下の微砂を含 む	
305	瓦器 瓶	14.8		(4.8)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にナダ 内面部: ナデ後にナダ	外観: 黑N6/ 内面: 黑N7/	0.5mm以下の微砂を含 む	
306	瓦器 瓶	15.0		(3.8)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 内面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	寄	
307	瓦器 瓶	14.4	5.2	6.0	外面部: 右舷ナデ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N4/ 内面: 黑N4/	寄	内面: 細孔状縫 物混入
308	瓦器 瓶	15.0		(4.4)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N4/	0.5mm以下の微砂を含 む	
309	瓦器 瓶	15.1	5.1	5.1	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	0.5mm以下の微砂を含 む	
310	瓦器 瓶	14.8		4.7	外面部: 右舷ナデ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N6/ 内面: 黑N5/	0.5mm以下の微砂を含 む	相模型
311	瓦器 瓶	15.4		(3.7)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N4/	1mm以下の微砂を含 む	
312	瓦器 瓶	15.2		(3.4)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	2mmの石英、0.5mm以 下的微砂を含む	
313	瓦器 瓶	15.2		(3.4)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	0.5mm以下の微砂を含 む	外面に暗文
314	瓦器 瓶	15.4	6.0	5.1	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	0.5mm以下の微砂を含 む	相模型
315	瓦器 瓶	16.0		(3.6)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	0.5mm以下の微砂を含 む	
316	瓦器 瓶	15.6		(4.5)	外面部: 右舷ナデ後にヘラミガキ 体部: 指鋼頭直後にヘラミガキ 内面部: ナデ後にヘラミガキ 体部: ナデ後にヘラミガキ	外観: 黑N5/ 内面: 黑N5/	2mmの石英、0.5mm以 下的微砂を含む	

報告番号	品種	生長(cm)	葉面	開花	果実	花粉	施肥
317	瓦器 實	15.8	(4.3)	外表面：細粒ナメル質にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ 外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
318	瓦器 樹	16.0	(4.2)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N3/ 内面：灰N3/	0.5mm以下の微細を含む	
319	瓦器 樹	15.8	(4.8)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
320	瓦器 樹	16.0	(4.1)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
321	瓦器 樹	16.0	(4.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N5/	0.5mm以下の微細を含む	
322	瓦器 樹	16.2	(4.4)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	1mm以下の微細を含む	
323	瓦器 樹	16.6	(4.9)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
324	瓦器 樹	15.8	4.8	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N5/	0.5mm以下の微細を含む	和室型
325	瓦器 樹	16.4	6.4	外表面：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N3/ 内面：灰白2.5Y7/1	1mmの粗野、0.5mm以下の微細を含む	和室型
326	瓦器 樹	16.4	(3.4)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰D1Y7/ 内面：灰HNT2/	1mm以下の粗糲、微細を含む	
327	瓦器 樹	17.0	(3.5)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰H5Y7/1	0.5mm以下の微細を含む	
328	瓦器 樹	17.0	(4.9)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	1~2mmの石英、0.5mm以下の微細を含む	
329	瓦器 樹	16.0	(4.8)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ 外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
330	瓦器 樹		(4.8)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰H5Y7/1/ 内面：灰白5Y7/1	0.5mm以上の微細を含む	
331	瓦器 樹		(3.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N3/ 内面：灰N3/	0.5mm以下の微細を含む	
332	瓦器 樹		(4.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N5/	0.5mm以下の微細を含む	
333	瓦器 樹	21.6	(5.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：ナメル、ヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
334	瓦器 樹	6.2	(1.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N3/ 内面：灰N3/	0.5mm以下の微細を含む	
335	瓦器 樹	5.0	(2.1)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N7/ 内面：灰N4/	1mmの石英、0.5mm以下の微細を含む	
336	瓦器 樹	7.0	(1.2)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：ナメル、ヘラミガキ	外表面：灰U5Y8/1/ 内面：灰U5Y8/1	0.5mm以下の微細を含む	
337	瓦器 樹	4.8	(2.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N3/	0.5mm以下の微細を含む	
338	瓦器 樹	6.0	(1.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N3/ 内面：灰N3/	0.5mm以下の微細を含む	
339	瓦器 樹	4.8	(1.2)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N5/ 内面：灰N5/	蜜	
340	瓦器 樹	5.6	(1.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰H5Y7/1	0.5mm以下の微細を含む	蜜糰：河原ヘラクツリ後にナゲ
341	瓦器 樹	4.0	(2.0)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：ナメル、ヘラミガキ	外表面：灰N4/ 内面：灰N4/	1~2mmの石英、0.5mm以下の微細を含む	
342	瓦器 樹	4.6	(0.9)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：ナメル後にヘラミガキ	外表面：青灰U5P5/1/ 内面：指軸H5P5B/1	1mm以下の微細を含む	
343	白磁 樹		(1.2)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	蜜：灰白Y7/2/ 蜜糰：灰白N4/	蜜糰	
344	F1混生 青白 樹		(2.9)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	蜜：灰白Y7/2/ 蜜糰：灰白Y7/2	蜜糰	
345			(3.1)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ	蜜：モリーブ灰10V5-2/ 蜜糰：灰白Y7/1	粘糰	
346	白磁 樹	16.0	(4.3)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ	蜜：灰白10V8/1/ 蜜糰：灰白N4/	蜜糰	
347	白磁 樹	18.6	(4.9)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：指軸H5P5B/1	蜜：灰白10V8/1/ 蜜糰：灰白7.5Y3/1	蜜糰	
348	白磁 樹		5.5	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	蜜：灰白Y7/2/ 蜜糰：灰白Y7/2	粘糰	
349	土壁質 高砂	22.2	(4.6)	外表面口部：指軸ナメル後後にヘラミガキ 体部：指軸生後後にヘラミガキ 内面：ナメル後にヘラミガキ	外表面：灰N6/ 内面：灰N5/	1mm以下の微細を多量に含む	
350	土壁質 高砂	27.6	(3.1)	外表面口部：ヨコナメル、ナメル 体部：ヨコナメル、ナメル	外表面：灰S5Y6/2/ 内面：灰S5Y6/2	2mm以下の石英、蜜糰を含む	
351	土壁質 高砂			外表面口部：ヨコナメル、ナメル 体部：ヨコナメル、ナメル	外表面：灰S5Y6/1/ 内面：灰S5Y6/1	1mm以下の長石、角閃石、云母を含む	
352	上渕	9.1	6.6	外表面：ナメル	外表面：灰N4/ 内面：灰H5Y6/4	5mm以下の石英、長石を含む	重さ：336.7g
353	土壁	4.5	3.5	外表面：ナメル	外表面：灰N6/1/ 内面：灰N5/1	2mm以下の石英、長石を含む	重さ：42.2g
354	籽半瓦	長さ (2.6)	幅 (3.0)	外表面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル 内面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル	外表面：灰N6/1/ 内面：灰N5/1	1~2mmの石英、長石、雲母を含む	梵字
355	カマド	(21.8)	(9.9)	外表面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル 内面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル	外表面：灰N6/1/ 内面：灰N5/1	1~2mmの石英、長石、雲母を含む	梵字
356	カマド	(44.6)	(9.2)	外表面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル 内面：指軸は直線、瓦面は斜線を向くのナメル	外表面：灰N6/1/ 内面：灰N5/1	1mm以下の石英、長石、雲母を含む	内側面：糊付側

番号	記種	法規 (cm)			周 長	色 調	地 士	備考
		上径	底径	高さ				
357	土師質土器 皿	7.6	6.0	1.2	外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：にいし青7.5 Y R7/3 内面：にいし青7.5 Y R7/3	0.5mm以下の微粉を含む	裏面：同軸ヘラケズリ ナデ
358	土師質土器 皿	7.6	5.6	1.6	外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：にいし青7.5 Y R7/4 内面：にいし青7.5 Y R7/4	1mm以下の微粉を含む	裏面：同軸ヘラ切後に同軸ヘラケズリ
359	土師質土器 皿	8.0	5.8	1.4	外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：同軸7.5 Y R7/4 内面：同軸7.5 Y R7/4	1mm以下の石英・黄石を含む	裏面：同軸ヘラケズリ
360	土師質土器 皿	10.5	6.8	2.1	外面：底盛 内面：底盛	外面：底盛2.5 Y R8/2 内面：底盛2.5 Y R8/2	1~2mmの石英、0.5mm以下の微粉を含む	裏面：同底希切
361	土師質土器 皿	10.7			(2.1) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：にいし青7.5 Y R7/4 内面：にいし青7.5 Y R7/4	1mm以下の微粉を含む	
362	土師質土器 皿	10.2	6.2	1.3	外面：底盛 内面：底盛	外面：底盛2.5 Y R7/6 内面：底盛2.5 Y R7/6	1mm以下の微粉を含む	
363	土師質土器 皿	12.0			(2.2) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：同軸7.5 Y R7/3 内面：同軸7.5 Y R7/3	0.3mm以下の微粉を含む	
364	土師質土器 皿	11.8	7.6	2.5	外面：同軸底盛、同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：底盛2.5 Y R7/6 内面：底盛2.5 Y R7/6	1mm以下の石英・黄石を含む	
365	土師質土器 皿	13.0			(2.2) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：底盛2.5 Y R7/4 内面：底盛2.5 Y R7/4	0.5mm以下の微粉を含む	
366	土師質土器 皿	8.8			(1.1) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：西洋7.5 Y R8/4 内面：西洋7.5 Y R8/4	1mm以下の石英・黄石を含む	裏面：同底希切
367	土師質土器 皿	6.3			(1.1) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ、ハラナデ	外面：にいし青7.5 Y R7/4 内面：にいし青7.5 Y R7/4	0.5mm以下の石英・黄石を含む	裏面：底筋条切後に同軸ヘラナデ
368	瓦器 碗	12.8			(2.8) 外面：同軸底盛、同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：底筋2.5 Y R7/4 内面：底筋2.5 Y R7/4	2mmの石英、0.5mm以下の微粉を含む	
369	瓦器 碗				(2.6) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：底筋2.5 Y R7/6 内面：底筋2.5 Y R7/6	0.5mm以下の微粉を含む	
370	瓦器 碗				(1.3) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：オーラー10 Y R6/2 内面：オーラー10 Y R6/2	0.5mm以下の微粉を含む	
371	瓦器 碗	4.9			(1.9) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：オーラー10 Y R6/2 内面：オーラー10 Y R6/2	1~2mmの石英を含む	
372	瓦器 碗	6.6			(3.2) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：オーラー10 Y R6/1 内面：オーラー10 Y R6/1	0.5mm以下の微粉を多量に含む	
373	瓦器 碗				(2.4) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：底筋2.5 Y R7/4 内面：底筋2.5 Y R7/4	0.5mm以下の微粉を含む	
374	瓦器 碗	29.0			(8.7) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外面：オーラー10 Y R6/2 内面：オーラー10 Y R6/2	0.5mm以下の微粉を含む	
375	土師質土器 皿	27.0			(3.4) 外面：同軸口沿：ヨコナデ 内面：同軸口沿：ヨコナデ	外面：底筋2.5 Y R6/4 内面：底筋2.5 Y R6/4	1mm以下の微粉を含む	
376	土師質土器 皿				(3.1) 外面：同軸口沿後：ナデ 内面：ハラナデ	外面：にいし青7.5 Y R6/4 内面：にいし青7.5 Y R6/4	1~3mm石英・黄石、角閃石を含む	
377	軒丸瓦	瓦芯 (14.4)	軒 (9.8)	厚さ 2.6	同上 2.6	同上 2.6	外表面：瓦芯 N4/ 内表面：瓦芯 N5/	密
378	軒丸瓦				厚さ 2.6	同上 2.6	外表面：瓦芯 N4/ 内表面：瓦芯 N5/	密
379	丸瓦	瓦芯 (9.0)	軒 (5.3)	厚さ 2.0	同上 2.0	同上 2.0	外表面：瓦芯 N4/6 内表面：瓦芯 N5/6	やや密
380	丸瓦	瓦芯 (9.0)	軒 (5.5)	厚さ 2.0	同上 2.0	同上 2.0	外表面：瓦芯 N4/6 内表面：瓦芯 N5/6	密
381	丸瓦	瓦芯 (8.4)	軒 (6.6)	厚さ 2.1	同上 2.1	同上 2.1	外表面：瓦芯 N4/6 内表面：瓦芯 N5/6	やや粗
382	瓦子瓦	瓦芯 (5.6)	軒 (3.9)	厚さ 2.1	同上 2.1	同上 2.1	外表面：瓦芯 N4/6 内表面：瓦芯 N5/6	密
383	梵字瓦	瓦芯 (10.0)	軒 (7.2)	厚さ 2.6	同上 2.6	同上 2.6	外表面：梵字 N4/ 内表面：梵字 N5/	梵字
384	軒瓦	瓦芯 (13.7)	軒 (15.0)	瓦芯 1.6	同上 1.6	同上 1.6	外表面：瓦芯 N4/6 内表面：瓦芯 N5/6	波状文
385	逆瓦瓦	瓦芯 (11.0)	軒 22.2	厚さ 1.9	同上 1.9	同上 1.9	外表面：逆瓦 N4/6 内表面：逆瓦 N5/6	密
386	逆瓦瓦	瓦芯 (12.8)	軒 (13.5)	瓦芯 1.7	同上 1.7	同上 1.7	外表面：逆瓦 N4/6 内表面：逆瓦 N5/6	1mm以下の微粉を含む
387	温瓦瓦	瓦芯 (12.8)	軒 (13.5)	瓦芯 1.7	同上 1.7	同上 1.7	外表面：瓦芯 N6/ 内表面：オーラー9/2.5 G Y6/4	密
388	土拂	瓦芯 (5.7)	軒 5.3	瓦芯 4.0	同上 1.7	同上 1.7	外表面：にいし青7.5 Y R7/4	1mm以下の石英・黄石を含む
389	スラグ							
390	土師質土器 皿	9.0	6.6	(1.7)	外面：摩滅 内面：摩滅	外側：底筋11.0 Y R8/2 内側：底筋11.0 Y R8/2	1mm以下の石英・黄石を含む	
391	土師質土器 皿	8.8			(2.0) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋11.0 Y R8/2 内側：底筋11.0 Y R8/2	0.5mm以下の微粉を含む	
392	土師質土器 皿	9.2			(2.1) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋11.0 Y R8/2 内側：底筋11.0 Y R8/2	0.5mm以下の微粉を含む	
393	土師質土器 皿	9.6	7.0	1.5	外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：にいし青7.5 Y R7/4 内側：にいし青7.5 Y R7/4	0.5mm以下の微粉を多量に含む	
394	土師質土器 皿	11.4			(1.9) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：にいし青7.5 Y R7/4 内側：にいし青7.5 Y R7/4	0.5mm以下の微粉を含む	
395	土師質土器 皿	12.0			(1.7) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋11.0 Y R8/2 内側：底筋11.0 Y R8/2	1mm以下の石英・黄石を含む	
396	土師質土器 皿	15.0			(3.6) 外面：同軸底盛、同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋2.5 Y R8/2 内側：底筋2.5 Y R8/2	0.5mm以下の微粉を含む	裏面：自底切後にナデ
397	土師質土器 皿	18.6			(2.3) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋2.5 Y R8/1 内側：底筋2.5 Y R8/2	0.5mm以下の微粉を含む	
398	土師質土器 皿	5.6			(3.3) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：同軸 N4/ 内側：同軸 N8/	0.5mm以下の微粉を石を含む	
399	土師質土器 皿				(3.4) 外面：同軸底盛、同軸ナデ後にヘラミガキ 内面：同軸底盛、同軸ナデ後にヘラミガキ	外側：にいし青7.5 Y R7/3 内側：にいし青7.5 Y R7/3	0.5mm以下の微粉を石を含む	
400	土師質土器 皿		6.0		(1.9) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋11.0 Y R8/2 内側：底筋11.0 Y R8/2	0.5mm以下の微粉を含む	
401	土師質土器 皿	5.2	(1.7)		外面：摩滅 内面：摩滅	外側：にいし青7.5 Y R7/2 内側：底筋5.2	0.5mm以下の微粉を含む	内面：黒色
402	白堀 泥	16.4			(2.3) 外面：同軸ナデ 内面：同軸ナデ	外側：底筋5.7 Y R7/3 内側：底筋5.7 Y R7/3	密	

規格番号	器 特 性	法量(g)			調 整	色 質	粒 上	備 考
		1L種	2L洋	5L高				
403	青銅 鏡	22.4	(3.5)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: オリーブ灰10Y5/2 内: 銀灰N7/1	指揮	内由: 錫運牛文
404	青銅 鏡		(2.2)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: オリーブ灰10Y5/2 内: 銀灰N7/1	指進	
405	青銅 鏡		(2.1)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: オリーブ灰10Y5/2 内: 銀灰N7/1	指進	
406	青銅 鏡		(3.5)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: キーパー灰10Y6/2 内: 銀灰N7/1	指進	外由: 青文
407	青銅 鏡	5.4	(2.5)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: 明緑灰10G-Y7/1 内: 銀灰N7/1	指進	
408	銀 鏡	4.0	(1.2)		外面: ナデ 内面: ナデ	外: 銀灰R8/1 内: 銀灰R8/1	審	見込みに砂目、凸凹に抉り
409	銀 盤	24.4	(4.3)		外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀灰R9/1 内: 銀灰R9/1	2mmの石英、1mm以下の砂	
410	土師質土器 足	16.6	(3.8)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: 銀灰板10Y5/2 内: 銀灰板10Y5/2	1mm以下下の石英、長 石、角閃石、気泡を含む	
411	土師質土器 底		(3.5)		外面: 銅板ナデ 内面: 銅板ナデ	外: 黄茶灰10Y4/2 内: 朱灰質10Y7/3	3mm以下の石英、長 石、雲母を含む	
412	土師質土器 縁		(4.2)		外面: 銅板ナデ 内面: ロカナデ	外: 12.5%、薄型10Y6/3 内: 淡黄10Y8/3	1mm以下の石英、長 石の微粉を含む	
413	銀 鏡	12.1	(8.4)		外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀灰2.5Y8/2 内: 銀灰2.5Y8/2	1mmの石英、0.5mm以 上の微粉を含む	
414	銀 鏡	12.4	(5.9)		外面: 銀板ナデ、銅板底 内面: 銀板ナデ	外: 銀灰2.5Y8/2 内: 朱灰質10Y8/3	1mmの石英、5mmの 小石を含む	内外由: 銀底: 備考付
415	銀 鏡 (6.0) 6.7				外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀灰2.5Y8/2 内: 銀灰2.5Y8/2	鉛板裏	
416	口 銘 鏡 6.5 6.2 9.0 9.2				外面: ナデ	外: 銀2.5Y8/6 内: 銀石を含む	1mm~5mm以下の石 英、銀石を含む 重さ: 27.2g	
417	銅口 鏡				外面: 銀板10YR6/1	3mm以下の石英、長 石を含む	スラグ付着	
418	羽口 鏡				外面: に赤い模2.5YR6/9	6mm以下の石英、長 石、雲母を含む		
419	羽口 鏡				外面: に赤い模10YR6/4	8mm以下の石英、長 石を含む		
420	羽口 鏡				外面: に赤い模10YR6/2	5mm以下の石英、長 石を含む		
421	羽口 鏡				外面: に赤い模7.5YR7/4	5mm以下の石英、長 石を含む		
422	羽口 鏡				外面: に赤い模2.5YR5/4	1~5mm以下の石英、 長石、雲母を含む		
423	木製品	全長 10.6	幅 1.4	厚 1.0				
424	土師質土器 蓋	12.8	(2.6)		外面: 銅板 内面: 銅板	外: に赤い模7.5YR7/4 内: に赤い模7.5YR7/4	1mm以下の石英、長 石、雲母を含む	
425	土師質土器 杯				外面: 銀板ナデ 内面: ナデ	外: 銀灰2.5Y7/1 内: 銀灰2.5Y7/1	0.5mm以下の微粉を含 む	
426	土師質土器 杯	8.2	(3.9)		外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: に赤い模7.5YR7/2 内: に赤い模7.5YR7/2	1mm以下の石英を含 む	外邊に墨書「京」あるいは「達」?
427	土師質土器 杯				外面: 銀板 内面: 銀板ナデ	外: に赤い模7.5YR7/4 内: に赤い模7.5YR7/6	0.5mm以下の石英、長 石、雲母を含む	鉛板切
428	土師質土器 杯	6.2	(1.1)		外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀板(10)E5/-1 内: 銀板(10)E5/-1	1mmの石英、0.5mm以 上の微粉を含む	脈洞: ハラ切後にヘラナデ
429	土陶	長5 5.4	直径 1.1		外面: ナデ	外: 銀明赤5YR5/6 内: ナデ	1mm以下の石英、長石 を含む 重さ: 5.3g	
430	土師質土器 杯		5.6	(1.3)	外面: 銀板 内面: 銀板	外: 深灰色10YR8/3 内: 銀板	1mm以下の石英、長 石、微粉を含む	内由: 黑色
431	土師質土器 杯	5.8	(2.1)		外面体部: 銀板 内面: ナデ、ヘリミギゼ 内面: ナデ	外: オリーブ灰5Y5/1 内: 銀板2.5YR7/3	1mm以下の石英、微粉 を含む	底由: 向拵へラ切
432	土師質土器 杯	8.2	(3.0)		外面体部: 銀板底 内面: ナデ	外: に赤い模10YR7/2 内: に赤い模10YR7/2	0.5mm以下の微粉を含 む	
433	土師質土器 杯	36.4	(8.7)		外面: 銀板底 内面: ナデ 修飾: ナデ	外: 銀板7.5YR5/2 内: に赤い模7.5YR5/3	1mm以下の石英、長 石は含む	
434	瓦 質 器	26.0	(3.0)		外面: ナデ 内面: ナデ	外: 底N4/ 内: 底N4/	0.5mm以下の微粉を含 む	
435	土師質土器 足	11.4	6.1	2.1	外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 深灰色10YR8/4 内: 深灰色10YR8/4	1mm以下の微粉を含 む	底由: 向拵へラ切
436	土師質土器 足	22.4	(4.2)		外: ナデ 内面: 銀板底 修飾: ナデ	外: に赤い模10YR6/4 内: に赤い模10YR6/4	1mm以上の石英、長石 を含む	
437	土師質土器 足		(5.6)		外面: ナデ 内面: ナデ	外: に赤い模7.5YR5/2 内: に赤い模7.5YR5/2	1mm以下の石英、長 石、角閃石、雲母を含 む	
438	土師質土器 足				外面: ナデ 内面: ナデ	外: に赤い模7.5YR7/4 内: に赤い模7.5YR7/4	2mm以下の石英、長石 を含む	
439	洗淨器 高杯	36.8	(3.2)		外: ナデ 内面: ナデ	外: に赤い模7.5YR7/4 内: に赤い模7.5YR7/4	1mm以下の石英、長 石、角閃石を含む	円孔: 1箇既存
440	瓦 器				外表面修飾: 向拵ナデ後にヘラミギキ 内面: 修飾: 銀板底後にヘラミギキ 内面: 銀板ナデ	外: RNS/ 内面: RNS/	1mm以下の微粉を含 む	
441	土師質土器 杯	12.6	7.2	2.1	外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀板10YR8/1 内: 銀板10YR8/1	0.5mm以下の微粉を含 む	地脚: 黄泥: 順付著 修理: 墓
442	土師質土器 杯	15.2		(6.0)	外表面修飾: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	外: に赤い模10YR6/3 内: に赤い模10YR6/3	1mm以下の微粉を含 む	
443	土師質土器 杯	9.6	5.2	2.1	外面: ナデ 内面: ナデ	外: 銀板10YR8/4 内: (10)YR8/1	0.5mm以下の微粉を含 む	
444	陶 質 器		(4.2)		外面: ハナナデ 内面: ハナナデ	外: 銀板10YR8/1 内面: N4/N4	2mm以下の石英、長石 を含む	底由: ヘラナデ
445	傳前 鋤耕	26.4	(7.5)		外面: 銀板ナデ 内面: 銀板ナデ	外: 銀板7.5YR5/2 内面: 銀板7.5YR5/2	2mm以下の石英、長石 を含む	
446	土師質土器 杯	17.0	2.6		外: ナデ 内面: ナデ	外: R(125Y8/1 内面: N4/N4	0.5mm以下の微粉を含 む	内由: 黑色
447	伝窯質土器 杯	13.9	(2.0)		外表面修飾: 向拵ナデ後にヘラミギキ 内面: 修飾: ナデ後にヘラミギキ 内面: 修飾: ヨコナデ後にヘラミギキ	外: 銀白5Y7/1 内面: R(135Y7/1	0.5mm以下の微粉を含 む	

報告書番号	管 種	長 度 (cm)	断面径 径	深 度	測 定	地 調	治 土	備 注	
448	直井上層 材	17.8	(2.0)	外圧口縫部: ハラミガキ 体部: ハラミガキ	外圧: 順底X3 内圧: 保10Y8/6	0.5mm以下の微粉を含む			
449	直井土管 材	5.6	(1.1)	外圧口縫部: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 順底X3Y8/1 内圧: 保10Y8/1	0.5mm以下の微粉を多く含む	裏面: ナデ		
450	丸 溝 材	(2.0)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保10Y8/1 内圧: 保10Y8/1	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ホース後にナデ			
451	土 壤質土管 材	(5.3)	外圧: ナデ、指揮注水	外圧: 磁3Y8/6 内圧: 機7.5YR8/6	Lumax下の石英・長石・雲母を含む				
452	鉄釘	長さ (1.7)	幅 1.3	厚さ 1.2	外圧: 油圧2.5YR8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	1mm以下の微粉を含む	裏面: 鉄板ハラ切		
453	鉄釘	長さ (2.0)	幅 1.1	厚さ 0.7	外圧: 油圧2.5YR8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	1mm以下の微粉を含む	裏面: 鉄板ハラケズリ		
454	土 壤質土管 材	3.4	5.0	0.8	外圧: 油圧2.5YR8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 鉄板ハラ切後に回転、同軸ヘラツア		
455	土 壤質土管 材	5.8	5.0	0.8	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/4 内圧: に保10Y8/4	1mm以下の微粉を含む	裏面: 同軸ヘラケズリ	
456	土 壤質土管 材	6.4	3.4	1.0	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保軸2.5YR8/6 内圧: 保軸2.5YR8/6	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 同軸系切	
457	土 壤質土管 材	6.4	5.8	1.2	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保軸2.5YR8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ハラケズリ	
458	土 壤質土管 材	6.2	4.6	1.0	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ、指ナテ	外圧: に保10Y8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 鉄板ハラ切後に回転、同軸ヘラツア	
459	土 壤質土管 材	6.0	5.0	1.0	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/4 内圧: に保10Y8/4	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: 回転ヘラ切後に同軸ヘラケズリ	
460	土 壤質土管 材	6.7	4.2	1.2	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保軸2.5YR8/6 内圧: 保軸2.5YR8/6	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ヘラケズリ	
461	土 壤質土管 材	8.0	4.0	1.6	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/4 内圧: に保10Y8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ヘラ切	
462	土 壤質土管 材	6.8	(1.8)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保10Y8/2 内圧: 保10Y8/2	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
463	土 壤質土管 材	8.7	7.4	1.0	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/4 内圧: 保10Y8/4	1mm以下の石英・微粉を含む	裏面: 回転ヘラ切後にナデ	
464	七 鎖 質 1段 材	10.4	8.4	1.6	外圧: 四方ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 磁2.5YR8/4 内圧: 保10Y8/4	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石	
465	土 壤質土管 材	10.0	(2.3)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 内10Y8/2 内圧: 保10Y8/2	0.3mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ヘラ切	
466	土 壤質土管 材	10.0	(2.2)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 磁3YR8/6 内圧: 保3YR8/6	0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	裏面: 回転ヘラ切	
467	瓦器 材	7.8	(2.0)	外圧11段部: 同軸ナテ 保軸: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/6 内圧: 保5Y/5	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
468	土 壤質土管 材	11.8	(2.9)	外圧: ナデ 内圧: 山形ナテ	外圧: に保10Y8/2 内圧: に保10Y8/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ヘラ切後にナデ		
469	土 壤質土管 材	13.2	(4.0)	外圧口縫部: 同軸ナテ 体部: 指揮注正 内圧: ハラミガキ	外圧: に保10Y8/7.4 内圧: 保10Y8/6	1mmの長石、0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
470	土 壤質土管 材	5.0	(0.8)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.4 内圧: 保10Y8/6	1mm以下の微粉を含む	裏面: 回転ヘラ切後に同軸ヘラナデ		
471	土 壤質土管 材	5.8	(1.8)	外圧: ナデ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.4 内圧: 保10Y8/4	1mmの長石、0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 同軸ヘラ切後に回転折ナデ		
472	土 壤質土管 材	7.0	(1.2)	外圧: ナデ 内圧: ハラミガキ	外圧: に保10Y8/7.4 内圧: に保10Y8/7.4	1mm以上の石英・長石を含む	裏面: 同軸系切		
473	土 壤質土管 材	6.0	(1.8)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保軸2.5YR8/4 内圧: 保軸2.5YR8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: ナデ		
474	土 壤質土管 材	8.4	(1.0)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/6.5 内圧: 保10Y8/6.5	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
475	傾 直 管	5.2	(1.1)	外圧: 同軸ナテ 内圧: ナデ	外圧: に保10Y8/7.2 内圧: 保NS/6	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
476	土 壤質土管 材	5.6	(1.0)	外圧: 同軸ナテ 内圧: ハラミガキ	外圧: に保10Y8/7.2 内圧: 保10Y8/2	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
477	土 壤質土管 材	49.0	(2.3)	外圧: ナデ 内圧: 同軸ナテ 保軸: ハク	外圧: に保10Y8/6 内圧: に保10Y8/3	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: ナデ		
478	土 壤質土管 材	36.8	(3.2)	外圧: ナデ 内圧: ナデ	外圧: 保軸2.5YR8/6 内圧: 保2.5YR8/6	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	裏面: 1mmの長石		
479	頸 直 管	(2.5)	外圧: ナコナデ 内圧: ナコナデ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 静止無			
480	傾 直 管	3.6	0.9	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
481	塗 化 木				外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
482	門型 管	幅 6.3	厚 2.2	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保10Y8/2 内圧: に保10Y8/2	1mm以下の微粉を含む	重さ: 94.5g		
483	1 制限1層 材	8.0	3.5	1.5	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.5TR8/4 内圧: 磁YR8/6	1mm以下の微粉を多く含む	裏面: 静止無	
484	土 壤質土管 材	8.2	6.0	1.5	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ、ナデ	外圧: 保軸10Y8/8.3 内圧: 保10Y8/2	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: 同軸ヘラ切後に規目 口端磨き: 付付骨	
485	土 壤質土管 材	7.2	5.4	1.7	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保軸10Y8/8.3 内圧: に保10Y8/7.4	1mm以下の微粉を含む	裏面: 未調整	
486	弧 型 管	(4.7)	外圧: ナコナデ 内圧: 滑脂	外圧: に保10Y8/7.5TR8/4 内圧: に保10Y8/7.5TR8/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	裏面: 1mmの長石			
487	土 壤質土管 材	(1.4)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.5TR8/4 内圧: に保10Y8/7.5TR8/4	0.5mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石			
488	傾 直 管	(5.3)	外圧: ナコナデ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: 1mmの長石			
489	塗 化 木	16.8	(2.6)	外圧: ナコナデ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: 1mmの長石		
490	土 壤質土管 材	8.6	(1.6)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.5TR8/4 内圧: に保10Y8/7.5TR8/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	裏面: ロクロ成形度		
491	1 制限1層 材	14.4	(1.2)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/7.5TR8/3 内圧: に保10Y8/8	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
492	土 壤質土管 材	16.8	(1.6)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
493	土 壤質土管 材	6.0	(1.5)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: に保10Y8/6.5 内圧: に保10Y8/6.5	1mm以下の石英・長石を含む	裏面: 同軸ヘラ切後にナデ		
494	傾 直 管	9.7	(1.8)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 白NS/2 内圧: 保NS/2	1mm以下の微粉を含む	裏面: 1mmの長石		
495	傾 直 管	(6.5)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/2 内圧: 保NS/2	1mm～1cmの石英・微粉を含む	裏面: 1mmの長石			
496	瓦器 材	15.6	(3.3)	外圧: 同軸ナテ 内圧: 同軸ナテ 保軸: 鋼鉄油圧 内圧: 同軸ナテ	外圧: 保NS/3 内圧: 保NS/3	1mm以下の微粉を多く含む	裏面: 1mmの長石		

番号	器種	法規 (cm)		調査	色調	地土	備考
		外径	内径				
497	木製壺	11.6 (20.8)	9.5 (5.0)	外面：磨成 内面：磨成	外底：灰白10YR8/2 内面：灰白7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
498	洗豆	長5 (1.0)	0.4×0.4				
499	1.鉢付土器 盆	7.8	5.6	1.3 (1.8)	外面：磨成 内面：磨成	外底：灰白10YR8/2 内面：灰白7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む
500	土師質土器 盆	10.0		(2.4)	外面：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR8/2 内面：灰白7.5YR8/2	1mm以下の石英・長石 を含む
501	土師質土器 盆	10.4		(2.4)	外面：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR8/2 内面：灰白7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む
502	土師質土器 盆	11.6		(2.4)	外面：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR8/2 内面：灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石 を含む
503	土師質土器 盆	13.4		(2.6)	外面：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR6/6 内面：灰白7.5YR6/6	1mm以下の石英・長石 を含む
504	1.鉢付土器 盆	3.6		(1.9)	外面：磨成 内面：磨成	外底：灰白10YR6/1 内面：灰白4/4	1mm以下の石英・長石 を含む
505	瓦器 盤	5.4		(1.2)	外面：ナメ、凹輪ナメ 内面：ハラミガニ	外底：灰白 内面：灰白6/6	1mm以下の石英・長石 を含む
506	須恵器 盤	20.9		(2.4)	外面：タキキ 内面：ヨコナメ	外底：灰白 内面：灰白5/5	2mm以下の石英・微砂 を含む
507	土師質土器 皿			(2.6)	外面：磨成 内面：磨成	外底：灰白7.5YR7/3 内面：灰白7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
508	土師質土器 皿			(2.2)	外面：磨成ナメ 内面：凹輪ナメ	外底：灰白5/5 内面：灰白5/5	1mm以下の石英・長石 を含む
509	土師質土器 皿	9.0		(1.7)	外底：ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白25YR6/6 内面：灰白SYR6/6	1mm以下の石英・長石 を含む
510	土師質土器 皿	8.4		(1.1)	外底：磨成ナメ 内面：凹輪ナメ	外底：灰白7.5YR7/4 内面：灰白7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
511	土師質土器 皿	5.6		(1.2)	外底：自転ナメ 内面：ナメ	外底：灰白10YR8/3 内面：灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石 を含む
512	1.鉢付土器 盆	15.3		(2.4)	外底：ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR4/2 内面：灰白7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
513	土師質土器 盆			(2.0)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白2.5YR8/2 内面：灰白2.5YR8/2	1mm以下の石英・長石 を含む
514	土師質土器 盆	6.2		(1.7)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/2 内面：磨成SYR7/6	1mm以下の石英・長石 を含む
515	1.端付土器 盆			(3.1)	外底：磨成 内面：磨成	外底：灰白10YR5/2 内面：灰白10YR5/2	3mm以下の石英・長石 を含む
516	1.端付土器 盆			(2.0)	外底：磨成 内面：磨成ナメに後後に埋入ヘラケズリ 内面：磨成ナメに後後にナメ	外底：灰白10YR5/2 内面：灰白10YR5/2	3mm以下の石英・長石 を含む
517	土師質土器 盆	8.0		(1.9)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白7.5YR7/4 内面：灰白7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
518	1.端付土器 皿	8.5	4.0	1.8	外底：磨成ナメ 内面：凹輪ナメ	外底：灰白7.5YR7/6 内面：灰白7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石 を含む
519	1.端付土器 皿			4.2	外底：磨成 内面：磨成	外底：灰白10YR8/3 内面：灰白10YR8/3	1mm以下の石英を含む
520	土師質土器 皿	9.4	8.6	0.8	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR2/4 内面：灰白25YR6/6	1mm以下の石英・長石 を含む
521	土師質土器 皿	14.0		(4.2)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメに後後にナメ	外底：灰白2.5YR8/2 内面：灰白2.5YR4/1	1mm以下の石英・長石 を含む
522	1.端付土器 皿	14.0		(2.1)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/3 内面：灰白10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む
523	須恵器 蓋			(6.2)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白7.5YR7/3 内面：灰白7.5YR7/3	2mm以下の石英・微砂 を含む
524	須恵器 蓋			(3.0)	外底：ナメ 内面：ナメ	外底：灰白10YR7/2 内面：灰白10YR7/2	1mm以下の石英・雲母 を含む
525	1.端付土器 皿			(4.7)	外底：磨成 内面：磨成	外底：灰白7.5YR7/2 内面：灰白7.5YR7/2	1mm以下の石英・長石 を含む
526	土師質土器 皿	15.4		(2.6)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR5/2 内面：灰白10YR5/2	2mm以下の石英・長石 を含む
527	土師質土器 皿	15.0		(3.6)	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR6/2 内面：灰白10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
528	1.端付土器 皿	6.2		(1.2)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/3 内面：灰白10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む
529	1.端付土器 皿	6.6		(1.1)	外底：磨成ナメ 内面：ナメ	外底：灰白10YR8/4 内面：オリエント灰SYR3/2	1mm以下の石英・長石 を含む
530	瓦器 皿	9.2		(1.9)	外底：磨成 内面：ヘルミギ	外底：灰白 内面：灰白	1mm以下の微砂を含む
531	瓦器 皿			(2.6)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白 内面：灰白	1mm以下の微砂を含む
532	瓦器 皿	6.0			外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白 内面：灰白	1mm以下の微砂を含む
533	1.端付土器 皿			(3.6)	外底：ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/3 内面：灰白10YR7/3	1~2mm以下の石英・長石 を含む
534	1.端付土器 皿	12.4		(1.9)	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR7/3 内面：灰白2.5YR6/2	1mm以下の石英・長石 を含む
535	1.端付土器 皿			(2.3)	外底：磨成ナメ 内面：凹輪ナメ	外底：灰白10YR7/4 内面：灰白10YR7/4	1mm以下の微砂を含む
536	須恵器 蓋	7.4	3.9	1.8	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/4 内面：灰白10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
537	土師質土器 皿			(5.4)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/4 内面：灰白25YR6/6	1mm以下の微砂を含む
538	内壁 (丸)	高さ (丸)	幅5 (2.5)		外底：磨成 内面：灰白	外底：灰白 内面：灰白	重さ：84.5g
539	瓦器	高さ (7.9)	幅5 (0.4~0.7)		外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/4 内面：灰白7.5YR7/3	1mm以下の微砂を含む
540	土師質土器 皿	3.2	4.5	0.9	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：淡黄緑7.5YR7/6 内面：灰白10YR7/4	1mm以下の微砂を含む
541	1.端付土器 皿	6.4	5.6	0.8	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：淡黄緑7.5YR8/4 内面：灰白10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
542	土師質土器 皿	7.4		(0.9)	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR7/3 内面：灰白5.5YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む
543	土師質土器 皿	6.8	5.8	0.8	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：灰白10YR7/2 内面：灰白10YR7/3	0.5mm以下の石英・長 石を含む
544	1.端付土器 皿	7.6	5.4	1.0	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR7/2 内面：灰白10YR7/2	1mm以下の石英・長石 を含む
545	土師質土器 皿	8.8	7.2	1.4	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR7/2 内面：灰白10YR7/2	1mm以下の石英・長石 を含む
546	土師質土器 皿	9.9	6.4	(1.3)	外底：磨成ナメ 内面：磨成	外底：灰白10YR7/2 内面：灰白10YR7/2	1mm以下の石英・長石 を含む
547	1.端付土器 皿	6.0		(1.9)	外底：磨成ナメ 内面：磨成ナメ	外底：淡黄緑7.5YR8/4 内面：淡黄緑7.5YR8/4	1mm以下の石英・長石 を含む

規格番号	品種	数量 (kg)		剪定	色調	粒度	備考
		内径	外径				
509	土師質土器 杯	11.2	3.2	2.5	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：ヘラナヂ
600	土師質土器 杯	10.5	7.0	3.6	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mmの石英、0.5mm以下の 砂鉄を含む	底面：回転ヘラ切後に板目、ナヂ
601	土師質土器 杯	11.0	6.4	2.6	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	2mmの石英、0.5mm以下の 砂鉄を含む	底面：回転ヘラ切後に板目、ナヂ
602	土師質土器 杯	10.8	6.2	2.6	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：板目ナヂ
603	土師質土器 杯	11.8	7.8	(2.4)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1~2mmの石英、長石 を含む	底面：ナヂ
604	土師質土器 杯	11.3	6.4	2.4	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切後に板目、ナヂ
605	土師質土器 杯	10.8	6.9	2.7	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長 石を含む	底面：板目ナヂあり
606	土師質土器 杯	12.0		(2.5)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：板目、ナヂ
607	土師質土器 杯	11.8	8.2	2.5	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切
608	土師質土器 杯	12.7		(3.5)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	内外面口縁部：黒渦あり
609	土師質土器 杯	13.0	8.0	2.8	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナヂ
610	土師質土器 杯	12.2	6.6	2.8	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：ナヂ
611	土師質土器 杯	12.4	6.8	2.7	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長 石、角閃石を含む	底面：ナヂ
612	土師質土器 杯	14.2		(2.4)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	石英	底面：回転ヘラ切後にヘラナヂ
613	土師質土器 杯	13.6		(2.5)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の多型砂 を含む	
614	土師質土器 杯	15.0		(2.5)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の無砂を含 む	
615	土師質土器 杯	14.4		(1.8)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長 石を含む	
616	土師質土器 杯	17.0		(1.8)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、砂鉄 を含む	
617	土師質土器 杯	16.0	9.4	(1.9)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	内面：黒渦あり
618	土師質土器 杯	6.0	(1.2)		外面：白25Y8V1 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の砂鉄を含 む	底面：静止キリ
619	土師質土器 杯	5.1	(6.9)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の砂鉄を含 む	底面：静止キリ
620	土師質土器 杯	6.4	(0.9)		外面：ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	施圧：静止キリ
621	土師質土器 杯	5.2	(1.0)		外面：ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、砂鉄 を含む	底面：回転キリ
622	土師質土器 杯	8.8	(1.1)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	底面：板目後に回転ヘラナヂ
623	土師質土器 杯	8.0	(1.3)		外面：回転ナチュラルヘラカケアリ 内面：回転ナチュラルヘラヘラナヂ	0.5mm以下の石英、長石 を含む	底面：静止キリ
624	土師質土器 杯	7.0	(1.7)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切
625	土師質土器 杯	5.4	(1.9)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	
626	土師質土器 杯	8.3	(1.7)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナヂ
627	土師質土器 杯	6.2	(1.9)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切後に板目
628	土師質土器 杯	6.2	(3.2)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラアリ
629	土師質土器 杯	7.0	(2.6)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：ナヂ
630	土師質土器 杯	8.4	(2.0)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の石英、長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にヘラナヂ
631	土師質土器 杯	8.4	(1.6)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	石英	底面中央：板目 周辺：回転ヘラナヂ
632	土師質土器 杯	11.6		(4.2)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	1mm以下の無砂を含 む	
633	土師質土器 杯	15.1		(3.0)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：回転ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の石英、長石 を含む	
634	土師質土器 杯			(2.0)	外面：ナヂ 内面：ナヂ	0.5mm以下の石英、長石 を含む	
635	須恵器 杯	15.0		(2.1)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：須恵器ナチュラルナチュラル	0.5mm以下の無砂を含 む	底面中央：板目 周辺：回転ヘラナヂ
636	須恵器 杯	12.8		(2.9)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：須恵器ナチュラルナチュラル	1mm以下の無砂を含 む	
637	黒土質土器 杯	6.0	(1.8)		外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：須恵器	1mm以下の石英、長石 を含む	
638	瓦器 瓶	14.4		(2.5)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：ヘラミガキ	1mm以下の砂鉄を含 む	
639	瓦器 瓶	16.0		(3.2)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：ヘラミガキ	1mm以下の無砂を含 む	
640	瓦器 瓶	15.9		(2.2)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：ヘラミガキ	1mm以下の砂鉄を含 む	
641	瓦器 瓶	17.8		(3.2)	外面：回転ナチュラルナチュラル 内面：ヘラミガキ	1mm以下の無砂を含 む	
642	瓦器 瓶	5.0	(6.9)		外面：ヨコナヂ 内面：ナヂにヘラミガキ	0.5mm以下の砂鉄を含 む	
643	瓦器 瓶	3.2	(2.0)		外面：須恵器 内面：須恵器	0.5mm以下の砂鉄を含 む	
644	瓦器 瓶	5.6	(0.9)		外面：須恵器 内面：ナヂ	0.5mm以下の砂鉄を含 む	
645	瓦器 瓶	6.0	(2.5)		外面：須恵器 内面：ヘラミガキ	1mm以下の砂鉄を含 む	
646	瓦器 瓶	5.1	(0.9)		外面：須恵器 内面：ヘラミガキ、縞文	0.5mm以下の砂鉄を含 む	

番号	器種	寸法(cm)		調査	色質	胎土	備考
		口径	底径				
617	丸呑瓶	6.8	(1.9)	外腹: 回転ナデ 内腹: ナデ	外肚: 黒白SY8/1 内腹: 黒白SY8/1	0.5mm以下の微粉を含む	
648	瓦錠瓶	3.0	(2.0)	外腹: 坐卓 内腹: 学成	外腹: 鉄N/S 内腹: 鉄N/S	1mm以下の石英・長石を含む	
649	青磁	11.8	(4.5)	外腹: 織部	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 鉄N/S	青: 1mm以下の石英・長石を含む 赤地: 鉄N/S	青
650	青磁	16.8	(6.3)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 鉄N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	外面: 漆花文
651	青磁 碗	13.4	(3.5)	外腹: 司馬ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	外面: 漆花文
652	青磁		(3.4)	外腹: 司馬ナデ 内腹: 明快ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
653	青磁		(2.0)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 鉄N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
654	青磁 碗		(3.0)	外腹: 司馬ナデ 内腹: 回転ナデ	青: 褐紅5G6/1 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
655	青磁 碗	12.2	(1.6)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
656	青磁 碗	14.8	(4.0)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 鉄N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
657	青磁 碗		(3.2)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: 明快A1G7Y7/1 赤地: 鉄N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
658	青磁 碗		(3.3)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: 褐紅5G6/1 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
659	青磁 碗	6.6	3.3	外腹: 回転ヘラケゼリ、施釉(高台内側露 出)、内腹: 施釉	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 鉄N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	足込み文様あり 中腹露胎系 内腹: 鉄質入
660	青磁 碗	13.0	(1.9)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
661	青磁 碗	17.6	(2.5)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: 褐紅5G5/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
662	青磁 碗	15.6	(3.1)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y3/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
663	青磁 碗	27.8	(3.0)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰10Y6/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
664	青磁 碗	7.0	(3.4)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	青: オリーブ灰2.5GY6/1 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
665	青磁 水注			外腹: 回転ナデ、施釉 内腹: 回転ナデ、施釉	青: オリーブ灰10Y5/2 赤地: 黒白N/S	青: 0.5mm以下の石英・長石を含む	青
666	白磁 杯	8.8	(1.7)	外腹: 回転ナデ、施釉 内腹: 回転ナデ、施釉	青: 透明 赤地: 黒白2.5Y8/1	青: 透明 赤地: 黒白2.5Y8/1	青
667	白磁 杯	10.2	(2.1)	外腹: 回転ナデ、施釉(体形・下半脚跡) 内腹: 回転ナデ、施釉	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青
668	白磁 杯	10.2	(1.9)	外腹: 回転ナデ、施釉 内腹: 回転ナデ、施釉	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青
669	白磁 杯		(2.1)	外腹: 回転ナデ、施釉 内腹: 回転ナデ、施釉	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青
670	白磁 杯	16.4	(2.4)	外腹: 回転ナデ、施釉 内腹: 回転ナデ、施釉	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青: 透明 赤地: 黑白2.5Y8/1	青
671	白磁 碗		(2.3)	外腹: 回転ナデ(高台付より内側露胎) 内腹: 回転ナデ	往: 明快10GY8/1 赤地: 黒白2.5Y8/1	往: 明快10GY8/1 赤地: 黒白2.5Y8/1	往
672	土師1:器 蓋	15.4	(4.5)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	外腹: 鉄10R5/6 内腹: にぼい鉄SYR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
673	土師2:器 蓋	40.0	(6.5)	外腹: 日目陶ナデ、ヘラナデ 内腹: 回転ナデ	外腹: 黒N/S 内腹: 黒N/S	1~2mmの石英、1mm以下の微粉を含む	
674	土師3:器 蓋	22.4	(6.6)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	外腹: 黒N/S 内腹: 黒N/S	1~2mmの石英、1mm以下の微粉を含む	
675	土師4:器 蓋	25.0	(5.1)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	外腹: 黒N/S 内腹: 黒N/S	1~2mmの石英、1mm以下の微粉を含む	青透系
676	加須窑 器	12.0	(9.8)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ	外腹: 黑白N/S 内腹: 黑白N/S	1~4mmの石英・細東を含む	青透系
677	上野賣子 器	28.0	(4.6)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: にぼい黒7.5YR7/4 内腹: にぼい黒7.5YR6/4	2mm以上の石英・黄 色・青色を含む	
678	土師質1:器 蓋	27.4	(6.7)	外腹: ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加	外腹: にぼい黒7.5YR6/4 内腹: にぼい黒7.5YR6/4	1mm以下の無石・角 閃石・青母を含む	外削: 保付青
679	土師質1:器 蓋	33.2	(6.1)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: 鉄5YR6/6 内腹: 鉄5YR6/6	2mm以上の石英・黄 色・青色を含む	外削: 保付青
680	土師質1:器 蓋	35.0	(5.9)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: にぼい黒7.5YR7/3 内腹: にぼい黒7.5YR6/4	1mm以下の石英・長 石・金星母を含む	外削: 保付青
681	土師質1:器 蓋	16.2	(4.4)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: にぼい黒7.5YR7/4 内腹: にぼい黒7.5YR7/4	1mm以下の石英・長 石・金星母を含む	外削: 保付青
682	土師質1:器 蓋	19.0	(7.0)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: 黒3YR6/6 内腹: にぼい黒7.5YR6/4	1mm以下の石英・角 閃石・青母を含む	
683	土師質1:器 蓋	21.0	(4.4)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: にぼい黒7.5YR7/2 内腹: にぼい黒7.5YR7/3	1mm以下の石英・長 石を含む	
684	土師質1:器 蓋	21.8	(6.4)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: にぼい黒7.5YR7/4 内腹: にぼい黒7.5YR7/4	1mmの微粉を含む	
685	土師質1:器 蓋	25.0	(6.4)	外腹: 回転ナデ 内腹: 回転ナデ 体形: 指捺印加、ナデ	外腹: 黒2.5YR6/6 内腹: 黒2.5YR6/6	1mm以下の石英・長 石・青母を含む	
686	須磨器 蓋		(5.8)	外腹: 陶質 内腹: 陶質 体形: 陶質	外腹: 黒N/S 内腹: 黒N/S	密	須磨が美しい
687	須磨器 蓋		(5.8)	外腹: 陶質 内腹: 陶質	外腹: 黑2.5Y7/2 内腹: 黑2.5Y7/2	やや頬	
688	陶器 蓋	30.0	(8.4)	外腹: 陶質 内腹: ハラナデ	外腹: 黑2.5YR6/6 内腹: 黑2.5Y4/4	1mm以下の石英・長 石を含む	
689	陶器 蓋		(5.6)	外腹: 陶質 内腹: ハラナデ、ナデ	外腹: 黑2.5YR6/6 内腹: 黑2.5YR6/6	1mm以下の石英・長 石を含む	本漆器

番号	品種	法面(cm)		測定	色期	胎土	備考	
		口径	底径					
731	土師瓦器足 足端	21.2		(1.0)	外面：ヨコナデ 内面：イコナデ、瓶ナデ 外側：連部：ヨコナデ 内側：ヨコナデ 外側：ハバケ 内面：ヨコハバケ	外面：灰白N7/ 内面：灰白N8	青	
732	土師瓦器脚 足端	29.6		(3.1)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：連部：ヨコナデ 内側：ヨコナデ 外側：ハバケ 内面：ヨコハバケ	外面：淡黄褐10YR8/3 内面：淡黄褐10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
733	土師瓦器脚 足端	22.5		(5.8)	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ 外側：ナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	外面：に bei 黄褐色70YR7/3 内面：に bei 黄褐色70YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
734	土師瓦器脚 足端	26.0		(12.1)	外面：ナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	外面：に bei 黄褐色70YR6/4 内面：に bei 黄褐色70YR6/4	1mm以下の石英・長石 を含む	
735	土師瓦器脚 足端	29.0		(18.0)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	外面：灰白10YR8/6 内面：灰白10YR8/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
736	土師瓦器脚 火鉢	27.4		(13.4)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	外面：黄灰2.5YR5/1 内面：灰白5YR6/1	やや密	
737	土師瓦器脚 火鉢	9.0		(2.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：黄灰5YR6/6 内面：灰白5YR6/1	0.5mm以下の微粉を含む	開拓欠損。消毒文のスタンプ
738	土師 桶	16.7		(1.5)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ	外側：クリア透明2.5YR6/3 内面：灰白10YR7/1	密	
739	土師 桶	12.0		(2.5)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	外側：黄灰7.5YR7/1 内面：灰白7.5YR7/1	密	
740	土師 桶 陶器 桶	11.2		(2.6)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ	外側：灰白7.5YR6/2 内面：灰白7.5YR7/2	やや密	
741	土師 桶	4.6		(1.6)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ	外側：灰白7.5YR6/2 内面：灰白7.5YR7/2	密	
742	土師 桶	5.1		(1.8)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ	外側：灰白7.5YR6/3 内面：灰白7.5YR7/1	密	
743	土師 桶			(2.7)	外側：ヨコナデ 内面：ヨコナデ 外側：ヨコナデ、施釉 内面：ヨコナデ	外側：灰白7.5YR6/3 内面：灰白7.5YR7/1	0.5mm以下の微粉を含む	底面：同軸系切。頭輪ヘラナデ
744	生虫土器 兜	7.4		(3.8)	外側：ナデ 内面：ナメ	外側：灰白2.5YR5/3 内面：に bei 黄2.5YR5/3	3mm以下の石英・長石 を含む	
745	土器品	人形 底径 7.7 cm 厚さ 4.5 cm 残存幅 1.5	人形 底径 4.5 cm 厚さ 4.5	外側：ナデ 内面：トドに貫通する穿孔	外側：に bei 黄褐色10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む		
746	石鏡	21.4		(4.0)			深緑	石鏡を加工して円使用
747	石鏡			(5.1)			滑石	
748	鏡	径 25		厚さ 1.5				水素浴室
749	青銅品	長さ 12.1	幅 0.7	厚さ 0.1				
750	鉄釘	1.8		0.6				
751	鉄釘	長さ 5.0		0.7×0.8				
752	鉄丸瓦	長さ 31.6	直径 16.5		内面：布口。ヨコビキ。両側刃と下縁を面取 右側：鋸刃方向のナデ、刃尖 左側：刃尖方向のナデ、周縁にそってナ 瓦気蘆：横方向のナデ。周縁にそってナ	外側：灰N10 内面：灰N4-6	青	三巴文、焼成口届
753	折平瓦	瓦当高 5.1		(11.0)	内面：布口、瓦當面を面取 右側：鋸刃方向のナデ。刃尖 左側：刃尖方向のナデ。周縁にそってナ 瓦気蘆：横方向のナデ。周縁にそってナ	外側：灰N6/ 内面：灰N5-	やや密	
754	東瓦	幅 11.4		(13.0)	外側：ナデ 内面：ナデ	外側：JKN5/0	密	
755	土壁	長さ 6.2	幅 4.9	厚さ 5.0	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 灰2.5YR6/4	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ：129.8g
756	土壁	長さ 7.8	幅 6.3	厚さ 3.5	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 灰2.5YR6/4	4mm以下の石英・長石 を含む	重さ：134.4g
757	土壁	長さ 7.6	幅 6.5	厚さ 6.2	外側：ナデ	外側：灰S 6/6	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：267.2g
758	土壁	長さ 8.0	幅 5.9	厚さ 5.9	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 灰2.5YR7/4	4mm以下の石英・長石 を含む	重さ：241.2g
759	土壁	長さ 8.2	幅 6.0	厚さ 5.9	外側：ナデ	外側：灰1.5YR6/2	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：259.8g
760	土壁	長さ 8.4	幅 5.9	厚さ 5.9	外側：ナデ	外側：に bei 灰2.5YR7/4	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：248.6g
761	土壁	長さ 8.6	幅 6.6	厚さ 6.2	外側：ナデ	外側：灰2.5YR6/6	2mm以下の石英・長石 を含む	重さ：297g
762	土壁	長さ 8.5	幅 5.9	厚さ 5.1	外側：ナデ。指揮印痕	外側：淡黄褐色10YR8/1	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：123.6g
763	土壁	長さ 8.7	幅 5.1	厚さ 5.1	外側：ナデ	外側：に bei 灰2.5YR5/4	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：212.2g
765	土壁	長さ 8.7	幅 5.7	厚さ 6.4	外側：ナデ	外側：明褐色7.5YR5/6	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：298.7g
766	土壁	長さ 8.6	幅 5.0	厚さ 5.8	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 灰10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ：213.7g
767	土壁	長さ 8.6	幅 5.8	厚さ 5.9	外側：ナデ。指揮印痕	外側：淡黄褐色7.5YR8/4	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：241.1g
768	土壁	長さ 8.8	幅 5.7	厚さ 5.1	外側：ナデ。指揮印痕	外側：灰5YR6/6	5mm以下の石英・長石・ 角閃石・水晶を含む	重さ：154.1g
769	土壁	長さ 8.8	幅 6.3	厚さ 5.3	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 灰2.5YR6/4	2mm以下の石英・長石 を含む	重さ：305.2g
770	土壁	長さ 9.0	幅 5.9	厚さ 5.9	外側：ナデ。指揮印痕	外側：に bei 黄褐色10YR6/3	2mm以下の石英・長石 を含む	重さ：267.4g
771	土壁	長さ 9.1	幅 6.2	厚さ 6.3	外側：ナデ	外側：灰5YR6/6	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：309.6g
772	土壁	長さ 9.0	幅 6.6	厚さ 6.2	外側：ナデ。指揮印痕	外側：淡黄褐色7.5YR8/4	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・水晶を含む	重さ：293.5g
773	土壁	長さ 9.0	幅 6.2	厚さ 5.9	外側：ナデ	外側：灰5YR6/6	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・水晶を含む	重さ：284.7g
774	土壁	長さ 9.2	幅 6.1	厚さ 5.9	外側：ナデ	外側：灰2.5YR6/6	3mm以下の石英・長石・ 角閃石・水晶を含む	重さ：335.8g
775	土壁	長さ 9.0	幅 6.3	厚さ 6.4	外側：ナデ	外側：に bei 灰2.5YR6/4	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ：315.4g

物別 番号	器種	法量 (cm)		質	色	鉱土	参考
		口径	底径				
276	土瓶	高さ 9.3	幅 (6.4)	厚さ 6.2	外面：ナデ、指添压痕	外面：にぶい磼7.5Y R 6/4 内面：にぶい磼7.5Y R 6/4	3mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 重さ：293.3g
277	土瓶	高さ 9.4	幅 (6.6)	厚さ 5.5	外面：ナデ、指添压痕	外面：にぶい磼7.5Y R 6/4	5mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 重さ：298.2g
278	土瓶	高さ 9.5	幅 (6.1)	厚さ 6.1	外面：ナデ	外面：にぶい磼7.5Y R 6/4	2mm以下の石英・長石 ・金雲母を含む 重さ：294.4g
279	土瓶	高さ 10.2	幅 (5.8)	厚さ 5.8	外面：ナデ、指添压痕	外面：磼7.5Y R 6/6	5mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 重さ：339.5g
280	土瓶	高さ 10.5	幅 (5.7)	厚さ 5.4	外面：ナデ	外面：にぶい磼7.5Y R 7/3	2mm以下の石英・長石 ・金雲母を少々含む 重さ：268.9g
281	土瓶	高さ 10.5	幅 (5.8)	厚さ 5.3	外面：ナデ、指添压痕	外面：にぶい磼10Y R 7/3	1mm以下の石英・長石 を含む 重さ：232.4g
282	土瓶	高さ 10.5	幅 (5.9)	厚さ 5.4	外面：ナデ	外面：灰白10Y R 8/2	1mm以下の石英・長石 を含む 重さ：70.4g
283	土鉢	高さ 10.5	直径 4.1	直径 4.1	外面：ナデ	外面：にぶい磼7.5Y R 7/4	2mm以下の石英・長石 ・雲母・角閃石を含む 重さ：101g
284	土瓶	高さ 10.5	幅 (5.9)	厚さ 5.4	外面：灰黄5Y 7/2	外面：灰黄5Y 7/2	3mm以下の石英・長石 を含む 重さ：27.9g
285	土鉢	高さ 10.5	直径 4.0	直径 4.0	外面：ナデ、西漢庄風	外面：にぶい磼7.5Y R 7/4	2mm以下の石英・長石 を含む 重さ：201.5g
286	土鉢	高さ 10.5	直径 4.0	直径 4.0	外面：ナデ	外面：にぶい磼7.5Y R 7/4	2mm以下の石英・長石 を含む 重さ：114.9g
287	土鉢	高さ 10.5	直径 4.0	直径 4.0	外面：ナデ	外面：にぶい磼10Y R 7/3	2mm以下の石英・長石 ・角閃石を含む 重さ：123.6g
288	土鉢	高さ 10.5	直径 4.1	直径 4.1	外面：ナデ	外面：灰白10Y R 8/2	1mm以下の石英・長石 ・雲母・角閃石を含む 重さ：6.8g
289	羽口					外面：赤褐色R 6/6	1~5mmの石英・長石 を含む
290	羽口					外面：灰黃褐色10Y R 6/2 内面：橙25Y R 6/8	5mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 重さ：201.5g
291	羽口					外面：にぶい赤褐色5Y R 5/3 内面：にぶい赤褐色5Y R 5/3	4mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：201.5g
292	羽口					外面：灰黃褐色2.5Y R 5/4	1mm以下の石英・長石 を含む 重さ：114.9g
293	羽口					外面：灰黃褐色10Y R 6/2	4mm以下の石英・長石 を含む 重さ：123.6g
294	羽口					外面：灰黃褐色10Y R 6/2	4mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：6.8g
295	羽口					外面：灰黃2.5Y R 6/1	5mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：101g
296	羽口					外面：にぶい2.5Y R 6/4 内面：にぶい2.5Y R 6/4	1~5mmの石英・長石 を含む 重さ：27.9g
297	羽口					外面：青黃2.5Y 1/1 内面：にぶい青褐色5Y R 5/4	5mm以下の心葉・葉 角閃石・雲母を含む 重さ：201.5g
298	羽口					外面：にぶい2.5Y R 6/3 内面：にぶい2.5Y R 6/3	4mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：114.9g
299	羽口					外面：明赤褐色2.5Y R 5/8	4mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 重さ：123.6g
300	羽口					外面：にぶい赤褐色2.5Y R 5/4 内面：にぶい赤褐色2.5Y R 5/4	3mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：6.8g
301	羽口					外面：赤褐色10R 3/4 内面：赤褐色10R 5/5	5mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：101g
302	羽口					外面：明赤褐色2.5Y R 5/6	5mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：101g
303	羽口					外面：灰黃褐色2.5Y R 5/6 内面：灰褐色5Y R 3/3	5mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：6.8g
304	土師質工藝 器	6.9	6.4	1.7	外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい青褐色10Y R 7/4 内面：にぶい青褐色10Y R 7/4	1mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 重さ：201.5g
305	土師質工藝 器	6.6	2.7	1.2	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面110Y R 7/2 内面：凹面110Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む 底面：両脇へラ切
306	土師質工藝 器	8.9	5.0	1.6	外面：凹面ナデ、凹面ハラ切 内面：凹面ナデ	外面：凹面10Y R 8/2 内面：凹面110Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む 底面：両脇へラ切
307	土師質工藝 器	8.8	5.2	1.3	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面2.5Y R 7/2 内面：凹面2.5Y R 7/2	0.5mm以下の石英・長石 ・角閃石を含む 底面：凹面へラ切
308	土師質工藝 器	9.2	(2.2)		外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面2.5Y R 7/2 内面：凹面2.5Y R 7/2	5mm以下の石英・長石 ・角閃石・雲母を含む 底面：凹面へラ切
309	土師質工藝 器	9.2	(2.1)		外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面5Y R 7/2 内面：凹面110Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
310	土師質工藝 器	9.0	1.9		外面：ナデ 内面：ナデ	外面：にぶい青褐色10Y R 7/3 内面：にぶい青褐色10Y R 7/3	1mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 底面：凹面へラ切
311	土師質工藝 器	9.6	(1.8)		外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：にぶい青褐色10Y R 7/3 内面：にぶい青褐色10Y R 7/3	1mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 底面：凹面へラ切
312	土師質工藝 器	9.6	6.1	2.6	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面10Y R 8/2 内面：凹面110Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
313	土師質工藝 器	9.5	5.8	2.1	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：凹面10Y R 8/2 内面：凹面110Y R 7/2	1mm以下の石英・長石 ・雲母を含む 底面：凹面へラ切
314	土師質工藝 器	10.8	(2.3)		外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰36% 内面：灰36%	1mm以下の砂渺を含む 底面：灰36%
315	土師質工藝 器	10.0	6.0	2.5	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/3 内面：灰褐色2.5Y R 6/3	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
316	土師質工藝 器	10.2	6.0	2.6	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/2 内面：灰褐色2.5Y R 6/2	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
317	土師質工藝 器	10.2	5.4	2.7	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/1 内面：灰褐色2.5Y R 6/1	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：灰褐色2.5Y R 6/1
318	土師質工藝 器	10.4	(2.7)		外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/2 内面：灰褐色2.5Y R 6/2	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
319	土師質工藝 器	10.5	6.0	2.8	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/2 内面：灰褐色2.5Y R 6/2	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
320	土師質工藝 器	10.6	7.0	2.5	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/2 内面：灰褐色2.5Y R 6/2	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
321	土師質工藝 器	11.0	6.0	2.8	外面：凹面ナデ 内面：凹面ナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/2 内面：灰褐色2.5Y R 6/2	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：凹面へラ切
322	土師質工藝 器	11.6	(2.4)		外面：凹面ナデ後にナデ 内面：凹面ナデ後にナデ	外面：灰褐色2.5Y R 6/1 内面：灰褐色2.5Y R 6/1	0.5mm以下の石英・長石 を含む 底面：ナデ

番号	種類	数量 (kg)			基準	色調	粒度	備考
		口径	底径	高さ				
823	七味豆子器 杯	11.6	6.8	2.7	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：浅黄焼10YR6/2 内筒：浅黄焼10YR6/3	0.5mm以下の石英・長石を含む	底面：ナデ
824	土師質土器 片	12.4	(2.2)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の石英・長石を含む	
825	土師質土器 片	11.2	7.4	2.3	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の石英・長石を含む	
826	皿	10.6	6.4	(3.1)	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰NS/ 内筒：灰NS/	1mm以下の微細を含む	底面：砂止ヘラナダ
827	土師質土器 杯	11.2	7.8	(2.5)	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：浅黄焼2.5YR6/3	0.5mm以下の石英・長石を含む	
828	土師質土器 片	11.4	8.2	2.8	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：浅黄焼2.5YR6/3	0.5mm以下の石英・長石を含む	
829	土師質土器 片	11.6	8.0	2.5	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	
830	伝承器 杯	11.8	7.2	2.8	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	2mmの石英、0.5mm以下の微細を含む	底面：同軸ヘラ切後に板目、ヘラナダ
831	瓦器 杯	12.6	(2.8)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰N4/ 内筒：灰N4/	0.5mm以下の微細を含む	
832	土師質土器 片	13.4	6.8	(2.8)	外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の微細を含む	
833	土師質土器 片	13.4	(2.5)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナードにナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の石英・長石を含む	
834	土師質土器 杯	13.8	(2.1)		外筒：同軸ナード 内筒：ヘラナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	底面：板目後にナダ
825	土師質土器 片	5.6	(1.2)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード、擦ナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の微細を含む	
836	土師質土器 片	4.8	(0.9)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	底面：板目後に同軸ヘラナダ
837	土師質土器 片	7.9	(0.65)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の石英・長石を含む	底面：板目ヘラ切後に同軸ヘラナダ
838	土師質土器 片	6.2	(2.0)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード、ヘラナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	底面：同軸ヘラ切後にナダ
839	土師質土器 片	6.2	(1.0)		外筒：同軸ナード 内筒：ナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：灰10YR6/2	0.5mm以下の微細を含む	
840	土師質土器 片	6.8	(1.7)		外筒：同軸ナード 内筒：ナダ	外筒：灰10YR6/2 内筒：透青2.5YR6/2	0.5mm以下の微細を含む	底面：ヘラナダ
841	丸器 皿	9.8	6.6	1.8	外筒：同軸ナード 内筒：ヘラミガキ	外筒：灰N1/ 内筒：灰N1/	0.5mm以下の微細を含む	
842	丸器 皿	16.0	2.6	5.4	外筒：同軸ナード 内筒：ヘラミガキ	外筒：灰NS/ 内筒：透青N2/	1~2mmの粗粒、0.5mm以下の微細を含む	丸型
843	青釉 碗	11.1	(4.6)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白NS/	粗混	
844	青釉 碗	11.6	(4.8)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白NS/	粗混	
845	青釉 碗		(2.0)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白NS/	粗混	外側：蓮化文
846	青釉 碗		(3.2)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白NS/	粗混	
847	青釉 碗	5.8	(2.0)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白NS/	粗混	
848	青釉 碗	6.6	(2.5)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：明暦灰10GY7/1 黒：灰白2.5YR5/1	粗混	
849	青釉 皿	25.8	(4.7)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	白：明暦灰10GY7/1 黒：灰白2.5YR5/1	粗混	内面：直進弁文
850	青釉 皿	27.0	(3.8)		外筒：白10YR6/2 内筒：白10YR6/2	外筒：明暦灰10GY7/2 内筒：灰白2.5YR5/2	粗混	内面：直進弁文
851	絞り器 皿		(1.9)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	白：オーリーブ灰10YR6/2 黒：灰白10YR6/2	粗混	
852	白磁 杯	8.6	(1.7)		外筒：集輪（体部下半斜弧） 内筒：施釉	白：透明 黒：灰白Y8/1	密	
853	白磁 碗	8.4	(3.1)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	白：灰白Y8/1 黒：灰白Y8/1	密	
854	白磁 碗		(1.2)		外筒：同軸ナード（下半斜弧） 内筒：施釉	白：透明 黒：灰白Y8/1	粗混	粗混貴人
855	白磁 碗	13.0	(2.0)		外筒：施釉 内筒：施釉	白：透明 黒：灰白Y8/1	密	
856	白磁 碗	13.6	(2.4)		外筒：施釉 内筒：施釉	白：明暦灰10GY7/1 黒：灰白NS/	密	
857	白磁 碗	9.8	(6.6)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰NS/ 内筒：灰NS/	密	口部部：コクカ付着
858	白磁 碗	12.0	(7.1)		外筒：同軸ナード、白施釉 内筒：同軸ナード、灰ナダ	外筒：灰ナダY5/2 内筒：灰白2.5Y3/1	1~3mmの粗粒を含む	全面白釉軸付着
859	土師質土器 片	20.4	(6.1)		外筒：削鉢 内筒：同軸ナード 施釉：ヘラケズリ	外筒：灰白2.5Y7/2 内筒：灰白2.5Y7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
860	乳器		(8.4)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰NS/ 内筒：灰NS/	1~2mmの粗粒を含む	
861	乳器 器	14.0	(4.6)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード	外筒：灰(1)7/2 内筒：灰(1)8/2	0.5mm以下の微細を含む	
862	乳器 器		(5.1)		外筒：同軸ナード 内筒：同軸ナード、削出し	外筒：明暦灰10GY7/3 内筒：明暦灰10GY7/3	1mmの石英、0.5mmの微細を含む	
863	前焼 器		(3.65)		外筒：同軸ナード、ハラケズリ 内筒：同軸ナード、施釉	外筒：赤茶5.5K7/4 内筒：灰NS/	やや粗	
864	前焼 器		8.4	6.4	外筒：同軸ナード、ハラケズリ 内筒：同軸ナード、施釉	外筒：灰Q3Y7/1 内筒：灰NS/	密	2次焼成 底面：同軸系切
865	J.前焼土器 皿	39.8	(6.4)		外筒：同軸ナード 内筒：ヨコナード 施釉：ナダ	外筒：灰褐7.3YR5/2 内筒：浅黄10YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	外側焼付着
866	J.前焼土器 皿	26.0	(9.4)		外筒：同軸ナード 内筒：ヨコナード 施釉：ナダ、ハラケズリ	外筒：灰褐7.3YR5/2 内筒：灰褐7.3YR5/3	3mm以下の石英・長石、角石を含む	外側焼付着
867	J.前焼土器 皿	25.2	(4.7)		外筒：同軸ナード 内筒：ヨコナード 施釉：ナダ	外筒：灰褐7.3YR5/2 内筒：灰褐7.3YR6/4	1mm以下の石英・長石、雲母を含む	
868	J.前焼土器 皿	24.9	(13.9)		外筒：同軸ナード 内筒：ヨコナード 施釉：ナダ	外筒：灰褐7.3YR5/2 内筒：灰褐7.3YR7/4	3mm以下の石英・長石、雲母を含む	

規格 等級	管種	法規 (mm)		試験	色調	約 1.	備考	
		外径	壁厚					
869	丸鋼土管	4.6	(7.7)	外表面：ナゲ 内面：しばり目	外面：赤朱/内面：黒口R8/	1mm以下の筋へ鉛錆 を含む		
870	石綿		(3.6)			滑石		
871	鋼	真さ (3.8)	幅 (2.0)	厚さ (1.2)			納板用	
872	鋼	真さ (7.0)	幅 (0.0)	厚さ (0.0)	外表面：硝煙灰		粘板用	
873	土縫	真さ (4.7)	幅 (4.1)	厚さ (5.5)	外表面：に赤い焼7YR7/3	2mm以下の石英・長 石・角閃石を含む 真さ：297.4g		
874	土縫	真さ (2.2)	幅 (2.0)	厚さ (5.3)	外表面：に赤い焼10YR6/3	5mm以下の石英・長 石・長石・角閃石を含 む 真さ：294.5g		
875	土縫	真さ (2.1)	幅 (6.0)	厚さ (5.8)	外表面：灰白10YR8/2	3mm以下の石英・長石 を含む 重さ：223.9g		
876	土縫	真さ (6.1)	幅 (4.7)	厚さ (4.2)	外表面：淡黄25YR8/3	5mm以下の石英・長石 を含む 重さ：47.0g		
877	鉄釘	真さ (2.2)	幅 (0.5×0.5)					
878	土質質土管 等		(1.7)	外表面：回転ナゲ 内面：ナゲ	外表面：淡5YR7/6 内面：褐7YR7/6	微錆・良む・石英・玉 子を含む	外由：墨書	
879	土質質土管 等		(2.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡5YR7/4 内面：褐7YR7/4	微錆・良む・石英を含 む	外由：墨書	
880	土質質土管 等		(3.4)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐7YR7/6 内面：褐5YR6/6	1mm以下の石英・長 石を含む	外表面：墨書	
881	土質質土管 等		(3.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼7YR7/4 内面：褐5YR6/6	微錆・良石・石英を含 む	外表面：墨書「法」	
882	土質質土管 等		(2.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐7YR7/6 内面：褐5YR7/6	微錆	外表面：墨書	
883	土質質土管 等		(6.0)	外表面：ナゲ 内面：ナゲ	外表面：淡黄7YR8/4 内面：淡黄10YR8/4	3mm以下の石英・長 石・長石・角閃石を含 む		
884	土質質土管 等	7.8	(2.9)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐5YR6/6 内面：褐5YR6/6	1mm以下の石英・長石 を含む 1mm以下の石英・長石 を含む	底面：ナゲ	
885	土質質土管 等	10.8	(6.6)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄10YR8/4 内面：淡黄10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む		
886	丸鋼 板		(2.0)	外表面：回転ナゲ 内面：ヨコナガ	外表面：(AN)6/ 内面：(AN)5	0.3mm以下の錆物を有 する		
887	鐵錠 等		(2.0)		地：赤10YR1 底面：灰赤10YR1	地		
888	土質質土管 等	6.1	4.8	1.3	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼7YR7/4 内面：に赤い焼7YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後に横目
889	土質質土管 等	6.4	2.7	0.8	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡5YR7/4 内面：褐7YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
890	土質質土管 等	8.8	7.5	(1.2)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼10YR7/3 内面：に赤い焼10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切
891	土質質土管 等	7.6	5.8	(1.2)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄25YR8/4 内面：淡黄25YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	回転ヘラ切後に両板ヘタケリ
892	土質質土管 等	7.5	6.0	1.0	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄25YR8/4 内面：淡黄25YR8/4	1mm以下の石英・長石 を含む	武器：回転ヘラ切後に版目
893	土質質土管 等	7.4	5.4	1.5	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄25YR8/4 内面：淡黄25YR8/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
894	土質質土管 等	7.6	6.8	(6.8)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/2 内面：(AN)10YR7/2	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
895	土質質土管 等	7.4	6.1	(1.4)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄25YR8/4 内面：淡黄25YR8/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
896	土質質土管 等	7.7	6.3	1.6	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/4 内面：(AN)10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にヘタケリ
897	土質質土管 等	8.3	6.8	(1.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄25YR8/3 内面：淡黄25YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後に版目
898	土質質土管 等	9.6	5.4	(1.5)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：淡黄10YR8/3 内面：淡黄10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
899	土質質土管 等	8.4		(1.7)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼7YR7/4 内面：淡黄25YR8/4	1mm以下の後錆を有 する	底面：回転ヘラ切後にナゲ
900	土質質土管 等	11.3		(1.8)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼7YR8/4 内面：(AN)8/4	0.5mm以下の石英・長 石を含む	
901	瓦器 等	8.8		(1.7)	外表面：回転ナゲ 内面：ヨコマギヤ	外表面：(AN)10YR7/4 内面：(AN)10YR7/4	1~2mmの粗緻 地：0.5 mm以下の板錆	底面：回転ヘラ切後に粗緻ヘタケリ
902	土質質土管 等	9.6	5.4	2.8	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼7YR7/4 内面：褐7YR7/6	1mm以下の石英・長石 を含む	武器：回転ヘラ切後に板目
903	土質質土管 等	9.7	5.6	3.0	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：に赤い焼10YR7/3 内面：淡黄10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	武器：回転ヘラ切後に両板ヘタナ ゲ
904	土質質土管 等	10.6	7.0	2.7	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/3 内面：(AN)10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後にナゲ
905	土質質土管 等	10.6	7.4	(2.6)	外表面：回転ナゲ 内面：ナゲ	外表面：(AN)10YR7/4 内面：(AN)10YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：回転ヘラ切後に板目。ナ ゲ
906	土質質土管 等	12.6	8.2	2.55	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/4 内面：(AN)10YR7/5	1mm以下の石英・長石 を含む	底面：板目。ナゲ
907	土質質土管 等	14.9		(2.6)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/3 内面：淡黄10YR8/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
908	土質質土管 等	15.0	11.3	(3.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/3 内面：(AN)10YR7/3	1mm以下の微錆を有 する	
909	土質質土管 等	15.6		(3.1)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/2 内面：(AN)10YR8/1	1mm以下の石英・長石・ 板錆を含む	
910	土質質土管 等	8.0		(2.9)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐7YR7/6 内面：に赤い焼7YR7/4	微錆 地：良石、板錆を含む	外表面：墨書
911	土質質土管 等		4.0	(1.9)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐7YR7/6 内面：褐7YR7/6	微錆 地：良石、板錆を含む	外表面：墨書 底面：粗緻糸切
912	土質質土管 等		5.4	(1.9)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：褐7YR7/6 内面：褐7YR7/6	1mm以下の石英・長石 を含む	
913	瓦器 等		5.0	(6.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)10YR7/2 内面：(AN)10YR7/2	2mmの石英・0.5mm長 石の微錆を有する	底面：回転糸切
914	細密器 等		5.6	(2.1)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)7/7 内面：(AN)7/7	1mm以下の微錆を有 する	底面：回転糸切
915	須磨器 等		7.2	(2.0)	外表面：回転ナゲ 内面：ナゲ	外表面：(AN)7/7 内面：ナゲ	1mm以下の微錆を有 する	
916	土質質土管 等		15.4	(3.0)	外表面：回転ナゲ 内面：回転ナゲ	外表面：(AN)12YR7/5 内面：(AN)12YR7/4	1mm以下の石英・長石 を含む	
917	土質質土管 等		17.0	(3.0)	外表面：回転ナゲ 内面：ヨコマギヤ	外表面：(AN)12YR7/5 内面：(AN)10YR7/2	0.5mm以下の微錆を有 する	

項目番号	器種	寸法(cm)		調査	色調	胎土	備考
		上端	瓦径				
918	瓦筒(火鉢)	—	5.0 (1.4)	外面: 刷毛テナ 内面: ナデ	外面: 淡灰2.5YR6/2 内面: 朱15YR8/1	1mm以下の石英・長石 を含む	
919	瓦筒(火鉢)	—	6.4 (1.2)	外側: 刷毛テナ 内面: ナデ	外側: 淡青灰10YR6/3 内面: 朱15YR8/1	6.5mm以下の微砂を含む	
920	土師質土器	—	5.4 (1.9)	外側: 刷毛テナ 内面: ナデ	外側: 淡灰10YR6/2 内面: 朱15YR8/1	1mm以下の微砂を含む	内面: 磁文
921	瓦器	18.4	(4.7)	器口縁部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 体部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰4/4 内面: 淡灰4/4	1mm以下の微砂を含む	
922	瓦器	14.0	(3.4)	器口縁部: 同様テナ後後にヘラミガキ 体部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡青灰3B4/1 内面: 淡灰5R5/1	6.5mm以下の微砂を含む	
923	瓦器	14.2	(3.9)	外面口縁部: 同様テナ後後にヘラミガキ 体部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰12.5YR7/1 内面: 淡灰12.5YR7/1	6.5mm以下の微砂を含む	
924	瓦器	16.5	(4.5)	器口縁部: 同様テナ後後にヘラミガキ 体部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰3YR4/1 内面: 淡灰3YR4/1	1mm以下の微砂を含む	
925	瓦器	15.8	(3.9)	器口縁部: 同様テナ後後にヘラミガキ 体部: 刷毛テナ後後にヘラミガキ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰4/4 内面: 淡灰2.5YR8/1	6.5mm以下の微砂を含む	
926	瓦器	6.2	(1.6)	外側体部: ナデ 裏面: 刷毛テナ 内面: ヘラミガキ	外面: 淡灰3/3 内面: 淡灰3/3	1mm以下の微砂を含む	
927	瓦器	5.6	(1.2)	外側体部: ナデ 裏面: 刷毛テナ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰3/3 内面: 淡灰3/3	6.5mm以下の微砂を含む	
928	瓦器	6.0	(1.0)	外側: 刷毛テナ 裏面: 刷毛テナ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰2.5YR6/1 裏面: 淡灰2.5YR6/1 内面: 淡灰2.5YR6/1	1mm以下の微砂を含む	
929	瓦器	—	(1.9)	外側: 刷毛テナ 裏面: 刷毛テナ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外面: 淡灰3YR7/2 裏面: 淡灰3YR7/2 内面: 淡灰3YR7/2	密	見出: 磁文
930	山根機	13.8	(3.4)	外側: 刷毛テナ 裏面: 刷毛テナ 内面: ナデ後にヘラミガキ	外側: 淡灰3YR7/2 裏面: 淡灰3YR7/2 内面: 淡灰3YR7/2	密	
931	白磁機	高台様 7.0	(3.1)	外側: 刷毛テナ 裏面: 刷毛テナ 内面: ナデ	外側: 淡灰3YR7/2 裏面: 淡灰3YR7/2 内面: 淡灰3YR7/2	密	見出: 磁文
932	瓦器	19.3	(5.6)	外側: ヨコナギ、利刃痕 裏面: ヨコナギ、利刃痕 内面: ヨコナギ	外側: 淡灰3YR7/2 裏面: 淡灰3YR7/2 内面: 淡灰3YR7/2	1mm以下の微砂を含む	
933	瓦器	27.0	(4.8)	外側: ヨコナギ 裏面: ヨコナギ、利刃痕 内面: ヨコナギ	外側: 淡灰2.5YR5/2 裏面: 淡灰2.5YR5/2 内面: 淡灰2.5YR5/2	やや粗	
934	滑面透溝	26.6	(4.5)	外側: 溝部、刷毛ナデ 底部: 同様テナ後後にヘラナダ 内面: 圓筒形、細孔	外側: 淡灰3YR7/2 底部: 淡灰3YR7/2 内面: 淡灰2.5YR5/2	やや粗	
935	土焼質土器	26.4	(8.1)	外側圓筒部: ヨコナギ 裏面: ヨコナギ 内面: ヘラナダ	外側: 淡灰10YR7/1 裏面: 淡灰10YR7/1 内面: 淡灰10YR7/4	3mm以下の石英・長石 を含む	
936	土焼質土器	33.8	(6.5)	外側口縁部: ヨコナギ 体部: 刷毛テナ 内面: ヘラナダ	外側: に淡灰10YR7/3 体部: に淡灰10YR7/3 内面: に淡灰10YR7/3	2mm以下の石英・長石 を含む	
937	土焼質土器	24.9	(5.3)	外側口縁部: ヨコナギ、刷毛テナ 体部: ナデナダ 内面: ヘラナダ	外側: に淡灰10YR7/3 体部: に淡灰10YR7/3 内面: に淡灰10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	係外: 植付骨
938	土焼質土器	26.2	(5.7)	外側口縁部: ヨコナギ 体部: ナデナダ 内面: ヘラナダ	外側: に淡灰10YR7/4 体部: に淡灰10YR7/4 内面: に淡灰10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
939	角削	—	(8.2)	外側: ハラチガ 内面: ナデ、利ハコハケ、擦剥出現	外側: 淡25YR6/6 内面: 淡25YR6/6	やや粗	
940	七輪質土器	火鉢	(7.4)	外側: ヨコナギ 内面: ヨコナギ 内面: コピカム、擦剥西吸	外側: に淡灰10YR7/3 内面: に淡灰10YR7/3 内面: に淡灰10YR7/3	1mm以下の石英・長石 を含む	外側: 磁文2条
941	平瓦	長さ (11.3) 幅 (13.3)	幅 6.0	内面: ナデ、擦剥東吸	外側: 淡灰7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 250.0g
942	平瓦	長さ (16.0) 幅 (16.4)	幅 6.4	内面: ナデ	外側: 淡灰10YR6/2	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 260.0g
943	土錠	長さ 6.9	幅 5.0	内面: ナデ、面取	外側: 淡灰7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石 を含む	
944	土錠	長さ 8.8	幅 5.4	内面: ナデ	外側: 淡灰10YR6/2	3mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 260.0g
945	土錠	長さ 8.6	幅 5.6	内面: ナデ	外側: 淡2.5YR7/6	2mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 261.8g
946	土錠	長さ 7.9	幅 5.5	内面: ナデ	外側: に淡灰7.5YR6/3	2mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 266.0g
947	土錠	長さ 7.1	幅 6.6	内面: ナデ	外側: に淡灰7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 264.0g
948	土錠	長さ 5.1	幅 3.8	内面: ナデ	外側: 淡灰2.5YR8/1	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 37.1g
949	土錠	長さ 3.4	幅 1.2	内面: ナデ	外側: 淡灰10YR4/1	1mm以下の石英・長石 を含む	重さ: 7.0g



1 遠景（西から）



2 遠景（東から）

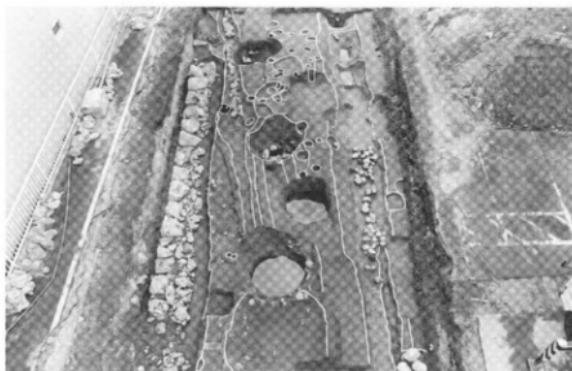


3 完掘状況（東側）

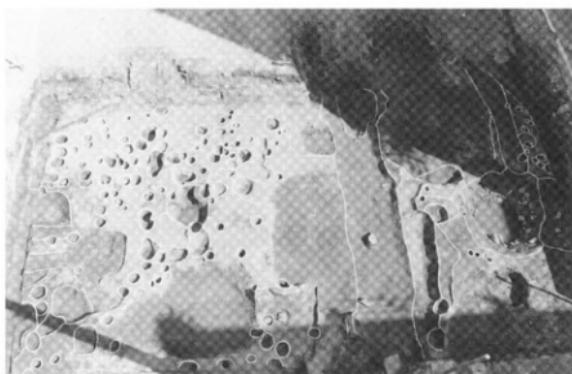
図版 2



1 完掘状況（東側）



2 完掘状況（東側）



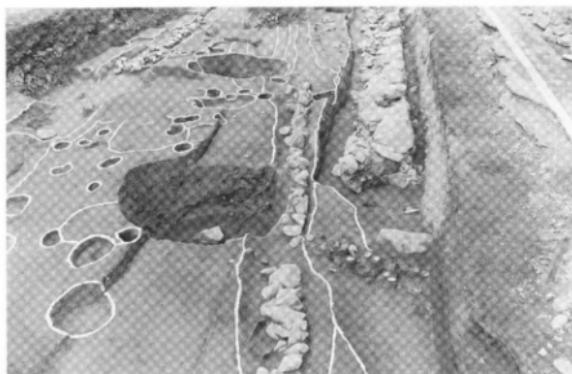
3 完掘状況（西側）



1 完掘状況（西側）

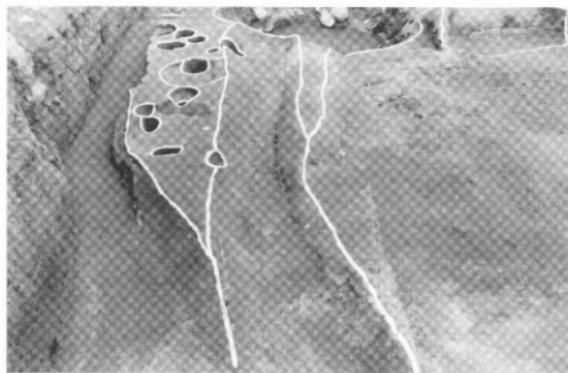


2 完掘状況（西側）

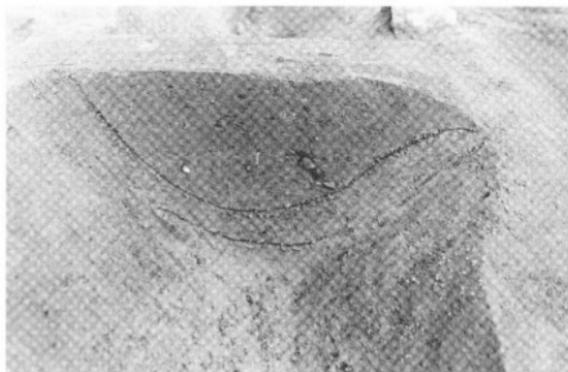


3 SD 1301・1304

圖版 4



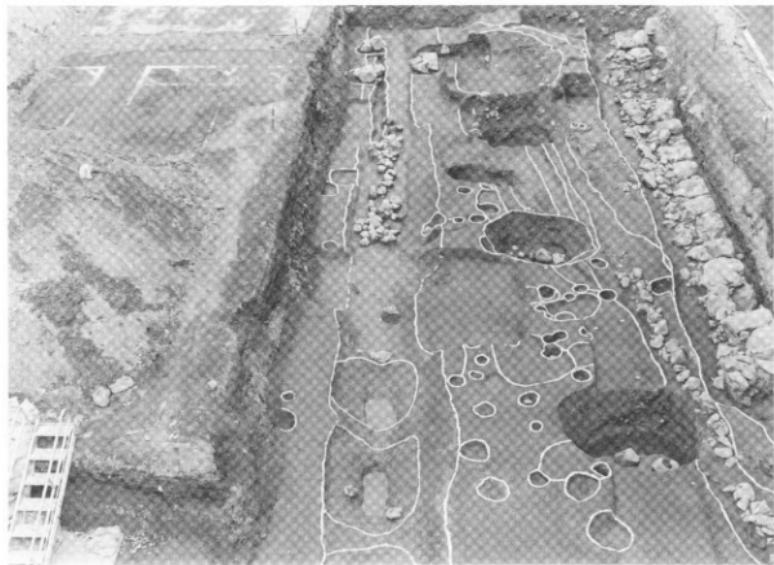
1 S D 1301・1304完掘



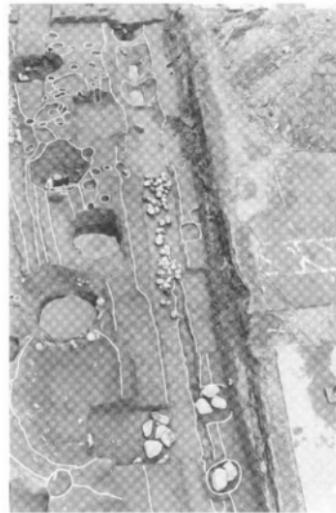
2 S D 1301土層



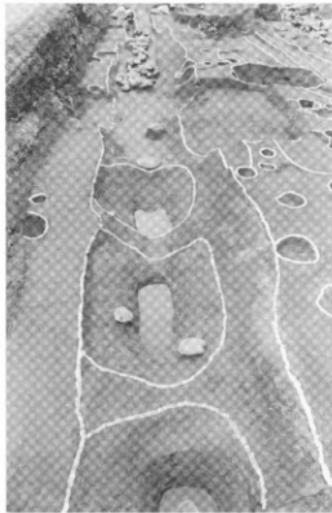
3 S D 1304遺物出土狀況



1 SD 1302完掘（東側）

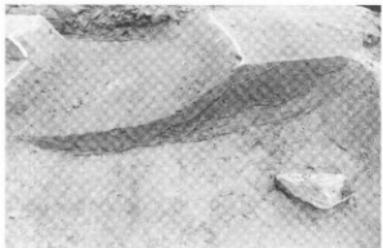


2 SD 1302完掘（東側）



3 SD 1302完掘（東側）

图版 6



1 S D 1302土層



2 S D 1302土層



3 S D 1302完掘（東側）



4 S D 1302完掘（西側）



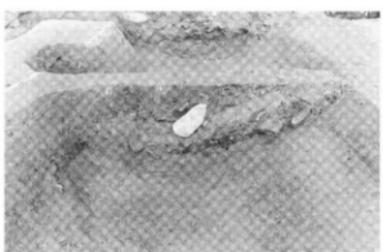
5 香炉出土状况



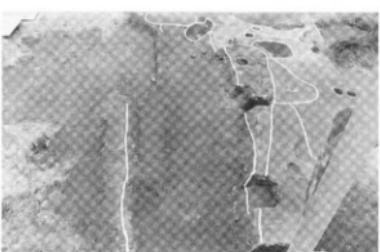
6 五輪塔出土状况



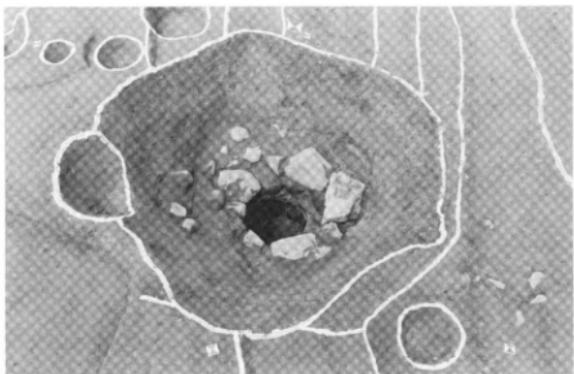
7 S D 1303完掘



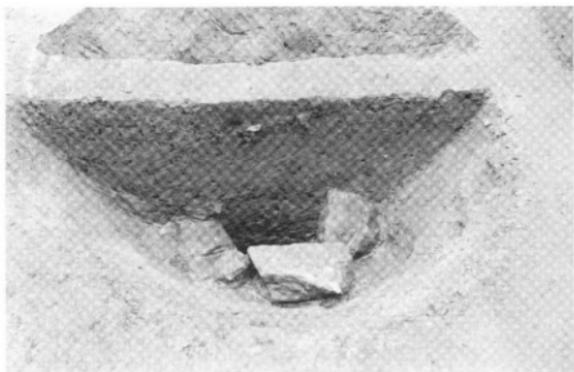
8 S D 1305土層



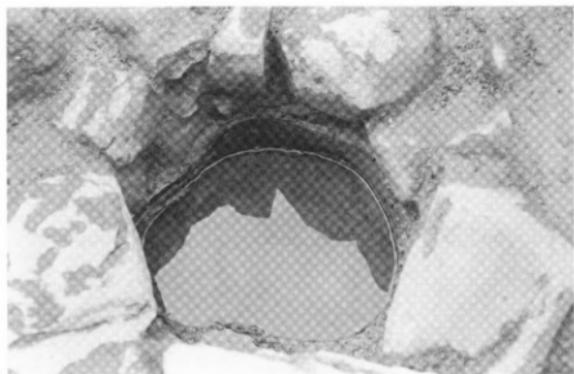
9 S D 1305完掘



1 S E 1301完掘

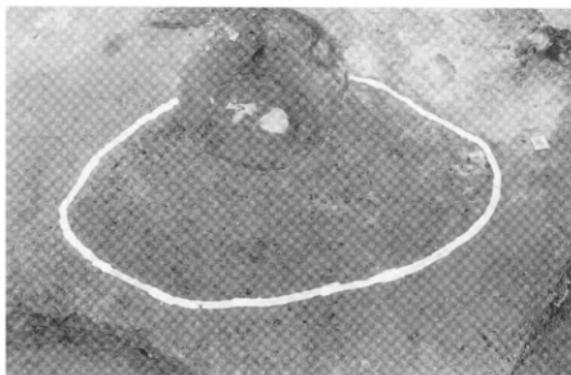


2 S E 1301土層

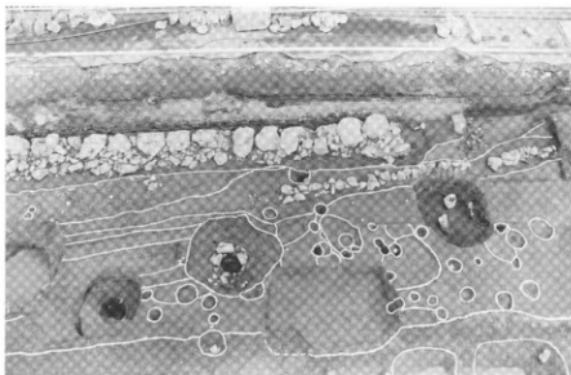


3 S E 1301井戸枠

図版 8



1 SK 1304完掘



2 東側ピット群完掘



3 西側上層ピット群完掘